

透き通る様な世界観にいる一般呪術師

半ライス大盛り

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

透き通るような世界観で送る学園RPGの世界に転生しちゃった呪術高専所属の一般呪術師の話。

先生は別でいます。

目次

かつての記憶：『愚者と王』	1
かつての記憶：『愚者と王』②	23
かつての記憶：『愚者と王』③	38
アビドス対策委員会編	
ぷろろーぐ	63
えっ！ 今からでも入れる保険があるんですか!?	72
今は無職、前職は呪術師	82
女の：涙の落ちる音がした	92
当店でのお触りは禁止されております！	103
暴力は：いけないっ…	121
ひとつだけ忠告がある：死ぬほど痛いぞ	131
信念はあるさ、生きて苦難を乗り越えれば、人は……いかれちまうのさ	139
まだあわあわ展開あわわ	152
いいからドーピングだ!!	165
リポ払いは使うなよ…	176
キミは、人のことをあれこれ言えるほど立派じゃないだろ	189
ワシとポツキーゲームじゃ!!	205
あちらをご覧ください ワタシの実家です。	214
眠そうな人 おはようでやんす (再掲)	222
オレとしたことが花束を忘れた	239
せやかて工藤	252
気がつけば貯金残高がZERO♪	265

キャラクタープロフィール

280

幕間

平穩はいつも近くに

—————

287

平穩はいつも近くに②

—————

296

■ 穩はいつも近くに③

—————

313

■ 穩はいつも近くに④

—————

326

■ 穩はいつも近くに⑤

—————

336

平穩はいつも近くに⑥

—————

353

時計じかけの花のパヴァーヌ編

私 ぶつちやけ 今日ノリで来たんで

—————

370

冒険の始まり…ってコト!?

—————

399

パンパカパーン!

—————

406

汝右の頬を叩かれたら、うんたらかんたら

—————

414

黙って聞いてりやチピチピチャパチャパ…!

—————

426

わっぴーで埋め尽くして♪

—————

437

アイツ…頭高くない?

—————

450

Vol. 0 廻想

かつての記憶：『愚者と王』

空気が爆ぜる。

夜の帷に包まれた渋谷、魔境と化した街にはどこもかしこも色濃く死と呪いの匂いで溢れている。

悲鳴が聞こえた。

助けを乞う声が聞こえた。

がなり立てるような罵声が聞こえた。

地獄絵図のような光景。

硝煙に混じった肉が焼けたような甘い匂い。

駆ける。

地を蹴り、音を置き去りにする速度で加速する。目指す先はただ一点、月明かりを背に嗤う邪悪の塊。小細工は要らない。そもそも、そんなモノでどうにかできるほど生温い存在ではない事はとうに理解している。

ならばこそ、ただ正面から捻じ伏せるのみ。

全身が凍えるような、空間すら捻じ曲げる殺意。常人ならば、その空気にあてられただけでも正気を失うだろう。しかし、今更そんなもので怯みはしない。

生き様も、死に様も、もう決まった。

「宿ッ儼ああアア、アッ ツ ツ!!」

「キヒイ……来い、呪術師ッ!」

爆発的な速度で加速する。

練り上げた呪力をひたすらに押し出していく。油断も慢心も、余裕

なんてものもない。ただひたすらに、全力で呪いの王を殺すつもりで拳を握る。

拳に集中させた呪力が、ノッキングしながら膨れ上がり鼓動する。聞いた情報では、かつて少年院で一時的に虎杖悠仁の意識を乗っ取った宿儺は心臓を失った状態であろうと長時間の戦闘活動を可能にしていた。それどころか、意識を取り戻したがその傷で完全に死亡した虎杖悠仁を何事も無かったかのように生き返らせていたという。ならば手心の必要などない。

殺しても死なないというのなら、悠二の事は呪いの王を殺した後でゆっくり考えればいい。

「オツツラアア!!」

「ははっ……い！」

互いの拳が激突する。

膨大な呪力と呪力、力と力のぶつけ合い。拳の衝突に宿儺と凧太郎を中心に衝撃波が発生し巨大なクレーターを作り上げる。沈み込みそうになる身体に力を入れ、圧倒的な暴力に押しつぶされまい必死に堪える。

一瞬の拮抗。

次の瞬間、凧太郎の体はワイヤーで引つ張られたように吹き飛ばされた。

「ガッ！ 痛ツウウウ！……ッ！」

視界が反転する。

前も後ろも、上下左右もかき混ぜられかのようにグルグルと視界が回転する。身動きの取れない空中、迫り来る地面にどうにか体勢を整えて落下の衝撃に備えようとする。

——ゾクリ、と背筋に悪寒が走り抜ける。
肌突き刺さる殺気。

視線の先に、数メートル先まで殴り飛ばした凧太郎の元へと踏み込み一つで追いついてきた宿儺の姿を捉えた。驚愕に思考が止まる、受け身の体勢に入ろうとしていた体を咄嗟に反応させて防御した。

全身の筋肉をしならせ、回し蹴りが放たれる。

空気が爆ぜる音と共に、ミシミシと蹴りを受け止めた両腕から骨が軋むような嫌な音が聞こえる。

重い……ッ!

正面からまともに受け止めたらへし折られる。

受け止めるのではなく、即座に攻撃を受け流す方向へと切り替える。

「調子に……乗んなア!」

「……ほう?」

「——歯ア、喰いしばれッツ!」

上体を逸らし、どうか攻撃を受け流し切った凧太郎。

関心したような表情。蹴りを放ったまま、無防備な姿となった宿儺へと掴み掛かりその顔面目掛けて拳を振り下ろす。油断している、カウンター反撃がない事を感じ取った凧太郎は恐れずそのまま拳を放つ。

顔面直撃。手応えはある。

確実に芯を捉えた感触を拳に感じながら、その勢いそのまま撃ち下ろす。

油断か慢心か、それとも余裕の現れか。

ほうけた顔で防御もろくに取らずに凧太郎に殴られた宿儺は勢い良く吹き飛んでいき、建築物に激突しながら地面へと叩きつけられた。

「まだだ……ッ」

凧太郎も着地と同時に走り出す。

追撃のチャンス、ここで攻撃の手を緩めてやる理由はない。折角作

り出したチャンス、追い討ち掛ける為に拳に呪力を集中させ舞い上がった砂埃の中心にいる宿儺の元へと加速する。
刹那。

「ガ、アツ!!？」

本能的に何かを察知した凜太郎。

咄嗟に後ろへと飛び退くが、判断が少し遅かった。劈くような激しい痛み、理解が追いつかないまま吹き飛び地面に転がる。左肩から袈裟懸けに大きく切り裂かれた傷口から、勢い良く鮮血が吹き出し地面に赤い水溜りを作る。

膝を突く。

傷口は深くはないが、派手に血が出ている。

「ははっ。なんだ、中々やるな呪術師。今ので三枚に卸すつもりだったが、存外頑丈だな」

「うる、せえな……！ テメエに褒められてもちつとも嬉しかねえよ」

「——だが、その右腕はもう使いものにならない。俺が治してやろうか？」

「いらねえよ、そんな気遣い。気色悪りイ」

息を整えながら、視界の隅に入る右腕を確認する。

先の初撃、宿儺と拳をぶつけ合った一撃。力比べに押し負け、肉が裂け指はへし曲がり血が滴っている。見るも無惨な姿、既に右腕はズタボロな状態だ。

それに加えて正面から受け流した宿儺の蹴り。両腕はへし折れはしなかったものの、その威力の高さから完全に受け流し切れず腕に痺れが残り思うように力が入らない。

だからどうした。

この程度の傷、なんて事はない。反転術式でも使用しない限り、簡

単に治せるような怪我ではない。だが問題はない。どうせ、時間の問題だ。

「こいよ。ビビってんのか？ それとも、負けた時の言い訳の為にこの腕治させてやろうか？」

「はっ……よく回る口だ。それなら、少し本気でやってやる。簡単に壊れてくれるなよ呪術師」

「——ッ！」

宿儺が視界から消える。

常人では目で追い切れない程の速度、凜太郎は即座に周辺の呪力の流れと気配を探り警戒する。だが右に移動したかと思えば、今度は真逆の位置に宿儺の呪力の動きを感じる。

速すぎて動きを捉えられない。

「くそ、速すぎんだろ……後ろか……ッ！」

「いや、こっちだ」

「しまっ——ッ！」

腹部への重い一撃。

穿たれるような鋭い衝撃が胴体を突き抜ける。

宿儺にとっては、呪力を乗せただけの拳での攻撃。しかし凜太郎にとってはそんな生易しいものではない。咄嗟の判断、山勘で腹に全呪力を集中させてダメージを最小限に抑え込もうとしたが、シャーペンの芯をへし折るかのように簡単に打ち破られた。

あまりのダメージに、腹から背へと突き抜ける衝撃によって制服の背部が円形状に弾け飛ぶ。

「ぶおウツッ……ガッ、アッアッアッ——ッ!!!!」

悲鳴。

重力が位置を変えたかのように体が吹き飛ぶ。まるでそうある事が当然であるかのように宙へと舞う。腹の中の全ての内臓が口から溢れ出て来たのではないかと思ってしまうほどの血液が吐き出された。

止まらない。

踏ん張りが効かないなんてレベルじゃない。身体には力が入らず、四肢は力なく放り出されている。

「(痛えッ……息が、吸えな……ッ。なにが、どうなって……)」

吹き飛ぶ。

勢いは一向に止まらない。

凧太郎の身体は宿讎に殴り飛ばされた勢いのまま、引き寄せられるように高層ビルへと激突する。それでも勢いは止まらない、一つ、二つと建築物を突き破り、瓦礫を舞いあげながら数メートル離れた位置に叩きつけられ意識が朦朧とする。

「ギ、ア……ッア…… (やべえ……いしき、とぶ……)」

——目が覚める

見上げる先は「帳」によって作り上げられた飲み込まれそうになる漆黒の夜空。思考が止まる。数秒遅れて自分が一瞬気絶していた事を嫌でも理解した。

眩暈がする。

聴覚はイカれたのか、耳鳴りが鳴り止まない。

全身に重くのしかかるような倦怠感。

地面に叩きつけられた衝撃によって建物は崩壊し、自分の上へ降り注いで来た瓦礫を退かし積み上がった瓦礫を蹴り飛ばしながら這いずるように脱出する。

「ほう、生きていたか。『小僧』と同じでつまらん奴だと思っただがそうでもないらしい」

「かあく、プツ！ そいつはどうも、好き放題殴りやがってあちこち痛えつての。うえ……口ん中じやりじやりする」

圧倒的な存在感。

叩きつけられる威圧感。プレッシャー、視線を合わせるだけで心臓を握られるような感覚。全身が総毛立ち、今すぐにでも逃げ出すべきだと己の本能が警鐘を鳴り響かせている。

月明かりを背にこちらを見下ろしながら——呪いの王、両面宿儺は嗤う。

頭を打ったせいかわ、記憶がぼんやりとしてなぜこんな怪物と戦い合う羽目になったのか思い出せない。正直に言っただけでも逃げ出した所だが、そうはいかないだろう。

そもそも、あの怪物がみすみすこちらを見逃してくれるとは思えない。

どうして、あんな怪物と戦おうなんて思ったのか。

「あ……くく、はははっ！」

「なんだ、気でも狂ったか呪術師」

「あ？ んな訳ないだろ。ただちよつと思っただけだ、なんでお前に喧嘩を売るなんて真似したのかな」

「……ほう。死の間際の走馬灯か？」

「いんや昔さ、五条先生が言ってたんだ。後輩を教え導き、守ってやるのが先輩の義務だって。いつもふざけてるアンタが何言ってるんだって気にも留めなかったけど……どうも俺は、自分が思ってた以上

に後輩が大切らしい」

「はっ、くだらん。それで、もう終わりなら幕引きにするが?」

ああ、きつと自分では呪いの王に勝てないだろう。

だが、それがどうした。

それは今ここで立ち向かわずに逃げていい理由にはならない。五条先生を助けるのは別に俺じゃなくてもいい。だが、いまここで呪いの王を、虎杖悠仁を止めるのは俺がやらなければならない。

でなければ、虎杖悠仁が目覚ました時、これから暴虐の限りを尽くすであろう両面宿儺が引き起こす惨状を目の当たりにすれば彼は罪の意識に苛まれ続けるだろう。

それは、ダメだ。

他人の為に本気で怒れるあの優しい後輩にこれ以上、余計なもの背負わせたくない。きつとこれが、自分が先輩として後輩にしてやれる最後の仕事。

——恐怖を呪力に変えて、雑念を振り払う。

「……! (なんだ、奴の呪力が急激に跳ね上がった)」

「悪いな。俺の術式の関係上、どうしても立ち上がりが遅くてさ。全力で戦おうとすると時間がかかるんだ、急に呪いを込めたら器が保たないのと同じで『ガタ』がくる」

呪いの王は静かに息を呑んだ。

膨れ上がるような膨大な呪力。今も尚、際限なく高まり続ける負のエネルギーに口元が弧を描き歪な笑みを浮かべさせる。

ただの気紛れだった。

愚かにも自分に挑んだ人間、取るに足りないただの術師、両面宿儺にとって津上 凜太郎はその程度の認識であった。

だがそれがどうだ、目の前に立つ男は一目見て分かるほどに呪力の量も密度も、その出力までもが先程までとは比べ物にならない程に変化している。

そしてそれは自分が焼き祓った特級呪霊を凌駕している。

「けど、ギアさえ入っちゃえばこっちのもんだ。それじゃあ、アゲて行こうぜ呪いの王……ッ！」

「クク、貴様の術式はつまらないものだと思っていたがそうではなかったか。なるほど、文字通り命を燃やし尽くすのはこれからだったわけだ。いいぞ、俺に貴様を魅せてみる津上 凜太郎ッ!!」

「うるせボケ！俺が魅せるのは女の子だけだったのッ！ だあくそ、どうせ死ぬなら可愛い子の腕の中で死にたい！」

「かいいいおとおおおおおけえええええんん!!」

「……………」

「三倍だあああああ——!!」

赤い呪力が迸る。

紅焰色の呪力により赤みを帯びた黒髪が重力に逆らうように鋭く逆立つ。ビリビリと空気が震えるのを肌で感じとる。膨大な呪力が全身を包み込み、一目見てわかるほどに先程までとは別格である事を理解させられる。

そして驚いた。

「(反転術式……いや、違う)」

凜太郎の傷が癒えていく。

ズズツ、と時間を巻き戻すかのように傷だらけであった肉体が再生されていく。だが、宿儺が驚いたのはそこではない。

凜太郎は反転術式を習得していない。

凜太郎の術式により一時的に呪力総量と出力が増幅された事により、今も高まり続ける膨大な呪力で凜太郎自身が壊れないよう肉体が無理やり反転術式を行っている。

術式：呪力強化。

ただの呪力操作。つまり術式としては無いも同然であり、呪術師の基礎中の基礎、呪力操作の基本中の基本とも言っていていい誰でも使える技。しかし術式としての恩恵がないのかと言われれば、それは違う。

単純明快、シンプル故に強力。

分かりやすく例えるならば、通常の術師が行う呪力による肉体強化が『たし算』による強化だとすれば、凜太郎が術式を介して行う肉体強化は『かけ算』による強化。

強化は倍率分上昇していき、段階を上げて己を強化することができ。それに加え、一時的に呪力総量と出力をも倍率分増幅させる。

もちろん術式効果にリスクがないわけではない。

倍率を高めるほどほど、必要以上に術者本人に負荷が掛かる。そして倍率の高い強化ほど肉体への「跳ね返り」の反動がある。

武器に急激な呪力強化を施せば器が保たず「自壊」するようになり、急激な強化を施せば半フルオートの反転術式があらうと先に凜太郎の肉体が耐え切れず「ガタ」が来る。

その為、段階を分けて強化をしなければならぬので全力で戦うには時間がかかり強制的にスロースターターとなってしまう。

そしてこの強化には、「理論上は上限がない」。

問題は凜太郎自身が負荷に耐えられるかどうかだ。

「うしー！ 治った治った」

「中途半端だな」

「あん？」

「その反転術式、完全ではないな。粗悪品もいいところだ。寿命を削っているようなモノだぞ」

「知ってるよ。硝子さんから同じ事言われたし、早死にするぞって……あの人に心配掛けたくなかったからあんまり使わなかったが、ま今はもうそんな事関係ないだろ？」

「ククツ……そうだな。貴様は今日ここで死ぬ」

「言ってる。逆にぶっ殺してやるよ。あ、テメエを殺せば名実共に俺が呪いの王って事でいいよな？」

「ふ……ほぎけ」

準備は出来ている。

睨み合いの最中、互いに口元が自然と弧を描き歪に嗤う。

焦りはない。

油断もない。

ただ一息で、踏み込む。

「スウ……——シャア！」

「——ッ！」

再び拳が激突する。

宿讎の膨大な呪力と凧太郎の膨大な呪力のぶつかり合い。まるで数刻前の再現、衝撃波で二人を中心にクレーターが出来上がる。しかし、一点。先程とは違う点があるとすれば。

「ウオオオオオオツツ！」

「ハハッ。いい、いいぞ！ もっと呪いを込めろ！」

「んなもんとつくにやってるよオ！」

力比べに凧太郎が押し負ける事なく、宿讎と正面から殴り合えてい

る事だろう。拮抗した力のぶつかり合いに、両者共に背後へと吹き飛ばされる。そして着地と同時に、眼前の敵へと目掛けて一息で飛び出す。

殴る。

殴るツ。

殴るツツ。

真正面からの拳の応酬。

一撃叩き込む事に爆発するような打撃音が響く。

「……チツ！（クツ）が、反応速すぎだろ！　なんでこの距離で、この速度の攻撃に反応できるんだよ！……というか、滅茶苦茶キツイ！」

脚が止まりそうになる。

肉体に負荷を掛ける無茶な強化の反動が着々と蝕んでくる。

凄まじい速さで繰り出される凜太郎の攻撃。常人では反応できないような速度の拳撃、宿儺は当然のようにそれに反応して防御している。その上、カウンターまで織り交せて来る。

だがそれでも、いくら呪いの王が相手であろうと正面からの殴り合いなら隙は作れる。その隙を突き、強引に防御の上から拳を直撃させてダメージを着実に与えている。

しかし、それは宿儺も同様であった。

何発かダメージを貰いながらも、それ以上のダメージを凜太郎に返してくる。手痛い一撃、一発喰らう事に吹き飛びそうになる意識を繋ぎ止めながらも凜太郎は思考する。

“——どうするべきか？”

ジリ貧。

エンジンが掛かるまでが遅い術式だが、おかげで宿儺と殴り合えるだけのアドバンテージは得た。だけど、それでもまだ足りない。かき集めてもまだ足りない。

このまま殴り合いを続けても先に潰されるのは明確だ。

“———どうするべきか？”

状況を打開する為の答えは簡単だ。

降って湧いたような、天才的な名案が導き出される。

「〃———なら先に潰せばいい”。ああ、そうしよう！」

「なにをゴチャゴチャと、もう限界か！」

「いいや、漸く温まってきた所だっつての！」

「そいつは結構———、ッ!!」

「だからッ、出し惜しみはなしだ！」

一点集中。

ギチギチと、右の拳へと収束させた呪力の塊が形状を変化させ、東洋龍の頭部を模した形状を形作る。今にも唸り声を上げそうな龍の頭部が宿讎を睨み上げた。

咆哮。

意識が冴え渡る。

痛みがより深く意識を研ぎ澄ます。

呪いの王との戦い。一瞬の油断も許されないような状況、死と肉薄する戦い、自分の命に王手が掛かりかけているこの瀬戸際が凜太郎の集中力を極限まで引き上げた。

意識が遠く感じる。

時が止まったような感覚。

感覚がずっとずっと引き伸ばされ、引き伸ばされて、そして炸裂した。

呪力が爆発的に高まる。

「龍ウウウ拳ンンンンッッッ!!!」

それは打撃との誤差、0.000001秒以内に呪力が衝突する際に生じる空間の歪み^{ひずみ}。打撃との誤差、0.000001秒以内に呪力が衝突した瞬間、空間は歪み、呪力は黒く光る。

—— 黒閃 ——

呪力が爆ぜる。

轟音を響かせ黒い火花を迸らせながら、呪いの黒龍が宿儺へと喰らいつく。容赦などしない。そこへ更に、打撃の為に拳へと収束させた呪力を方向性を切り替え解き放つ。

「ぶち抜けえええツツ!!」

呪力放出、凜太郎が得意する呪力の高出力指向放出を拳撃に重ね合わせる。繰り出した打撃が衝突した瞬間、ゼロ距離から放たれる高出力の呪力放出が黒い光を輝かせながら宿儺を撃ち抜く。

呪力によって形どられた黒き龍は宿儺を飲み込みながらアスファルトを抉るように引き摺り回して、ビルの壁を突き破り負のエネルギーの大爆発を起こす。

「……いまなんか出たな。まあいいか、上手く行ったみたいでラッキー」

『黒閃』

打撃との誤差、0.000001秒以内に呪力が衝突する際に生じる現象。言うなれば呪力を使った攻撃の『クリティカルヒット』『会心ダメージ』と呼ばれるようなものだ。

威力は平均で通常の2.5乗。黒閃を狙って出せる術師は存在しない。だがしかし、『黒閃』を経験した者とそうでない者とは、呪力の核心との距離に天と地程の差があると言われる。

更に黒閃をキメると術師は一時的にアスリートでいう“ゾーン”

に入った状態になる。普段意図的に行っている呪力操作が呼吸のように自然に廻り、自分以外の全てが自分中心に立ち回っているような全能感。

「ふう〜……イイねこの感覚」

立ち上る呪力。

変化した呪力の“味”を噛み締める。

友人のチョンマゲゴリラ曰く、『黒閃』を経験する前と後では、今まで口に入れたことのない食材をなんとなく鍋に入れて煮込んでいるような状態であり、『黒閃』を経て呪力という食材の“味”を理解した今、呪術師として3秒前の自分とは別次元に立っているとのこと。

凜太郎は今、120%の潜在能力^{ポテンシャル}を引き出すことに成功した。

「くつくつ……悪くない攻撃だ、やってくれたな」

「お褒めに預かり光栄ですってか？ 言っただろ、テメエに褒められても嬉しくねえよ。加減してほしいなら頭下げてくださいしろよ」

吹き飛んだ高層ビル。

雪崩のように降りかかる瓦礫の山の中から、愉快そうに笑みを貼り付けた宿儺が姿を現した。黒閃を経て放たれた打撃と呪力放出を重ね合わせた『龍拳』による一撃。

呪力で防御^{ガード}した宿儺の方腕をへし折り、そこから畳み掛けるように繰り出した膨大な出力の呪力砲によって消し炭にする寸前までのダメージを与える事の成功していた。

しかし、反転術式による治療で既に宿儺の片腕は完治している。

「(この小僧。高い出力とそれを出すまでの呪力の瞬発力、そして何より呪力の爆発力^{キレ}が凄まじい。指を取り込む前の俺なら敗れていたかもしれない)」

「(反転術式……厄介だが呪力の消費がハンパじゃない。かと言っ

て、何度もバンバン使わせてそれで宿儺の呪力に底が見えてくるかと
言われたら……無理だろうな)」

「現代の呪術師にしては中々やる。だが所詮は凡夫、それだけだ」

「……………ぼ、ぼんぷ?」

「……………愚かな者、無知な者、凡庸な人という意味だ」

「ああ、なるほど……………ほーん、喧嘩売られてるって事は理解したぞ」

「はあ……………お前、頭悪いだろ」

「あゝあゝ!?!」

え、こんな頭悪い奴に一撃喰らわせられたの?マジ? とでも言い
たげな白けた顔で宿儺は凜太郎に目を向ける。因みに凜太郎はテス
トで一夜漬けするタイプ、得意科目は体育を除けば歴史など人物名や
場所や出来事をなんとなく覚えておけばどうにかなるような科目
である。

つまりはバカである。

「ま、無駄話はこれくらいにして仕切り直そうぜ?」

「ああ、仕切り直そう」

トン、トン、と軽快な動作で準備運動でもするかのように跳躍する。
呪いの王を前にして、肝が据わっていると云えばいいのか、割と切
羽詰まった状況だというのにそれを感じさせず、寧ろ余裕すら感じさ
せている。

「来い」

「んじや、行くぜ」

何度目かの跳躍の瞬間、凜太郎の姿が消える。

数秒遅れて鳴り響く轟音と吹き荒れる突風。凜太郎が立っていた
地面は爆発したかのようにヒビ割れて粉碎されている。

放たれるのは不可視の斬撃。

初見殺し中の初見殺し、相手が特級相当の呪霊であろうと問答無用で両断する両面宿儺の術式。

「邪魔アー！」

「(斬撃を弾いた！ 見えているのか、俺の術が！)」

「お散歩の時間だぜ宿儺ア！」

「な、ぐう!？」

勢い殺さないまま更に加速する。

凜太郎は宿儺へと掴み掛かると、呪いの王を振り回しながらビルの壁、割れた窓ガラス、アスファルトなどへ叩きつけながら引き摺り回す。

「もう一丁ッ！」

「ッ……馬鹿が」

振り払う。

両手に呪力を込めて繰り出す連撃。防御の構えをとり、冷静に攻撃を凌ぐ宿儺。タイミングを見計らい、凜太郎の拳を掴み止めるとカウンターの裏拳を顔面に命中させる。

鼻血が噴き出る。

首から頭が飛んでいきそうな一撃。

「どうした。その程度ではあるまい」

「痛っ……離せコラ、野郎と仲良く手繋ぐ趣味はねえんだよッ！」

「俺だってそんな趣味はない」

「お前から手繋いで来たんだろ！」

いつまで手を繋いでんじや。

凜太郎は片腕を押さえ込まれたまま殴りかかる。だが素直に殴らせてやる程、宿讎も甘くはない。腕を弾くよう見切り、もう片方の腕も素早く押さえ込むと凜太郎の両腕を流れる様に自身の両脇へと挟み込んだ。

「げ」

「ふ、堪えろよ。津上 凜太郎ッ！」

「ぎい！ あああああっつっつ!!!?」

粉碎。

両腕の骨を二の腕の辺りから強引にへし折られた。痛みあまり、絶叫し膝を突く。そこへ更に追い討ちに前蹴り。

凜太郎の身体はボールの様に吹き飛び地面を転がる。

「貴様の中途半端な反転術式では修復に時間が掛かるか？」

「ぐ、ぎぎぎ……ああ、ぐうう……」

「立て、続きをやろう。それとも、今死ぬか？」

「ツッ!!」

背筋が凍る。

手印を結び佇む宿讎の姿に死を覚悟した。それは凜太郎も未だ手の届かない、術式の最終段階であり、呪術戦の極致。

「——領域展開」

『伏魔御厨子』

宿讎の背後に突如として出現した悪趣味な建築物。牛のような頭骨に象られた巨大な廚子が鎮座する領域が展開される。それへと対抗する手段が凜太郎にはない。

何せ彼の「ソレ」は領域での押し合いなど出来るはずのない、あまりにも不出来で陳腐なものだから。

「さて、どうする？」 津上 凜太郎ッ

宿讎の斬撃は二種類。

通常の斬撃『解』^{カイ}。

呪力差、強度に応じて一太刀で対象を卸す『捌』^{ハチ}

『伏魔御厨子』は通常の術師の領域とは異なり、結界で空間を分断しない。結界を閉じず生得領域を具現化することはキャンバスを用いず空に絵を描くに等しい正に神業。

加えて相手に逃げ道を与えるという「縛り」により底上げされた必中効果範囲は最大で半径200mにも及ぶ。

そして今、津上 凜太郎を狙い効果範囲を半径50mの地上のみに絞りきった。

「ッア——！」

必中効果範囲内の呪力を帯びたモノには『捌』、呪力のないモノには『解』が。それは『伏魔御厨子』が消えるまで絶え間なく浴びせられる。

両面宿讎は嗤う。

声を荒げて邪悪で歪な笑みを浮かべながら嗤う。

その視線の先には息をつき暇もなく絶え間ない斬撃の雨に晒されて、全身を切り裂かれ血みどろになりながらも未だに人の形を保ちながら斬撃に耐えている呪術師の姿があった。

ゲラゲラと、不愉快な嗤い声は未だ止む事はない。

——彼女は夢を見る。

——それは繋がりを通り、垣間見える記憶の一端。

「——ウツ!!」

それはどこか暗い場所。

渋谷でもキヴオトスでもない、どこでもない彼方の方舟。

目が覚めた彼女が感じたのは途轍もない吐き気だった。込み上げて来た吐き気に我慢できず、嘔吐する。胃の中が空になってしまいそのような感覚。

「ハア、ハア——うつ」

吐瀉物をぶち撒けながら、涙を流す。

あれは何て事ない夢だ、何度も自分に言い聞かせて来た。それでも、何度も夢に出る悪夢に、それがただの夢ではないと彼女は理解していた。

何度も、何度も何度も何度も。

彼の歩んだ人生を、かつての記憶の断片を追体験させるような悪夢、呪いの王によつて目の前で大切な友人が、愛した男が無慈悲な刃によつて切り刻まれ血の海に沈んで行く姿を何度も見せられた。

『■■■■』

「ツ……大丈夫、大丈夫だから」

声が聞こえる。

自分の影の中から、いつからか聞こえるようになった声。自分にしか聞こえない声に彼女は独り言のように呟いた。

掃除しなきや。

そんな事を思いながら彼女は震える膝に力を入れて立ち上がる。

大きくスリットの入った扇情的な黒いドレス。

腰まで伸びた絹のように美しい銀色の髪。光のない荒んだ瞳は水色に輝き瞳孔は左右で違う色に染まっている。

そして彼女の片耳には、男性物の耳飾りが淡く輝きを放っていた。

「……会いたいよ。リントロー」

——まだその時は来ない。

かつての記憶：『愚者と王』②

——痛い。

——痛いッ。

——痛いッッ。

全身を切り裂かれる痛みにならない悲鳴が、ヒュッと掠れた喉から血反吐と共に搾り出される。絶え間ない斬撃の雨。呪力で強化した肉体で防御しようにも、まるで豆腐に刃を通すかのようになんの抵抗もなく切りか裂かれた。

一撃、一撃が途轍もなく重い。

術式により高まり続ける呪力によって肉体が反射で反転術式行っているが、その反転術式の治癒が追いつかないほどに肉体が損傷の激しさを増していつている。

耳が、指が、腕や骨が、どれだけ治癒したところで治した側から失われていく。

わかりやすく例えるならば凛太郎のH ヒットポイント Pが500ptだとすれば、反転術式による回復量が50pt。それに対して宿儺は100pt以上のダメージを連続で与え続けている。

ジリ貧。

このままでは必ずどこかで「詰み」が来る。

まるで栓の抜けた風呂の水のように、自分身体から流れ出てくる鮮血によって作り上げられた血の水溜りを眺めながら凛太郎はどうか状況を打開しようと考えてる。

（や、べえ……っ！ 死ぬ、このっ……ままじゃ、ガチで殺されるッ！！）

——領域の範囲外まで逃げる？

——無理だ、宿儺が易々とそれを許すはずがない。

——損傷の激しさと激痛により肉体には上手く力が入らず、凛太郎はそ

れは無しだと判断する。足の腱がやられた、そもそも満足に動けない状態で宿儺から逃げ切るのは無理だ。

宿儺の『伏魔御厨子』は通常の術師の領域とは異なり、結界で空間を分断しない。結界を閉じず生得領域を具現化することはキャンバスを用いず空に絵を描くに等しい正に神業。

加えて相手に逃げ道を与えると「縛り」により底上げされた必中効果範囲は最大で半径200mにも及んでいる。しかし現在、宿儺の展開した『伏魔御厨子』は領域効果範囲を半径50mに絞る事によって術式の出力を底上げしていた。

それによって凜太郎は想定以上に深いダメージを受けている。

「簡易領域」によって領域の必中効果を消して肉体を修復に専念する事も考えたが、それも無しだと頭の中からその案も消し去る。

本来、反転術式と通常の呪力操作を同時に行う事は難しいとされているが、凜太郎は自分の意思とは関係なく肉体が反射で反転術式を行っているので出来なくはない。

しかしそれやったところで「簡易領域」の出力程度では本物の領域に対しては数秒の時間稼ぎにしかない。

今はその数秒すら惜しい。

(なら、いいぜ……やってやるよッ!!)

ならば手段は一つしかない。

未だ掴めぬ呪力の核心。

不安はある、それでもここで呆気なく殺されてやるつもりは毛頭ない。

「ククッ……クハッ——！」

ゲラゲラと耳障りな嗤い声が響く。

突如として出現した牛のような頭骨に象られた巨大な牛のような御厨子。宿儺は悪趣味な建築物の上に立ちながら、『伏魔御厨子』の範囲

内で切り裂かれ続ける凜太郎を見ていた。

——どうする？ 津上 凜太郎。

宿儺は見ていた。

斬撃の雨に晒され血と泥に沈みながらこちらを睨む敵あいての眼は、その気迫は一変たりとも死んではない。寧ろ鋭さを増して飢えた獣のように牙を研いでいるのだと。この状況でどう動こうというのか、笑みを深め様子を伺う。

「……………」

突然、鈍い音が響いた。

「——なにをしている？」

一定の間隔で鳴り響く鈍い音。

宿儺の視線の先、そこには折れた腕で地面を殴りつける凜太郎の姿があった。

思わず眉を顰めた。

この状況で穴掘りでもしようというのか。死にかけの状態で地面を叩くその意図が掴めず凜太郎を凝視する。肉が裂け骨さえ見えそうな拳で、何度も強く打ち付けている。

気でも狂ったか。

こちらの様子を気に求めず呪力で強化した拳で地面を殴り続ける凜太郎に落胆するように息を吐いた——そして気づく、凜太郎の行動の意図に。

宿儺が術式の出力を上げようとした瞬間。

「よっしやー！」

「……………ケヒッ」

黒い火花 が微笑んだ。

二度の黒閃——津上 凜太郎のボルテージが上がる。

それに伴い、反転術式による治癒能力が向上する。

切断され、失った指や耳、削ぎ落とされた肉と骨を再生。損傷すら追い越すスピードで傷ついた肉体を修復させていく。

視線が交差する。

互いに口元に弧を描き、歯を剥き出しにして嗤う。

凜太郎が勝負に賭けたのはここからだ。

「結界術つてのは難しいよなア！」

「なに……？」

「現実空間に擬似空間を重ねるだとか、俺にはさっぱりだ！ 最強”に教えを説いてももらっても、あいつ何言ってるかわかんねえしよオ！」

「(まさか……使えるのか)」

「だから俺は、俺のやり方でやらせてもらおうッ」

——いつまで高みの見物してんだ。引き摺り下ろしてやるよ！

——……いいぞ、魅せてみる！

祈るように両手を組み合わせる。

作り上げるのは金剛夜叉明王印。掌印を結び練り上げた呪力を押し出していく。生得領域の具現化と術式の発動、本来2段階の工程を1つにまとめる。

二度の黒閃を経た覚醒状態が可能にした早業。

「領域展開——」

こくれつざんきこく
國裂懺鬼哭

——津上 凜太郎の領域展開は未完成だ。

伏黒 恵の領域『嵌合暗翳庭』と同様に不完全な領域である。未完

成である為、相手を閉じ込めるための結界としては成り立っていない。

しかし伏黒 恵と津上 凛太郎の領域展開では同じ不完全な領域展開であっても、完成度に明確な差がある。

領域展開とは、それぞれの術師の中にある生得領域を結界という形で体外に創り出し敵を閉じ込め、その結界に術師の生得術式を付与する事で術式に基づく攻撃を「必中」とする結界術の一種であり呪術戦の極致。

結界術というものは複雑だ。

現実空間にスケールの異なる擬似空間を重ねる感覚。

結界術においてもっと重要なのは「具体的なイメージ」。

伏黒 恵の術式は「十種影法術」

自分の影を媒体として式神を生み出す禪院家相伝の術式。術式の応用性や潜在能力も高く、彼は影という性質の解釈を広げて、閉鎖的な空間のスペースを自らの領域として転用することにより結界を無理矢理閉ざしている。

そして津上 凛太郎の術式は「呪力強化」

先ほども言ったように、結界術で重要なのは何よりも「具体的なイメージ」だ。単純に術式の解釈を広げる事は出来ても、凛太郎は伏黒 恵のように影を拡張させて現実空間に擬似空間を重ねるといったようなイメージはできない。

ゆえに、そこで両者の領域には大きな差が出てしまう。

「(——不発?)」

呪力の「起こり」

術式発動直前に術師から漲る呪力。

領域展開直前、必中術式の発動直前など大技の発動前には「起こり」が必ずある。たとえそれがただの呪力操作と変わらない術式であろうと、凛太郎の術式を介した呪力強化に僅かな「起こり」が存在する。

掌印や膨大な呪力の規模から、眼前の「起こり」は確かに領域展開であると宿儺は判断していた。その判断は決して間違いではなかった。

しかし、具現化した領域どころか結界術の影も形も宿儺の視界には写らなかった。失敗、その二文字が宿儺の脳裏を過った。

だが、その判断は誤りであったとすぐに理解させられた。

ゾクリツ、と全身の産毛が逆立つような奇妙な感覚に晒される。感じたのは緊張や恐怖といった感情ではない。ソレは歓喜にも近いモノであったのかもしれない。

「——…速いッ！」

一瞬であった。

眼前にいた相手の姿を見失った瞬間、自分の懐へと飛び込んで拳を構える高速の影を宿儺は視界の隅で捉えた。惚けそうになった意識と練り上げていた呪力を即座に防御へと巡らせる。

——次の瞬間、『伏魔御厨子』が崩壊した。

そして宿儺の体は黒い火花と共に穿たれたような衝撃によって吹き飛んだ。数秒遅れ発生した轟音と突風により周辺の窓ガラスが割れる。勢いは止まらず一つ二つと、コンビニや高層ビルなどの建物をぶち抜いて飛んでいく。

「……なんだ、やりや出来るもんだな。俺つてもしかして天才？」

拳を振り抜いた体勢のまま、凧太郎は息を吐いた。

そしてたった今繰り出した一撃によって、肘から先が内側から破裂するように消し飛んだ。右腕を反転術式によって何事もなかったかのように修復する。

数秒で元通りとなった腕の感触を確かめるように、手を握ったり開いたりを数回繰り返す。数秒の攻防、凧太郎は自分の賭けが上手くいった事に笑みを深くした。

未完成の領域。

それは凜太郎も理解している。

しかし彼は一か八か、この土壇場で凜太郎は自身の肉体を領域とする事で「具体的なイメージ」を固めた。呪術師の、いや人間の体内は一種の領域であるとされている。

通常の領域が結界^{外殻}生得領域^{中身}であるならば、肉体精神^{外殻}も領域^{中身}であると定義して賭けに出たのだ。

結果は成功。

文句のつけようがない、大満足とも言えるような状況に持っていた。

「……………（不思議な感覚だ。黒閃を初めてキメた時よりも、ずっと……………いまならなんでも出来そうな感覚）」

本来なら凜太郎は自力で領域を使えるほどの技量はない。

いくら二度の黒閃を経て覚醒状態にあつたとしても、呪力の核心と言われるモノを理解していない凜太郎にとって呪術戦の極地と呼ばれる領域はまだ無理な代物であつた。

だからこの領域を使用するにあたって、凜太郎が課した「縛り」が存在する。

それは領域内での術式による対象への必中効果の無効。

肉体を領域とする以上相手を閉じ込める為の外殻はないが、形は違えど条件が成立された領域である以上は「足し引きのルール」が適応され存在していた。

これは棚ぼたであつた、だから凜太郎はそれを逆手に取つた。

元々、凜太郎の術式は自身を強化するだけの術式^{バフ}だ。領域内での必中効果などあつてもなくても変わらない。術式反転とそこから繰り出される拡張術式による対象への攻撃となれば話は別だが、それでも凜太郎はさしたる問題ではないと判断した。

そして次に、領域外への逃げ道を与えるという「縛り」。

それは奇しくも領域を閉じない宿儺が課していた縛りと同じモノ

であった。宿儺はその「縛り」によって必中効果範囲を底上げしていたが、凜太郎は術式性能と出力を更に向上、底上げしている。自身にデメリットを与えるこの「縛り」によって不完全な領域を完全なものとして成り立たせていた。

「けどま、長くは持ちそうにないな。甘く見積もって10分……つてどこか？」

際限なく湧き上がる呪力。

高まる全能感に酔いしれそうになるが、悠長に遊んでいる暇もない。

放出した呪力を逆噴射させ、瞬間的に加速する。

吹き飛んでいった宿儺目掛けてジェット機のような速度で飛来した。

「いつまで休んでんだよ」

積み上がった瓦礫の上に立ち、沈黙する宿儺を見下ろす。

死んだのか、なんて傲慢や慢心とも言えるようなくだらぬ油断などしない。狸寝入りを決めている宿儺に向けて、指先に呪力を溜め銃で狙い撃つように標的を定める。

指先にはバランスボールサイズの呪力が装填される。

「出力最大……——『赫』!!」

放たれるのは『赫』とは名ばかりの呪力弾。

それでも今の凜太郎が放つ一撃はただの呪力放出であろうとも、たとえ特級相当の呪霊であっても容易く深傷を負わせられるような高出力な密度と威力を誇っていた。

宿儺であろうと、直撃すればひとたまりもない一撃。

ピリピリと焼け付くような呪力を感じ取った宿儺は即座に地面を

蹴って回避する。そして拳に呪力を込めて接近戦へと持ち込んだ。

「ククツ……やってくれたな!!」

「どうした余裕がなさそうだな！ まさか呪いの王とあろうとモンが、この程度で終わりなんてわけじゃねえだろうなあ!？」

「安い挑発だ。貴様こそ随分と必死だな。どうした、何を焦っている?」

「そいつはお互い様なんじゃない?」

超至近距離。

殴り合いを再開する。先程見たような光景であるが、違う点がある。とすれば凧太郎の勢いが増している事と、一撃防ぐごとに宿儺が顔を顰めていることであるだろう。

領域展開後、肉体に刻まれた術式は一時的に焼き切れ使用困難となる。

呪力は電気で、術式は家電とも言われている。わかりやすく言えば、オーバーヒートによって異常を起こした機械の冷却を待っている状態。

『伏魔御厨子』を展開中に、領域を維持できない程の強烈なダメージを受けた宿儺は今その状態に陥っている。凧太郎もそれを理解している為、焼き切れた術式が回復しきる前に宿儺を殺すつもりで攻めの手を緩めず継続している。

宿儺も術式の回復まで耐え忍ぶかの様に攻撃を受け流しているが、その表情は険しいものであった。

自身の肉体を領域とした『國裂懺鬼哭』による術式の底上げ。

それに加えて凧太郎が課した「縛り」と領域の効果によって術式性能や呪力出力は飛躍的に向上している。そして黒閃を経た覚醒状態、凧太郎はいま潜在能力を120%以上引き出された状態にある。

その状態から繰り出す凧太郎の呪力特性の乗った攻撃が厄介でもあった。今までは膨大な呪力量と出力で呪力特性を無視していたが、それも無視できなくなってきた。

一撃もらう毎に、〃鋭い呪力〃によって肉に釘を打たれるような痛みが走る。凧太郎自身が宿儺に対して呪力特性を押し付けられるほどに、ブーストが掛かり始めているからだ。

陽炎のように揺らめく赤熱の呪力。

全身は紅焔の呪力に包まれ、赤みを帯びた髪は先程よりも鋭く、どこぞの戦闘民族のように逆立っている。

その呪力量と出力によって裏付けされた耐久力タフネス、デカイ水槽を殴っているようだ。宿儺は感想を抱く。

「……ッ！（この小僧の領域による術式性能の上昇……凄まじいな。単純な必中領域よりもやりづらい）」

「動きが鈍いぜ。さっきの黒閃が効いてるな！」

「ふっ……貴様こそ、随分と無茶をしているんじゃないか？」

「当然っ！ じゃなきゃテメエとやりあうなんて、出来やしねえよ！」

呪力を乗せた重い一撃。

だが力まかせの凧太郎を弄ぶように、宿儺はその攻撃を軽々と受け流す。脇腹に膝蹴りを喰らい、凧太郎の表情が一瞬苦痛に歪む。

宿儺はその隙見逃さず、間髪入れずに顎へと掌底を繰り出す。吹き飛ばすように浮き上がった凧太郎へと追いつき、足首を掴んで地面へと叩きつけようと振り回す。

「ッ……痛えなあ！」

「ハハッ、いいぞ!!」

だが片足を掴まれた瞬間、凧太郎は呪力を手のひらから放出して推進力とした。体を捻り回転する。そしてそのまま勢いを加速させて、掴まれ固定された足首を軸としてその場で一回転して見せた。

ブチブチと、肉が千切れる嫌な音が聞こえた。

その反撃の仕方は予想外であったのか、驚いたような表情の宿儺。

呪いの王の顔面目掛けて回し蹴りを叩き込んだ。

そして片足の拘束が外れた瞬間、身を振って更に回転を加え、千切れた片足で追い討ちの蹴りを繰り出して宿儺を地面へと落とす。

——— どういうことだ？

凜太郎との殴り合いの最中、宿儺は思案していた。

いくら凜太郎が『國裂懺鬼哭』による術式の底上げによってブーストがかかっているとは言え、呪力を乗せただけの打撃がなぜこうも自分の防御を貫通してダメージを与えてきているのか？

完全ではないとはいえ、15本の指を取り込んだ宿儺と凜太郎では呪力総量と呪力出力はつきり言って宿儺の方が圧倒的に上だ。だというのになぜ、そんな疑問が浮かんでいた。

——— …… いや、違う。

「俺の呪力出力が落ちてきているのか」

「どうした、考え事か！」

「随分と小賢しい真似をする」

「あ？……… なんのことだ？」

「ふっ……… そうか。『無意識』だったか」

その原因をすぐに理解した。

凜太郎は反転術式を習得していない。彼が使う反転術式は術式効果によって際限なく高まり溢れ続ける過剰な呪力によって、凜太郎が壊れないよう肉体が反射で反転術式を回している。

そこに凜太郎の意識は割かれてはいない。

負の力エネルギーを掛け合わせる事により生まれる正の力エネルギー、それが反転術式。

しかし凜太郎は反転術式によって生まれた正の力エネルギー、その力エネルギーのリリースを自らに刻まれた術式へと無意識のうちに流し込んでいた。

術式反転「呪力弱化」

文字通り、呪力強化の反対である弱化の能力。術式対象は凜太郎ではなく、敵^{あいて}に対して効果を発揮する。それが基本的な使い方となる。凜太郎の拳が宿儺に触れた瞬間、まるで呪力を削り取られたかのようところで、強制的に弱体化を喰らい脆くなった部位へ強烈な一撃を叩き込まれている。

それによって、凜太郎は宿儺を自分の土台へと引き摺り込んでいた。

「ハアッ！」

「ぐっ！」

地面と水平になるほどの深い前傾姿勢。

加速して勢いを乗せた膝蹴りが宿儺の腹部へと直撃する。蹴りの威力に僅かに浮き上がった宿儺へ掴み掛かり、背負い投げの要領で投げた。

そして素早くマウントポジションを取る。

全身から呪力を迸らせ、繰り出す連撃の拳。ミシミシと骨を軋ませる感触が拳から伝わる。

「くたばり、やがれえっ！」

爆音が響く。

領域と反転術式によって呪力を削り、息も付かせぬ攻防で肉^{フィジカル}体も削った。確かに削れているはずだ、それでも未だに宿儺の底は見えない。宿儺は焦った様子もなく、寧ろこの状況を楽しんでいるようにも見える。

攻めの手は緩めない。

こんな機会^{チャンス}は二度と来ないと、全力で殺しに行く。

「――『捌』」

「……っ！」

――『蜘蛛の糸』

しかし宿儺の術式は既に回復していた。

凧太郎の攻撃を防御しながら、宿儺は一瞬の隙をついて背にした地面に向けて不可視の斬撃を放った。

足場が決壊する。

まるで地面が爆発したかのような衝撃と共に蜘蛛の巣状に大きなクレーターが出来上がる。凧太郎がバランスを崩した一瞬に、宿儺は拘束を抜け出した。

「お返しだ」

頭部を鷲掴みする。

ゼロ距離で放たれた不可視の斬撃。呪力差・強度に応じて対象を一刀で卸す『捌』。凧太郎を両断する死の刃を繰り出された。凧太郎自身も、死を色濃く幻視させられた。

「――なに、すんだッ！ 痛えじゃねえかこの野郎！」

「ハハハッ！ 今のを喰らってその程度で済むのか！」

顔や胴体から鮮血を吹き出させながら、反撃カウンターを放つ。

無傷、とまではいかないが一太刀で卸すつもりで放った一撃に耐え抜いた凧太郎の頑丈さに宿儺は感嘆するように声を上げて笑う。そして凧太郎がなぜ肉を浅く切り裂かれた程度のダメージで済んだのか、だいたいの予想もついた。

凧太郎が無意識で運用している術式反転、それは自身の肉体へ呪力・術式を用いて繰り出された攻撃にも適用されていた。宿儺の斬撃が肉体に触れた瞬間、術式の出力を低下させてダメージを最小限に抑

え込んでいたのだ。

——それなら、出力を落とされようと関係ない一撃で殺す。

それを理解した宿儺が笑みを深めてギアを上げる。

凧太郎もそれを感じ取っていた、だからこそ術式の倍率^{ギア}を上げて追いつくろうとする。

しかし。

「……は？——ツツ!!? ガツ！ぎい、ガツ——ア、ア、

アアアアツツつ!!」

「ツ！」

ドクン、と心臓が跳ね上がった。

全身の血管や神経がぐちゃぐちゃに混ぜられたかのような痛みに襲われた。鼻と口からは吐瀉物を吐き出すように血液が流れ落ちてくる。

視界が赤く染まる。

膝が震えて、滝のように汗が吹き出してくる。

思考にノイズが走る。

自分が自分じゃない何かに塗りつぶされていくような感覚。血液が逆流しているんじゃないかと思うぐらい、内側で血管がドクドクと脈打っている。

血液が沸騰する音が聞こえる。

全身の血管が広がっていくのがわかる。

凧太郎が甘く見積もった10分、既に肉体は限界を迎えていた。術式の肉体強化による無茶な反動がこのタイミングで凧太郎を襲った。

痛みで意識が落ちかける。

全身に巡らせていた呪力が風に吹かれたかのように消える。

凧太郎が片膝をつき、地面に倒れ込もうとした瞬間。

ドスツ、と肩を押されたような衝撃に襲われた。

胸元に感じる小さな違和感、視線を向ければそこには背まで貫通するほど深く凧太郎の体を手刀で貫いている宿儺の姿があった。

「——存外、つまらん幕引きだったな」

「ぶつ、ゴホツ！……ア、ああ」

「中々、楽しめたぞ。津上 凧太郎」

腕を引き抜く。

凧太郎に体はまるで糸の切れた人形のように地面へと倒れ込み、ピクリとも動かなくなる。

そんな彼の姿を残念そうに、名残惜しそうに視線を向けた後、宿儺はその場を離れようと踵を返し歩き出した。

かつての記憶：『愚者と王』③

「……は？——ツツ!!? ガツ！ぎい、ガツ——ア、ア、アアアアツツつ!!」

「ツ——」

ドクン、と心臓が跳ね上がった。

全身の血管や神経がぐちゃぐちゃに混ぜられたかのような痛みに襲われた。鼻と口からは吐瀉物を吐き出すように血液が流れ落ちてくる。

視界が赤く染まる。

膝が震えて、滝のように汗が吹き出してくる。

思考にノイズが走る。

自分が自分じゃない何かに塗りつぶされていくような感覚。血液が逆流しているんじゃないかと思うぐらい、内側で血管がドクドクと脈打っている。

血液が沸騰する音が聞こえる。

全身の血管が広がっていくのがわかる。

凜太郎が甘く見積もった10分、既に肉体は限界を迎えていた。膨大な呪力から行使される肉体強化、術式の無茶な強化の反動がこの夕イミングで凜太郎を襲った。

痛みで意識が落ちかける。

全身に巡らせていた呪力が風に吹かれたかのように消える。

四肢に力が入らない。

凜太郎が膝をつき、地面に倒れ込もうとした瞬間。

ドスツ、と肩を押されたような軽い衝撃に襲われた。

胸元に感じる小さな違和感。視線を向ければそこには背まで貫通するほど深く凜太郎の体を手刀で貫いている宿儺の姿があった。

「――存外、つまらん幕引きだったな」

「ぶつ、ゴホッ!……ア、ああ」

「中々、楽しめたぞ。津上 凜太郎」

貫手による攻撃。

手応えはあった、宿儺は凜太郎の心臓を完全に破壊した腕を引き抜く。

胸に開いたら大きな風穴からの湯水のごとく鮮血が吹き出した。凜太郎に体はまるで糸の切れた人形のように地面へと倒れ込み、ピクリとも動かなくなる。

興醒め。

そんな彼の姿を少しだけ残念そうに、名残惜しむかのような視線を向けた後、宿儺は腕の血を振り払いその場を離れようと踵を返し歩き出した。

「……ん?」

思いがけず、足が止まる。

視線をゆつくりと戻せば、そこには「行かせない」と言わんばかりに呪いの王の足首を掴む凜太郎の姿がある。凜太郎に意識はない、完全に心臓は破壊された。わざわざ生死を確認せずとも、宿儺の五感から得られる情報では足元に転がる呪術師は既に人の形をした肉塊であることは理解出来ていた。

血溜まりに沈む男の姿に、宿儺は鬱陶しそうに息を吐く。

「……その手を退けろ。不愉快だ」

宿儺の興味は既に凜太郎にはない。

どこにそんな力があるのか、掴んだまま動かない凜太郎の亡骸。足についたゴミでも払うかのような動作で、強引に振り解いた。

その瞬間。

「——ッ！」

さながら万力にかけたごとかの並外れた握力、突如として凄まじい力で締め上げる。

メキメキと骨が軋む音と共に、宿儺の足首が握りつぶされ破壊される。宿儺の表情が歪む、それは痛みによってなどではなく自身の予想を上回った僅かな驚愕によってもたらされた変化。

即座に反応する。

足首を未だ掴み上げる凧太郎の腕を不可視の斬撃によって切り落とす。そして距離を取るかのように足元に転がる凧太郎の体をボールを蹴るように飛ばす。

（——何が起きた？）

シンプルな疑問が浮かぶ。

意識はない、あれは完全に死んでいる、ならばなぜ？ 首がもげたトンボのように神経が反応して肉体が動いたのか？ 様々な予想が脳裏に過るが、そのどれもが違うであろうと予測をつける。

視線の先には大きく吹き飛びごろごろと地面を転がっていき、仰向けで力なく倒れ込んだまま血溜まりに沈んでいる凧太郎の姿がある。今にも起き上がってくるような様子は感じられない。

砕かれた足首を反転術式によって回復させる。

スツと目を細めて観察する、感じる気配も生者ではなく死者のそれだ。

静かに指先を向けた。

『解』——！』

放たれる不可視の斬撃。

地面に転がる凧太郎向かって伸びていく。しかし、放たれた斬撃は凧太郎に直撃する事なく、まるで何かに阻まれ僅かに逸れるかのよう軌道を変えてその背後にあつた建築物を大きく切り裂いた。

(俺の斬撃が弾かれた？ いや……違うな)

斬撃が弾かれたのではなく、まるで攻撃そのものを拒むかのように斬撃が方向を変えていなされた。術式がヒットした感触もない、斬撃は流れに沿うよう凧太郎を避けて飛んでいったようにも宿儺は感じていた。

「——ッ！」

視線の先で、凧太郎に変化が起きる。

胸に空いた大きな風穴から、長く細い糸のようなモノを伸ばしながらドロツと黒い何かが穴の底から這い出てくるように姿を現した。ゆっくりと伸びていき、煤のような黒い微粒子を撒き散らしながら凧太郎の体を包み込んでいく。

数秒もしないうちに、その黒い何かに完全に包み込まれた。

凧太郎の中から現れたその何かを観察する。凧太郎の死後発動する術式というわけでもなく、ましてや主従関係を結んだ呪霊が主人のピンチに現れたというわけでもない。

まるでモヤでも掛かったかのように、宿儺はその気配を読み取る事が出来なかった。

(……反転術式による治癒……いや、これは事象の拒絶に近いと言つてもいい。この小僧、一体どうなっている?)

瞬く間に凧太郎の肉体が修復されていく。

宿儺に切り落ちされた腕は黒い何かに包まれると何事もなかったかのように失った腕が元通りになっている。それと同様に、胸に空け

られた大きな穴そして破壊された心臓が時間を巻き戻すよう修復され鼓動し始める。

ものの数秒で、凧太郎の傷が完全に修復された。

突如として姿を見せた黒い何かも、霧となつて消えるかのような飲み込まれて姿を消した。その光景を宿儺は静かに見ていた。

その光景は反転術式による治癒と言うよりは、もはや蘇生に近いものだった。

「——ッ……はっあー！」

「ほう、起きたか」

「は？ え？………どういう状況？」

バツ、と勢いよく体を起こす。

困惑する。

何せ先程、無茶な強化の反動で動けなくなり宿儺に胸を貫かれて死んだと思っていたのだ。しかし目を覚ましてみれば自分はまだ生きており、そんな自分を呪いの王は面白いモノでも見たと言わんばかりの笑みを浮かべて見下ろしている。

理解が追いつかず、困惑するしかない。

「ククッ……小僧、何かしたな。あれが貴様の虎の子というわけか？」

「なに、言ってるんだ……」

「ふ、貴様にとつても想定外であつたというわけか」

「……さあな。俺が知るかそんな事……けどまあ、誰かがコインでも入れたんだろ」

ペタペタと、そこにあつた筈の傷を確認するように手を伸ばした。何がどうなつたのか理解が追いつかない。

ただ、わかる事があるとすれば誰かが己の命を繋ぎ止めてくれたという事くらいであろうか。凧太郎は不思議とそう思った。自分はあ

の瞬間、殺されて完全に「ゲームオーバー」であったはずなのだ。だというのにそんな自分に、まだチャンスを与えられた。小さく笑みが浮かぶ。

目を覚ます直前、なんだか懐かしい温かさに包まれたのを凧太郎は確かに感じていた。もしかしたら気のせいかもしれない、例えそれが自分の願望が生み出したまやかしであったとしても、ただそれでも嬉しかった。

「悪いな呪いの王、どうにもまだ死ねないみてえだ……んじやコンテニューと行こうか」

「ククク……いい、いいぞ。俺もお前も、満足するまでとことんやろう。今度はあんつまらん幕引きは無しだ津上 凧太郎オ！」

呪いを込める。

例え1分、1秒、であろうとも無駄には出来ない。自分に与えられた奇跡、二度目のチャンス。凧太郎はそれが無理矢理繋ぎ止められた「限りあるもの」であり、時間は残されていないということを本能で理解していた。

例えるならばそれは小さな灯火。

肉体の損傷は完治している。しかしそれだけだ、消耗した呪力も命を燃やしてすり減らした魂というエネルギーまでは元通りにはなっていない。既に今の凧太郎の命は残り火のようなものに過ぎない。

そこに誰かが薪を焚べ、僅かな時間だけ延命させてくれただけだ。だからこそ無駄には出来ない、この一瞬で全てを出し尽くす、尽きる命ならば最後まで燃やし尽くして死ぬ。

故に凜太郎は恐れも何もかもを捨て、自分のありったけを呪力に変える。真正面から挑んだところで呪いの王には勝てない。何もかもが自分には足りてない、だったら今この瞬間だけでも届き得るだけ掻き集めろ。

術師にとって最も簡単に能力を底上げする方法、それは命を賭けた“縛り”。遅かれ早かれどうせ尽きる命だ、凜太郎はこの瞬間自身の命を代償に呪力制限を消し去った。

呪力が膨れ上がる。

その全てリソースを術式と身体強化へと回す。

「ケヒツ……なるほど、そう来るか!」

「行くぞ、宿儺ア!」

「来い、津上 凜太郎ッ!」

全身から赤熱の呪力が陽炎と共に立ち昇る。

バチチツ、と高まった呪力が紫電となって迸っている。

術式は既に回復していた。

術式のギアを最大出力まで強引に持っていく。血管を巡る血液が沸騰しているんじゃないかと思うくらいに身体が熱い、肉体は耐えきれずに崩壊を始めているが崩れていく身体をフルオートの反転術式によつて繋ぎ止めている。

今の凜太郎は小さな穴が空いたまま限界まで膨らませて続けている風船という状態がしつくり来るような状態である。空気が抜け続けて完全に“中身”が空になるのが先か、それとも空気を閉じ込め続けておく為の“器”が先に壊れるのか。

そんなギリギリの状態。

領域は使わない。

いや、使えないと言った方が正しい。凜太郎の術式「呪力強化」は

その効果中、一時的に呪力総量と出力を倍率分増幅させる。

しかし呪力の総量と出力を増幅させたところで、術式や領域展開などを使用して消費される呪力は増幅される以前の素の呪力から消費される。後付けされた呪力からは消費されることはない。

つまり、連続で領域展開を使用できる程の呪力は今の凜太郎に残されていない。だからこそ、自分の術式にのみ意識を集中させた。

「術式の付与の解釈を拡大させる」。

それにより細胞の一つ一つへ、肉体の隅々にまで術式効果を作用させる至った。

「はあああああ!!」

「ふん」

ビリビリと空気が振動する。

宿儺が静かに見つめるなか、凜太郎は両拳を腰に構え、溜め込んだ呪力を気合いと共に全て吐き出した。その瞬間、凜太郎を中心に衝撃波が広がった。全身に叩きつけられる呪力の圧力に、宿儺は目を見開き口元を歪ませる。

立ち昇る濃密な呪力。

前髪を一房ほど残して、黒髪を鋭く逆立たせたながら赤熱の呪力に包まれた凜太郎。宿儺にも、それがただの虚仮威しではないことがわかった。

「おおお！」

「ふっ」

重心を低くし、腰を落として構える。

放出した呪力を推進力へと変化させ突撃する。

踏み込んだ足場を粉碎して捲りあげるほどの、文字通り爆発的な加速。吹き出した呪力が凜太郎を覆い、赤い呪力の輝きが軌跡となっていく。

「力は重さと速さだぜ……せええ、のツツ！」
「ぐううっ！」

繰り出された凜太郎の拳を宿儺は交差した腕で受け止めていた。まるで巨大なハンマーで殴られたかのような衝撃、威力と衝撃を殺しきれず宿儺はそのまま凜太郎に押し出されるような形で吹き飛んでいく。

「ぐ……！」

突撃を受け流せないと判断した宿儺は密着した体勢のまま迎え撃つ。隙だらけの胴へと手のひらを押し当て、惜しみなく術式を解放する。

襲いかかる斬撃の雨。

体の内部から突き抜けるような斬撃と衝撃に体が一瞬にして斬り刻まれる。もろにそれを喰らった凜太郎は勢いを失い、血を吐き出したながら痛みで吹き飛びそうになる意識を繋ぎ止める。

「ぶおオッ！」

「体があつたまつて来たな……そら、簡単に死んでくれるなよ津上凜太郎ッ！」

「ぐッ！」

宿儺のカウンターの拳が叩き込まれる。

頭から地面に突っ込んで凜太郎は激突する寸前に両腕を着地して反動で起き上がろうとするが、それよりも早く宿儺が動いた。

呪いの王の腕が凜太郎の頭部を鷲掴みにする。

今度はこちらの番だと言わんばかりに、宿儺は凜太郎を掴んだまま近くにあったコンクリートの壁へと突進する。

ガン、凜太郎の顔が壁を壊す勢いで叩きつけられる。

しかしそれだけでは終わらず、ゲラゲラと不愉快な嗤い声を上げながら駆け出した。

(やば……おれ、いまどうなって、口のなか甘……!!)

まるでかき氷機にでも入れられたような気分だ。

擦り下ろす。骨を砕かれ、肉を抉られ、凧太郎の声にならない叫び声と共に無機質なコンクリートの壁が、血痕を残しながら掘削機で穿つように一直線に削り取られていく。

常人であれば直視できず、目を背けたくなるような酷い光景が一瞬にして出来る。

そして壁面が途切れた所で、宿儺は凧太郎を力任せに放り投げた。

「……ッ………いってえなッ！」

かろうじて意識を保っていた凧太郎、顔半分を擦り卸ろされた痛みとうめきながらも四つん這いになってどうにか着地する。

即座に潰れた眼球と折れた歯や骨、失った肉を反転術式によって修復させ口内に溜まった血を吐き出すと再び宿儺に向かって走り出す。呪力を手のひらに集中させる。

再現するのは『とある漫画』の主人公が使う必殺技、会得難易度Aランクと言われる『回転』、『威力』、『溜める』の三工程を極めた超高等忍術。それを呪力によって再現し具現化させる。

「螺旋丸！」

手のひらの上で呪力を乱回転させながら球状に圧縮させた呪力の塊。凧太郎が至近距離で放つ手加減のない、並の相手ならば致命傷になりかねない呪力の一撃。

凧太郎は螺旋丸を宿儺へと叩きつけようと飛び掛かった。

だが攻撃が届く寸前、宿儺の手が螺旋丸ごと凧太郎の手を掴み、握りつぶした。

不発に終わった攻撃は爆風となって消え、宿儺の腕も呪力によって切り裂かれたような傷を負うが何事もなかったかのように反転術式によって修復される。

「痛う……げ、マジイ!？」

「ほお、中々興味深い技だ。術式もなく技術のみで、呪力の形態を変化させて放つというわけか……クク、お前は面白いな」

「おま、螺旋丸をそんな簡単に止めんなよ！俺とファン達が泣くぞ!？」

「知るかそんなこと……それ、隙だらけだぞ」

凧太郎は身を離そうと後ろに飛んだが、宿儺がそれを許す筈もなかった。宿儺は凧太郎の手を掴んだまま、身を捻りパワーにものを言わせて振り回さんとするが途中で何かがおかしいことに気がついた。掴んで押さえた筈の相手の手が妙に軽かった。

まさか——！

自身の違和感の原因をすぐさま確認する。そこには肘から先のみしかない人間の腕が宿儺の手の中に力なく収まっていた。

「——おい、隙だらけだぜ?」

「……………」

自切。

凧太郎は力任せに振り回される寸前、自身の腕を片腕に集中させた“呪力の刃”で即座に斬り落としていた。凧太郎は自身の腕を落とすことになんの躊躇いもなかった。

彼からすれば反転術式によって再生できるならば、腕一本など安いものだと考えているくらいだった。

明確な隙を晒した。

宿儺が向き直るよりも速く、凜太郎が拳を叩きつける。

——凜太郎はこの戦いで既に三度経験している。

一度目は偶然、二度目は無我夢中で、三度目も凜太郎が意図したものではなかった。そもそも、これは狙って行える攻撃ではない。狙って出せる自分の後輩がおかしいだけだ。

しかし凜太郎はこの瞬間、意識を研ぎ澄ませて意図的に手繰り寄せてみせた。

——それは四度目の黒閃。

この瞬間、凜太郎は自分の意思で黒い火花を微笑ませた。

「ぐうッ——!!」

「はああああああっっ！」

空間が歪む。

黒い火花を迸らせながら拳が胴を穿つ。

今の自分が繰り出せる最大呪力出力を乗せた渾身の黒閃。宿儺が口から血を吐き出して重心がブレたことにより膝を突きそうになる、その一撃は呪いの王に絶大なダメージを与えられるほどの会心の一撃だった。

今しかないと、凜太郎が畳み掛ける。

黒閃の余韻で動けずにいる宿儺を壁へと追い込み、自分の全てをぶつけるが如く連続で拳を叩きつける。

呪力による防御は凜太郎の拳と無意識に使用される術式反転の効果で打ち貫かれた、黒閃をモロに受けた宿儺はなすすべなく攻撃を受け続けている。

しかしその表情に焦りはなく、まるで悦びを露わにするように嗤っていた。そんな呪いの王の姿に不気味さを感じながらも凜太郎は攻撃の手を緩めることはない。

「ぬううう、ああああああっっ！」

拳が顔面を撃ち抜いた。

今まで以上の手応え、殴り飛ばされた宿儺が壁を突き抜けて吹き飛んでいく。

（黒閃の余韻が長いな……まだ、思うように動けんツ……）

吹き飛ばされた宿儺は焦る事なく、冷静に状況を見据えていた。

視線の先には地面を滑るように追いつがる凧太郎の姿。

宿儺は素直に感嘆していた。

いくら殴り切り裂かれたようとも立ち上がるタフネス耐久性、格上の相手との戦闘では自傷を顧みずそれを反撃の一手とする精神力、そして何より戦いの中で学習して成長するそのスピード。

このほんの数分間の間に、戦闘技術が驚くほどに進捗を遂げいていた。スピードは自分が優っているが、単純な膂力勝負となれば向こうが一枚上手なのではと考えさせられる程だった。

しかし、凧太郎と両面宿儺の間には未だ明確な力の差がある。

だというのに未だ倒れる事なく、必死に喰らい付き喉を食い破ろうとする獣のような姿で立ち塞がる呪術師は驚嘆に値するものだった。

——突如として凧太郎の姿が視界から消える。

先程まで爆発的な加速で自分を追っていたというのに、霧散するかのように姿がブレるとその場から音もなく消えて見せた。

（あの小僧、どこへ消えた……！）

吹き飛ばされていた宿儺は地面に腕を突き刺して減速、滑り降りるように勢いを殺して着地する。そして服に付いた埃を払い、何事もなかったかのように立ち上がると周囲の気配を探る。

逃げたのか？

一瞬そんな考えが過つたが、それはないと即座に判断した。既に凧太郎は命を賭けた縛りを課している、そして何よりも奴は戦闘の最中

に逃げ出すような腰抜けなどではないと宿儺も知っている。
そんな呪いの王の頭上に大きな影が重なった。

「……は、ハハハ！」

「いいもんやるよ、受け取りなっ!!」

「クク、わざわざ持って来たのか！」

視線の先、そこには見覚えのある巨大な岩石を持ち上げて落下してくる凧太郎の姿がある。それは宿儺が祓った大地への畏れから誕生した特級呪霊、漏瑚が呪いの王へと一矢報いようと解き放った極ノ番「隕」その残骸であった。

凧太郎は岩石の熱に両腕を焦がしながら宿儺目掛けて「隕」を投げ落とす。

それに対して宿儺は避ける素振りすら見せず構える。

「〃龍鱗〃」

人差し指と中指を立てる。

銃口を向けるように指先を構えた。

「〃反発〃」

それは呪詞の詠唱。

術式の出力を底上げする為の手段。

「〃つがの流星〃」

目を見開く。

宿儺の呪力出力が高まったことを肌で感じ取った凧太郎。ゾクリ、とその一撃が自分を絶命させるに事足りる威力を發揮するであろうことを理解させられる。

『解』

膨大な呪力出力と共に放たれた網目状の斬撃。

静かに構えた宿儺から放たれる、目視可能な程の濃密な呪力の斬撃。落下してくる巨大な岩の塊が、まるで豆腐に刃を通すかのように容易く切り裂いた。

(さて、これはどうする?)

宿儺は確かに見ていた。

強大な「隕」を盾に構え、そして自分の斬撃に飲み込まれていく凧太郎の姿を。ブロック状に切り裂かれた岩石が周辺に音を立てて落下し、周辺を土煙で包み込んでいく。

宿儺は静かに待つ。

油断はない。慢心もない。あるのはただ一つの確信、自分に立ち向かうあの呪術師は今の一撃を凌ぎ、自分に拳を向けてくるであろうという確信。

そして土煙を切り裂き、飛び出してくる一つの影。

その男の姿に歪な笑みを深めて宿儺は嗤う。

「ハハハツ、死に物狂いというわけかツツ!!」

「なんつーもん飛ばしてくれてんだ! マジで死ぬかと思ったよ!!」

回避は間に合わず、防御しきれないと判断した凧太郎は即席の「縛り」によって片腕の防御を捨てる代わりに、全身の防御を強固な物へとした。それによって自身のへのダメージを最小限に抑えて斬撃を防ぎきった。

即座に腕を修復して殴りかかる。

「どうした。もう限界か! もっとがんばれ津上 凧太郎!」

「うるせえな！ こちとら限界ギリギリサバイバーだ、つつーのオ!!」

しかし凜太郎の攻撃は全て虚しく空を切っていた。

それに比べて、宿儺の攻撃は逆に面白いほどに当たる。ハイキックを見切られては背中に膝を叩き込まれ、顔面には手刀、さらには反撃の回し蹴りからバランスを崩したところを組まれて投げ飛ばされる。

凜太郎は石ころのように飛ばされて近くの建物に激突し、鮮血に塗れた粉塵と破片をまき散らした。

「ほら、がんばれがんばれ。まだ踊れるだろう?」

「くそ、舐めやがって……!」

既に限界に近い。

命を賭けた『縛り』、刻一刻とタイムリミットは近づいて来ている。それでも無駄死にだけはできない、既に消えかけている命の灯火を吹き飛ばされまいと凜太郎は必死に抗っていた。

自分の上にのし掛かる瓦礫を吹き飛ばして、凜太郎は息を整えようとするが目に映る光景に「げ!」と目を見開いて表情を歪めた。

そこには腰を落として上下に重ねた両手を腰の辺りに構える宿儺の姿があった。その構えには見覚えがありすぎた、何せ自分が決めたとして扱う十八番と言ってもいい『かめはめ波^{呪力放出}』なのだから。

すぐさまその場から飛び退いた。

次の瞬間には、自分が数秒前まで立っていた場所は膨大な呪力の光に包まれ、その熱量に融解するかのように焼け焦げていた。

「おま、人の必殺技をパクってんじゃねえよ!」

「はっ、何が必殺技だ阿呆め。ただの呪力放出だろう」

「あゝあゝあゝ!?! お前それはタブーだろうが! 言っとくが、ビッグバンアタックだったただの気功波じゃねえんだよ!」

「……知らん。なんだそれは」

「はあ!? 舐めんなクソが!」

ムツキー、と地団駄を踏む過激派読者である凜太郎の姿に宿儺は「なんだこいつ」呆れて溜め息をつく。

ガルル、歯を剥き出しにして唸る凜太郎だが彼は冷静に考えていた。このままでは宿儺に勝つどころか、呪いの王の器である後輩の悠二が目を覚まして主導権を取り戻すまでの時間稼ぎすら出来ずに自分は死ぬであろうと。

(……どうせ死ぬんだ。それなら、限界までやってみるか)

もはや自分に呪力出力のリミッターはない。

自死は免れない。それならば、今の自分にしかできない方法で限界をこじ開けることが可能だ。自分にも危険が伴う可能性を考えて封じていた手段を存分に試す事も可能だ。

——凜太郎は術式と、その拡張術式の『界王拳』のギアを“四段階”に分けて使用している。なぜならばそれは術式効果のリスクを抑えて、自分の肉体が術式発動中と術式解除後の“跳ね返り”の反動に耐えられるであろうラインを見極めた“四段階”だからだ。

しかし術式には、“理論上は上限がない”。

凜太郎自身が負荷と反動に耐えられるかどうか、それが問題となるだけだ。

自然と笑みが笑みが深まる。

かつては心のどこかで恐怖を覚えて踏み越えられなかった一線。しかし今の彼に恐怖はない、寧ろ初めての試みである為、凜太郎はワクワクしてすらいいた。

「いっちょよ行くぜ……!」

呪力が迸る。

重心を落とす。腰に両手の拳をあて、構えをとった。

赤熱に揺らめく呪力が輝き、それは巨大な炎のように広がっていき
凜太郎の体を押し包む。空気が爆ぜるように振動して凜太郎を中心
に増していく膨大な呪力の嵐が地面を抉り、瓦礫を巻き上げている。
赤い呪力が光の柱となって解放される。

「かいいい、おおおお……っ……けえええええんん!!」

(なんだ、この尋常ではない呪力の膨れ上がり方……っ!)

「10倍だあ——っ!!」

凜太郎の雄叫びが地鳴りのように辺りを震わせた。
息を飲んだ。

自分に届き得るであろうほどの膨大な呪力の塊。天を突くほどに
聳え立った呪力の柱、光の中からゆっくりと浮かび上がる影。押し寄
せる強烈な波動に、宿讎の体がビリビリと震える。

一時的なものであると、その呪力出力と総量が特級相当であろう
事が理解できた。

凜太郎の目が向けられた刹那。

「は？」

——気がつけば宿讎は天を見上げていた。

ワンテンポ遅れて響く轟音と衝撃、自分が反応もできずに殴り飛ば
された事を理解するのに数秒の時間を有した。空中で体勢を整えて
着地しようとするが、またもや視点が切り替わる。

いつの間にか自分の体は衝撃と共にコンクリートへと叩きつけれ
ていた。

(——速い！この小僧、いつの間に……!)

即座に理解する。

例え制限付きの力であろうと、目の前の呪術師は数秒前までとは比

べものにならない別次元の存在へと成ったこと。

「ケヒツ、いいぞ！ 貴様は本当につ、俺を楽しませてくれるな！」
「……………」

答える余裕はない。

限界を超えた強化の負荷と“跳ね返り”の反動で吹き飛びそうになる意識をどうにか保っている。既に崩壊しかけている肉体がいまも悲鳴を上げている、体を動かす度にブチブチと筋肉が千切れていくような感覚に涙が出そうになるくらい痛い。

痛みを堪えて拳を突き出す。

音を置き去りにする拳は、呪力を乗せて肉を穿つ拳圧となって飛んでいく。目視できず、反応が遅れて直撃したことにより怯む。

「ツツおおおおあああああ!!」

接近戦。

攻撃を受けながしながら放たれた宿儺の蹴り。

それが届く寸前、凧太郎は軽く飛び上がった、上からカウンターの蹴りを叩き込む。交差した腕で受け止めたものの、ガラ空きとなったワキに凧太郎の回し蹴りが直撃する。

骨を砕く感触。

吹き飛ばされ、着地したところで宿儺が指先を構える。

放たれた巨大な斬撃を凧太郎は僅かに半身を引いただけでやり過ぎし、素早く飛び掛かって宿儺を殴り飛ばした。吹き飛びながら広げた手のひらから連続で放たれる斬撃、凧太郎はそれを軽やかに回避して更に連続で拳を打ち込んでいく。

宿儺は一撃喰らうごとに突き抜ける衝撃に満足に動けなくなるほど怯んでいた。

両者共に、その表情は苦痛に歪んでいた。

(やはり速いな！ 奴の拳も厄介だ、そう何発もまともに喰らえば俺とてただでは済まないか……)

「おい！ しつかり見とけよ！ こいつが本場のかめはめ波だ!!」
「……………」

呪力が膨れ上がる。

凜太郎は空中で両手に呪力を収束させ、ギチギチと反発する呪力を圧縮させて重ねて合わせた巨大な負のエネルギーを作り出す。上下に重ねた両手を腕を腰に引き寄せた。

次第に輝きを増して、圧縮された膨大なエネルギー量に宿儺は回避を判断したが、それよりも速く凜太郎の姿が消えた。瞬間移動と見間違うほどの速度で凜太郎は既に宿儺の懐へと潜り込んでいた。

「10倍ッ、かめはめ……………はああああ——!!」

放たれる極光。

視界を埋め尽くす程の膨大な呪力を収束させた高出力指向放出。ゼロ距離で放たれたかめはめ波に宿儺の姿が飲み込まれていく。僅かに上空へと傾けて放った呪力は高層ビルを融解させるように抉り空へと伸びて消えていく。

「はあ……………は……………つつ……………ぐう……………はっ、はっ……………!」

膝について肩で息をする。

活動限界が近い、既に視界はボヤけて体には力が入らなくなって来ている。いまの一撃は確実に宿儺を捉えていたはず、凜太郎は震える膝に力を入れて宿儺、というよりはその器である後輩の無事を確認しようとする。

「……………あいつ、どこに消えた?」

しかし宿讎の姿は見当たらない。

周辺を見渡してみても、今の一撃の余波で吹き飛んだ建物は瓦礫が積み重なっているだけだった。「まさかマジで殺しちゃった？」そんな考えが一瞬だけ過ったが、あの呪いの王がそんな簡単にくたばる筈がないと考えを改める。

「——なっ!？」

次の瞬間、凜太郎の足元が切り刻まれた。

疲労により反応が遅れ、瓦礫に飲み込まれるように体が落下していく。何がどうなったのか理解ができない。落下した先は広い空間、渋谷駅の地下通路だった。

——そして視線の先には笑みを浮かべて接近してくる宿讎の姿がある。

「ケヒッ、ハハハハハ!!」

「が、ごおおああああ!!」

悲鳴にも似た叫び声と共に凜太郎が殴り飛ばされる。

油断していた凜太郎は防御もできずモロに拳を喰らい、吹き飛んで行き地下通路の壁に叩きつけられる。

そして宿讎は追い討ちをかけるかのように、地下通路の階段に取り付けられていた手すりを斬撃で切り離すと槍を投げるように投擲する。

呪力を纏い投擲物と化した鉄の塊が凜太郎の腹を深く貫き、壁へと礫にした。

「ぐう、がああああアツツ!!」

「ククツ……今のは危なかったぞ。直撃すれば俺とて無事では済まなかっただろう……当たればの話だな」

「クソが、大人しく喰らっとけよ……ッ!」

宿儺は先程の一撃を凌ぎ切っていた。

自力での回避は間に合わない判断して自身の足元を切り裂いて、地下通路へと繋がる入り口を作り出して地下に滑り込む事によって凧太郎のかめはめ波は回避していた。

しかし完全な回避とはいかず、掠っただけで片腕を持っていかれたその威力に驚くくらいだった。

「……………ッ！」

宿儺が何かを小さく呟いた。

痛みでうめく凧太郎はそれを聞き取れなかったが、呪いの王が何かしたということだけは理解できた。

宿儺は徐に両手を重ね合わせ、手のひらに顕現させた炎が収束していく。

膨大な熱量に熱せられて周辺は徐々に融解していく、凧太郎も宿儺が繰り出そうとしている一撃が途轍もなくやばいものである事を嫌でも理解させられる。

指先で炎を手繰り。

矢を番えるように宿儺は構えた。狙い撃つ先は串刺しとなって動けずにいる凧太郎。

「さて……………避けるよ、津上 凧太郎」

「いや無理ゲーだろこの状況!!」

「ふっ、根性だ」

「まさかの精神論……………!?!」

笑顔で容赦なく放たれる一撃。

凧太郎はなす術もなく火柱に飲み込まれていった。

「タフな奴だ……まだ息があるのか」

宿儺は瓦礫を踏み締めて立っていた。

宿儺が解き放った広範囲かつ高火力を誇る火柱が立つほどの一撃で周辺のビルは吹き飛び、辺り一面は既に渋谷としての面影がないほどに更地と化して焦土となっていた。

肉が焼けるような甘い匂いが鼻腔を擦る。

視線の先には片腕を失い、肉は千切れ全身をやけ焦がしながらもどうにか人の形を保っている凧太郎の姿がある。反転術式は既に機能しておらず、傷が回復する様子もない。

先程の一撃で完全に殺すつもりだったというのに、まだ生きている事に素直に感心してしまうくらいだ。

「もう限界か……」

ゆっくりと近づく。

凧太郎の呪力が、命の鼓動が徐々に小さくなって行くのを宿儺は確かに感じ取っていた。命の掛けた「縛り」、限界を超えた術式による強化の反動、その代償として小さな命の灯火が消えていく。

「見事だ。津上 凧太郎」

「認めよう、純粋な呪力と体術のみでの殴り合い。俺と戦った者で貴様の右に出る者はいないだろう」

純粹な賞賛。

ただの暇つぶし以上に、両面宿儺にとって凧太郎との戦いは有意義な時間であった。風前の灯火、ゆつくりと消えていく凧太郎の命。〃縛り〃によつて自死させるくらいならば、楽しませてくれた礼としてこの手でしつかりと殺してやろう。

宿儺は動かない凧太郎を掴み上げて、貫いた。

「ゴホツ、なんども、言わせんなよツ……テメエに、褒め……られても嬉しくねえよ。それに、まだ……終わってねえぞ」

「ククク、口の減らん奴だ。賞賛は素直に受け取っておけ」

まだ意識があつた。

既に虫の息。胸を貫かれたまま中へと浮き、しかしどこまでも自分に悪態をつくような態度に宿儺は笑う。

「要らねえよ……ああ、けど、礼は……言つて、おくぜ……ありがとうよ、近づいて来てくれてツ！」

「……なに？」

「——領域展開」

「——!!」

両手で掌印を結ぶ。

目を見開く、先程まではなかつたはずの片腕がいつの間にも存在している事に驚いてしまう。反転術式はそれ相応の呪力を消費する、失つた腕を再生させるなどもう出来ないとすら考えていた。

宿儺の考えは正しかった。

だが凧太郎は失つた片腕を再生させた訳ではない。千切れて吹き飛んだ自分の片腕を密かに回収しており、新たに腕を生やすのではなく、繋ぎ直したに過ぎない。それによつて呪力の消費を抑えていた。形成された外殻が宿儺と凧太郎を包み込む。

しかし呪力不足によって展開された領域はおよそ領域とは呼べないほどに見窄らしいものだった。生得領域の具現化すらできておらず、術式の必中効果すら付与できていない。

もはやただの結果と言ってもいいような代物。

宿儺はため息を吐く。

「それで、この領域で何ができる？」

「さあな、けど……おかげで、テメエを……閉じ込められてた……射程距離に、入ったぜ……ッ！」

「？……っ……まさか——！！」

生得領域の具現化など必要ない。

必中効果もこの距離まで近づいてしまえば必要ない。

ただ宿儺の逃げ道を塞ぐだけの時間と手段があればよかった。

凜太郎が最後の呪力を振り絞る。

それは宿儺の一撃を喰らった瞬間まで練り上げ続けたなげなしの呪力、それを術式効果によって臨界点まで急激に増幅させる。指向放出など必要ない、ただ無制限に解き放つのみ。

「んじゃ、大人しく死んでくれ呪いの王」

「貴様——！！」

自爆。

凜太郎を中心に呪力が爆発した。

アビドス対策委員会編 ぷろろーぐ

えー、呪術高専にて学友と共に研鑽を重ねて切磋琢磨しているであろう皆様。

いかがお過ごしでしょうか。

貴方の心に語りかけている一般呪術師です。

吹く風も強くなり外は冷え込む季節になってきました。

秋と言えばやっぱり食欲の秋ですかね、カボチャやリンゴあとは魚介類で言えばサンマやカツオなんかが美味しいですね。まあ個人的には季節を問わずに美味しく食べられる焼肉が最強ですけど。

とまあ、そんな事はさておき渋谷にて封印された五条先生の救出作戦の方は上手く行っていますか？

普段から最強を豪語して好き勝手やっていたながら大事な場面で封印されやがった怪しさ全開の目隠し野郎をしっかりと助け出す事はできたでしょうか？

もし上手く行っているのであれば可愛い後輩の為に身体を張った甲斐があったという物です。

何せ呪詛師や特級呪霊とやりあったり、挙げ句の果てにはあの呪いの王と死ぬまで正面から殴りあう羽目になったのですから、しっかりと成功させている事を願います……だ、大丈夫だよねちゃんと救出成功してる、よね。

……まあ、恩師を救い出すことが出来ず道半ばで力尽きてしまった自分は作戦の成功を祈ることしかできません。もしも失敗し、あの「最強」が封印されたまま、なんて事になったらなんて考えたくはありません。

ええ、呪術界隈はどうしようもなくクソなんで。はい、死にもの狂いで頑張ってください。

そして、そんな自分もいまとてつもない窮地に陥っています。

「ん？……あの……大丈夫？」

「……」

「えっと……聞こえてる？」

「……かわいいッ！」

「……え？」

滅茶苦茶かわいい。

絹のような美しい銀色の髪。大きな瞳は水色に輝き瞳孔は左右で違う色に染まっている。その容姿から溢れ出るミステリアスな雰囲気。気に飲み込まれそうになる。

やばい、惚れそう。

助けて五条先生、俺この子のこと好きになっちゃいそう。やばい動悸がすごくなってきた……ッ。

「心臓が痛い。これが……恋？」

「……？」

いや、心臓どころか軋む様に全身が痛いけど。

まずは状況を整理しよう。

先程は混乱のあまり脳内でこの場にいない仲間に語りかけてしまったが、そんな事をしている場合じゃない。

さつきまで青空を呆然と眺めていたのだが、目に入れても痛くないと言うより寧ろ目に突っ込みたいくらい的美少女が現れて倒れ伏すこちらを覗き込んでいる……言葉の使い方間違っただけでも。

そしてその少女のかわいいさに見惚れていたが、彼女の頭部にて大きな存在感を放つ獣耳とまるで童話の中で神に付き添う存在が持つであろう光り輝く光輪に視線が行ってしまう。

天使かな？

いやこれは天使だわ。

「……つまり俺は死んでる?」

「そんな事はないと思う。それに、服は血で凄いい事になってるけど見たところ怪我は……大丈夫?」

「う、怪我の心配までしてくれるなんて……っ。君かわいい上に優しさまで持つてるとか向かうところ敵なしじゃん。因みにお名前を伺つてもよろしいでしょうか、この後一緒にご飯とか。あ、あとLINEやってる?」

「……んっ、そこまで褒められると悪い気はしない。あ、私は砂狼シロコ、それから……らいん? はよくわからないけどモモトクなら使ってる」

「すなおおかみしろ………どういう漢字なのかわかんないけど良い響きだ。てかLINEやってないのね珍しい。まあいいか! 俺がそのモモトクなるものを使えば問題ないな! あ、シロコちゃんって呼んでいい?」

「ん」

小さく頷き、それに合わせるように動く頭部のお耳がなんとも可愛らしいことで。というかその耳って本物だったりします?」

と、いかんいかん。

呑気にお話ししてる場合じゃない。状況の整理だった、彼女の連絡先も気になるがそれよりも先に聞かなきゃいけないことがあった。流石に地面に寝そべったままお喋りするのによそう、側から見たらシロコちゃんのスカートの中を覗き込もうとしている変態にしか見えない。

「よつと、いちちまだ身体中痛えな。あ、そうだシロコちゃん聞きたい事あるんだけどいいかな?」

「問題ない。私に答えられる質問なら」

「ありがと。それじゃあ、ここっつてどこだかわかる? 俺さっきまで渋谷にいたはずんだけど、宿儺に殺され……ンンッ! じゃなかった後輩の皮を被った悪い奴にボコボコにされて気絶したと思つたらこ

ここで倒れててさ状況がよくわかってないんだよね」

「……………しぶや?」

「そう渋谷、あの無駄に人が多い場所。なんか頭ん中はゴチャゴチャになってるしここが何処だかさっぱりわからないんだよねえ。人の気配も全然しないしでお兄さん困ってたのよ」

「うーん……………しぶや、っていうのはよく分からないけど、ここは学園都市キヴオトス。私たちが今いる場所はアビドス自治区だよ。ここから少し離れた所に学校もある」

「……………はい?」

「むぐ、んぐ……………つまり、シロコちゃんの話を纏めると俺はやっぱり死んでるってコトであってる? あ、このチョコバーとエナジードリンクありがとね。貰っておいてなんだけどよかったの?」

「ん、全部間違ってる。……………ライディング用でいくつか持つてるやつだから大丈夫」

ロードバイクを押しながら隣を歩く少女の横で自己紹介を済ませた男——津上つがみ 凛太郎りんたろうは頭を抱えて1時間ほど蹲りたい気分になっていた。何がどうしてこんな事になってしまっているのか一切の見当が付かない。

だが確かなのは津上 凛太郎はあの時、渋谷で死んだ筈なのだ。もはや天災とも言える呪いの王である両面宿儺と戦いの末に自分は死んでいる。だというのに、自分はこの学園都市キヴオトスと呼ばれる場所で再び目を覚ました。

訳がわからない。

チラリと視線を向ける先には肘から先が吹っ飛んだ筈の右腕が何事もなかったかのように完治していた。最初からあの渋谷での戦いは夢だったのではないか、そう思ってしまう程に傷一つない綺麗な右腕が存在していた。

しかし、あの時右腕と共に無くなった制服の袖が、血で汚れ穴が開いたままズタボロとなった高専の学生服があああの戦いは夢などではなかったと証明している。

因みにチョコバーとエナジードリンクはしよぼくれたしわくちや顔で空腹で腹を鳴らしながら歩いていたら、見かねたシロコからお情けで頂いたものだ。ドリンクで口を潤している時、なぜか頬を赤らめている少女がいたが察しの良いこの男は気がついていないフリをしながら堪能ゲフンゲフン、やり過ぎす事にした。

「あー、くそッ。記憶はごっちゃだし、よくわからん事を深く考えると頭痛がする」

「……とりあえず、リンタローが記憶喪失ではなさそうで安心した。最初血だらけで人が道で倒れてるのを見つけた時はビックリした」

「あはは、確かにそれはそうかも。まあこうしてシロコちゃんに見つけてもらえたからラッキーかな。助けてくれるのは有難いけどそれはそうとして俺もそのアビドス？　ってとこの学校にお邪魔してもいいわけ？　よその人が急に來たら学校の人に怒られたりするんじゃない」

「ん、問題ない。それにいま学校には私を含めて5人の生徒しかいないから」

「へー……ん？　ごにん……5人っ!？」

「……本当に何も知らないんだね」

ハア!?!と凜太郎は表情に露わにしてしまうほど驚くが、隣を歩くシロコは気にした様子も見せないで訳ありだろうと深く考えない事にした。しかし呪術高専のような特殊な少人数クラスならまだしも

他の一般高で5人はやばいのでは？

(しっかし、本当に人が全然居ないなここらへん……)

シロコのお喋りに花を咲かせ鼻の下を伸ばしている凧太郎だったが、先程から通行人はおろか住民の姿が一人も見えない事に疑問を持ち始めていた。

現在の正確な時間こそ分からないものの、学生服に身を包み登校する最中だったであろうシロコの姿からおおよそ正午前と言ったところか。

賑わっているとまでいかなくとも、普通なら少なからず通行人がいるはずだ。住宅街だというのに生活感を感じられず、歩いている最中に見つけたコンビニらしき建物もシャッターが降りていた。気になる所ではあったが、田舎とかだとこれが普通なのかと一人納得してしまふ。

それと気になる事があるとすれば、もう一つだけあった。

それはシロコが肩から掛けている学生鞆と一緒に並んでいる大きな銃器の存在だ。アサルトライフル、突撃銃とも呼ばれるものだっただろうか。

映画などで齧った程度で、そういった方面の知識は疎い凧太郎であったがそんな自分でも見た事があるような形状をした銃器。表情に出すことはしないものの、シロコが背に掛けているソレに驚いてしまふ。

それってエアガン？ とか、なんでそんなの持ち歩いてるの？ など色々聞きたい所ではあったが、自称相手の趣味に理解を示せる男である凧太郎は温かい目で見守っておく事にした。

「そーいや、ここから学校まであとどんくらいなの？」

「ん……そーうだね。ここからなら、残り約10kmつとところかな」

「ほーん10kmか。このままのんびりシロコちゃんと歩いて行くのも魅力的だけど、寝起きの運動がてら走って行こうかな。シロコちゃ

んも遠慮せずそのロードバイク乗ってくれていいよ」

「……いいの？ 私スピードを出して走っちゃうけど」

「大丈夫大丈夫。学生が遅刻しちやいかんでしょ。こう見えて運動は結構出来る方だからさ」

「……わかった」

「はは、決まりだ。んじゃあ行こうか」

こちらを少し心配そうにしながらもロードバイクへと跨り走り出したシロコを尻目に、グツと体を伸ばして軽く準備運動を行い息を整えてから少し遅れて走り出す。

常日頃から呪霊や術師を相手に戦う為鍛えてあげた肉体と恵まれた天性の身体能力ならば、本調子とまでとはいかなくともこの程度のランニングなら朝飯前だ。

風を切り人気のない住宅街を走り抜ければ、少し離れた所でロードバイクを走らせるシロコの元へとももの数秒で追いつく事が出来た。

「や、さっきぶり」

「……驚いた。まさか本当に追いついてくるとは思わなかった」

少しロードバイクを走らせて、凜太郎の姿が見えなければ引き返して様子を見に行く事も考慮していたシロコは軽い足取りで自分と並走する少年の姿に少なからず驚いていた。

「ん……もつと速くしても大丈夫？」

「モーマンタイ無問題ッー」

気合いの入った良い返事に少しだけ嬉しそうに少女の頬が緩まった。加速したロードバイクに合わせ、こちらも前傾姿勢となり速度を上げる。

5分か10分か、もしかしたらそれ以上の時間か。

かつては機能していたであろう信号や交差点などの要所で短い休

憩を挟みながら数十分、漸く目的地であるアビドス高等学校が見えてきた。

ここアビドスの郊外には元々砂漠地帯があり、過去に大規模な砂嵐が頻発した事で住宅街や市街地、自治区の殆どが砂漠化して飲み込まれてしまっている。

そんな話を道中シロコの口から聞かされる事となったのだが、実際ここに来るまでの道のりで広がり続け砂漠に沈む都市をこの目で見てきたのだ。その話を聞き現状を確認して道理で人の気配がしない訳だと納得してしまった。

人が居ないというより、去っていったという言葉の方が正しいのだろう。

「おー、ここがアビドス高等学校か」

「そうだよ……あ、そういえば久しぶりのお客様だ」

「なるほどね。それじゃ、お邪魔します」

「ん、いらっしやい」

見上げる先は所々に剥げたような傷があり、中々年季が入っているであろう鉄筋校舎。

シロコが言っていた砂嵐の影響によるものなのか、塀や校門を入つてすぐの校舎付近に大量の砂が積もっている。しかし誰かが日頃から清掃しているのか、塀の外へと掻き出されたような痕跡も見つけられた。

「あつちが本館でその隣が別館、それから奥が体育館。他にも色々ある」

「へー。意外と……あれ、あそこにいる生徒さんは？」

「ん……あれは」

校門を通り抜けた後、ロードバイクを止めたシロコに案内されながら校舎へと足を進めていく。表情の変化が乏しいシロコだったが柔

らかい表情を浮かべながら心なしか楽しげに話を聞かせてくれる様子に、彼女はこの学校が大好きなんだなと理解できた。

そんな彼女の様子に和みながら話を聞いていた凜太郎だが、前方から現れた人影に気がついた。

後ろ姿から確認できたのはシロコと同じアビドスの制服に、黒髪のショートヘアの女性。この生徒であることから彼女も知り合いなのか尋ねようとした所、向こうもこちらに気がついたようで振り返り、シロコの姿を捉えると笑顔を浮かべたのだが——その隣に立つ凜太郎の存在に気がつくやと表情を変えて固まってしまった。

凜太郎はひとまず挨拶をしようと思っていたのだが。

「し、シロコ先輩が血だらけの人を連れてきましたー！」

「…………え」

「ありやま」

えっ！　今からでも入れる保険があるんですか!?

目が覚める。

見上げる先は「帳」によって作り上げられた飲み込まれそうになる漆黒の夜空。思考が止まる。数秒遅れて自分が一瞬気絶していた事を理解した。

眩暈がする。

聴覚はイカれたのか、耳鳴りが鳴り止まない。

全身に重くのしかかるような倦怠感。

地面に叩きつけられた衝撃によって建物は崩壊し、自分の上へ降り注いで来た瓦礫を退かし積み上がった瓦礫を蹴り飛ばしながら這いずるように脱出する。

「ほう、生きていたか。『小僧』と同じでつまらん奴だと思っていたがそれでもないらしい」

「かあく、プツ！　そいつはどうも、好き放題殴りやがってあちこち痛えつての。うえ……口ん中じやりじやりする」

圧倒的な存在感。

叩きつけられる威圧感^{プレッシャー}、視線を合わせるだけで心臓を握られるような感覚。全身が総毛立ち、今すぐにも逃げ出すべきだと己の本能が警鐘を鳴り響かせている。

月明かりを背にこちらを見下ろしながら——呪いの王、両面宿儺は嗤う。

記憶がぼんやりとしてなぜこんな怪物と戦り合う羽目になったのか思い出せない。正直に言つて今すぐにも逃げ出したい所だが、そうはいかないだろう。そもそも、あの怪物がみすみすこちらを見逃してくれるとは思えない。

どうして、あんな怪物と戦おうなんて思ったのか。

「あ……くく、はははっ！」

「なんだ、気でも狂ったか呪術師」

「あ？　んな訳ないだろ。ただちよつと思ひ出ただけだ、なんでお前に喧嘩を売るなんて真似したのかな」

「……ほう。死の間際の走馬灯か？」

「いんや昔さ、五条先生が言ってたんだ。後輩を教え導き、守ってやるのが先輩の義務だって。いつもふぎけてるアンタが何言ってるんだって気にも留めなかつたけど……どうも俺は、自分が思ってた以上に後輩が大切らしい」

「はっ、くだらん。それで、もう終わりなら幕引きにするが？」

ああ、きつと自分では呪いの王に勝てないだろう。

だが、それがどうした。

それは今ここで立ち向かわずに逃げていい理由にはならない。五条先生を助けるのは別に俺じゃなくてもいい。だが、いまここで呪いの王を、虎杖悠仁を止めるのは俺がやらなければならない。

でなければ、虎杖悠仁が目覚ました時、これから暴虐の限りを尽くすであろう両面宿儺が引き起こす惨状を目の当たりにすれば彼は罪の意識に苛まれ続けるだろう。

それは、ダメだ。

他人の為に本気で怒れるあの優しい後輩にこれ以上、余計なもの背負わせたくない。

——恐怖を呪力に変えて、雑念を振り払う。

「……！　（なんだ、奴の呪力が急激に跳ね上がった）」

「悪いな。俺の術式の関係上、どうしても立ち上がりが遅くてさ。全力で戦おうとすると時間がかかるんだ、急に呪いを込めたら器が保たないのと同じで『ガタ』がくる」

呪いの王は静かに息を呑んだ。

膨れ上がるような膨大な呪力。今も尚、際限なく高まり続ける負のエネルギーに口元が弧を描き歪な笑みを浮かべさせる。

ただの気紛れだった。

愚かにも自分に挑んだ人間、取るに足りないただの術師、両面宿儺にとつて津上 凜太郎はその程度の認識であった。

だがそれがどうだ、目の前に立つ男は一目見て分かるほどに呪力の量も密度も、その出力までもが先程までとは比べ物にならない程に変化している。

そしてそれは自分が焼き祓った特級呪霊を凌駕している。

「けど、ギアさえ入っちゃえばこつちのもんだ。それじゃあ、アゲて行こうぜ呪いの王……ッ！」

「クク、貴様の術式は呪力強化だと思っていたがつまらないものそうではなかったか。なるほど、文字通り命を燃やし尽くすのはこれからだったわけだ。いぞ、俺に貴様を魅せてみる津上 凜太郎ッ!!」

「うるせボケ！俺が魅せるのは女の子だけだつてのッ！だあくそ、どうせ死ぬなら可愛い子の腕の中で死にたい！」

「……、タロウさん。リンタロウさん？」

「……へ？ ああ、ごめん。眠くてぼーっとしてた」

名を呼ばれる声に意識が引き戻される。

どうやら自分でも気がつかないうちに疲労が溜まっていたようだ。軽く欠伸を零した後、眠気を吹き飛ばすように両手でパンツと勢い良く頬を張る。

よし。

とりあえず、まずは状況を丁寧に整理して行こう。

シロコちゃんに案内され、ここアビドス高等学校に到着したまでは良かったんだが、そこから一悶着あったのだ。血だらけの俺が現れたことにより生徒の一人が気絶しかけ、さらにその叫びを聞き駆けつけた他の生徒たちも色々ありてんやわんやといった感じだった。

他の子がシロコちゃんがとうとうやらかしたなんて叫び、危うく隠蔽の為に土の中へと埋められる所だった。テンパってたんだらうけど、その判断はお兄さんどうかと思う。というかシロコちゃんは普段からどんなことしてるんだ？

いやー、その場を収めるのに意外と苦労したね。

「あ、そういえばシャワー借りた上に着替えまで貸してもらっちゃってありがとね。俺もあの格好のまま彷徨いたくなかったし助かったよ」

「い、いえ。偶々倉庫にあった……さ、サイズの大きい物をお貸ししただけです。それよりも、その……先程は、あ、ありがとうございました」

「あー、いや、あれは事故みたいなものというか。そう露骨に反応されると俺も気まずいんで、色々と見なかった事にしよう」

「うう………は、はいい」

アビドス対策委員会と名乗った彼女たちが利用する教室。

向かい合うように前の席に座る彼女の縮こまる様な姿に苦笑いが出てしまう。このアビドス高等学校の対策委員で会計を担当しており先程表玄関で遭遇した黒髪の女の子、奥空アヤネちゃん。

赤縁の眼鏡とエルフ耳が特徴的でとってもキュート。彼女のエル

フ耳の存在を確認した事によって俺の中で異世界転生説が浮上してきたね。

まあ、それはさておき。

俺が血だらけでシロコちゃんに連れられてくるもんだから、一体全体どうしたのかとか、怪我は大丈夫なのかとか、状況説明を求められ、色々誤解を解く為にもここに至るまでの経緯を説明した。

誤解を解いた後、血で汚れてるし汗臭いしで学校にあるシャワーを借りたのだが、ここでまた一つ問題発生。なんとシロコちゃんが俺の着ていた服を、制服やシャツ、上着や下着などを洗濯機に突っ込んでしまったのだ。というかなんで洗濯機が学校にあるの、こういうのって普通にあるものなのか？

とりあえず何か着れる物を探してくると言われ、それまで俺はタオル一枚を腰に巻いた状態で待機を言い渡された。

真っ裸でゴウンゴウン、と回り続ける洗濯機を眺めながらシロコちゃんたちが戻ってくるのを仁王立ちで待ってる時間は流石に風邪を引くかと思つた。

スマホでも弄つて時間潰そうかと思つたが、画面は割れてるし電波は繋がってないしであまりにも虚無な待ち時間を過ごす事となった。

どれくらい待つたのかはわからないが、すると突然あら不思議、グラウンドに爆発音が響き、続け様に銃声まで聞こえて来たのだ。

窓から覗き込んで見ればフルフェイスのヘルメットを被った変な集団がヤンキー漫画のようなオラつき方でぞろぞろと侵入してきているんだから。

いや、ビツクリしたね。

ヘルメットの仮装集団もそうだが、彼女たちが使ってる武器が全部実弾の銃なんだもん。明らかなテロ、ここに來てから驚きの連続である。ポイポイ投げつけれる投擲物も本物の爆弾だし。

『うへ、まじか。あれ本物じゃん。ヤンチャしてるで済むレベルの話じゃないぞ』

どうするべきか悩んでいたのだが、集団の一人がこちらに気がつく
と遠慮なしに発砲してくるのだ。

隠れてやり過ぎすかとも考えたが、この学校に居るのは俺だけではないのでそれはなし。とりあえず無力化だけするかと思考していると、開いていた窓から何かを投げ込まれそれが目の前に落ちてきた。

爆弾かと思いい慌てて投げ返したが、発煙手榴弾だったようで視界を奪われた集団は見事に混乱していた。

それを好機とし窓から飛び出すと即座に距離を詰めて、あて身ツ！の要領で気絶チョップを叩き込んだのだが、加減し過ぎたのか相手が頑丈だったのかはわからないが意識を失っていない奴が数名いた。

反撃として榴弾っぽいものを撃ち込まれたのだが、背後には校舎があるので仕方なく全身を呪力でしっかりと固めてから受け止める事にした。

まあ、そこまではよかったのだ。

特殊な呪具ならともかく、呪力で強化して防御ガードしていればただの刃物や銃弾を怖いと思っただ事はない。だからいつも通りのやり方で防御したのだが、爆発の影響で俺の腰に巻いていたタオルが文字通り消し飛んだのだ。

『お、おまつ?! どうして何も着てないんだ！ 恥ずかしくないのかッ!!』

『……いや、今の爆発でタオルが吹っ飛んだ。まあ気にすんな、見られて恥ずかしいようならしない身体はしてない』

『そういう事じゃない！ 気にしろ！ 前を隠せッ!!』

とりあえず、そのまま相手をしていると向こうも諦めたようで気絶した奴を引き摺って逃げ出し始めていた。なぜいきなり襲ってきたのかを聞く為にも一人くらい拘束しようと思っていたのだが、騒ぎを聞きつけたシロコちゃんたちが戻ってきたのだ。

恐れ逃げ出すヘルメットの集団、穴だらけで爆心地と化したグラウンド、そしてフルチン状態でそこに立つ俺。

圧倒的な混沌^{カオス}。どう足掻いても絶望。もはや言い訳の余地がないほどに詰んでいる。この状況を打破するにはどうするべきか本気で悩んだが、結局解決策は導き出せなかったよ。

まあ……結局あれだ、色々手遅れだったのでキツチリバツチリ見られたわけです。

因みに今はちゃんと服を着ています。

古い倉庫で見つけたという『大人用』のアビドスのジャージに身を包んでいます。これが見つからなかったら女性用のジャージにBURUMAを着用するハメになっていた。

それは流石に死ぬ、もう死んでるけど。

「あ、シロコ先輩たちがそろそろ戻ってくるそうです」

「こりゃあ、コンビニにおやつを買いに行くだけでも一苦勞だ。お留守番も楽じゃないね。あ、俺もお茶のおかわり貰ってもいいアヤネちゃん」

「あはは、そうですね。買い物するなら郊外の方に行かないといけませんし。はい、どうぞ……あの、どうかしましたか？」

「いや、シロコちゃんとかアヤネちゃんとかもだけど、この学校ってかわい子が多いなって。あ、柿ピーおいしい」

「か、かわ……っ!?!」

うーん、とても可愛らしい。

目の前であわわ、と頬を赤く染め半分パニック状態で狼狽えるアヤネちゃんの姿についてニマニマと口角が上がってしまう。しかし数時間前に委員会の子達と顔を合わせた時も思ったが顔面偏差値が随分と高い気がする。エルフ耳はいるし獣耳もいる、流石は異世界だ。

こんな女の子たちに囲まれて暮らせるなら異世界も意外と悪くないかもしれない。

「うへー、おじさんの前で可愛い後輩を口説くだなんてタローくんもやるねえ。これが若さかねー……あ、おじさんにも柿ピーを恵んでく

れると嬉しいんだけど」

「しようがない。それじゃあホシノちゃんにはこのピーだけをプレゼントしてあげよう。はい、あーん」

「わーい……ん、あれ？　本当にピーだけ？」

この空間にいるもう一人の女の子。

てつきり居眠りしてるもんだと思ったがそうでもなかったらしい。桃色の髪にピョコンと伸びるアホ毛と左右で色の違う瞳が特徴的で可愛いらしい自称おじさんの女子高生、小鳥遊ホシノちゃんだ。ご要望通りに、とは行かないが小さく開いた彼女の口の中にピーナッツだけを何粒か放り込んで上げる。この柿はわいのじゃ。

机に伏せるような体勢のままお菓子を頬張る姿は小動物のようにも見える。うん、かわいい。

「しかしおじさんキヴオトスの外から来たって人は初めて見たかなあ。〃大人〃には見えないし、聞いてた話で想像してたのとはだいぶ違うかも」

「そ、それが良い方向での想像であることを祈るよ」

ホシノちゃんのかわいさに癒されながら、片手間にこのキヴオトスについてと自分がいま置かれてる状況に考える。

まず自分はあるの渋谷で命を落としている。

これは確実だ、薄れゆく意識の中で今にも泣きそうな顔をしていた後輩の姿を覚えている。だがどうだ、胸に開けられた穴や失った右腕も、今の自分は怪我一つない状態でピンピンしている。

考えられる可能性としてはあの瞬間、両面宿儺に何かをされ肉体は死んでいるが俺の意識だけがこの領域に取り残されているという状態。もう一つはあの戦いの後、俺も実は助かっていたが意識不明の重症により目を覚まさず〃夢〃を見ているような状態。

もしくはやっぱ死んでるけど、今流行りの異世界系な感じでキヴオトスに転生した。このどれかだろう、まあ良い線いつてるのは異世界

転生説だ。実際に体験してるし、宿儺が俺をどうこうする理由もないだろう。

「おやおや、どうしたの難しい顔して」

「んー、女の子は目の保養になるなーって。スマホが無事なら写真撮って待ち受けにしたのに」

「ありやりや、もしかしておじさんも口説かれてる？ いやー、照れちゃうなー。けど、おじさんにばかり構っているとアヤネちゃんが拗ねちゃうからダメだよ」

「は、はいい!? ちよ、ホシノ先輩なに言ってるんですかつ!?」

きやつきやつ、と楽しそうにしている二人の姿に荒んだ心が洗い流されそうになる。呪術師になってからは任務漬けで灰色の青春しか送ってないから、呪いとか関係なしのこういう青春を送りたかったね。

それはさておき。

このキヴォトスとやらとその住民たちについても調べなくちゃいけない事はたくさんあるだろう。何せこっちの常識は通じないだろうし、ここじゃアクセサリー感覚で学生の殆どが銃などを日頃から装備して、場所にもよるが暴動なんて日常茶飯事のようにだ。

キヴォトスって怖い所なのね。

まあ暫くはここアビドスに身を置く事になるだろう。何せ今の俺は住所不定無職に無一文の人間だ。

このままじゃお腹も空くし寂しいし「お願い助けてシロコちゃんツ！」と泣きついたところなんと本当に助けてもらった。自分で言うとおいてなんだが、俺相当怪しい奴だと思んだけど、優しすぎてちよつと心配になるぞ。

アビドス対策委員会のお手伝いと、この古い校舎の壊れた箇所修理、夜間警備などのその他諸々を条件に滞在を許してもらえた。これも対策委員会の子達に掛け合ってくれたシロコちゃんのおかげだ。

シロコちゃんまじ天使。

今は無職、前職は呪術師

「うーん。きゆうおく……9億かあ。どう考えてもシロコちゃん達だけで、払い切れる金額じゃないよな、っと。てか9億円の借金とか悪徳だとしても絶対後ろの方がすげー黒い感じでしょこれ。まじでキヴオトス恐ろしい所だな」

このキヴオトスに訪れて、かれこれ1週間くらいの日時が経過していた。シロコちゃんと一緒にランニングしたりアヤネちゃんを揶揄ったり、バイトのお手伝いやホシノちゃんとお昼寝したりで激闘の1週間だったぜ。

現在は損傷の酷い校舎の壁を修復中である。

助けてドラえもん本格的な修復作業なんてできないよー、なんて途方に暮れそうな時期もあったがよく考えれば全然そんな事はなかった。

五条先生と一緒ににはっちやけ過ぎて夜蛾学長にお叱りを喰らい、罰としてぶっ壊した高専の校舎の修理をした時の経験がここで生きてくるとは。こっちは鉄筋で向こうは木造だったけど、感覚さえ掴めれば問題ないっしょ。

あの時、五条先生とふざけて校舎を吹っ飛ばしておいて正解だったかもしれない。ありがとう五条先生、魔貫光殺砲の練習に付き合ってくれて。

ま、その後一人だけ逃げ出そうとしたのは許さんけどな。死にものぐるいで道連れにしたわ。

「うし、ここの壁はこんなもんかなあ。そういえばアヤネちゃんがグラウンドの水飲み場の調子が悪いって言ってたし、そっちも見てみるか」

しかし何というか、平和だ。

最近ヘルメット団という謎のテロが多く発生するが、呪術師として活動していた頃と比べれば圧倒的に平和だ。

任務を言い渡され、現場に到着すれば既に無惨な状態となった死体を見つけて、そんで気持ち悪い呪霊を祓って、後輩とかスーツの人たちとかとも飯食って寝て、また呪霊を祓って、それで今度は呪詛師をぶちのめしに行く。

そんな生活だったが、今じゃ学校の用務員のような仕事をこなしながらかわいい女の子達に囲まれて暮らしている。

んー、最高ですね。

「はー……ここが俺の楽園ツ……。平和だなあ、ドブカスくんをブン殴った時の殺伐とした空気が懐かしい」

なにが、三步後ろを歩かない女は背中刺されて死んだらいい、じゃボケ。女の子は慈しみ敬い愛でるべきじゃろがい。ペっ、お前が三步下がって歩かんかい黒閃叩き込んで転がすぞ。

偶々、本当に偶々胸糞悪い現場を目撃した時、ペラペラと悪びれる事もなく喋りだす奴の言い分に我慢出来ずにプツツンしてブン殴ってしまった。

やりすぎて色々大変な事になったが、夜蛾学長や五条先生が丸く収めてくれたおかげで停学にはならずちよつとの謹慎処分と今後の活動への制限程度で済んだ。

もうちよいキツめな感じのやつが来ると思っていたが、向こうの当主のジジイが何故かそこまで事を大きくしなかつたらしい。よく知らんが腹から声出して面白そうに笑ってた。

ジジイはともかく、学長と先生には感謝してもしたりないね。

「こういう時に真依ちゃんの構築術式みたいのがあればパパッと簡単に作業が終わりそうなんだけどな。呪力消費が重いらしいけど、なんか便利そうだよなあれ……。そうだ呪力消費といえば」

無意識のうちに呟いていた独り言に、ハツとする。

チラリと周りに人がいない事を確認してから持ち運んでいた工具箱を漁って中から釘を一本取り出す。それを容器と仮定してズツと練り上げた呪力を注ぎ込む。

すると次の瞬間、釘はひしゃげたかと思えば軽い音と共に破裂するように粉々になった。

「……やっぱ呪力の出力が上がってる？」

最近気がついた事なのだが、自身の呪力の出力が変化している気がするのだ。それだけではなく、呪力の総量も増えている感じがする。と言っても同級生の特級よろしくバカみたいな呪力量があるわけでもないし劇的な変化が起きている訳でもない。

何となくだが、素の状態なのに術式を使用してギアが上がってる状態に近くなっているような……そんな感じだ。

これがキヴオトスに訪れた事が原因なのか、それとも一度死というものを経験した事による変化なのか。わからん事だらけだが、暫くは大技は控えて呪力のコントロールに専念するか。

「……うむ、わからん。けどま呪力の総量が増えて困る事はなさそうだしいいか。コントロールがちと面倒だが」

「ちよつと、なに一人でブツブツ言ってるのよ。サボってないでちゃんと仕事してるんでしょうね」

「おっと、そのちよつとツンケンした態度とは裏腹に優しさが滲み出る声色はセリカちゃんじゃないか！ グツモーニング今日もかわいいねー！」

「は、はあ?! いきなり何言ってるのよこのヘンタイっ！」

「あはは、おつかれさまですリンタロウくん。 あ、よかったらこれどうぞ。この間はお掃除も手伝ってくれてありがとうございます」

「別に気にしないでもいいって。けど、ありがとうノノミちゃん。

ちょうど小腹が空いてたのよねえ。あ、ノノミちゃんもおっはー！」
「ふふ、はい。おっはー☆」

ほえー、今日もかわいい。

受け取ったビニール袋の中から惣菜パンを取り出し、封を切って頬張る。うん、美味しい。空腹に嘆いていた胃袋が活力が満ちていく。
こちらは黒見セリカちゃん。

アビドス高等学校の1年生。ピコピコと動く猫耳、赤い瞳と長い黒髪をツインテールに結んだ髪型が特徴的だ。年齢は15歳との事で2つ年下、そしてアビドス対策委員会のメンバーである。うん、かわいい。スカートからチラツツと見えるスパッツもキュート。

そしてこちらが十六夜ノノミちゃん。

アビドス高等学校の2年生。黄緑色の瞳に白茶色のロングヘア、絵に描いたようなゆるふわとおっとり兼ね備えたような女の子。彼女も対策委員会のメンバーだ。そしてデカイ。ナニがどうかとりあずデカイ。

うわ、デツツツ。

同級生でここまで発育がいい子は見たことない。

女の子というのはそれぞれその子にしかない魅力、特別な持ち味を秘めているので、身体的な特徴でのみ魅力を語るような事はしたくないが。というかそれだけで女性のタイプを語るのは三流がする事だ
出直してきなさい。

だがしかし、尻ケツもいいが胸おっぱいもいいと思うぞ東堂。ロマンが詰まってるぞ東堂。

うーん、眼福。

「もしかして2人はこれからお出かけかな」

「はい。実は学校に置いてある消耗品なんかが少なくなってきたので、切らしちゃう前に買いに行こうって話してたんです」

「そりゃ大変だ。ここら辺はお店閉まつてるからねえ、ちよつと買い物しにいくだけでも遠出しなきゃ行けないし。という訳でお兄さん

もお供しようか？」

「な、なんであんたまでついてこようとしてるのよっ!? 私とノノミ先輩だけで充分だから! とういうか作業中でしょ……っ!」

「はは、冗談だよ冗談。作業もそうだけど、俺もこの後ちよつとだけ用事があるからね」

「は……えっ? そ、そうなの?」

「そうそう。あ、因みに行き先とかは内緒ね。俺は謎も着飾るミステリアスボーイだから。まあ帰りは遅くはならんでしょ……あれ、セリカちゃんもしかしてちよつと残念だなんて思ったりしてくれた?」

「ツ~~~~! そ、そんなわけないじゃない! ってなんでついてくるの!」

「あははっ、二人とも仲良しですね」

フンツ、と鼻を鳴らしてズカズカと歩いて行ってしまふ。もちろんニヤニヤと笑いながら後を追う。

ちよつとからかい過ぎて怒ったかなとも思ったが、1週間という短い時間ながら彼女の性格は何となく理解できている。冗談は通じるし根が真面目で優しい子だという事はわかっているので心配ない。あれは可愛らしい照れ隠しなのだ。

いつてらつしやーい、とセリカちゃんとノノミちゃんを校門まで見送った後、ひとまず工具箱などを片付けてから校舎に戻る。

キヴォトスに来てからアビドスの空き教室を使わせてもらいそこを寝床にしている。このがっこうぐらしにも慣れてきたもので、いつもの対策委員会本部の教室までの道のりにも迷うことがなくなってきた。

「シロコちゃーん! というわけでちよつと出かけてくるね!」

「ん……珍しいね。リンタローが一人で外に出るの」

「……なんか、その言い方だと俺が引きこもりみたいでやだな」

「え……あ、ごめん」

「ちゃ、ちゃんと外に出ています。」

そんな引きこもりの友人と偶然外で居合わせたみたいな反応されちゃうと流石に傷つきます。さ、最近では夜になると郊外に出かけてるし。呪力の調子を確かめる為に砂漠の方でビーム撃ったりしています。

まあ、シロコちゃんたちに呪力の事とかは説明してないのでこっそり隠れながらだけど。

「どこに行くの?」

「ふふーん、それは内緒。でもヒントを上げると郊外の方かな、お土産でも期待して待っててよ」

「……リントローお金持ってるの?」

「あ、あー……ない、かも……ですね。ってああ! 財布を取り出そうとしないでシロコちゃん!! ごめんねちよつと見栄張ろうとしただけだから! ただでさえ色々と良くしてもらってるのにお金まで貰ったら俺の心が死んじゃうからさっ!」

「ん……おやつは300円まで」

「いや本当に大丈夫だから! マジでごめんね! その300円はシロコちゃんが好きに使って……無言で小銭を握らせようとしなくてシロコちゃん! くうつ、細くて綺麗な指してるのに力強いッおのれキヴォトス人!」

「っ……ありがとう。でもリントローは頑張ってるから、素直に受け取るべき」

5分ほど格闘したが結局お金を握らされるハメになってしまった。無職はお金の暴力の前では無力だったよ。

やめて、衣食住をどうにかしてもらってるのにお金まで受け取った俺の男としてのポリシーが完全に殺されちゃう。つい最近シロコちゃんから寝袋までもらったのに、これ以上は心がキツイ。

ヒモにはなりたくねえ、ヒモにはなりたくないんだ。

とりあえず、これ以上は時間が遅くなりそうなのでそろそろ向かうとしよう。アヤネちゃんは別件で留守にしており、ホシノちゃんにも

声をかけてから出ようと思ったのだが、お昼寝中だったようなのでプリチーな寝顔を拝み頬をツンツンしてから教室を出る。

以前校舎を探索中に見つけた黒いウィンドブレーカーをアビドスのジャージの上から羽織り、ジツパーを上までキツチリと上げてフードを被る。

「うし。それじゃあ一稼ぎするとしますか」

学校にあったPCを借りた際に見つけた面白い情報をコピーしてプリントアウトしておいた紙切れ数枚に視線を向ける。

「懸賞金ねえ。そういうの、こつちでもあるんだ」

ヴアルキューレ警察学校とやらが掲示していた情報。

お尋ね者とも言えはいいのか、記事に張り出されている顔写真とその下には懸賞金の額が書き込まれている。目撃情報があった場所なども記されているので風潰しで当たって行こう。

悪い奴を捕まえてお金をもらえる、呪術師として活動していた頃のように荒事で稼げるなら得意分だ。

「はー、でも正直女の子に手を上げるとかしたくないな。けどシロコちゃんたちの力にもなってあげたいからなー……はあああ、気が滅入る。大人しく捕まってくれればいいんだけど」

キヴォトスに来る以前に使っていた通帳の呪術師として稼いだ金があれば、アビドスが抱える借金の三分の一、いや半分くらいは余裕で返せるのだからねだりはしようがない。

とりま、無駄足にならない事を祈ろう。

夢を見る。

何度も同じ、夢を見る。

ただひたすらに、真つ暗な闇の中を、無我夢中で走り続けるタチの悪い夢を見る。1歩、2歩と踏み出す度になぜ自分はこんな必死に脚を動かしているのかと疑問が浮かぶ。

不自然に記憶が飛び、つい休んでしまおうと脚が止まる。

乱れた息を整えたくて、大きく息を吸ってゆっくりと空気を吐き出す。そして背後で何かが動く気配につられて、振り向いてみれば。

ヒュツ、とか細い息が漏れた。

再び無我夢中で走り出した。絶対に脚を止めてはならない。どうして脚を止めてしまったのか、それはわからない。けれどなぜ自分が走っていたのかを思い出す。

ただアレに追いつかれてはならない。

誰かにそう言われた訳ではない、自分の本能がそれを理解していた。

『つあ、ハア……ハア……ッ！ どうしてこんな、なんでッ』

脚が重い。

足首まで深さのある泥のような黒い液体に脚を絡め取られながら、ただひたすら走り続ける。それでも背後から迫り来る大きな足音を突き放す事は出来ない。

振り返った先には、化け物がいた。

自分の身長を優に超える大きさ、体から幾重にも突き出た節足動物

のような嫌悪感を抱かせる獣の手足、そして獣姿のソレにツギハイだかのような不気味な人間の頭部。

理解が追いつかない。

小さな疑問は頭から吹き飛び、どうしようもない恐怖だけが残る。逃走は長く続かない。

泥の中で何かに掴まれたように脚をもつれさせ転倒してしまう。

泥を這うように進むが、恐怖で体が思うように動かない。

やがて追いついて来た化け物が、真つ黒な空洞の瞳で見下ろしながら嗤うのだ。体から幾重にも突き出た手足が逃げようとする私を押しさえつけて、化け物は大きく口を広げる。

『やだ、いやだっ。やめ……あ』

——そして私は目を覚ます。

見慣れた事務所の天井。

ソファで横になった所為か背中が痛む、どつと吹き出た汗が気持ち悪い。呼吸が乱れて、叫び声を上げなかつただけ自分を褒めてやりた。気分が悪い、上体を起こして深く息を吐いた。

「……うなされてたみたいだけど、大丈夫、——ちゃん」

つい、ビクツと肩を震わせてしまった。

声の方へと視線を向ければ心配そうな表情でこちらを見つめる小さな少女の姿がある。ただ、その言葉に返事をするだけの気力もなく彼女の頭を優しく撫でる事しかできない。

「ふう……社長たちは、出払ってるんだっけ？ ごめん、ちよつと外で空気吸ってくるね」

こちらを心配する少女の声を遠ざけるように事務所を出た。

この事務所を拠点とする便利屋のメンバー。

一人は見栄っ張りな性格でアウトローに憧れる社長と、そんな彼女を揶揄い楽しそうに笑う少女、いつもオドオドとしており社長を強く慕っている後輩の少女。

便利屋としてこなす依頼は上手くない事も多いが、それを苦だと思つた事はない。

そんな大切な便利屋の仲間たち。

けれどもそんな彼女たちにも言えない秘密が私にもあつた。絶対に明かせない大きな隠し事。

『ねエ、見えテるウ？ みミい、ミえてルよオネエエ？』

ああ、目を合わせちやダメだ。

私がいっつに気づいていると絶対に悟らせてはいけない。悟らせて仕舞えば、どうなるかわかつたものじゃない。

この化け物は私にしか見えていない。

女の…涙の落ちる音がした

澄み渡るような青い空。

空に浮かぶ雲は一つもなく、照りつけるような日差しがなんとも煩わしい。小さく浮き上がる粉粒が太陽光を反射してちっちゃな太陽を作り出しているようにも見える。

寝起き特有の気怠さでもいうのか、どうしても倦怠感拭えない。

「……ふわぁ」

「あはは、おつきいあくびが出たねカヨコっち」

「んんっ……はあく、ごめん。ちよつと油断した」

「ねえ……アルちゃんも言ってたけど、無理せず休んでてもいいんじゃない?」

「……大丈夫。ちよつと寝不足なだけだから」

白をベースとした黒のトゥトンヘア、長い髪を後頭部にまとめて垂らした髪型。そして頭部に浮かぶ光輪、ヘイローと共に存在する悪魔を彷彿とさせるような小さな黒いツノ。ゲヘナ学園3年生であり便利屋68のメンバー、——鬼方カヨコはこちらを心配そうに見つめる少女を安心させようと小さく微笑む。

「……むう」

「本当に大丈夫だから。社長たちを待たせるわけにはいかないし、早く行こう」

スタスタと前を歩いて行ってしまふ彼女の後ろをついていく少女。同じくゲヘナ学園2年生であり便利屋のメンバー。

色白の肌にツヤのある白く長い髪を側頭部で一つにまとめて垂らした髪型、切れ長の目に紫紺の瞳。小悪魔という言葉がピッタリと当て嵌まるような小柄な少女——浅黄ムツキはそんなカヨコに納得が

いかず、不貞腐れた様子で頬を膨らませる。

そんな彼女の様子に、カヨコはちよつぱり申し訳なく思う。ここ数日体調を崩している自分を心配しての行動をありがたく思いながら、ムツキを含む便利屋のみんなに心配をかけてしまっている自分が不甲斐ないと感じる。

だがしかし、自分がいま抱えるこの問題だけは相談する事も打ち明ける事もできないのだ。そもそも、自分にしか認識できないオカルト紛いの話をどう説明すればいいのかもわからない。

——ああ、見られてる。

ゾワツ、とまるで首筋に氷柱を当てられたるような感覚。

自分の影に怯える子犬のように、ありもしない幻に怯えている。姿こそ確認できないものの、*「アレ」*は未だ近くにて息を潜めている。自分だけが知覚出来る、突き刺さるような視線をカヨコは感じていた。

「……カヨコちゃん。顔色悪いけど、やっぱり休んだほうが」

「大丈夫だからッ、早く二人と合流しよう。それよりもアルとハルカの二人だけで仕事させるのも心配だから急ごうッ」

「ええ、ちよつ、早いつてカヨコちゃんっ！」

一刻も早くこの場所から去りたい。

はやる気持ちを抑えきれない、ムツキを置いて行ってしまいそうになるほどの駆け足でカヨコは歩き出す。

*「ソレ」*を認識できるようになったのは1週間ほど前だっただろうか。

初めは目の錯覚のようで、ボヤけて見える程度の小さな黒い影のようなものだった。便利屋としてこなす依頼による疲れから、なんて事ない体調不良から見える幻、その程度の認識。

だがそんな甘い考えを覆されたのは、3〜4日ほど前の事だ。宙に

舞う黒い埃のようだった。ソレの姿形を、ハッキリと認識出来るようになつてしまった。

色々と問題事が多く、時には廃墟やキャンプをして事務所を転々とする便利屋の生活。便利屋の新たな事務所、そのオフィスで楽しげに話をする彼女たちの側で、ソレは立っていた。

最初はドツキリか何かだと思つた。

悪戯好きなムツキや、何かと騙されやすい社長が、自分に仕掛けた夕子の悪いイタズラ。

「ソレ」が自分にしか見えていないと理解させられたのはいつだったか。一向に出来ない少女からのネタバラシ、まるで見えていないかのように振る舞い談笑する彼女たちと、その空気に似つかわしくない不気味な存在。

徐々に顔を青くしたカヨコに本気で心配する仲間達に震えそうになる声で尋ねようとした時、ソレは目を合わせ口元を大きく歪ませて不気味に笑うのだ。

『……あ、アア、みみみミ？ わ、ワワわた、見えテるよオねねええ？』

——これは、ダメだ。

汚れない透明な水に、一滴だけ黒く澱んだ雫を落とすような。そんなざわめきが、胸の中で広がった。これ以上目を合わせてはいけないと、本能的な警鐘がカヨコにはあつた。

この日からカヨコにとってのなんて事ない日常は一変した。日が経つごとに悪化する悪夢に魘され続け、目を覚ませば気取られない様に息を殺すように生活する非日常。

打つ手はなく祈ることしかできない。

ああ、誰でもいい、どうか今すぐにでもこの悪夢を終わらせて欲しい。

「カヨコちゃん？ おーいカヨコっち、聞こえてるう〜？」

「……ごめん。ブーツとしてた」

「もう、気をつけてよ。それよりもほら、あっちの方になんかすつごい人居るよ」

突き刺すような視線はいつの間にか消えていた。

臆げな意識のまま歩いていたところ、なんだか楽しそうな様子のムツキに意識が引き戻される。ムツキが言ったんだかすごい人を探して、彼女が指差す方へと視線を向ければ。

「いやー、なんか手伝ってもらっちゃった上に道案内までしてもらってごめんね。ほんとありがと、俺こころ辺の土地勘まったくないからさー」

「はは、そんな気にしないですよ。それに私こそお兄さんに色々ご馳走してもらっちゃってますから……あ、このクレープほどよい甘さで中々美味しいっすね」

「へえー、そっちの苺もちよつと気になってたんだよね。一口俺のと交換しない？ ……お、サンキュー。うん、美味しい。甘いもの久しぶりに食ったからか余計に美味く感じるわ、ほい」

「ん、そっちのチョコの方も中々……そういえば気になってたんすけど、その変なサングラスと背中の中々……どういえば気になってたんすか？」

「ああ、これ？ さつき戦闘中に見つけたんだけど、なんか面白いし持って来ちゃったんだよね。ほら見てこれ。ここね、紐引つ張ると羽が動くの」

「ぶっ……いやつ、そんな事聞いてないっす。あ、ちよ、そんな高速でパタパタさせないでくださっ……しゅ、シユール過ぎて笑いが……っ！ くく、ちよつ写真撮らせてください」

なんかいた。

確かになんかすごい人がいた。

明らかに変人というカテゴリーのやばい人が歩いてた。

スイーツを片手に街を歩く2人組。1人は特徴的な黒い制服を身

に纏うトリニテイ総合学園の生徒。その学園の委員会の一つで、学園や校外等での違反行為を取り締まる自治活動をしている正義実現委員会の人間。

そしてもう1人が問題だった。

黒いジャケット姿の男性。

いたって普通の、一般人という言葉が似合いそうな出立ちの人間だが、なぜか頭と背中には作り物である天使の輪のカチューシャ、少し焦げて汚れている天使の羽の飾り物が装着されている。おまけと言わんばかりに装備された星形のサングラスが変人度合いを加速させている。

ヘンテコな2人組は会話に花を咲かせてそのままどこかへと歩いて行ってしまう。隣で笑っているムツキをよそにカヨコは目を点にしながら2人組の背中が見えなくなるまで見つめていた。

「あー、面白かった。今の人すごかったねカヨコちゃん」

「……はあ、色んな意味ですごかった」

「……ん？ あれ、アルちゃんたち依頼が片付いたからこっちに戻ってきてるって〜」

「そう、なんだ。ならすれ違いにならないようにしなきゃね」

連絡が届いたのだろう。

スマホを確認しているムツキを尻目に、自分の方にも少し遅れて送られて来た情報を確認して現在地から、どのルートを通って行けば楽に合流する事できるかを簡単に頭の中で組み立てていく。

カヨコとムツキ、2人がいるのは連邦生徒会が管理する地域「D・U」付近。

朝方、依頼が舞い込んだと有頂天になっていた気の早いアルがハルカを連れて事務所を足早に出ていたのだ。

いつも通りカヨコもそれに同行しようと思っていたのだが、数日前から体調を崩している事に気がついていてアルがそれを許さなかった。ムツキを監視役として残してハルカと2人で依頼をこなした。

行ってしまった。

本当なら、自分の気を紛らわせる為と、`ソレ`が仲間たちに危害を及ぼさないか見張っておきたかったのだが、純粋な好意を無碍にはできず午前中まではと事務所で身を休めることに。

「この信号変わるの遅いからムツキちゃん退屈」

「もう、あとちよつとだから我慢」

一向に切り替わらない信号機にぶーたれるとムツキを諫めつつ、カヨコは赤く発光する信号機と街並みをぼんやりと眺めていた。

今日が平日だったか休日だったか、それすらも臆げで思い出せない。だけれど、行き交う人々は多く随分と賑わっている気がする。

ふと、視界の隅に見つけた。

信号を渡った先にある小さな公園、小学生くらいだろうか。小さな子供たちが元気いっぱいと言った様子で楽しそうに遊具やボールを蹴って遊んでいるのが見えた。

最近、おかしなものが見え始めたせいで無邪気に遊ぶ子供たちの姿について穏やかな気持ちになってしまう。

「……あそこの公園、人気なんだね」

「え、そうなの？」

「前はそんなに遊んでる子の姿を見なかったから」

そんな事を話している内に、信号の光が赤から青へと切り替わった。

スマホを開き、もう地図と所在地の情報を確認しようとして画面に視線を向けようとした時、足元へと転がってくるボールが視界に映った。

「あ、お姉ちゃん！ そのボールこっちに投げてー！」

「……えつと」

こちらに手を振りながら笑う姿にカヨコはどうするべきか悩んだ。何を隠そう、この鬼方カヨコという女の子は色々と周囲からかなり誤解されやすい人間なのだ。

本人にそんなつもりはなくても、顔が怖くて怒っているように見えるなど、買い物に來ただけで店員からは「その道」の偉い人が來たのだと怯えられてしまうことが多々ある。

カヨコ自身も誤解される事についてはもう慣れてしまった為、沈黙を貫いておりその所為でますます誤解されている。

故に、自分が小さい子を相手にすれば怯えさせてしまうだけだと、隣にいる自分とは真逆の立ち位置にいるであろうムツキに頼る事にした。彼女なら大丈夫だろうと。

「ムツキ、そのボールあの子たちに返してあげて。私じゃ怖がらせちゃうだろうし」

「……………んーっと、ボール？」

「ほら、そこに転がってるボール。ムツキなら怖がられないでしょ」

「えっ、どのボール？」

「だから、そのボールを公園で遊んでる子たちに——」

「——えっと、カヨコちゃん？ ボールなんて転がってないし、公園に子供なんて居ないよ？ そもそもあの公園、まだ工事中みただけだよ」

「……………え？」

——心臓が跳ね上がる。

何を言ってるだと、ムツキの方へと視線を向ければ彼女は困り果てたような表情を浮かべていた。無意識に唾を飲み込む、いつの間にかスマホを持つ手には汗が滲んでいる。

なぜ、そんな訳の分からない事を言っているのだとカヨコはゆつくりと視線を前方へと戻した。確かに公園は存在している、いや存在していたと言った方が正しいだろう。

確かに数秒前までは存在していた筈の公園は姿を失い、工事用の

フェンスで囲われている。入り口付近には立ち入り禁止と可愛らしい文字で書かれた看板が立て掛けられていた。

何がどうなっているのか理解できない。

呼吸の仕方を忘れてしまったかのように息が苦しくてしようがない。まるで立ち眩みに襲われたように、耳鳴りがして平行感覚が失われて行く。

こつん、と足元に何がぶつかる感触。

視線を向けるなど、誰かが叫んだ気がした。全て気のせいだった、そう自分に言い聞かせろと。

だがカヨコの視線は吸い込まれるように足元へと流れていった。

『みみ、ミみ見、見えてタあア！ 才ね、おネええ血やんんあアソおぼ
おおおオオ！』

「ひっ……!?!」

足元には隠し切れない歓喜の表情を浮かべ、カヨコを見てケタケタと唾う子供の頭が転がっていた。

失敗した。

とうとうやらかしてしまった。激しい後悔がカヨコの胸の中で埋め尽くされる。油断していた、視線を感じないからといって気を抜いてしまっていた。だが後悔しても遅い、自分の油断が招いた事態だ。

「ごめん！ ムツキは先に2人の所に行つてて!!」

「え？ ちょ、待つてどこに行くのカヨコちゃん!？」

「来ちゃダメッ！ いいからムツキは2人の所に、私は後でそつちに行くからッ！」

足元に縋りついてくる「ソレ」を蹴り飛ばした後、困惑するムツキを置き去りにして一目散に走り出す。

蹴り転がされた「ソレ」はありえないような膨れ上がり方をする
と姿を変化させる。その場に取り残されたムツキには目もくれず逃

げたカヨコを追いかけ始めた。

自分の身長を優に超える大きさ、体から幾重にも突き出た節足動物のような嫌悪感を抱かせる獣の長い手足、そして獣姿の体軀にツギハイだかのような不気味な人間の頭部。

紛れもなく、カヨコが目にし続けた怪物の姿だった。

「くっ、はあ……はあ……ごめん退いてッ」

『おおオ、おに、鬼ゴツツッ(おおおおお?)』

来た道を引き返し走り続ける。

どこに向かうべきかなんて分からないし、決めてはいない。ただがむしやらに走る、自分を追いかけてくる怪物から逃げる為にひたすら走り続けている。

帰り道なのか、人混みを作る学生たちにぶつかりそうになりながらも勢いを殺す事なく市街を駆けた。

周りにいる学生は人混みを避けて走るカヨコに好奇や奇怪といった、奇妙なものを見る視線を向けている。

それに気がついたカヨコはやはりあの怪物は自分にしか見えていないのだと理解させられる。助けは期待できない、なら自分でどうにかするしかない。

無関係な人間を巻き込む訳にも行かない、人気がない方へと方向を変えて足を加速させる。日頃からもっと運動して体力をつけておくべきだったかな、そんな現実逃避するような思考がつい混じってしまう。

『つつ、ツカ、つかマえたあアアああアア!』

「っ……か、はっ!」

だが健闘虚しく、少女の逃走も長くは続かなかった。

曲がり角に入り込もうとした時、壁を貫通して現れた長い腕がカヨコを容赦なく壁に叩きつけた。その衝撃で肺の中の空気が押し出さ

れて呼吸が出来なくなる。

ズキズキと背中から全身に走る痛みで倒れ伏してしまう。

早く逃げなければ、頭ではそうわかっているても痛みと恐怖で体がいうことを聞いてくれなかった。

『モモも、もおお、終わりのいいイイイ？』

「この、離せっ……離してッ」

蹲るカヨコに怪物は近づく。

這いずりながらも逃げようとする彼女に、無情にも長い不気味な腕が四肢を絡めとるように纏わりついてくる。もはや少女は蜘蛛の巣に掛かった蝶も同然だった。愚かにも罨に捕えられた生き物に腹を空かせた捕食者がにじり寄る。

まるで悪夢の再現だ。

怪物の腹がメキメキと嫌な音を鳴らしながら裂けると、大きな口となつて少女を取り込もうとする。

力づくで振り解こうと足掻いても、咄嗟に抜いた拳銃を発砲させるも全て無駄な抵抗だった。

「……やだ、やだやだッ！ 離してよ！」

『イ、いい胃、いたダ、きまあああすうウウ！』

「ひっ……まだ、まだ私ッ！ 嫌だ、いやだいやだ！ なんで、やだっ……やだよお……だれか、たすけ……あ」

絶望と言う一言から逃げられず、精神が音を立てて崩れ落ちる。

活きのいい食事を迎え入れるように大きく開いた口は、獲物を咀嚼しようとする骨や内臓がまるで蟲のように蠢き、今か今かと唾を垂らして涙を流す少女を待ち構えていた。

目の前の景色がなにもかも制止したかのようにゆっくりと動いているように感じる。カヨコの脳裏に過つたのは便利屋での生活と仲間たちの顔だった。これが走馬灯というやつか、そんな事を他人事の

ように考えいていた。

死にたくないな、なんて思ってもどうしようもなかった。

『ぶえ、ピイぎいいウー!』

「——え?」

一瞬、何が起こったのか理解できなかった。

目の前で口を広げていた化け物が悲鳴を上げて吹き飛んで行ったのだ。

「やあ。いい天気だね、君さえ良ければ俺とお茶なんてどう?」

「……………え?」

呆然と座り込んだカヨコの横にはいつの間にか、視線を合わせるように屈み込んだ見覚えのある男が人懐っこい笑みを浮かべながらそこに居た。

当店でのお触りは禁止されております！

これってどういう状況なん？

誰でもいいから簡潔に状況説明してほしい所なんだが。

まず隣には唾然とした表情を浮かべる、可愛いというより綺麗といった言葉が似合いそうな女の子が涙を流して赤くなった目でこちらに視線を向けている。

そして眼前には先程、蹴り飛ばした呪霊が設置されていた自動販売機を巻き込む形で向かい側の建物に穴を開けながら派手に吹き飛んで行った。

うーん、というかあれって呪霊、なんだよな。

この状況こそ大体の推測が出来るが、まったくもって想定外の状況に疑問が疑問を呼び、理解が追いつかず思考が迷子になってしまいうだ。

そもそも、あれが呪霊だと確信を持って判断ができない。

だというのも、なぜ自分がこの距離に近付くまで呪霊の存在を察知する事が出来なかったのか。

呪霊特有の澱んだ気配と漲るような呪力、数々の呪いを相手にして祓ってきた経験からして間違える筈がない。ましてや見逃すだなんて事もありえない。

「……単純に気配を感じ辛い、って訳じゃなさそうだな。となるとそういう術式か？」

疑問が尽きない。

ここキヴォトスで生活していた上で最初に疑問に思ったのは呪霊の存在の有無ついて。

だが、ある事を理由に呪霊はこの学園都市に存在しないものだと思っていた。

そもそもなぜ呪霊は存在するのか。

呪霊とは妬みや恨み、後悔や恥辱など、人間から漏出した様々な負^{エネルギー}の感情が集積し呪いが形を成す事で具現化する意思を持った異形の存在。

死後、呪術師が呪霊に転ずる事があるとしても呪術師から呪霊は生まれえない、それはつまり裏を返せば非術師であるただの人間からのみ呪霊が生まれ続けるという事。

だが、この学園都市に置いてそれはないと俺は考えていた。

なぜなら学園都市に住む住民、アビドスで生活しているシロコちゃんやホシノちゃん。力の幅に個人差こそあるものの、彼女たちは呪力とはまた違う「不思議な力」をその身に宿しているのを感じ取れたからだ。

呪いの存在を感じない世界、呪力とは別の特別な力を宿す住民、この2つの情報から呪霊は発生しないと踏んでいた。

「いや、深く考えるのは後だ。優先するべきはそんな事じゃない」

意識を思考の海から切り上げる。

吹き飛ばした呪霊の方へと向けていた視線を、酷く怯えた様子少女へと戻す。そんな彼女に歩み寄り、安心させようと視線を合わせ表情と声色を意識して声をかける。

「やあ。いい天気だね、君さえ良ければ俺とお茶なんてどう？」

「……………え？」

少女はポカーン、となんとも言えない表情を浮かべている。

数秒遅れて、状況に理解が追いついたのかハツとした顔をして何かを必死に伝えようとしている。しかし動揺していて、声にならない声を発するのみで終わってしまう。

「あ……………はっ……………はっ……………ッ」

「大丈夫。ゆっくりでいいよ、まずは深呼吸から」

こちらの言葉にゆつくりと頷き、少女は苦しそうに胸を押さえ深く息を吸い吐いてを繰り返している。というかこの子めちやくちやかわいいんだが。アビドスのみんなと良い、きつき知り合った正義実現委員会とやらに所属しているイチカちゃんといい、なんでキヴオトスには魅力的な女の子が多いのか。

これから先、俺の理性と心臓が持ち堪えてくれるか心配になって来たぞ。

「はあ、ふう……あ、あの」

「軽い自己紹介といこうか。俺は津上 凜太郎、親しみを込めて凜ちゃんでも太郎くんでも、ま好きに呼んでくれて構わないよ。それで、かわいいお姉さんのお名前を聞いてもいいかな?」

「……じゃあ、リンって呼ぶ。えっと、鬼方……カヨコ、私の事も好きに呼んでいい。いや、それよりも——」

「——あれが見えてるのかって? もちろん見えてるよ」

彼女がなにが聞きたいのか予想は出来た。

その言葉に酷く驚いたような様子で、目を見開いている。

「逆に聞くけど、カヨコちゃんも見えてるって事でいいんだよね?」

「……うん」

静かに頷いて返してくれる。

特殊な状況や呪具を除き、基本的に一般人は呪霊を見る事も触れる事もできない。カヨコちゃんからも呪力は感じない、だということになぜ視認する事が出来ているのか疑問が残る。

しかし深く考える余裕はない。

「……っ後ろ!」

「ん? ああ、起き上がって来たか」

青ざめた顔のカヨコちゃんの言葉に背後を確認すれば蹴り飛ばした呪霊が戻ってきたようだ。

呪力を込めて蹴った訳ではないので、ダメージを負った様子はない。がしかし、横槍を入れられたことが相当気に食わないのか、一目見てわかるほどに表情を歪めて怒りを露わにしていた。

『お、おおオバエ、じじ、ジャジャ邪魔するナあアア!』

「(……こいつ、喋れるのか。言葉がわかるって事はそれなりの級の呪
いか)」

『キキキつ、き聞いてルのかあッ!』

「うるせえな。口が臭えから黙ってるよ、鼻が曲がりそうだ」

簡単な挑発。

奴もおちよくられていると理解しているのか、地団駄を踏み奇声を上げながら自らの体に穴を開ける勢いで全身を掻きむしっている。拙いながらも言語を理解している事からそれなりに高い等級である呪霊。

さしずめ二級、高く見積もっても準一級といった所であろう。

この程度ならさして問題ないな、なんて事を考えているとギョツと服を引っ張られるような感触について視線がそっちに向く。

そこには奴の怒り狂った様子に怯えたカヨコちゃんの姿がある、袖を掴む彼女の手も酷く震えていた。無理もない事だろう、いくらキヴォトスに住み銃器でドンパチしているような子でもアレは少々刺激が強すぎる。

「に、逃げ……」

「大丈夫。俺 結構強いから、カヨコちゃんの身の安全は保証するよ」
「な、そんな事言ってる場合じゃー!」

「平気だよ。あれの扱いには慣れてる、これ以上 君に怖い思いはさせないからさ」

「…………ツ！」

『あ、アアアアあああアカアアつああア！』

「おー、元気いっばいだな」

『きき、きらい嫌イツ!! オマ、才前嫌いダツ！』

「そうかい。俺もお前みたいな害虫ゴキに好かれたいとは思わないね。呪いと友達になるなら里香ちゃんみたいな愛嬌のある子がいいよ」

せつかくカヨコちゃんとお喋りしていると言うのに、余計な奴が横槍を入れて来る所為でついため息が出そうになる。

とりあえず、場所を移すべきか。

今この場で奴を祓ってもいいのだが、周囲への被害を考えたらそうはいかない。派手に吹き飛ばした自動販売機や、その衝撃で壁に開いた大きな穴、遠くから集まって来る気配、軽く騒ぎになってしまう事を想定してこの場を離れるべきだと判断する。

「カヨコちゃん、走れる？」

「…………ごめん。無理そう、腰が抜けちゃって」

「オツケー。そういう事ならちよつと失礼するよ」

「え？ ちよ!？」

腰を抜かしたらしく、動けない様子のカヨコちゃんの上半身と下半身をそれぞれの腕で分担する形で支え、お姫様抱っこの形で抱えあげる。

軽いな、ちゃんとご飯食べてるのかお兄さん心配だよ。

本人は恥ずかしがっているのか、色白な肌を赤く染めて腕の中で慌てふためく姿がかわいらしい。それはそれとして小さく暴れるのは我慢してほしい。

「カヨコちゃんってここら辺の地理詳しい？」

「そ、それなりには詳しいほうだけど」

「そいつはありがたい。じゃあ人が寄り付かないような廃墟とかここ

ら辺にある?」

「……………ここから、少し離れた所になら」

「なら、俺と散歩デートと行こうか。そこまで誘導よろしくね」

「で……………っ」

「あ、照れてるう? かわいいなく」

うん、かわいい。

赤くなった顔で睨みつけてくる姿は怖い所かなんとも愛らしい。荒んだ心が洗われるような気分だ。このまま眺めていたいが、視線を呪霊に向けてもう一度わかりやすく挑発する。

「来いよ。この子がほしいんだろ? 奪ってみろ、テメエじゃ一生無理だろうけど、なっ!」

『……………アアアあぁッ!』

乗った。

背を向けて走り出した俺を完全にターゲットとしたのか、数秒遅れて巨大な体躯を引き摺るように後ろを付いてくる。馬鹿デカイ怪物が殺意を向けて背後から迫ってくる光景は一般人はおろか呪術師ですらチビりそうなレベルだ。

まあ、渋谷でもっと怖い奴と鬼ごっこした経験があるのでそれと比べればたいした事はない。

「(でけえ凶体の割には結構速いな。手足が多い分速度スピードも倍ですよってか?)」

巨大な体躯に反して重量を無視するような速度。

パワータイプののような見た目でスピードタイプののような俊敏さ。中々の速度だが、しかしその程度だ。いままで戦った相手のように突然 視界から消えるような速さはなく、素の身体能力でも振り切れないレベルというわけじゃない。

だが、こつちが人一人を抱えているとなれば話は別だ。

背後から感じる気配は徐々に距離を詰めて来ている、このままでは
いずれ追いつかれてしまうだろう。

「つ……リン、次その道を右に」

「カヨコちゃん」

「なにつ、どうしたの？」

「ちよつと速度^{スピード}あげるからしつかり捕まって。あと、舌嚙まないよう
に気をつけてね」

「え………つ!!」

完全に振り切ってしまったては意味がない。

付かず離れず、それくらいの距離を維持しながら呪霊を誘導しな
ければならない。

——出力を調整する。

必要最低限の呪力を練り上げて身体強化を施す。全身に力が行き
渡るような感覚を肌で感じながら舗装路を踏み抜く勢いで加速する。
視界に映る全てが早送りになったような景色、風を切り疾走するこの
感覚がなんとも気持ちいい。

「う、くう………! (はやつ、私の事を抱えたままなんて速力)」

「うしつ、これくらいのペースでいいか。引き続きナビよろしくねカ
ヨコちゃん!」

「わ、わかった。次の交差点まで真っ直ぐ、でも信号があるから」

「任せんしゃい。赤信号だろうとへっちらだから!……あ、やべ車
きた」

「え? ちよそいう問題じゃ………つ!!」

「うう……酔ったかも」

「あ、あはは、ごめんちよつと速くしすぎた」

誘導の下走り続け、辿り着いた大きな廃墟。

先程の地区から離れた区画、とあるビルの地下フロアへと通じる道、さらに地上階へと続く階段を上り、迷路のように入り組んだジグザグの通路を潜り漸く到着した目的地。

大規模な改装工事を行う予定だったが、経営の悪化により倒産してしまい、改装工事も取り壊し作業も中途半端なまま放置され今も残っていると言うこの廃墟こそがカヨコのナビゲートが導いた場所。

ここに来るまで色々であった。

女性を抱えた男性が自動車並みの速度で道路を走つてると好奇の目とカメラを向けられたり、背後から腕を伸ばして来る呪霊の攻撃を右に左に、飛んだり跳ねたりで回避したりと様々なアクションがあった。

凜太郎 本人としては向けられたカメラに対してピースしたり、スタントマンのように呪霊の攻撃を避けながら走るのはスリルがあり楽しかったが、腕に抱えられているかカヨコからしたら堪ったもんじやない

常に激しく揺れ続ける視界や、なんだか黄色い歓声と共に向けられるカメラに、羞恥や焦燥といった感情がごちゃ混ぜになり精神的にも肉体的にもどつと疲れが押し寄せてきた。

「さて、それじゃカヨコちゃんはここらへんに隠れてて」

「……リンはどうするつもり？」

「勿論あのデカブツを片付けて来る」

「っ本当に、大丈夫なんだよね」

「無問題。モーマンタイもう一度言うけどここに隠れててよ、カヨコちゃんを巻き

込む訳には行かないしき」

取り壊しと改装工事が中途半端に終わっている所為か、上の階と下の階が吹き抜けとなっており、大きく開けたエリアとなっている。

あの呪霊を誘い込むにはピッタリだろうと、凜太郎は思案してすぐ側の壁一枚向こう側の影になる場所へと身を隠すよう伝える。

距離を突き離れた呪いの気配がすぐそこまで近づいてきている。

あと数秒もすれば呪霊この場に辿り着くだろう。

ここでなら周囲への被害を抑えられ存分に暴れられる。

本当なら“帷”を下ろして完璧な準備を終えてから対処したかったが、キヴオトスで“帷”の効果がどれほどの役割を果たしてくれるか未知数であった為、今回は下すことを見送った。

——来た。

背後で大きくなった呪いの気配に凜太郎は振り返る。

目と鼻の先と言っていい距離、呪術師としての意識に切り替えようとした時——不意に手を握られた。

柔らかな感触に驚きながら、視線を彼女の方へと戻す。そこには不安げな表情で俯いたままなんとも言えない様子の少女の姿がある。

カヨコの心は不安と後悔で押しつぶされそうだった。

自分を守るように立つ男は巻き込むわけにはいかない、と言った。なぜ、どうしてそんな言葉をかけてくれるのか。巻き込んでしまったのは、自分だというのに。

「——ね、カヨコちゃんこの後時間ある？」

「——えっ。」

「時間があるなさつきも言った通り、なんか食べに行こう」

「……リンの、奢りなら」

「もちろん。女の子に財布は出させないぜ、これでもさつき一稼ぎしてきて懐は分厚いからね」

「ふふ……なら、待ってる」

彼女が抱える不安も恐怖も、理解できた。だからこそ気にするなど笑いかける。

試したい事はあるが、出来る限りスムーズに祓う、そう決めた。

女の子の前でカッコつけたと思う気持ちがないわけではない。呪いをナメているわけでもない。ただこの少女を安心させてあげようと凧太郎は思った。

彼女の感じる恐怖など拭い去って、安心させ笑いながら帰路につかせてあげたい。その為には呪いこいつが邪魔だ。

少女の小さな手を優しく解き、拳を握って構える。

『みみ見つけタああああアア!!』

「ウォーミングアップってところか」

「どこ見てんだウスノロ!」

『ジャジャ邪………ツ魔アアああッ!』

凧太郎は眼前の呪霊を相手にしながら、その頭の片隅では渋谷で自

身が戦った強敵の姿を脳裏に思い描いていた。

それは渋谷で呪詛師の降霊術によって蘇り、再び現世の大地を踏み締める事となった禪院甚爾という男の姿。

禪院甚爾という男は知らないが、禪院という名には聞き覚えがありすぎた。禪院とは呪術師を多く輩出する名門、呪術界御三家のひとつ。身近にいる人間では同級生の禪院真希その双子の妹の真依。

そして凜太郎が大とつくほど嫌いな、禪院直哉。

男尊女卑を当然とし女性に対して自分とは全く違った価値観を持つ男、彼のその所業を目の当たりにして凜太郎は過去に禪院家当主の息子である彼に喧嘩を売り、殴り飛ばし叩きのめした事がある。

その所為で禪院家、というより直哉からの姑息な嫌がらせで昇級を度々邪魔され苦勞するハメになる。

「どうした、こいよ」

『あ……………アアアあッ！』

思い出すのは渋谷での戦闘。

禪院甚爾の肉体の情報を下ろした事により、その姿を変貌させた呪詛師によって行動を共にしていた仲間は無事に再起不能にされた。数秒前までとは比べ物にならない身体能力、かくいう凜太郎自身も不意を突かれそうになったが対処しきれないレベルではなかった。

能力こそ高まったものの、それだけだった。

臂力も速度も桁違いだが、動きは力任せで戦闘経験があるだけのチンピラ程度。

押し切れる、そう思ったのも束の間。突然、呪詛師の様子がおかしくなるや否や、後ろに控えていた仲間の、降霊術を扱う呪詛師を殺害したのだ。

そこからだった、凜太郎が死を覚悟したのは。

攻撃の重さや動きの俊敏さも、その全てが比べ物にならないほどキレが増していた。先程まで対処出来ていたのに、力の差は五分いや寧ろ押され始めていた。こちらは呪力で強化しているのに、かたや呪力

を感じない素の身体能力。

まさに剥き出しとなった暴力の塊。

凜太郎は脳裏に焼きつく禪院甚爾の動きを模倣し喰らおうとしているが、どれだけ動きを近づけてもあと少し足りない。

「(ダメだな。生身である動きを真似するのはやっぱ無理、単純に俺のスペック不足。呪力込みならいけると思うけど、それでもなんか違うんだよな)」

『シシ死ネエエ、死んジャエエツ!』

「うるっせなあ……!! 今考え事してんだよっ!」

伸びてきた腕を身を翻して回避。

そこから更に懐へ潜り込むと拳を胴体へと叩き込み、浮き上がった呪霊に追い討ちと言わんばかりに回し蹴りを炸裂させる。

呪いは呪いの力でしか祓えない。

故に、敢えて呪力を纏わせていない凜太郎の打撃は呪霊への決定打どころかダメージにすらなっていない。しかし凜太郎にとつて今はこの方が都合が良かった、何せどれだけ叩き込んでも壊れないサンドバックとしての役割があるのだから。

だがしかし、そう遊んでもいられない。

スムーズに祓うと決めた以上、時間をかけてはなられない。

「そら、アゲてくぞッ」

『あ、あああああ! きらいきらい嫌い!』

「……………チッ!」

呪いの身体が膨張したかと思えば、膨れ上がった肉体を引き裂いて——いくつもの「腕」が鞭の如く飛び出した。

ただでさえ数の多い「腕」が更に数を増やした事に舌打ちを零す。無数の腕の隙間を縫うように、最低限の動きで回避しようとしたが、瞬時に判断を切り替えた。うねうねと動く長い「腕」を部屋全体へ

と張り巡らせるように伸びている。

呪力を練り上げ右腕に集中させ、迸らせる。

呪力を集中させ作り上げた簡易的な呪いの「刃」で肉を裂き、腕を斬り落とし輪切りにしていく。

「うげえ、キモすぎるっ！」

『い、いた、痛い！ 痛い痛いイタイ！』

「ならそのキモい腕しまえ！」

憎悪に歪んだような呪霊の顔。

痛みと憎悪に暴れる呪霊は、無数の腕を鞭のように振り回す。その威力自体も目を見張るものがある。まるで小さな嵐だ、生身で受ければ骨を粉々にへし折るだけのものはあるだろう。

降り注ぐ拳の雨を掻い潜り、縦横無尽に伸びる腕を地面に滑り込み回避する。低くした体勢から、全身をバネのようにして跳躍、ガラ空きとなつている呪霊の顔面に拳を振りかぶる。

だがその打撃は呪霊の体躯を僅かに揺らすだけの一撃だった。

痛くも痒くもない一撃、自分に対してダメージの通らない打撃。呪霊の表情が不気味に歪む、それは自分を苛立たせる存在の攻撃は自身を脅かす決定打になり得ない事を理解して浮かべた侮蔑の笑みだった。

邪魔をする存在の命を刈り取ろうと、着地の瞬間を狙い腕を伸ばす。

「———それ、二撃目も来るぞ」

『ハア？……………ギギイイ!!?』

「いい技だよな。自慢の後輩のとおきだ」

ワンテンポ遅れて響いた呪力よる2度目の衝撃。

油断しきっていた呪霊の顔面に叩き込まれた見えない砲弾に穿たれたような一撃。痛みのあまりのたうち回るが、そんな隙だらけの姿

を見逃してやるほど凜太郎は優しくはない。

呪力を込めた拳を振りかぶり、息をつく暇も与えず打撃を叩き込む。鋭く、突き刺されたような打撃の痛みに呪霊は悲鳴を上げてもがき苦しむ。これ以上好きにやらせるかと、失った部位を呪力で修復、更に全身を呪力で防御するが、徒労に終わる。

「“痛え” だろ。呪力の特性って言えばいいのか、俺の呪力は“鋭い” んだよ。三年の先輩にも変わった呪力を持つてるのがいるんだが、つて言つてもわかんねえか」

『ううう、うるさいツツ！ きき消えろオオオオ！』

「ほら、ちゃんと防御しろ。無駄だけどなア！」

呪力を乗せた拳を再び振りかぶる。呪霊は呪力を高め、防御を固めて拳を受け止めるが、そんなものは関係ない。

例外を除けば、呪力特性や術式効果というものはシンプルな呪力による肉体強化では防ぎきれない。それに加えて凜太郎の“鋭利” な呪力は分厚い木材に釘を打ち込むように、防御の上から呪力を貫通させて鋭いダメージを与える事ができる。

満身創痍、膝をつく呪霊の姿に潮時かと凜太郎は判断する。

「さてと、そろそろ終わりにするか」

『……………な、なななんでええ！』

「……………あ？」

『なななんで！ なんでなんでナンデええ!!』

どうしてこうも一方的に自分だけが殴られているのか。

体格も、膂力も、強度も、存在としての格も自分の方が優れているというのに、なぜこうも目の前の矮小な存在になすすべなくやられているのか理解できない。

“苛立ち” が募る。

“怒り” とは術師にとって重要な起爆剤だ。そも呪力とは怒りや

恐怖、後悔、憎しみ、妬みなどの人間の負の感情が元となって発生するエネルギー。

相手を怒らせてしまったばかりに格下に遅れを取る事もある。逆もまた然り、「怒り」で呪力を乱し実力を発揮できず負ける事もある。

そしてその起爆剤は、この呪いにも当て嵌まる。

「……………(こいつ、呪力が)」

『あ、あああああああ！ しねシネ死ね死ねえええ!!』

高まった負のエネルギーに警戒する。

獣のような体躯にツギハイダかのような人間の頭部、削ぎ落とされた鼻、空洞の眼窩、瞳のない顔で憎悪に表情を歪ませて凜太郎を睨みつけている。

ミチミチと音を鳴らし裂けた額から現れた大きな瞳。ピリピリと、膨大な呪力がその瞳に収束していくのを肌で感じ取った。

「……………まさかこいつ)」

『死んじゃえええええ!!』

「やっぱそれ呪力放出だよねッ!？」

呪力の高出力指向放出。

出力が達する前に潰そうと動き出した凜太郎よりも早く呪力の充填^{チャージ}が完了する。最大出力に達した呪霊が放つ、文字通り最後の咆哮。

どうする、凜太郎は瞬時に思考を回転させる。回避する、それはダメだ。あれだけの呪力量、周辺の被害がどれだけのものになるかわからない。

そもそも、近くにはカヨコが身を隠している。彼女にだって危険が及ぶ。彼女の身に何かあればすぐにフォローに入れるよう近くに置いておいたが、それがここで仇となった。

ならば自分の呪力放出により相殺させる。これもダメだ、あの呪力放出を相殺できるレベルまで呪力を溜めるのに時間がかかる。

——— だったら選択肢はひとつだ。

呪力を注入して術式を起動。

自分自身の出力を更に二段階引き上げる。全身から溢れ出すほどに高まる負のエネルギー、息が詰まるような感覚、全ての呪力を身体強化へと回す。

「ぐう!!……ぐ、ぎぎぎ! だつりやああ!!」

『……なんで、ナンデ! どうしてえええ!!』

「ふうー、あぶねえあぶねえ。ちよつと焦ったぞ」

『 どおオオオしテ死んでないいいいい!! 』

「いやいや、流星に今のはやばかったって。生身で受け止めてたらタダじゃすまなかっただろうし」

呆然と立ち尽くす。

最後の呪力を振り絞った渾身の一撃。それをあろうことか素手で受け止められた。それだけではなく、解き放った高出力の呪力の軌道を上空へと無理矢理逸らすことで完全にいなされた。天井には呪霊の呪力放出によってポツカリ大きな穴が開けられている。

「さてと、それじゃ今度は俺の番だな。いいもん見せてやるよ」

『……あ、ああ、アアアああああああああ!!』

「おいおい、逃すわけないだろう。ここできつちりお前は祓^{殺す}う、それが呪術師の仕事だ」

矮小な存在だと見下していた。

自分よりも遥かに劣る脆弱な生き物だと、決めつけていた。この男を殺し、あの少女の前でバラバラにして絶望を与えてから喰ってやろうと考えていた。だが実際はどうだ、自分など霞む程の圧倒的な呪力量。気圧され、無意識のうちに足が下がった。

自分は捕食者なのだと思っていたが、それは勘違いだった。逃げなければ、恐怖に思考が埋め尽くされた呪霊が後ろ姿を見せて逃走する。

だがそれよりも速く、呪霊の背後へと音もなく回り込んだ凧太郎がその巨大な凶体を、一撃で逃げ場のない空中へと蹴り上げる。吹き飛んでいく呪霊を尻目に、意識を集中させて練り上げた膨大な呪力を両手に収束させていく。

「すう……いくぞツ!!」

呪力の制御^{コントロール}技術、そこから繰り出す高出力指向放出の扱いに関しては五条先生を除き、凧太郎は自分が高専一であると自負している。

呪術師としてスカウトされ高専に入学したその日。

呪力の制御は一朝一夕でどうこうなるものではないと、グレートティーチャー五条は呪力とはどういったものか実戦を交えて凧太郎にそう言った。だがしかし、次の日には凧太郎はコツを掴んだと言って目の前で拙いながらも高度な呪力放出を行ってみせた。

これには五条も目を見開いて驚いた。

なぜなら今までなんとなくで呪力を使っていた生徒が男の夢と希望が詰まった、ロマンの塊である必殺技を披露してきたのだから。あまりにも完成度の高いそれに腹を抱えて笑ったほどだ。

そこから更に、五条が保有する対象の術式・呪力を視覚情報として詳細に認識できる特殊な瞳『六眼』により呪力の流れや操作を精細に読みとってもらい技術を磨き上げてきた。

全ては自身の憧れを完全なものとする為に。

「かあ——、めえ——」

大気が震える。

それは今か今かと、収束に収束を重ねた呪力がその瞬間を待ち望む聲に聞こえた。

「はあ——、めえ——」

呪いの王からは「何が必殺技だ阿呆め。ただの呪力放出だろう」と呆れられたがそんな事は関係ない。寧ろその威力を身を持って味わわせてやった。反転術式を使わざるを得ないほどのダメージを与えてやったのだから、文句は言わせない。

「波アアアアツ!!」

——極光。

その両手に溜めた負のエネルギーを、呪いに向けて解き放つ。視界を埋め尽くす程の膨大なエネルギーの嵐、止め処なく溢れる力の奔流は呪霊を一瞬で呑み込み、チリ一つ残さずに消失させる。

「……………綺麗」

空へ登っていく光の柱。陰に隠れていた少女はその美しさに愕然と息を呑んだ。蒼白い巨大な光はどこまでも伸びていき、キヴォトスの空の彼方へ消えていく。

「……………ふく、やっぱり必殺技と言ったらこれだよな!」

我ながら会心の出来栄え。

誇らしげに笑みをこぼす少年と、啞然と空を眺める少女がその場にはいた。

暴力は…いけない…

あの呪霊、いや呪霊もどきとでもいうべきか？

まあいいや、あの呪霊と戦闘から既に三、四日ほどの時間が経過している。その四日間のうちに色々あった。戦闘の後、カヨコちゃんが所属している企業とでも言えばいいのか、『便利屋 6 シックスティーエイト 8』のメンバーたちと顔を顔を合わせる機会があった。

まず社長のアルちゃん、それから室長のムツキちゃん、んで平社員 of ハルカちゃん。それとカヨコちゃんはなんと課長ポジションらしい。便利屋のみんなと直接会って話をした感想としては、なんというか『おもしろー集団』といった感じだ。

それと全員顔が良い、みんなかわいくて美少女の集団に囲まれた時は思わずムンクの『叫び』バりに声をあげそうになったが、なんとか堪えた。

まあ、鼻の下が伸びてるだとかでカヨコちゃんに頬をつねられたが。

軽く自己紹介を済ませた後、みんなでご飯を食べに行ったのだが、その、色々とすごかった。

適当なお店に入って何か食べようとしていたのだが、席につき注文する際、なぜか冷や汗を流しながらメニュー表を見つめては一人前の料理をどうにかしてみんなで山分けしようとしている社長の姿を見て思わず真顔になってしまった。

ついバツとカヨコちゃんの方に視線を向けてみれば、彼女は気まずそうな表情を浮かべ視線を逸らした後に色々自分たちの活動と経営状況を赤裸々に語ってくれた。

その、苦勞してるんだな。

疲れたような表情の彼女にそんな感想しか出てこなかった。

俺から食事に誘ったという事もあつたし、最初からカヨコちゃんたちには財布を出させるつもりはなかったんだが、奢るから好きな食

べても良いよと伝えればアルちゃんからはまるで怪物でも見るかのような顔をされた。なんでじゃない。

『……はっ!? ほ、施しを受けるつもりはないわ!』

『あ、そういう感じ? そんなつもりはなかったんだけどな……まあいいや。あ、店員さんすんませーん! えっと、ここからここまでもらえます? はい、全部大盛りで!』

『ひ、ひいー!?!』

『適当に頼んだから、みんなも好きなの食べていいよ』

『わあっ! タロちゃんてば太っ腹く! んー、それじゃあ私もこれとこれ、頼んじやおうかなあ!』

『……じゃ、私もこれ頼もうかな。ハルカは何食べる?』

『あ、えっ? えっ……わ、私なんかが食べても……あ、それならこれを』

出された料理はちゃんと完食いたしました。

とても美味しゅうございました。泣きながら頼いっぱいにご飯を食べるハルカちゃんの姿にはビックリしたが、そこまで美味しそうに食べていただけるなら俺も食事に誘った甲斐があったいうものだ。

外も暗くなり始めてその後はそのまま解散、という流れになるはずだったのだが、せつかくなんだから親睦を深めようとムツキちゃんの提案で便利屋68+αで一仕事に行く事になった。

アビドスの借金の事もあり、金はあるだけ困らないのでそれを承諾。

臨時で便利屋68の一員にさせられたが、少数精鋭の秘密結社みたいでカツコよかったので、俺もついテンション上がってアルちゃんたちについていった。俺のポジションは見習い、もしくはバイトらしい。

懸賞金やブラックマーケットなる場所で手頃な依頼を受けて、怪しい取引を妨害したり身柄を確保したりした。なんかちよつと危ない橋を渡った気がする。

それでその後 便利屋の事務所にお邪魔したのだが、はしやぎ過ぎ

たのか気がつけば事務所の床で寝落ちしてました。それもなんとみんな横一列になって寝てました。因みに俺は一番端っこ、隣にはカヨコちゃんがいきました。みんな寝顔が可愛かったです。

一瞬、〃ナニ〃かあったのかと自分を疑いそうになったがそういう訳ではなさそうなので安心した。女の子は好きだが、だからと言って女遊びするクズにはなりたくないの。

あ、俺は純愛派です。

あと、呪霊を視認できるのはカヨコちゃんだけで、みんなにも隠していると言っていたので彼女にのみ呪霊への対処法的な奴を教えておいた。呪霊の等級や、視線に敏感である事やその他諸々を。

ひとまず、彼女の持っていた拳銃。

予備の弾丸に結構な量の呪いを込めていくつか渡しておいた。対呪霊用の簡易的な呪具として持続時間や、呪霊相手にどれほどの効果があるかわからないが、ないよりはいいだろう。

彼女にもどうしようもなくなったら使ってくれと伝えた。そうすれば遠く離れていようと、自分の呪力が爆ぜた感覚で状況と位置を把握できるので駆けつける事ができる。

それからコンビニで適当に買い物してみんなで朝ごはんを食べた後で解散した。

連絡先を交換しようと言ってくれたのだが、残念な事に俺のスマホは渋谷での戦いの所為かキヴオトスに来てからうんともすんとも言ってくれず完全にぶっ壊れてしまっている。

その為、便利屋のみんなと連絡先を交換する事ができなかった。とても悲しい。

とりあえずアビドスの固定電話の番号は教えておいた。ムツキちゃんやカヨコちゃんが残念がっていたが、スマホを直すか買い換えるまではどうしようもない。

——それからちよつと地獄を見る事になった。

お土産を買い、お金も稼いでルンルンな気分であビドスに帰ってくるなり、なんだか綺麗な笑顔を浮かべたホシノちゃんに捕まったと思ったら対策委員会本部まで有無を言わせず連行されちよつとばかりお話をする事となった。

『……えーつと』

『よーし。それじゃあ、タローくんにはキリキリ喋ってもらおうかなー』

『ん、黙秘権はない』

『皆さーんお茶飲みます?』

『あ、それなら私も貰おうかな』

教室には既にメンバーが勢揃いの状態で集まっていた。

アヤネちゃんとノノミちゃんはお菓子とお茶を並べておやつタイムの準備をしており、セリカちゃんは呆れたような同情するような、そんな意味深な視線を頬杖をつきながら怖い顔をこちらに向けて来ている。

そして目の前にはムスツとしたような表情でジツとこちらを見つめるシロコちゃん、そんな表情も素敵でちよーかわいい。その隣にはぼわぼわとゆるい雰囲気を纏ったホシノちゃんがいるのだが、なんだかいつもと違う御様子である。

というかみんな怒っているようだった。

なぜそんなにもおかんむり状態なのかと思っただが、帰りは遅くならないと言っていたのに連絡一つ寄越さないうで朝帰りしているのだから当然だ、と言われたらその通りですねと謝るしかない。

そのうえ、呪霊との戦闘や便利屋と共同でこなしたいくつかの仕事、ドンチャン騒ぎで暴れた所為で着ていた服は目に見えてボロボロになって煤けてたし。俺がこっそりと稼いできた資金、その金額を確認して何か危ない事をして来たんじゃないかとホシノちゃんにはそりやもう怖い顔をされた。

『ふう……タローくん正座』

『え?』

『正座』

『あ、はい』

『タローくん。おじさんはね、ちよーつと怒ってるよ』

『うん。怒った顔も可愛いね……あ、すいません。真面目に聞くんで脇腹を抓るのは勘弁してください、痛い痛い普通に痛いっ』

なんだかちゃんと先輩モードのホシノちゃんは初めて見たかもしれない。ホシノちゃんは普段のふわふわとした雰囲気とは別で相手を「よく視ている」子だ、俺自身あまり信用されてないと思っていたがどうやらそんな事はなかったようだ。

純粹にこちらを心配して、説教までしてくれるんだ。心配をかけた身で不謹慎かもしれないが、そこまで想ってくれるほど仲良くなれていた事がなんだが嬉しかった。

『……………』

『あの、シロコちゃん。据わった目のままずっと見つめられるのも、その、きついいと言いますか』

『心配した』

『……………ご、ごめんちゃん』

『……………すぐ、心配だったよ。連絡を取る方法もないから……リンタローに何かあったんじゃないかと、思った』

『あ、あー！ 罪悪感がツ！ いや本当、すいませんでしたツ!!』

シロコちゃんの声がちよつと震えてる時点でダメだった。額を地面に擦り付けるといか叩きつけるレベルで土下座したね。もうね、ほんと無理。あんな捨てられた子犬みたいな表情かおでそんな事を言われたら罪悪感で死んでしまいます。

誰だ不謹慎だけど嬉しいとか言ってた奴、こんな顔されちゃ全然嬉しくねえつてばよ。

今後こう言った事がないようにと、ちゃんと連絡するよう指切りで約束する事になった。今ならシロコちゃんとの間に無理難題な「縛り」だつて設けられちゃう心持ち。

それからなんだが笑顔が怖いノノミちゃんや、見るからに私は怒つてますと言つた様子のアヤネちゃん、光のない瞳で睨むように見てくるセリカちゃん、彼女たちの機嫌を直してもらうためにもすんごい頑張った。

それからというもの、まるで監視するかのようにジツとこちらを見つめてくる彼女たちの視線を背に浴びながら校舎を修復したり、掃除をしたりと任された仕事をこなしていた。外出禁止とかになんなくてよかつたよマジで。

そんなこんなで時間が経過して、俺は郊外付近のコンビニまで買い物に来ていたのだが。

「…………た、た、す、け、て、く、た、さ、い、っ」

「……………はあ？」

——道端になんかいた。



「んぐっ、はぐ……………んんっ……………ぷあ！　ふー、ご馳走様でしたっ！　いや、助かったよ本当にありがとう！」

「おう、きちんと感謝して崇め奉れ。まったく遠慮なく食いやがつて、てめえに食わせる為に買ったわけじゃねえってのに」

「……………ご、ごめんね？」

人気のない通行路。

凜太郎はその道端に腰を下ろしながら、後で食べようと思っていた自分の弁当や飲料を食べ尽くした謎の多い男性の姿に呆れたように息を吐いた。

チラリと視線を向ける、天パなのか黒髪の癖っ毛に黒縁の眼鏡をかけた成人男性。身なりや顔立ちは整っているが天パと眼鏡の所為なのかなんだかパツとしない印象を受ける。

それから珍しいなと思った。

ここキヴオトスで初めて自分以外の男性にあつたかもしれない。いや、存在しない事はないのだろうが、滅多に出会わないのだ。

出会うとしてもそのどれもがロボットだったり喋る上に二足歩行で歩く犬や猫、人間の男性という言葉がピッタリと当てはまる様な人間には出会ったのは初めてだった。

そしてこの男の頭部にはなぜかヒーローが存在していない。

キヴオトスの住民の、ヒーローといったその辺については詳しくはないので、深くは考えなかった。

それはともかく
閑話休題。

どうやらここアビドスに訪れたのは初めてなようで、備えも土地勘もなく住民もおらず食べ物のあるお店もなく、それどころか遭難してしまい絶体絶命な状況に追い込まれていたようだ。

男性から話を聞いた凜太郎は無計画すぎる行動に思わず「バカだろオマエ」と口が滑ってしまった。

女の子ならともかく、見ず知らずの、それも野郎を善意で助けるつもりはなかった凜太郎だが、余りにも必死な形相で恥も外聞もなく泣きついて来た男の姿に呆れて助けてしまった。

「ハア……知らない土地ならちゃん準備してから来いっての。迷子になった挙句、空腹で死にかけてましたじゃ笑い話にもならねえよ」
「か、返す言葉もないです」

あははー、と引き攣った笑みを浮かべて視線を逸らす姿に本当に大丈夫こいつと心配になってしまう。自分が通り掛からなければ本当

に死んでいたのでは？ と凜太郎は頭を抱える。

重い息を吐き出して、腰を上げてズボンについた汚れを軽く叩く。そんな凜太郎の行動に目をパチクリさせながら、謎の男は空になったプラスチックの容器を片付けるとそれに続くように腰上げた。

「あれ、もうどこか行っちゃうの？」

「そりやそうだろ。いつまでもこんな場所で時間潰す訳にもいかねえっての、どっかのバカの所為でただでさえ遅れてるんだ」

「あ、それなら道案内とか頼んでもいい？」

「オマエ面の皮厚いな。ビツクリだよ」

いやー、もう迷子は懲り懲りだしさ。なんてニコニコと楽しそうに笑いながら言っている大人の男の姿にマジかコイツと、つい眉を顰めて睨むように視線を向けるが本人は何処吹く風といった様子である。

「……仕方ねえ。また迷子にでもなつて死なれたら後味が良くないからな。で、どこに行きたいんだよ」

「ありがとう。行き先なんだけど、学校に行きたいんだ」

「学校、って事はこの近くだと……まさかアビドスか？」

頷いて答える男に、マジかよ凜太郎はゲンナリした。帰り道もコイツと一緒にのかよと。

「んだよ、俺と方向一緒かよ。じゃあついて来い、ちょうど帰り道だ」「え、そうなの？ という事は君はアビドスの生徒ってこと？」

「いや別にそういう訳じゃないが、うーん説明がむずいなあ。ま、あの子達の助けになれるうちは一応はアビドスの一員かな。ほら、ちやっちやと行くぞ」

「あー！ できれば背負って欲しいなって、足が痛くて動きたくないです」

「は？ 蹴り殺すぞ」

「ええーっ!!?」

「俺が背負うのは女の子だけだ、文句言ってねえで歩け」

ブーブー、と文句を言う男を無視して歩き出す。

それでもしつかりと後ろを付いてくる男の姿に何度目かわからな
いたため息を吐く。一緒にいるだけでここまで精神的に疲れるのは五
条先生以来かもしれないと何となくこの男の性格を理解し始めて来
た。

なんで俺が見ず知らずの男と二人きりで長い帰り道を歩かなきゃ
ならんのだと苛立ちが募る。

スマホが無事ならイヤホンで耳栓をして音楽でも聞けるのだが、そ
れもできないので隣でペラペラと喋り掛けてくる男の言葉を完全に
シャツトダウンする事もできない。

そこでふと、そういえばアビドスの図書館で借りていた本を上着に
入れたまま持ち歩いて事を思い出した。どうせなら、学校に着くまで
の間、ながら見でもしながら時間を潰すかと上着から本を取り出し
た。

大きさでいえば、スマホよりも少し大きいサイズでソフトカバーの
コミック本くらいの一冊の本。片手は買い物袋で塞がっているので、
空いている片手で器用にペラペラとページを捲りながら読み掛けて
いた場所から目を通す。

「えーつと、なになに『ゼロから学ぶ手話の辞典』?」

「距離が近い。覗き込んで来んなや」

「すごいね! もしかしなくても手話の勉強してるの?」

「んー、まあちよつとな。少し前に郊外の方で会った子が手話で話す
子だったんだよ」

「うんうん。どんな子だったの」

「花壇の前でジツと花を見つめてる子でさ。俺も簡単な単語なら知っ
てるから、ちよつとだけ話したんだけどなんか不思議な感じで、次会
えた時はもう少し会話ができるようになつとこうかなと……つてな

んでアンタにこんな事話さなきやならんのじゃ」

ナチュラルに、あまりにも距離感が近い男に思わず余計な事を語ってしまったが、これ以上律儀に返事を返してやる義理もないので無視を決め込んでページを捲る。

「……そういえばアンタ、アビドスになんの用があつてここまで来たんだ？」

「……あ！ そういえば自己紹介がまだだつたね！」

やばい、すっかり忘れてたよと。

凜太郎の言葉に思い出したように手を叩いた男は懐から何かを取り出すと、綺麗な姿勢で凜太郎に向けて差し出した。

それは一枚の小さな紙切れだった。

なんだ急に、と胡乱な目を向けながら差し出されたそれを受け取る。その紙切れ、名刺には印刷で連邦生徒会・連邦捜査部『S. C. H. A. L. E』と書かれていた。

「どうも。連邦捜査部シャーレ担当顧問の先生です。よろしくね」

「……はあ??」

「あ、あれ？ なんか反応薄いね」

「いや、連邦なんちゃらとか言われても知らんし。というかシャーレって理化学の?」

「うん。それはペトリ皿の方だね」

ひとつだけ忠告がある…死ぬほど痛いぞ

『私は認めない!!』

アビドス対策委員会が現在抱えている大きな問題。

それは彼女たちの学舎である学校の校舎を狙う地域の暴力組織による武力的な侵攻、そしてもう一つが対策委員会のメンバー全員が身を粉にしてどうにか返済している約9億円という多額の借金。

この借金を返済できなければ学校は銀行の手に渡って、廃校手続きをせざるを得ない。

しかし彼女たちの力だけでは限界があった。

多額の借金も毎月の利息を払うのが精一杯で、暴力組織の侵攻に抗う為に必要な弾薬などの物資の補給にもお金がかかる。だがアビドスに凜太郎が現れてからは、彼が武力には武力を持って返しており、凜太郎が率先して前線に立ち相手の物資補給の拠点などを一人で潰して回り強奪していた。

そのおかげもあってか、彼女たちの物資に少しだけ余裕を持たせる事ができていた。けれどそれも首の皮一枚で繋がっているような状態だ。

いずれ限界が来る、そう思って対策委員会の奥空アヤネは助けを求めて一通の手紙を送った。

その宛先は連邦捜査部『シャーレ』。

それは連邦生徒会と呼ばれるこのキヴオトスの全行政を担い、学園都市の運営に従事する組織。そのリーダー、連邦生徒会長が立ち上げたとある組織の名称。その権限は各学園の自治権をも超越し、学園で日々発生する問題を解決する為に行動する組織。

それが連邦捜査部『シャーレ』

因みにこの説明に凜太郎は首を傾げて終始、頭に？マークを浮かべながら話を聞いていた。連邦生徒会や生徒会長やらの話を聞かされたがちんぷんかんぷんだった、とりあえず厄介ことを押し付けられて

その解決をする組織として認識することにした。

そしてアヤネの助けを求める手紙に目を通した連邦捜査部シャーレ顧問の『先生』がここアビドスに訪れたのだった。

「……ちよつと、なんでついてくるのよ？」

「んー、別に。偶々俺の行きたい所にセリカちゃんがいるだけだよ」

「さつきもそう言つて、曲がり角で何回もついて来てるじゃない！」

「はは、気にしない気にしない」

「……なんなのよ、もう」

凜太郎が連れて来たシャーレの先生。

彼のおかげで枯渇し始めていた弾丸などの物資も潤い、懲りずに攻撃を仕掛けてくるヘルメットの武装集団を撃退に成功した。それだけではなく、アビドスが抱える現状に耳を傾けてぜひ協力させてほしいと手を差し伸べて来た。

もちろん。

連邦生徒会直属の組織であるシャーレの協力を仰げるのなら、猫の手も借りたいアビドスにとってはこれ以上に心強い味方はいないだろう。

だがそれに、納得できないと異を唱える者もいる。

それがセリカだった。

今までどれだけ助けを求めても周りの『大人』たちは取り合わず、自分たちが必死に守ろうとしている学校がどうなるかなんて気にも止めなかった。

だから自分たちだけの力でどうにかして来たというのに、それなのに今更首を突っ込んで来るなんて認められない。

それも部外者で、会ったばかりの『大人』を信用できない。それが彼女の心の内だった。差し伸べられた善意を無碍にするつもりはなかった。だが我慢出来ずに溢れ出したその言葉を皮切りにセリカはその場から逃げるように飛び出して行った。

それがアビドス対策委員会本部であった数分前の出来事。

「というか、どうして私のいる場所がわかったの？」

「困っている女の子がいれば、俺はどこへだって駆けつけるさ。それが友達のセリカちゃんなら尚更ね」

「……ふふ、なにそれ」

飛び出して行ったセリカを心配して追いかけてようとしたアヤネとノノミだったが、それに待ったをかけたのが凧太郎だった。対策委員会として長く活動を共にする彼女たちよりも、協力者でこそあるが部外者に近い立場の自分のほうが適任だろうと。

親しい仲だからこそ、話せない事もある。

凧太郎を振り切るように逃げるセリカと、そんな彼女を行く先に偶然を装い先回りしている凧太郎。そんな応酬を何度か繰り返した後、セリカは隣を歩く男に恨みがしように視線を向けて諦めた。

行く当てもなく歩き、たどり着いたのは小さな公園だった。借金の所為で学校は廃校の危機に追いやられ、生徒は居なくなり街はゴーストタウンになりつつある。この公園を利用する者もない。

数多く並ぶ遊具。

風に揺られ、寂しそうに揺れるブランコ。セリカは無言で座板に座ると、それに続くように凧太郎も静かにその隣に腰を下ろした。

「……さっきの事、何も言わないの？」

「えー、セリカちゃんは俺に何か言っただけじゃない？」

「べ、別にそういう訳じゃないけど」

「じゃあいいじゃん。今はお兄さんとゆっくりしようや。うおー、ブランコなっ！」

無言に耐えきれなかったのか。会話を切り出したセリカだったが、まるで俺から言うことではないといった凧太郎の様子に困惑する。彼女はつきり、あの場から去った自分を諭すように何か言われるのかと思っていたからなんだか拍子抜けだった。

そんな彼女を他所に、小学生以来か久しぶりにブランコに揺られた
凧太郎は懐かしくてちよつと感動していた。

「ねえ……あの大人の事、あんたはどう思ってるの？」

「え、ああ、さっきのシャーレとかいう先生の事？　というかどう思っ
てるとは？」

「そのまんま。信用できるのかできないのかって話」

「んー、べつにどうでもいいかなあ」

「はあっ!?　ど、どうでもいいってなによそれえ……」

どうでもいい。

予想だにしなかった答えが返って来た事に思わず目を見開いて驚
愕を露わにってしまう。そんなセリカの様子を気にせず凧太郎は
ブランコに揺られている。

「だってそうじゃない？　信用とか信頼とか、できできない以前に
判断材料が圧倒的に少ないもん」

「それはっ、そう………だけど」

「それに一眼見て悪い奴だって判断出来るような奴なら、俺だって学
校に案内しないさ。ま、だからと言って現状は特に期待もしてないけ
どね。そういうのは行動と結果を見てからでしょ」

「……………」

確かにその通りだ。

凧太郎の言っていることは理解できる。だからと言って簡単に納
得できるかと言われれば無理な話だった。借金で廃校寸前の学校な
ど気にも止めず、見て見ぬふりをして来た周りの『大人』たち。それ
なのに初対面の大人が力になりたいと言われても、セリカは信用でき
なかつた。

「セリカちゃんの言いたい事も、思ってる事も理解できるよ」

「……それなら、なんで」

「けど、大丈夫じゃない。あれは多分、他人の為に本気で幸福を祈れるタイプの人間だよ」

凜太郎から見て、あのシャーレの先生と名乗った男は自分が出会って来た人間の中でも真つ当な人間だと感じた。

人間の嫌な所ばかりを見せられる血生臭い呪術師としての経験や、それ以前から過去に経験した忘れてたくても忘れられない、忘れてはならない古い思い出。そんな嫌な経験ばかりしたからか、善人と悪人になんともなく見分けることができる。

纏う雰囲気^{オーラ}でも言えいいのか、シャーレの先生は純粹に「いい人」だ直感でそう思った。

「セリカちゃんはさ、大人が嫌い？」

「別に、嫌いとかそういうのじゃないし。ただ、信じたくても……その人を信じていいのか、わからなくなるっていうか」

「そっか——俺は、嫌いだよ」

「——えっ？」

その言葉に驚いたように視線を向けた。

そんなセリカの様子に苦笑いを浮かべて空を見上げる。

「と言っても、『悪い大人』がって意味だけどね。どいつもこいつも偉そうに、自分の都合の為だけに平気で他人を利用する奴が大っ嫌いだ」

「……………」

「——そいつら全員殺してやりたくなる」

「——ツツ」

思わず、目を見開きたじろいだ。

凜太郎から漏れ出るように放たれた重くて冷たい威圧感。息が詰

まったかのように呼吸ができなくなり、か細い喉がヒュツと音を鳴らす。

まるで喉元に刃物を押し当てられている光景をセリカは幻視する。

「り、リインタロウ……？」

豹変したかのような雰囲気は戸惑ってしまう。

視線が揺れる。

声音を酷く震わせたセリカに、空を仰ぎ見ていた凧太郎はゆっくりと視線を彼女に向けた。見惚れるてしまうほど綺麗な青い瞳。

だが、その瞳の奥には黒く燃える何かが爛爛としている。

何を考えているのか、彼女の視線に静かに微笑む。

見透かすような切れ長の瞳に射抜かれ、無意識の内に足が下がる。

しかし次の瞬間、その表情は破顔する。

「……ぷっ、あははは！ 冗談、冗談だつて！ どお、びっくりしたでしよセリカちゃ、顔面が痛いツッ！」

「こんの、ヘンタイっ！ ビックリさせないでよ!!」

「あ、ちよ、待つて！ 痛いってセリカちゃん！ お願いだから割とマジのグーはやめてほしい！」

弾かれたように鋭い握り拳が炸裂する。

こつちが真面目な話をしていたというのに、バカにしているのか貴様は。先程までの冷たい雰囲気は嘘のように消え失せ、飄々した態度でニヤニヤと笑う凧太郎の顔面にセリカの拳がめり込んだ。

「前が見えねエ」

「フンっ。自業自得よ！ こつちは真面目に話してるのに」

「女の子が軽々と放つていいパンチじゃないよマジで。痛くて泣いちやいそう」

キヴオトス人の恐るべき身体能力。

天与呪縛のフィジカルギフトを持つ真希や、明らかに段違いな耐久力と身体能力を持つ悠二、生身で人間を辞めると言っているいい人物たちに近い能力を持つキヴオトスの住民たちに戦慄するしかない。人間を辞めてる度合いで言えば自分も大概なのだが、それでもだ。

「うっし！ んじゃま、帰ろうかセリカちゃん」

「ハア……あんたの所為で変に疲れたんだけど」

「でも、いい気分転換になったでしょ」

「それはそうだけど、ってなんで私の手を握ってるのよ!?!」

「なんでってそりゃ、デートは家に帰るまでがデートでしょ?」

「でつ!? ベ、別にデートじゃないから!!?」

「細かい事は気にしない気にしない。ほら、帰りますよセリカちゃん」

「ちよ、は、離しなさいってばああ!」

羞恥から顔を真っ赤にしてシャツ、と猫のように唸るセリカの言葉が無視して帰路につく。日頃から銃を持って戦っている彼女たちだが、女性らしい柔らかい手のひらの感触に少し驚きながらもしっかりと堪能する。

恥ずかしがっている彼女の様子について口角が上がり嗜虐心が刺激されるが、ほどほどにしておこう。あんまり揶揄い過ぎると後でホシノちゃんやノノミちゃんに可愛い後輩を虐めた罪として自分が怒られてしまう。

「なんなのよ、もう……っ」

「んもー、セリカちゃんったら照れちゃって。かわいいんだから」

「何その喋り方、キモイから。というか照れてないっ!」

「はっはっ、嘘をつくな小娘」

いつもの調子に戻ってきたらセリカの様子に心の中で安堵する。それは彼女を元気づけられた事に対するものと、うまく誤魔化した事

に対して。つい気が緩んだが、気にした様子も見せない彼女の姿に凜太郎は未熟な自分を恥じる。

先程の言葉に嘘はない。だが今は語るべき時でもない。

やるべき事は山積みだが、ひとまずは目先の問題を解決していこう。シャーレの先生との出会い、それが彼女たちアビドス対策委員会にとっていい風が吹き始めている気がする。

恩に報いる為にも自分は出来る事をしよう、そして彼女たちが今後も笑って学園生活を送れるように力の限りを尽くそう。凜太郎にとって既にアビドスはかけがえのないものとなっている。

決意を固めるには十分だった。

「〃銀行を襲うよ!〃」

「それはちよつと予想してなかったかなー……」

数日後、凜太郎はどうしてこうなるんだと頭を抱えなくなった。決意を固めたが、あまりにも予想外すぎた。

信念はあるさ、生きて苦難を乗り越えれば、人は……
いかれちまうのさ

ある日の昼下がり、今日も今日とても用務員の如く砂嵐に晒されるアビドス校舎を綺麗に掃除して、点検や修繕などを行っていたのだがアビドス本館の教室に設置されている固定電話から一本の連絡が届いた。

そのお相手はなんとカヨコちゃんである。

俺が恋しくなったら連絡してね、なんてふざけて彼女に言っただけなのだが本当に連絡が来るとは思っていなかった。それもまさかこんなにも早くお電話を頂けるなんて、と勝手に一人で舞い上がりそうになったが、それとは別で呪霊関係の連絡かもしれないと意識を切り替える。

しかし、そうではないらしい。

あれ以降、特に呪いに対して悩まされるような日々は送っておらず。呪霊の所為で失いかけたかつての日常を取り戻すかのように、便利屋に振り回されながらも楽しく過ごせるとのこと。

受話器越しに声音を弾ませて語るカヨコちゃんの様子に、なんだか自分まで嬉しくなってしまう。満足感とでも言えば良いのか、呪いなんかの所為で、手の届く距離にある人の輝きを取りこぼすような事にならなくてよかったと本気で思えた。

なんだか久しぶり、なんて程じゃないが久々のカヨコちゃんとの会話を盛り上がってしまった、長電話をしたせいでアヤネちゃんからは睨まれてしまった。長々と電話してすいません。

意外と話し込んでしまった為、会話を切り上げて通話を切ろうとした時だった。カヨコちゃんから直接会って話が見たいと持ちかけられたのは。

まさかのデートのお誘いだった（早計な判断）

それから待ち合わせの日時を決め、ルンルンな気分待ち合わせ場所まで向かったのだが。

「へー、アビドスへの襲撃依頼……ん？ 襲撃依頼？」

「そう」

「？……もしかして俺の聞き間違い、とかではない？」

「ううん。聞き間違いじゃないよ」

「……うへええ、まじか」

彼女の言葉に思わず耳を疑う。

寂れたアビドスだが付近に飲食店がないわけではないので、適当に入ったお店で軽い食事をしながら話を聞いていたのだが、その内容は思っていたよりもぶつ飛んだ内容であった。

どうにも彼女たち便利屋68にアビドス本校への襲撃を依頼する電話が舞い込んだらしい。

うーん、頭が痛い。

どうして一つ問題が解決に近づいたと思えば、更に問題事が増えるのか。

しかも便利屋にそれを依頼して来た依頼主が問題だ。

「カイザー、だっけ……それ俺に言っちゃっても大丈夫なやつ？」

「……本来ならクライアントの秘密情報は保持しなきゃならないけど、今回は別。私もリンには助けられたし、社長たちもどうするか悩んでるみたいだから」

「……そっか。ありがとうねカヨコちゃん」

「ううん、気にしないで。お礼を言われるほどの事でもないから」

「それでも、こういう時は感謝だよ。ありがとう」

カイザーコーポレーション。

キヴォトスで様々な事業を展開している大企業。軽く調べた程度だが、民間軍事会社、銀行経営、兵器の販売など、様々な分野に手を

伸ばしている企業だ。

キヴォトスに来て間もない俺でもこの名前は嫌でも聞き覚えがあった。それもそのはずだ、なんてったって今アビドスが抱えている膨大な借金、その借金元でアビドスに融資を行っていたのがカイザーローン。

そしてそれはカイザーグループ、多角化企業のカイザーコーポレーションが運営する高利金融業者。

「……(なんだってその偉い奴が、わざわざアビドスを?)」

カヨコちゃんたち便利屋68にアビドス襲撃を依頼したのはカイザーの民間軍事会社の代表らしい。

簡単に言えば超大物だ。

この情報を伝える為に、カヨコちゃんがわざわざ秘密裏にクライアントを調べてくれたのだ。そして今までアビドスに乗り込んできたヘルメット団の連中なんかも、そのカイザーが雇った傭兵のようなものだという。

疑問が尽きない。

何故わざわざそんな連中を雇ってアビドスにけしかけるような真似をするのか。言い方は悪いが現状、アビドスはカイザーにとって良い金づるの筈だ。対策委員会の子たちは毎月集金に来るカイザーの役員に利息約800万という額の借金を毎月キツチリと返済している。

毎月返済して誠意を見せてもいる。

9億というただの学生には馬鹿げた借金。

今までの様子や、彼女たちの誠実さからも、夜逃げ出されるような事はない。放っておけばしつかりと金は会社に入ってくる。だといふのになぜ、自分たちにとって都合のいいカモを潰すような真似をするのか。

それとも返済されると困る事でもあるのか?

その意図を探ろうとすればするほど、嫌な予想ばかりが脳裏に浮か

び上がってくる。

「大丈夫？」

「え？」

「……すごい怖い顔してるよ今のリン」

「んー、ごめん。ちよつと考え事をね」

ズブーツと殆ど空になったコップの炭酸サイダーをストローで啜る。

いかんいかん。

どうしても嫌な考えばかりが浮かんで思考がまとまらない。そもそもこういう難しい事をうだうだ考えるのは得意じゃないし、割とその場のノリと勢いで解決しようとするタイプだ。たぶん五条先生とかもそんな感じだろう、というかあの人の所為で結構適当な部分に移ってるかもしれない。

どうするべきか。

「……もういつそ俺がカイザーコーポレーションなるものをぶっ潰しに行けば何も問題はないのでは？」

「いや、問題だらけだよそれ。というか本当に出来そうだからやめて」「んん、冗談冗談。流石にやらないよ後々の処理とかめんどそうだし」

「……面倒じゃなかったらやるの？」

本当に冗談だからそんなげんなりした顔はしないでね。

『議論なんてそんな野蛮な……ここは穏便に暴力で……』なんて事が実際に出来たら楽だが、それは最終手段としよう。見境なく暴力を振るうつもりはないし、そんな事したらアビドスのみんなに悲しまれてしまう。なので、惜しくも却下。

「カイザーか……どうにも胡散臭い話だよなア」

「……元々、あの手の企業に“そういう”噂は多いから。特にカイ

ザーは噂が絶えないね、合法と違法の間のグレーゾーンを上手く立ち回ってるみたい」

「なるほど。実際はほぼ真っ黒って感じか」

深刻そうな顔つきで告げるカヨコちゃん。

そうなつてくるとアビドスが抱えている借金なんかも色々怪しく思えてくる。どこまでが正当な金額での借金なのかはわからないが、おおかた吹っかけられてると考えてもいいだろう。

だがこちらが真実を確かめる術がない以上、結局の所これは推測の域を出ない。

溜め息が出る。

どうしようもない汚れた大人というのはどこに行っても変わらな
いんだな。そういうのは呪術界の腐敗した連中だけでもうお腹いっ
ぱいだつてのに。

「……そうだ。カヨコちゃん、ちよつとお願いしたい事があるんだけ
ど、いいかな?」

「お願いしたい事?」

「——正確に言えば、カヨコちゃんにと言うよりは『便利屋』にか
な」

——それが数日前の出来事。

「ん、銀行を襲う」

「……………へ？」

え、マジ？

というかガチで今から銀行を襲うのか？

まさかと思っていたが、あまりの展開に思考が追いつかず戸惑ってしまう。誰かこの状況を止められる者は居ないのかと確認するが、それどころかアビドス対策委員会のみんなは完全フル装備でヤル気十分と言った御様子である。

というかみんなその目出し帽どこから取り出しの？

そもそもソレ持ち歩いてたんですか？

凜太郎は目を点にして困惑する。

現在、凜太郎たちアビドス対策委員会に新たにシャーレの先生を加えたメンバーはアビドス自治区を離れて連邦生徒会の手が及ばないエリアにある『ブラックマーケット』と呼ばれる場所、所謂 闇市に來ていた。

それは市場マーケットなどという小さな規模で収まるものではなく、街ひとつ分くらいはあるであろう大規模なものであった。中退、休学、退学、様々な理由で『学校』をやめた生徒たちが集団を形成して連邦生徒会の許可を得ていない非認可な部活や組織が活動している。

それ程までに数が多く栄えているのかガヤガヤと、どこもかしこも人気の多い賑やかさについて驚いてしまうくらいだ。

このブラックマーケットに訪れたのは数時間前のことだ。

なぜアビドス一行がブラックマーケットに訪れたのか、その理由はもちろん自分たちが返済した借金がどこへ流れてついているのか、そして疑惑の真相を突き止める為にわざわざここまで来たのだ。

凜太郎はカヨコから得た情報をアビドス対策委員会へと共有して、自身が怪しいと睨んでいるカイザーの繋がりを辿る事をみんなに提案した。

『はあ？』 どうしてわざわざ民間軍事会社の代表が私たちの学校を襲

うように依頼するのよっ!』

『理由は正直わかんないけど、何か裏があるってのは確かだと思う』

『……そのゲヘナの便利屋からの情報は信用できるの?』

『そこは大丈夫。仲の良い信用できる子だし、ほらシロコちゃんも見かけたでしょラーメン屋で』

『?……もしかしてそれって柴関にいた』

『そうそう! セリカちゃんのバイト先にいたあの子達だよ』

これからどうするべきか、という話し合い自体は割とすんなり纏まった。

どうにもきな臭いカイザーの情報を調べ上げる為に、手始めにカイザーローンについて調べる事にした。しかしネットで調べたところで噂話程度の情報しか手に入らない。

ならば直接調べるほかない。

『運のいい事に』わざわざ遠出する必要もなく、ちょうど向こうからアビドスに来てくれる奴がいる。それは毎月の返済日にアビドスに訪れるカイザーローンの銀行員だ。

その銀行員はなぜかわざわざ利息をアビドスに受け取りに来るのだ。口座からの引き落としや振込ではなくなぜか現金のみの支払いでそれを受け取りに来る。

キヴォトスでもインターネットなどの技術は普及している、寧ろその技術力は自分がいた世界よりも優れているだろうというのが凜太郎の見解だ。だというのに片田舎と言ってもいいようなアビドスに直接足を運んで現金を手渡しのみでの返済。

カイザーが何か企んでいるとわかった以上、疑うというのが無理な話だ。

だから輸送車の行方から調べる事にした。

正直言ってカイザー関連はもう信用できない。

そして結果は、『大当たり』だったわけだ。

「はい。リントローもこれつけて」

「…………え、デジマ?」

シロコから手渡されるのは黒い目出し帽の覆面。

流石の凧太郎も表情が引き攣るが、既に覆面を装着して準備完了といった様子のシロコはどこか期待する様子で覆面を差し出している。周りの様子を見てみれば、やるならとことんまでやるしかねえ! と覆面を装備してヤル気全開の対策委員会たちの姿が見える。

なんだか全員の笑顔が怖い。

自分たちが汗水流して、利息返済の為に苦勞して稼いだ現金の全てが闇銀行に流れてると知ってかなりおかんむりなのだろう。なんだか負のエネルギーを感じる。

「…………キヴオトスに来る前もはちやめちやな事はいっぱいあったけど、流石に銀行強盗は初めてだよお兄さん」

とりあえず凧太郎も受け取った覆面を装着して、近くに駐車してあった車の窓ガラスで今の自分の姿を確認する。

「…………ファブルやんけ。そういや、猪野さんもこんなんつけてたな」

その立ち姿はどこぞの殺さない殺し屋のようにも見える。しかし妙な既視感を覚えるその姿に記憶を捻り出せば、自分と同じ2級呪術師であり降霊術関連の術式を扱う呪術師仲間の姿が重なり笑いそうになった。

とりあえず臍げな記憶を頼りにいくつかポーズを決めてみる。なんだか意外と様になっている気がする。

「——うし。ボチボチ俺も、一級術師になっちゃうぞイ☆」

「…………アンタ、一人で何やってるのよ」

「んー、いやちよつと知人のモノマネを。結構似てると思うんだよね俺の後輩辺りには多分ウケるか? ……あ、覆面姿もかわいいよセリカ

「ちやん。プロの貫禄出てるね」

「いや、覆面が似合うって言われても素直に喜べないから。というかプロの貫禄って何っ!？」

むんつ、と力こぶを作り笑う凜太郎の姿にセリカは呆れたように息吐く。そもそも女の子に対して貫禄があつて覆面が似合うねってどうなのか、普段から自分に対してどんなイメージを持っているのか問い詰めたくなる。

睨むように視線を向けるセリカからサツと目線を逸らせば、慌ててふためいている「白い制服を着た影」が目に入り込んだ。

「ごめん、ヒフミ。あなたの分の覆面は準備がない」

「うへー、つてことは、バレたら全部“トリニティ”のせいだっというしかないねー」

「ええっ!? そ、そんな……覆面……何で……えつと、だから……あ、あうう……」

シロコとホシノに挟まれ泣き出しそうな様子でこちらに助けを求め少女と目が合った。そんな彼女の様子に申し訳なくなり、流石に凜太郎は助け舟を出しに行く。

「それならヒフミちゃんが俺の使う? 流石に可哀想だし」

「ううっ、り、リントロウさん……」

「ん、それだとリントローの分がなくなる」

「まあ、何とかなるでしょ」

監視カメラとデータをぶつ壊して銀行員を全員気絶させるか、最悪銀行ごと亡き者とすれば問題ないだろう。なんて軽く考えながらこの場に置いて部外者でありながら自分たちに力を貸してくれている少女に目を向ける。

少女——阿慈谷ヒフミは救世主でも見つけたかのような様子で凜

太郎の姿を見上げる。彼女は『トリニティ総合学園』に所属する生徒であり、このブラックマーケットで出会ったこの地理にも詳しいとの事で案内役を任されてしまった少女だ。

凜太郎と対策委員会がヒフミと出会ったのはブラックマーケットに訪れてすぐの事だ。現金を積んだ輸送車の後を追ってブラックマーケットに辿り着いたのはいいものの、予期せぬトラブルにより途中で輸送車の姿を見失ってしまったのだ。

その予期せぬトラブルというものは彼女、ヒフミが大きく関係している。

輸送車の追跡中に突然銃声が鳴り響いたかと思えば、一世代前のスケバンとでも言えればいいのか。いかにもオラついたヤンキー女子高生たちのチンピラ集団に追われて逃げ惑うヒフミと出会ったのだ。

『さて、お怪我はありませんかお嬢さん？』
マドモアゼル

『あ……え？え？ だ、大丈夫です？』

『失礼。何やら困ってるご様子だったので手を貸してしまいました。が、要らぬ気遣いでしたかね？』

『え?!……あ、い、いえー！ あ、ありがとうございます！』

『ふふ、それはよかった。それで、可愛らしいお嬢さんはどうしてこんな所へ？ 一人で出歩くにはここは少し危険過ぎるか？』

『あうう……そ、それは……』

『もしよろしければ自分が安全な所までエスコートを、お尻が痛いッ

！』

『!!?』

『おうコラ。なに息を吸うような流れでナンパしてるのよこのヘンタイ』

『痛っ、ちよセリカちゃん。いま俺カッコつけてる所だから、尻けつに蹴り入れないで……ちよタンマ銃でバットを持つような構えをとらないでくださいそれは洒落にならんて』

『いやー、ごめんね。あの人に変な事されてない？』

『大丈夫ですか？ 嫌な事はしつかりと断らないとダメですよ？』

『あらやだ酷い言われよう。ねえシロコちゃん俺泣いちゃいそう』
『ん……リントローの日頃の行い』

これが阿慈谷ヒフミとの邂逅だ。

どうやら彼女の通うトリニティ総合学園はこの学園都市キヴオトスにおいて三大学園と数えられている一大勢力であり、言ってしまうと彼女は所謂マンモス校に所属する生徒でお嬢様学校に通う一人のようだ。

それを知ったブラックマーケットのチンピラたちは彼女を人質に身代金を要求するつもりだったらしい。やっぱりキヴオトスって怖い所だなと凜太郎は再確認させられた。

どうしてそんな彼女がこんな場所に訪れているのか疑問に思ったが、その疑問も直ぐに解消された。

『これです！これがペロロ様です！アイス屋さんとのコラボの限定生産で100体しか作られていないレアグッズなんですよ！』

『わあ☆ モモフレンズですね！ 私も大好きです！ペロロちゃんすごく可愛いですよね！』

『……今の女子高生ってああいうのが好きなの？』コソコソ

『いや、俺もよくわからん。どちらかと言うとキモ——』コソコソ

『ペ、ペロロ様はキモくないです！』

『——ですよ。俺もかわいいと思います。先生コイツがキモいって言ってました』

『あつれリントロー!?』

どうやらモモフレンズと呼ばれるファンシーキャラクターの限定グッズを入手する為にここまで来たらしい。ヒフミから見せられたのは最近キヴオトスで流行しているらしいモモフレンズのマスコツトキャラで主役格のペロロ様と呼ばれるぬいぐるみ。

白く丸っこい鳥の様な姿をしており、だらしなく舌を出していてどこに視線を向けているのかわからない眼球。わかりやすく好き嫌い

が分れるようなデザインのカラクターだった。

ジャップのギャグ漫画でこんな奴いたな、お前絶対すね毛濃いだろ。それがペロ口様なるものを初めて見た凧太郎の感想である。限定グッズの為にこんな危険な場所まで一人で来るとはなんとも恐ろしい行動力だ。

閑話休題それはともかく

ヒフミをチンピラ集団から助け出した際に、見失ってしまった輸送車を探し出す際にこの広いブラックマーケットに詳しい彼女を半ば強制で案内役として任命し、ここの組織情報やどういった人間がこのブラックマーケットに流れ着くのかを軽く説明してもらいながら觀光気味にブラックマーケットを探索していた。

凧太郎も便利屋68と共に一度だけ訪れた事はあったが、それっきりであり大した情報も持っていなかったので彼女の案内は大変ありがたかった。

そして道中路店で買い食いなどをしながらも探索の甲斐あつてか、闇銀行前で停車している輸送車を見つけそこでカイザーの銀行員と闇銀行の行員が現金の受け渡しをしているのを目撃したのだった。

アビドス対策委員会は激怒した。

必ずやかのカイザーローンと闇銀行をシバキ倒しその証拠となる集金確認の書類とその他諸々を手に入れなければならぬと決意した。凧太郎にはキヴオトスの政治などわからぬ。凧太郎は、唯の呪術師である。呪霊を祓い、学友と遊んで暮して来た。けれども邪悪レディ(女性への)に対しては、人一倍に敏感であった。

故にカイザーへの判決は有罪ギルテイ。アビドス対策委員会のメンバーを悲しませる輩は野郎オブクラッシャー。去勢してやる。

「ふふ、大丈夫ですよ。ヒフミちゃん、とりあえずこれをどうぞ☆」
「それってさっきの路店で買ったたい焼きの袋？ おお！それなら大

「丈夫そうー!」

「え? ちよ、ちよと待ってください、みなさん……っ!?」

「で……先生はどうすんの?」

「ん、外で待機しておこうかな。みんなと違って派手に暴れたりとかは無理だからね」

「かあく、これだからモヤシ野郎は」

「私に対して当たり強くない?」

そして数分後、ノノミの手によって紙袋で作られた覆面を頭から被った女子高生が完成した。紙袋には黒のマジックペンで5番の数字がしっかりと振られている。因みに凜太郎の覆面には数字は振られていない、ハブられたとかではなくまだ作成途中の物の為だ。

「見た目はグループのリーダー格って所ですね」

「こりやあ親玉だねー」

「わ、私もご一緒するんですか? 闇銀行の襲撃に……?」

「そりやあもちのろーん。ヒフミちゃん、今日は私たちと一緒に行動するって約束したじゃん」

「う、うああ……わ、私、もう『生徒会』の人たちに合わせる顔がありません……」

「問題ないよ! 私らは悪くないし! 悪いのはあっちで、だから襲うの!」

「加害者はみんなそう言うんだぜセリカちゃん」

「ちよ、変な事言わないでよ! 悪いのは本当にあっちじゃん!」

「……それじゃあ先生。例のセリフを」

「よし、みんな。『銀行を襲うよ!』」

この後、滅茶苦茶銀行を襲った。

まだあわあわ展開あわわ

a月×日

ホシノちゃんから日記帳をもらった。

この日記帳はアビドス校舎の使われていない教室を掃除している時に出てきた物だ。埃こそ被っていたが使われていた痕跡もなく、新品同様の真つさらな綺麗な状態な物だった。

かつてアビドスに在学していた生徒の物だろうか。捨てるのは勿体無いが、かといつてそのまま残しておいても持ち主が取りに来ることはないだろう。

アンティーク調とでも言えないのか、昔見た音割れしてそのような魔法使いの映画にでも出てきそうなオシヤレな日記帳だ。

専門の店で売るかオークションにでも出せばそれなりの値段がつくのではないかと思い、対策委員会本部にてお昼寝していたホシノちゃんに聞いてみたのだが俺がもらつていいと言つていた。

なんでも「勝手に売るのもなんだか申し訳ないし、それならタローくんに使ってもらつたほうが元の持ち主も嬉しいんじゃないかな」との事でこの日記帳を譲り受ける事になった。

しかし日記を書くなんてインテリっぽい事は慣れないというか、やった事がない。何を書けばいいかわからないし、まあ、その日あった事をチマチマ書いていこうかと思えます。

三日坊主にならない程度に続けていけばいいか。

a月k日

今日のアビドスは平和。

そういえば、あの銀行強盗の後色々あった。

現状確認と情報を纏める為にもこのまま書き記しておこうと思う。まず第一に、カイザーは黒で確定だ。もう泥沼ヘズブズブに浸かりきっているレベルで真つ黒だ。

銀行から入手した現金輸送車が持っていた集金記録の束、そこにはアビドスから利息の788万円を集金したと記されている集金記録、そして更にそこからカタカタヘルメット団なるものへと「任務補助金500万円提供」としつかり記録されたものも発見した。

これで今までのアビドスへ襲撃してきた武装集団、カタカタヘルメット団の背後にはカイザーグループがいると言う裏付けが取れてしまった。

カヨコちゃんから得た情報から予測して、それを言い伝えた時から覚悟はしていたのだろうが、それでも衝撃はおおきかったのだろう。シロコちゃんたちは理解できないと、驚きを隠せない様子で呆然としていた。

無理もない事だと思う。

自分たちが必死になって返済した現金が犯罪者や反社会勢力、何かしらの犯罪組織に横流しになっており、知らず知らずのうちに自分たちがそれを援助する形になっているようなものなのだから。

今回の件に巻き込んでしまう形となったヒフミちゃんも、この事実には驚愕しており、カイザーコーポレーションの実態を在学するトリニティ総合学園の生徒会、『ティーパーティー』へと報告するとの事。それと現在アビドスが置かれている状況についても何か力になれるかもしれないと、そちらも報告すると言ってくれていたがそう上手くはいかないだろう。

なんでもホシノちゃん曰く、そのティーパーティーとやらもカイザーやアビドスの状況はとつくに把握しているだろうと。何せキヴオトスで三大学園と数えられるほどの規模を持つマンモス校だ、そんな学園のトップに立つ首脳部なら知らないはずが無い。

この事にヒフミちゃんは酷く驚き、困惑を露わにしていた。

知っているのならばどうしてアビドスのみんなの事を見て見ぬふりをしているのかと。

ヒフミちゃんはやっぱりと言うか、つくづく優しい子だと思う。でも世の中そんなに甘くない事ばかりだ。

いい事は連続して起こらないくせに、悪い事は連続して起こるもん

だ。この言葉は中々の得ているし、俺はこれが世の常だと思う。そういえば、後輩呪術師の恵も近い事を言っていた気がする。不平等な現実のみが平等に与えられている。

因果応報は全自動ではなく、悪人は初めて法の下で裁かれる。呪術師はそんな「報い」の歯車の一つ。少しでも多くの善人が平等を享受できる様に、不平等に人を助ける。

……一日で色んな事があり過ぎた。

だけどもあ、銀行強盗が意外と楽しかったというか。もしこの先、俺が同級生や後輩、先生なんかの友人たちと再会できる事があれば面白おかしく語れる武勇伝になるだろう。

やっぱり少し寂しい。みんなに会いたい

a月h日

今日はシャーレの先公と一緒にだった。

個人的に野郎と二人きりでの活動ほど盛り上がりがない事はないが、これも致し方なしと割り切って一緒に仕事をする事にした。やった事といえば単純でいつも俺がやっているようなアビドス校舎の清掃や点検、修繕などを主にこなしてもらった。

俺はよくノノミちゃんから力仕事なんかを任せられるので、今回それをシャーレの先公と一緒にやったのだが、先公は驚くくらいに体力がなかった。

今までは使う教室の掃除や整理だけをしていたが、俺が校舎を寝床にしている事や、先公が来ていて人の出入りがあり、男手があるからとの事で他の空き教室や使えそうな機材、今後必要になりそうな物なんかの整理をしていた行つたのだが、早い段階で先公はバテていた。貧弱すぎる、もっと体力つけろ。

ノノミちゃんから任せられた仕事は途中から、というか8割くらい俺が仕事してたぞ。俺のやつよりも小さい荷物を抱えてピーピー弱音を吐いていたのは許さんぞおまえ。

休憩中になんとなく握手して、その際に力を込めてみたら野太い叫

び声を上げながら膝を付いていた。その様子に思わず、「うわっ：シャールレの先生、雑魚すぎ：？」状態になってしまったくらい。

今度、無理矢理にでもランニングに引きずって行くかと考えているくらいだ。いくらなんでもフィジカルがクソ雑魚過ぎる。

男同士だからか意外と気安く、休憩中に面白い話もいくつか聞けた。

キヴオトスに初訪した時なんかも色々あって大変だったようで、言葉とは裏腹にどことなく楽しそうに語っていた。先公貧弱すぎるのに、この世界のドンパチに巻き込まれたらいつか死ぬんじゃないかと思っただが意外と大丈夫らしい。

なんでも『シツテムの箱』と呼ばれる秘密道具で自分の身を守っているらしい

見た目はただのタブレットだが、超高性能で防護フィールドによりどんな攻撃も防いでくれるらしい。

ものは試しで思いっきり殴ってみたのだがこれがまた凄かった。見えない壁のようなもので攻撃が防がれるのだ、原理は違うが五条先生の無限バリアを殴っているような気分だ。

それから『シツテムの箱』なるものにはアロナちゃんと呼ばれるスーパーAIが搭載されているらしく、AIの彼女（ここ重要）が先公を守ってくれているとの事

よくわからんがタブレットの中にかわいい女の子がいるって事はわかった。普通に羨ましい。

それと、どうやらこの先公もキヴオトスではない他の場所、『キヴオトスの外』から来たらしい。どうりで頭の上に光る輪っかがないわけだ。

それならと、俺の知ってる漫画やアニメなんかの話を振ってみたが、あまり話を通じていないようだった。というよりも、お互いの知識に妙なズレがある感じだった。こっちの世界で連載や放送していた作品のタイトルこそ共通だが、その内容は俺の知ってるモノとは違うようでお互いに何言ってるんだこいつ状態に陥っていた。

例えば、人気のあった作品がこっちだと続編がいくつも作られてい

だが、向こうだと続編が作られておらず1作品目で完結して完全に終了、そんな感じだ。

それとなく渋谷で何か大きな事件はあったか聞いてみたが、渋谷を知らず俺が何を言っているのか理解できていない様子だった。キヴォトスの外とやらの謎が深まるばかりだ。

マルチでバース的なアレなのか。

そういうの俺バカだからわかんねえけどよ、バカだからわかんねえわ。

とりあえず明日はカヨコちゃんたち便利屋68のみんなに会いに行く。その時、先公も一緒に同行する事になった、情報を伝えてくれた御礼と挨拶をしておきたいとの事で。

帰れ、ついてくんな。

俺が便利屋のみんなとイチャイチャする場に貴様は呼んでないじゃ。

——凜太郎は現在、困っていた。

どれくらいレベルで困っているかといえば、トイレでデカイ方の用を足した後にケツを拭く紙がないか、詰まりを起こして流せない状況に陥っているくらいには困っていた。

解決する手段もなく。

助けを呼ぶにも呼べないような状況、あの瞬間の絶望は体験した本人にしかわからないだろう。素数を数えて落ち着いたところで、どうする事もできない。そんな小さな絶望感と危機的状況。

兎にも角にも、凜太郎は困っていた。
それはもう緊急事態だ。

「あー、できれば降参してほしいんだけど……それって無理そ？」
「売られた喧嘩を買わないなんてことは、風紀委員会としてできない。そっちこそ、痛い目に遭いたくなかったら速やかに投降することをお勧めするが」

「売られた喧嘩っていうか、絡まれたからこっちは抵抗してるだけであつてですね……はあ、女の子相手じゃ気が滅入るって」

ダル、しんど、やる気でねー、の三拍子。

重く溜め息を吐いて面倒くさそうに頭を掻く凜太郎の姿からは、言葉にせざともその心中が態度に現れている。どうしてこう、自分が望まずしてトラブルの中心へと引き込まれていくのか、ひよつとして俺って呪われてる？ まさか女難の相、なんてくだらない考えすら脳裏に過ってしまう。

カイザーの件の報告も兼ねてカヨコちゃんたちの元へ遊びに来ただけなのになぜこんなトラブルに巻き込まれてしまっているのか。どちらかというと、揉め事ではなくT.O.L.O.V.Eるな展開に巻き込まれてキヤツキヤツうふふしたいのが本音だ。

「ー。おっと……」

ふいに、自分の脳天目掛けて飛んできた弾丸を首を傾げて回避する。

容赦ないなこの子、なんて能天気と考えながら続けて放たれた第二射を軽く身を翻して避ける。気は進まないが、とりあえずなんとかするしかない。

呪力を練り上げ、身体強化を施す。

状況を確認。頭の中で道筋ルートを構築。そのまま一息で距離を詰めて眼前の少女を無力化するべく、地面を踏み砕く勢いで加速する。

「——ちっ」

しかし、頭上から弧を描くように飛来した物体を目視した事により、凜太郎は即座にルートを変更する。地面を滑りながら加速した勢いを殺し、飛来した物体が標的に着弾するよりも早く、拾い上げた小石を呪力で強化して投げ放ち、衝突させる事によって空中でその物体——迫撃砲を爆発させる。

「(つたく、鬱陶しいなあれ……)」

先程から遠くで遠慮なしにポンポン打ち込まれてくる迫撃砲により思うように動けない。防ぎきれず被弾した周辺のアスファルトはその威力から吹き飛び大きく抉れている。周囲の建物も黒煙に包まれ火を吹いているようにも見えるが、倒壊しないだけまだマシか。先に迫撃砲をどうにかするべきか。

チラリと背後の物陰に視線を向ければ、そこには不意打ちで叩き込まれた迫撃砲によってダウンしてしまっている便利屋68の姿がある。普通の人間と変わらない耐久力をしているシャーレの先生も無事だ。シツテムの箱による防護フィールドで防ぎ切ったのだろう

無事で何よりだ、キヴォトスの住民と比べて紙装甲の先生が生身であんなものを喰らえば普通に死ぬ。

「……だいたい、2kmって所か。うんギリ届くかな」

「もう一度だけ言うぞ。大人しく投降しろ、私たちが用のあるのは後ろにいるうちの厄介者共だけだ。これ以上邪魔をするなら部外者であつても問答無用で叩きのめす」

「はいそうですねって、大事な友達を引き渡せないって……それよりもイオリちゃんだったけ？　もし君の仲間に怪我させちゃったらごめんね」

「——はっ?」

その言葉に、何を言っているんだと少女——片目を隠した銀髪ツインテールに褐色の肌が特徴的なゲヘナ学園所属の風紀委員会、銀鏡イオリは怪訝そうな表情を浮かべた後、目つきの鋭い赤い瞳を見開きその顔色を大きく歪ませる事となる。

——これでいいや。

凜太郎は周囲を見渡した後、視界に映った一台の自動車に手を伸ばした。そしてリアバンパー部分を掴むと片手で持ち上げ、後輪が浮き上がり車体が前のめりの体勢となつてできた隙間に体を素早く滑り込ませて下から車体全体を両手で持ち上げる。

「ふううツ……よっこい、しよオ！」

「なっ！ お、お前いったい何して……!?!」

「それじゃあ、いっくわよオオツ！」

「ちよ、ちよつと待てツ本気かツ!?!」

「ああ！ 本気だぜ!!」

呪力を送らせながら走り出す。

助走距離は十分に足りている。陸上競技選手が踏み切りの位置まで勢いをつけるように加速して、ステップを刻み踏みしめた両足で地を蹴りイオリの頭上を軽く飛び越える程に跳躍する。

イオリは自分への攻撃かと身構えるが、それは違う。

開けた視界から狙いを済ますのはただ一点。

視線は遠くに固定。2 kmほど離れた位置にいて確認できるゲヘナ風紀委員が率いる擲弾兵にによる部隊を視界に捉えた。

「どっ、りやあああああッ!!」

「な、投げたあああ!!」

シャーレの先生が驚愕するような声が聞こえる。

全身の筋肉を唸らせ、球技のジャンプシュートの要領で投げ放たれ

た自動車は戦艦から発射されたミサイルのような速度で宙を駆け飛来する。

後方の部隊から慌てふためきながら退避するように指示を飛ばす声が聞こえるが、正面から真っ直ぐ放たれた空爆と言ってもいい攻撃に対して間に合うはずもなく大爆発を起こす。

凄まじい爆発音に塞ぎたくなる。

「お、派手にトんだな……だ、大丈夫だよな？　流石に死んでない……よね？」

誰の自動車かは知らんが、まあいいだろう。

相手側の攻撃に巻き込まれて殆ど壊れかけと言ってもいいような状態だったし、遅かれ早かれというやつだ。完全にトドメを刺したのは凜太郎なのだが、当の本人は知ったこっちゃないと爆発によって立ち上る黒煙を見上げている。

しかし着弾地点、当たりどころが悪かったのか。思っていた以上にド派手に吹き飛んだ自動車と相手の部隊に少しやり過ぎたかと心配になってしまう。

恐らくだが、衝突の瞬間にその場にあった迫撃砲やら何やらといった爆発物を巻き込んで派手に誘爆した結果、爆心地のような惨状となっている。

こればかりはキヴオトスの住民の耐久力を信じて無事を祈るしかない。

「……………」

「……………え、えへ☆」

「可愛くないから二度とやらないで」

「あ？　どこをどう見て言ってるんだ。可愛いかったらろが」

「うわキッツ……………」

「あ、あ、ん!？」

つい背後に視線をやれば、そこには「やりすぎだよお前」と言わんばかりに引き攣った表情で凧太郎を見るシャーレの先生と視線が合う。とりあえず笑って誤魔化す事にした。

自分も先生に対して遠慮はないが、最近じゃシャーレの先生も凧太郎に対して砕けた感じというか遠慮がなくなってきた感じがする。

「く、車を素手で投げ飛ばすなんて……い、いくらなんでもめっちゃくちゃがすぎるぞ!?!」

「え? いや、これでも手心を加えてるほうで……俺からしたらかめはめ波撃たなかったただけまだマシだというか」

「ビームツ!?!」

ビームってなんだ?! と困惑しているイオリに注意を向けつつ、状況を再度確認する。

「(うーん、数が多いなあ……てか囲まれてるよなこれ)」

後方から嫌がらせのようにちまちまと砲撃してくる部隊は潰せたと思うが、相手の部隊はそれだけではない。イオリが率いている部隊のメンバーに加えて自身を取り囲むように物陰に隠れて身を潜めている気配をいくつも感じる。

その数はアビドスに襲撃を仕掛けてくるヘルメット団以上のものだろう。

どうすつかなー、と元々無いような知恵を振り絞って状況を打開する為の一点を生み出そうとするが妙案は浮かび上がってこない。もうこのまま単純な解決策として便利屋のみんなど先生をどうにか担いで逃げるべきか。

自分一人でならどうとでもなるが、守りながら戦うとなれば別だ。そもそも、どうしてこんな状況になったのだったか。

近況報告も兼ねてシャーレの先生を連れて便利屋68のみんなに会いに行った。

『あはっ。タロちゃんおっひさ〜!』

『お、ムチユキちゃんお久しブリブリ。元気してた〜?』

『そりやあもちろん! くふふ。それでそれで、タロちゃんってば今日もカヨコちゃんに会いに来たの〜?』

『んー、惜しい、残念ハズレ。今日はカヨコちゃんだけじゃなくて便利屋のみんなにデートのお誘いかな』

『ぷっ、あははっ! タロちゃんって意外とプレイボーイだねえ。でもダメ、アルちゃんがわる〜い狼さんに誑かされちゃうのはムツキちゃん見過ごせないかなあ』

『そんなく、そりやないぜムツキちゃん』

『え〜、どうしよつかなく♪』

『……あ、あなたたちいつの間にそんなに仲良くなったのよ』

そこまでは問題なかった、しかし問題はその後だ。

前回、凜太郎が便利屋と仕事をした時に彼女たちが中々ひもじい思いをしている事はわかっていたので、どうせなら食事でもしながらと考えていたのだが突然すぎる襲撃を受けたのだ。初めましての挨拶はなく、それどころか挨拶代わりの遠距離砲撃。

その所為で、食事を済ませようと思っていたセリカちゃんのバイト先である柴関ラーメン屋が吹き飛び見るも無惨な姿になってしまった。ゲヘナ風紀委員会許すまじ。因みに柴関ラーメンの大将は無事だ。

キヴオトスって本当に恐ろしい所やで。

『リントロウさん! 大丈夫ですか!』

『おろ?……アヤネちゃんか、どうしたん?』

『どうしたじゃないですよ!! 一個中隊の規模の部隊を率いたゲヘナ風紀委員会を相手に戦闘なんて、いまどういう状況ですか!!?』

『あー、なんていうか……簡単に言うとは喧嘩売られたから買ったというか』

『け、喧嘩売られたツツ?!?!?』

「詳しく説明すると長くなりそうだし、俺もよくわかってないからそれはまた後でね」

もう強引に包囲網を突破して逃げるか、なんて考えているとジャケツトの衣囊に突っ込んでいたイヤホンサイズの物体、アビドス対策委員会から渡されていた通信用のインカムが点滅している事に気がついた。

そういえば渡されてたな、なんてぼんやり思い出しながらも装着してみればどこか慌てたようなアヤネの声が通信機越しに凜太郎の耳に入った。

周辺を見渡してみればアヤネが日頃から戦闘支援などで使用している小型のドローンが飛び回っている。あらやだかわいい。とりあえず手を振って挨拶しておく。

『ふざけてる場合じゃないですよ!』

「いやふざけてないって、ちよーまじめだよ。それよりもゲヘナって何? そんなヤバいの?」

『え……し、知らずに応戦してたんですか!?!』

「うっす。まあ、いきなり喧嘩吹っかけられただけだし」

そもそもゲヘナ風紀委員会、もといゲヘナ学園とは何か。それは学園都市キヴオトスに置いてトリニティ総合学園に並ぶほどのマンモス高であり、その規模はトリニティ総合学園と一、二を争うほどである。

因みにトリニティ総合学園とは昔から犬猿の仲で、街中でトリニティとゲヘナの生徒が出会えば即時に銃撃戦に勃発するほどのものである。

また『自由と混沌』を校風としている他、破天荒、型破り、粗暴な生徒が多く、銃撃戦が茶飯事というキヴオトスの価値観も加わっている所為か、領内の治安は非常に悪いんだそうだ。

そしてゲヘナ風紀委員会とはゲヘナ学園の委員会の一つである。銃弾飛び交うこのキヴオトス内で、特に治安が悪いゲヘナ学園の秩序維持を一手に担っており奔走している組織だ。

まあ、詳しく説明された所で凜太郎からしたら、なんじゃそりやといったくらいの感想しかないのだが。

『現在そちらに先輩たちが向かっています!』

「え、そうなの? 俺も先公と便利屋のみんなを連れて適当に逃げるから大丈夫だけど」

『いえ、そうもいきません。風紀委員会が私たちの自治区で既に戦術的行動をしたという事は政治的紛争が生じます……』

「??……政治?……? えーつと、つまり……?」

『風紀委員会が動いたという事はそれだけの理由があるんですよ。しかし、だからといって、他の学園の風紀委員会が私たちの許可もなく、こんな暴挙を敢行していい理由にはなり得ません!』

「あー、要するに、アイツら追い返せって事ね」

通信機越しでも、ふんす!と意気込んでいるアヤネの姿を幻視して苦笑いが浮かぶ。

政治的紛争やら何やらと、キヴオトスの複雑なルールについては詳しくわかっていないが、武力で解決しろというなら話は簡単だ。寧ろ得意分野だ、馬鹿な自分にもわかりやすいやり方である。

怖い顔で睨みつけてくるイオリに、余裕たつぷりな表情で笑みを浮かべて返す。

いいからドーピングだ!!

『先生！ 怪我はありませんか?!』

「大丈夫。これもアロナのおかげだよ、ありがとうね」

『えへへ。 任せてください！ 先生の事はこのアロナちゃんがしっかりとお守りしますから!』

「うん。 頼りにしてるよ」

現在、シャーレの先生は物陰に隠れながらこっそりと顔を出して覗き見るように周辺の状況を確認していた。ここキヴォトスに来日して以来、銃撃戦など日常茶飯事。

こういったトラブルばかりに巻き込まれてばかりだが、システムの箱と相棒の自称スーパーAIであるアロナのサポートのお陰で無事、御体満足で過ごせている。

先生は“神秘”を宿し人間離れた能力を持つキヴォトスの住民たちと比べて、天と地の差があると言っても良いほどに非力であり脆弱な一般人だ。生徒たちと共に銃を持って最前線に立つ事など不可能、しかしシャーレの先生が持ち得る“武器”は直接的で単純な武力ではない。

彼の武器は戦況を見極め、その優れた指揮で圧倒的不利な戦局すら覆せる力にある。

『す、すごいですね……』

「……うん。 彼が強いのはなんとなくわかってたけど、まさかここまでなんて」

しかし、そんな先生でも手の出せずにいる戦況が目前にあった。

驚きを隠せないでいるアロナの言葉に、ゆっくりと言葉を飲み込むように返事を返した。先生の視線の先にはゲヘナ風紀委員会を相手に立ち回る一人の男性、いや生徒の後ろ姿が見える。

「よっしゃ！ 行くぞ、上段蹴りっ！」

「くっ……！ ちょこまかと、鬱陶しい！」

「脇が甘いつて！ ほら次は中段、からの下段と思わしてもつかい中段！」

「なっ！ ぐう!!」

「相手の動きをよく見ろ、目で追えないなら動きの流れを感じ取れ！」

「くそっ！ さつきからなんなんだお前ツ……ひゃあ!? い、いま私のお尻触っただろ!!?」

「うえ!? 待って今のはマジで事故！ すいません柔らかかったですう!?!」

「くっツ、殺す!!」

「いやほんとごめんて！」

なんかやつてる。

目の前では追いきれない程の素早い動きでイオリを翻弄する凧太郎の姿。イオリも喰らいつくように素早い動きで凧太郎を射程に捉え、銃口を向けて引き金を引くが、その瞬間には既に姿はなく背後に回り込んで回避されている。

凧太郎が自分と同じで『キヴオトスの外』から来た人間である事は本人から聞いていたので知っていたが、まさかここまで人間離れた身体能力を有しているとは知らなかった。

キヴオトスの住人を相手に武器も持たず、生身で張り合えるほどの能力を持っていたなど予想出来はずもない。寧ろ、眼前での戦闘を見る限り余裕たっぷり凧太郎がイオリを押ししているのは明らかだ。

そしてなにより。

「——明らかに戦い慣れしてる……」

ズバ抜けた戦闘センス。

咄嗟の判断、とても言えればいいのか。

銃口を向けられた瞬間には、手の甲で弾き逸らしたり、蹴り上げる事によって相手の攻撃を封じている。それどころか、着実に相手の手数を潰して追い詰めている。常に自分の土俵に相手を引き摺り込んで戦っていた。

凜太郎の相手をしているイオリからしたら戦い辛い事この上ないだろう。現にイオリは顔を顰めてどうにか自分の戦いやすい距離に持ち込もうとしているが、それを許さない凜太郎の執拗な追撃が繰り出されている。

イオリの持つ武器はスナイパーライフル、銃身は長く一般的に遠距離からの狙撃を得意とする武器種。取り回しも重く、お互いに手が届くような距離で撃ち合うには向いていない筈だ。

「距離が近い、離れろッ！」

「それは出来ない相談かな。ばかスカ撃たれたら俺も流石に痛いっ！」

「この、大人しくしろ！」

「ちよ、危なッ！」

だが、流石はゲヘナ学園の秩序維持を努める風紀委員会の切り込み隊長というべきか。

少しずつ、そして着実に、王手を掛けるように凜太郎の素早い動きに対応して始めている。その事に凜太郎も気づいているのか、頬を掠めた銃弾に驚き僅かに表情を顰めていた。

「リントロウッ！」

「わーってるっの！ いちいち叫ぶな！」

身を乗り出して呼びかける先生に振り返らずに返事をする。

シャーレの先生から見て、凜太郎の持つ戦闘能力は非常に優れたものだと感じている。自分と同じ生身の人間でありながら武器も持た

ずに身体能力のみで前線に立っているのだから。

しかし、それでも凜太郎がイオリに押され始めるのは時間の問題であるはずだ。それは何も凜太郎の実力不足が原因ではない、寧ろその実力は高く未知数でもある。

単純に、凜太郎が手を抜いている。

何を理由に加減をしているのか先生にはわからないが、妙に違和感のある動き、咄嗟に力加減を加えるなど、少しやりづらそうにしている姿からそれは明白であった。

このままでは巻き返されるのも時間の問題か。

凜太郎単騎の戦闘であった為もあり、寧ろ邪魔になるかもしれないと、今まで後ろで様子を見ていたがフオローすべきか。

先生が戦闘の指揮を取る為に『シツテムの箱』を起動させようとした瞬間、凜太郎が目にも止まらぬ速さでイオリの懐に飛び込んだ。

「ちよつと痛くするぞ。腹に力入れて堪えてくれよ」

「はっ？——ッ！」

「出力、調整……行くぜ。なんちゃって無下限呪術、術式反転——」

「速っ……くそ、離せ！ くつつくな！」

「——『赫』」

響く轟音。

何が起きたのかまったく分からなかった。

「ふう……うし、こんなもんか。派手に吹っ飛んだけど、まあ大丈夫だろう。ッこつち」の人間は真希ちゃん並みに頑丈だろうし」

思わず目が点になった。

瞬く間に、とでも言えればいいのか。

一瞬たりとも目を離したつもりはなかった。だが凜太郎の側に居たはずのイオリの姿が消えたかと思えば、次の瞬間には彼女の体は大

きく吹き飛び、背後の壁を貫通して瓦礫の中へと消えていった。

シャーレの先生からはあの一瞬、懐に飛び込みイオりに組みついた凧太郎が彼女に拳銃を構ったような指を差し向けたのは視認できた。そして次の瞬間には方がついていていた。

何がどうなつたのか理解できない。

突然、まるで見えない砲弾に穿たれたかのようにだ。

当の本人は「あー、しんど」などと小言を漏らしながら伸びをしていた。因みに術式反転『赫』なんていつていたが、今のはただ凝縮した呪力を発射してぶつけただけ。

本人が気分を上げる為に叫んでいるだけである。『…今のはメラゾーマではない…メラだ…』的な感じで楽しんでるだけ。

出力は抑えているので、威力でいえば軽い衝撃波程度の呪力弾といったところか。一応高出力で放てば霊界探偵の霊丸といった必殺技なんかにもなる。

「イオリ隊長無事ですか！……っ?!」

「うげ、まーだ来るんか?」

一足遅く、先の自動車の爆発に巻き込まれながらなんとか抜け出したきた何名かの風紀委員会の応援が目撃したのは、瓦礫に半分埋もれながら目を回して気絶しているイオリと一仕事終えた感を出している凧太郎の姿。

ゲヘナ風紀委員会の中でも実力者の彼女を倒し、その上自動車を投げつけて爆撃するなんてはちやめちやな攻撃を仕掛けてくる凧太郎やばい奴に対する警戒心が否が応でも引き上げられる。

「な、なんなんだお前!……くそ、これでも喰らえ!」

「ん?……ごめん! 女の子からのプレゼントは嬉しいけど、これ返すね!」

「え……ふぎや!」

隙を作るためか、様子を見るためか、風紀委員の一人が閃光手榴弾スタングレネードを凜太郎に向かって投擲する。弧を描きながら真っ直ぐと自分の方へと飛んできたその軌道に合わせて、とりあえず蹴って返す事にした。

女性からのプレゼントなら基本的になんでもありがたいがたく受け取ってしまうのだが、流石に物騒なものは返品させてもらう。

風紀委員の相手も、まさか蹴って返されるとは思っていなかったのか目を点にして驚いている。そしてその数秒後、炸裂したスタングレネードの閃光と大音量をもちろに喰らった事によりその場で気絶して倒れてしまう。

登場してからなんとも早い退場、直撃したスタングレネードによって目を回し倒れている姿になんだか少し申し訳なくなる。

「それで、そっちのお嬢さんもまだやるかい？」

「……いえ、シャーレの先生がそちらにいらっしやる事を知った瞬間に、勝ち目はないと判断するべきでした……いや、それよりも貴方一人にここまでの被害を出された時点で考えを改めるべきでしたね」
「そつ、なら大人しくしてくれると嬉しいな。俺も意味もなく暴力を振るうのは好きじゃないし」

背後から近づく気配。

肩越しに振り向いてみれば、そこにはどこか疲れたような表情を浮かべる女の子がいる。状況を鑑みて、彼女も恐らくゲヘナ風紀委員会のメンバーである事は間違い無いだろう。

「久しぶりだね、チナツ」

「先生……こんな形でお目にかかる事になるとは……」

「えっ?……もしかして2人とも知り合い?」

「あー、うん。ほら前に話したでしょ、キヴオトスに初めて来た日の事」

「……あー、はいはい。なるほどね、把握」

眼前の少女——火宮チナツ。ゲヘナ学園、風紀委員会所属で救護担当を努める少女。キヴォトスに来てからよく見かけるようになってエルフ耳、両肩から垂らして先端を纏めたヘアスタイル。

黒縁のメガネとアクセサリーの黒いリボンが特徴的だ。それに加え制服の上からでも分かる豊満な胸部、そしてピッチリとした赤いタイツがなんともセクシーだ。

「おいコラ」

「痛いっ!……え、なんでいまお尻蹴られたの?」

「お前未成年に手出すなよ」

「いきなりなんの話かなっ!?!」

「うるせ。立場を考えろよ立場を」

「え、なんの話?」

「黙れ。こちとら彼女いない歴〓年齢だぞ、あゝあゝ! !」

「だからなんの話ツ!?!」

「俺だつて彼女がほしいイ!!」

やかましい。

久しぶりの再会で募る話もあるのか、シャーレの先生と会話するチナツの表情とチラチラと様子を見る姿から「つまりそういうことか!?!」と何となく察した凜太郎はとりあえず先生の尻を蹴り上げる事にした。

どう見たつて気になる異性を前にした女性の反応だろうと、他人のそういう事には無駄に察しのいい凜太郎。醜い嫉妬を隠さずに本気で蹴り飛ばしてやろうかとすら考えていた。

呪術絡みなんてなければ今頃自分にだつて可愛い彼女はいた筈なのだ。凜太郎は唸りながら、親の仇でも見るような目でシャーレの先生に嫉妬の眼差しを向ける。

やはり男の嫉妬は醜い。

因みに2人のやり取りはチナツ本人に丸聞こえであつた為、彼女は

顔を赤くしてアワアワしていた。

「リントロー!」

「おー、シロコちゅわーん!」

名前を呼ばれて事に反応して、振り返ってみればそこには現場に着したアビドス対策委員会の面々の姿がある。一瞬で表情を切り替えて近づいてくる彼女たちに嬉々として手を振って答える。

なんとも変わり身の早い奴である。

「……遅れてごめん。状況はどうなってるの?」

「それなら多分もう大丈夫かな……あれホシノちゃんは?」

「それが、ホシノ先輩とは連絡が取れなくて……」

「ちよ、ていうか大将は!」

「あ、それも大丈夫。犬の大将ならピンピンしてる」

そんな言葉に思わず凧太郎の頭に?マークが浮かび上がる。そういえば朝からホシノちゃんの姿が見えないとは思っていたが、個人的な用事で朝から出かけているのか。

気になる所ではあったが、それよりも先に解決しなければならない事がある。

「とりあえず無力化は出来たと思うけど、こつから先どうすればいいかわからんのだが……そこんとこどう思う?」

「え?……わ、私に聞かれましても」

「だよねー。どうすっかな……因みに動機や所属やら何やらは詳しく聞かせてもらってもいい感じ?」

「それは……」

『——なら、それは私から答えさせていただきます』

「おん?」

とりあえずチナツに聞いてみるが、彼女も困ったような表情を浮かべるだけでなんの解決にはならない。どうするべきか凜太郎は頭を悩ませる。縛り付けてから、キヴォトスにおける警察機関に相当する組織に突き出してもいいのだが、その前に根掘り葉掘り聞き出さなければならぬ。

拷問も尋問も苦手なんだけどどうっすかな、なんて再び頭を悩ませていれば、チナツが持っていた通信機から割り込むように第三者の声が聞こえてきた。

『こんにちは、アビドスの皆様。私はゲヘナの行政官、天雨アコと申します』

「――」

3Dホログラム、とでもいえばいいのか。小さな通信機から何もない空間に、まるで本物が目の前にあるかのように声の主が立体的な映像として投影された。SF映画なんかでしか見たことがない技術力だ。

投影された映像に思わず驚いて固まってしまった。

アビドス対策委員会であるアヤネも自分のドローンに同じような機能をつけていたが、あれはわかりやすくゴテゴテとしたデザインであった。通信機のような小型の機械にこのような機能を搭載しているなんて余程の技術力というか、経済的な余裕があるのか。

それにしてもキヴォトスの技術力は元いた世界とは比べものにならないくらい高いものだ。

『今の状況について少し説明させていただきたのですが、よろしいでしょうか？』

「……………」

『それにしても、風紀委員会の実働部隊をたった1人で壊滅状態まで持っていき、それに加えて突撃隊長であるイオリまで退けてしまうなんて』

「……………」

『まさかアビドスのような辺境にここまでの実力者が居たのは驚きました……あの、私の話を聞いてますか?』

映像として映し出されたアコの視線が凜太郎へと向けられる。通信機の近くにおり、「自分の作戦」を台無しにした人間と言ってもいい男に皮肉げに声をかけたつもりなのだが、何故か凜太郎はポカンと口を開けている。

アコの顔をじつと見たと思えば、視線を彼女の豊満な胸部へとずらし、そしてまたアコの顔を見るの繰り返しをしている。

そんな男の不躰な態度に顔を顰めて、訝しむよう表情を浮かべてしまふ。流石に失礼だと、一言言っつてやろうと思っただが。

「へ、変態だ……ッ」

『——はい?』

しかし凜太郎のそんな反応は仕方のない事だった。なぜなら通信機のホログラム越しに姿を現したこの天雨アコという女生徒の服装が凄まじいものだったのだ。

キヴォトスの住人にとつては普通のファッションなのかもしれないが、「キヴォトスの外」から来たと言っつてもいい凜太郎にとつては驚き固まっても仕方ないようなとんでもない服装。

なにせ、アコの纏う装いは胸部にえげつないスリットとでもいえばいいのか、少しズラせばポロリどころかボロン!と全体がまる見えになるようなエグイデザインになっているのだ。

そこでエラ呼吸でもしてるのかお前、と言いたくなるくらいに横乳が丸出しになっている。

「——はっ！もしかして、虐められてる……？」
『な、なんの話ですかいったい!?!』

理解出来ないような服装に流石に心配が勝ってしまう凛太郎であつた。

リボ払いは使うなよ…

a月j日

無事帰還。んー、ピースピース。

あれから色々あったが、ひとまずは無事に解決したという事ではないだろうか？まあ、問題はそれだけじゃないのだが。

兎にも角にも久しぶりにはちやけたが、中々いい運動になったと思う。やっぱ定期的に運動しないと体がなまっちまうからな。

しかし、やっぱり女の子相手に拳を向けるのは心が痛む所存。いくら相手が腕の立つ呪術師並み並に頑丈であったとしてもやりにくかったらありやしない。

真希ちゃん相手なら加減なしでやれるけど、というか加減したらめちやくちやキレられる。流石に頑丈とわかっていても初対面の女の子相手に遠慮なく攻撃なんてできない。

あと毎度思うんだが、まじでキヴォトスの人間ってどうなってるんだ。銃弾で打たれてもピンピンしてるし、生身の頑丈さなら多分俺負けてるんじゃないか？ 頑丈さでいえば悠二に近い気がする、あいつも「なんでその程度の怪我で済んでんだ？」ってくらい耐久力はだんち。

それはともかくとして、あの子の事を記録ついでに書いておく。

あの子、意外にもというか、拍子抜けというか、アビドスで暴れたゲヘナ風紀委員会の子たちは「ある人物」の登場であっさり帰っていた。

その人物というのは、なんとゲヘナ風紀委員会のリーダー。風紀委員長空崎ヒナちゃんだ。

彼女がどんな子かという点、なんというか見た目の特徴が多い子だ。あとすごくかわいい、なんというか甘やかしたくなるタイプだね。

なんかあの横乳丸出しの変態気質な格好をした自称風紀委員の天

雨アコちゃんはまだ殺る気マンマンというか、戦闘の意思は全然萎えてなかったのだが彼女の登場で状況が一変した。というかなんだその横乳、ちゃんと隠せ風邪引くぞ。

風紀委員会がどうしてわざわざアビドスにまで来て暴れていたのかはわからなかったが、話を聞いていく中でなんとなくわかった。

どうにも、ゲヘナ風紀委員会の目的はアビドスに滞在している便利屋68、ゲヘナ学園の生徒の捕縛という名目でシャーレの先公を目的としていたようだ。

名探偵カヨコちゃんの推理によると、風紀委員会が自分たちを狙いわざわざ他校の自治区まで追ってくるなんて、そんな非効率な運用は風紀委員長のやり方ではないとの事。

それも便利屋68を相手にするとしてもあまりに多すぎる兵力。他校の集団と戦闘する事を想定していれば説明がつく、故に行政官の独断的な行動である。

そしてその目的はシャーレの先公。

なんで先公を狙ってるのかはわからなかったが、これもカヨコちゃんの名推理によって謎が解けた。

横乳ちゃん曰く、大人の先生が担当している連邦生徒会長が残した正体不明な超法規的な部活……『怪しい匂いがプンプンするぜえー！』との事なのでトリニティとの条約とかなんとかが無事締結されるまで風紀委員会の庇護下にお迎え（拉致）するつもりだったようだ。君やろうとしてる事エグくない？

まあ俺はこっちの情勢とか詳しくないし難しい話は苦手なので、とかさそういうのは専門外。とりあえずシロコちゃんとかあっち向いてホイして聞き流してたけど。フェイントに釣られてたシロコちゃん可愛かった。

その所為で横乳ちゃんはバチくそキレてた。その胸部でまだカルシウム足りてないんか。

あらかた片付けたと思っていたゲヘナの部隊もまだいたようで、増員を投入して第二ラウンドが始まるかなってタイミングで現れたのが風紀委員長のヒナちゃんだ。

彼女が来てからはあつというまだった。ゲヘナ風紀委員会に撤収準備をさせたり、独断で動いていた横乳ちゃんに謹慎処分を言い渡したりと。

因みに俺はヒナちゃんとは初対面ではなく、顔を合わせるのはこれで二度目だ。

前に懸賞金目当てで一稼ぎしに行き、呪霊に襲われるカヨコちゃんを助けたあの日に実はヒナちゃんと会っているのだ。

懸賞金の掛けられた生徒の中にゲヘナ学園所属の子がおり、引き取りの連絡をした際にその場に現れたのがヒナちゃんである。なので顔を合わせるのは二度目ということ。

他にもヴァルキューレ警察学校の子なんかとも顔を合わせたっけな。

向こうも俺の事は覚えてくれてたみたいで、顔を見るなり驚いたような表情を浮かべてた。それから近況を伝えたりちよつとだけお喋りしたのだが、少し疲れたような顔をしていた。

はちやめちやが押し寄せてきそうなこのキヴオトスで割と常識人というか、まともな感性の持ち主なので彼女は仕事に追われてストレスが凄そうなイメージだ。

というかまじでいい子だと思う。

アビドスのみんなにも横乳ちゃんのやらかしを彼女が頭を下げて謝罪してたし。ヒナちゃんにあんまり迷惑かけるなよ横乳。

とりあえずストレス発散も兼ねて今度遊び行こうよとナンパしていた。

それからお喋りしてる時に、ヒナちゃんから興味深い話を聞かされた。

真相こそまだわからないが、それはアビドスの砂漠でカイザーコーポレーションがコソコソと何か企んでるとい話だった。

またカイザー。もういい加減力尽くでカイザー潰した方がいい気がしてきたんだが……。

あと帰り際に手を振って声を掛けたら、少し恥ずかしそうに振り返してくれた姿は可愛かったです。

a月▲日

今日は謎のかわいい子ちゃんとお忍びデートしてきました！

その謎のかわいい子ちゃんとは数日前からちよくちよく顔を合わせている白いフードになんか機械的になかちよいいガスマスクを装着したミステリアスな雰囲気の子だ。

俺の可愛子ちゃんセンサーが反応している。あの子は顔も中身も絶対に美人だと。なんとというか雰囲気でわかる。

以前会ってから待ち合わせなんかをした訳ではないが、郊外のコンビニまで買い出しに行こうと思い遠出した際に彼女に出会ったのだ。

なんとこの mysterious girl……わざわざアビドス付近まで会いに来てくれたらしい。なんでもゲヘナ風紀委員会がアビドスで暴れていた情報は意外と広まっており、それを聞いた彼女は心配になって少し顔を見に来てくれたようだ。

ええ子やなっ……！

詳しく聞きはしなかったが、彼女は意外と偉いところのお嬢様らしく普段はあまり表には出ず外出する際も護衛の人が何人かいるように。

なのだが、今回はこっそり抜け出し外に出てきちゃったとの事だ。それって大丈夫なのかと心配になったが、だから代わりにと護衛の役割を任されてしまった。

かわい子ちゃんにこうも頼まれちゃ仕方ない。その日限定で臨時の護衛を任される事にした。

そういえば、勉強の甲斐あってかしっかりと手話で彼女とお話する事が出来た。手話を披露した際はマスクで表情こそ見えなかったが驚いている雰囲気は感じ取れた。

それから少し嬉しそうに挨拶を返してくれる彼女の様子にこっちも嬉しくなってしまった。

彼女曰く「挨拶は大事な事」らしい。

いやー、いいねこういうの。女の子と手話で会話する機会なんてそうそうなかったが、こういうやり取りは親密な子との秘密の挨拶みたく私にはドキドキします。

そういや、俺は自己紹介して名乗ったが彼女の名前は分からずじまらだつたな。

それは内緒、との事で教えてもらえなかった。まあ謎の多い女性というのも素敵だ、女は秘密を着飾って美しくなるってベルモットさんも言っていました。

まあ、それは別としてなんて呼べばよろしいか困っていたところ彼女から『アツちゃん』と呼んでほしいと言われた。

アツちゃんかわいい！

俺の事はリンくんでお願ひしますと頼んでおいた。最初は好きな風に読んでいいと言ったのだが、流石に『リンリン』呼びは反応に困る。

その呼ばれ方はどこぞの喋るパンダ擬きに、味のしないガムレベルで弄り倒されたのでやめてほしい。

それから彼女、アツちゃんと軽いデートと洒落込んできました。初めて会った時にもこの子は花壇前でジツと花を見つめていたが、一緒に歩いている時も道路や花壇に咲く花を興味深そうに見ていた。

花や植物の話題を振ってみれば、やっぱりというか興味津々だった。俺のいた世界とキヴォトスで植物にどこまで違いがあるのかはわからんが、とりあえず俺の知識にあるものを解説しながらお花トークで盛り上がった。

たんぽぽの根を使ってコーヒーが作れると教えてみればすごく驚いていた。まあ厳密にはコーヒーではないんだが。

それと『死して賢者となりなさい』とか殺意全開で襲い掛かってくる森の妖精謙特級呪霊の話とか冗談半分でしょうと思ったがやめた。アツちゃんピユアそうで信じちゃいそうだし。

最後に時間だからそろそろ戻らないといけないと言う彼女を送ってから帰ろうと思ったのだが、迎えが来るからここまででいいと言う彼女に『また今度ね』と挨拶をしてその日のデートはお開きとなった。

とても有意義で素敵な休日デートを過ごせました。

「——、シノちゃん。おーい ホシノちゃん？」

「……うへ？ あ、あれ？ タローくんどうしたの？」

「どうしたのって、そりゃ俺のセリフだって。話しかけても気づかないし、ブーツとしてたみたいけど」

「え……あちゃー。おじさんもやっぱりもう歳かね、どうにも最近疲れが取れなくてさ」

「はいはい、何言ってるのさ。まだまだピチピチの美少女でしょうに、ホシノちゃんは自分の若さと可愛さに自信を持ってくださいな」

呆然と、遠くに離れていた意識が引き戻された。

場所は空き教室。気がつけば、自分の肩口からニュツとこちらを覗き込む男の姿がそこにはあった。

男性にしては少し長く整えられたまつ毛。引き込まれそうになる澄んだ青い瞳にはポカンとした表情を浮かべる自分の姿が映り込んでいる。

振り返れば鼻先同士が触れ合いそうになるほどの近い距離、ここまで接近されていたというのに気がつく事ができなかった事に対する驚きと、あまりにも距離が近い異性の存在に少しだけドキツとしてしまう。

「(あ……綺麗な色)」

青い瞳に、つい見惚れてしまう。

海が青い理由は、海にそそいだ光が海中の物質にあたって反射すると、吸収されにくい青色の成分が多くなり、そのために海の色は青く見えるのだという。

まるで海のようなだ、自分を見つめる青い瞳にそんな感想を抱いた。ホシノ自身、左右で色の違う橙系と青系のオッドアイであり鏡を見ればいつでも確認できる見慣れた色だ。しかし自分と似ているようで違う、深く澄んだ色合いの瞳に視線が奪われる。

そして何より、自分とは瞳の奥に宿す「熱の色」が違う。

「……うひえく、何するのさタローくん」

「んー、別に。ホシノちゃんのほっぺが柔らかかそうだったのでつい」

むにむに、と遠慮なくほっぺを摘んでは伸ばし、揉みほぐして柔らかさを堪能している。凧太郎は揶揄うような飄々とした様子で、ムツと不貞腐れたようなホシノに『えいえい。おこった?』と頬を突き始める。

しかしやりすぎて『おこってるよ?』なんてグーパンが飛んできても洒落にならないので程々にやめておく。

「それで、ホシノちゃんは何かお悩みかな?」

「っ……………え?」

「あ、もしかしてバレてないと思ってるう? 残念、あれだけ心ここに在らずって感じなら流石にわかるって」

「……………そっか」

「そんなホシノちゃんに朗報です。ここになんと! ホシノちゃんとお喋りしたくて暇そうにしているイケメンくんがいるんだけど、どうかな?」

「うへく、おっかしいな。おじさんからはそんなイケメンくん見当たらないんだけど」

「おっと、悪口かな。泣いちゃうぞ〜」

近くにあった椅子を適当にとると、背もたれを前にして肘を掛けて前のめりの体勢で座り込む。

内心を読んだような凜太郎の言葉に最初こそポカンとした表情をしていたホシノだが、目の前で自信たっぷりなドヤ顔を浮かべられる男の気遣いについて笑みを溢してしまう。

「さてさてさて、それではお悩み相談のお時間です！ ゲストのホシノちゃん、あなたのお悩みを聞かせてくださいいな」

「あれ、そういうテンションで行く感じ……？」

「おろろ、体育教師の熱血指導風の方がよかった？」

「んー、それもそれでなんか嫌だなあ」

さあさあ早く貴女の悩みを喋ってみなさいよと、聖職者気取りのポーズでホシノの返事を凜太郎は待っている。そんな男のノリノリな様子にホシノは苦笑いする。

気遣いに甘えて胸の内を語ってもいいのかもしれない。

しかし、自身が抱える悩みはおいそれと人に話せるようなものではない。しかもそれが悩みの渦中である凜太郎本人にも深く関わってくる事なのだから。

によほほーん、と身体をくねらせている凜太郎を尻目にホシノは少し前の——まだ新しい記憶を掘り返す。

『——これはこれは』

『……』

『お待ちしておりましたよ、暁のホル……いえ、ホシノさんでしたね。これは失礼』

それはアビドス対策委員会の面々にも伝えていない、キヴオトスのどこかにある場所で小鳥遊ホシノの個人による単独的な秘密の会合。

ホシノの視線の先に佇む、まるで人ならざるものとも思わされる容姿の人物。黒いスーツをピツシリと着込んでおり、その体は影の様に黒く無機質。右目と思われる箇所は不気味に発光しており、そこから広がるように顔全体に亀裂が走っている。

人の形をしたナニか、とても人間とは思えない姿。

『いやいや、キヴォトスにはまだ馴染めていなくて。こちらへどうぞ、お座りくださいホシノさん』

『……別にいいよ、長居するつもりはないし。『黒服の人』、今度は何の用なのさ』

『……ふふ、少々状況が変わりましたね。今回は再度、アビドス最高の神秘をお持ちのホシノさんにあるご提案をしようと思ひまして』

『ツ……提案？ ふざけるな!!それはもう……!』

『まあまあ、そう声を荒げずに落ち着いてください』

『……っ!?!』

今にも噛み付かんばかりに敵意を剥き出しにするホシノ。

怠け者でどこか気の抜ける、おっとりとした普段の彼女の姿からはとても想像がつかないような姿。アビドスの後輩たちがその姿を見たら驚愕を露わにするだろう。

しかしそんな彼女の相手を殴りかねない非情な剣幕を前にしても、黒服の態度が揺らぐことはない。

『再度、ホシノさんへご提案をしようと思っていたのですが……今回はそれとは別のご提案をあなたへしようかと思ひまして』

『……違う、提案?』

『はい。単刀直入にいいいますと、現在アビドスにてホシノさんたちと行動を共にしている津上 凜太郎さんの身柄をこちらで預かりたいのです』

『……、な、は?』

予想だにしなかった黒服の要求にホシノの思考が止まった。

『アビドス最高の神秘をお持ちであるホシノさんとは別に、津上凛太郎さん……言うなれば彼はアビドス最高の、その身に溢れんばかりの恐怖を宿している』

『……なにを、言ってる』

『神秘を宿してすらいない者が、なぜ神秘とは真逆の位置に属する恐怖を宿しているのか。そもそもあれは恐怖なのか私にとっても未だ未知数、非常に興味があります』

『――』

言葉が出ない。

眼前に佇む黒服の者が何を言っているのかまったく理解できなかった。それに加えて黒服のいう別の提案とやらはホシノにとって到底理解し難いものでもあった。

『ふ、ふざけるな！ なんのつもりでタローくんを！』

『クッククック……先程 申し上げた通り、彼に興味を惹かれています。未知を既知とするのは探求するものとしては当然のことでしょう？』

ホシノが以前に黒服から受けた提案、それは一種のスカウトのようなものだ。

アビドス高校を退学して、黒服たちの企業に所属する。

その企業が何をしているのかホシノ自身は詳しくは知らなかったが、この黒服という人物がカイザーの理事、お偉いさんと裏で繋がっている事は知っていた。

だからこそ、彼女はその提案とはカイザーPMCの傭兵として働く事を意味していると考えている。そしてその提案を飲めば、見返りとしてアビドスが背負っている9億という学生だけでは返し切れない多額の借金の半分近くを黒服が肩代わりするというものだ。

それはあまりにも、誰から見たって破格な条件だ。

だからこそ、ホシノはその条件を飲まなかった。

何せ怪しすぎる。

リスクに対してリターンが、大き過ぎる見返りに何か裏があるのではないかと考えるのは当然のことだ。そして何より、可愛い後輩たちの前に立つ者として、彼女たちと学園を置いていく選択肢を選ぶ事はよしとはできなかった。

だがしかし、いま黒服が提示してきた提案は津上 凛太郎の身柄を引き渡せというもの。それはつまり、津上 凛太郎を自分の身代わりにしろと言われているようなものだ。

『そ、そんなことっ……できるわけないだろッ！　そもそも、それは私やお前が勝手に決めていい事じゃない!!』

『ええ、確かにその通りです。この場にいない本人の意思とは関係なく、第三者のみで契約など交わせませんから。だからこそホシノさん、あなたの方からも彼へ声を掛けて頂きたい』

『断る……。そんな提案飲むわけない』

『それを決めるのはホシノさんではなく、彼と私の話し合いの末に決めさせて頂くものです』

『ッ……!』

これがホシノと黒服による秘密の会合、未だ記憶に新しい先日の出来事。当然この事は凛太郎本人には伝えていない。否、伝える事ができていない。

それもそうだろう。

助けを求められたシャーレの先生とは違い、凛太郎は結局の所アビドス自治区とは関わりのない部外者だ。

そんな部外者の彼が、アビドスの現状を変える為に自分たちを手伝ってくれている人間に自分の代わりにアビドスの為に犠牲になってくれなど口が裂けてもホシノは言えなかった。

そしてそれを伝えられない理由はもう一つある。

もし仮に、もし仮にホシノがこの提案を凧太郎に伝えたとして、自分の代わりに犠牲になってくれと頼んだとして、凧太郎がこんな馬鹿げた提案に二つ返事で快く引き受けてしまったら、自分はどうすれば良いかわからなくなる。

だからこそ、伝える事ができなかった。

共に過ごした時間は少ないが、ホシノにとって凧太郎は可愛い後輩たちと変わらないくらい大切なアビドスの仲間の一人となっているのだから。

「おーい。ホシノちゃん？」

「うへ？」

「……本当に大丈夫？ またブーツとしてたけど」

「……いやー、お日様が気持ち良くてすぐ眠くなっちゃうよ。ダメだねえ、こんな時間にお昼寝してサボってたらまたセリカちゃんに怒られちゃうね」

「……ふーん。ま、そういう事にしておいてあげるよ。それはそうとしてホシノちゃん」

「んー？ 何かなタローくん」

「実は少し前から俺の財布の紐を握っているアヤネちゃんに内緒で高反発なおつきいマットレスを買ってみたんだが……どうする？」

「おー！ それじゃアヤネちゃんに怒られる前におじさんと一緒にお昼寝しようじゃないか！」

「やったー！ じゃあ今からお昼寝のお時間ですね！」

——だからこそ今は、この束の間の平和に身を任せよう。

「クツクツク……津上 凛太郎さん。少々お時間よろしいですか？」

「……あ、？ てめえは誰だよ。挨拶は大事だって知らねえのか？」

——その夜、呪術師は不可解な探究者と出会う。

キミは、人のことをあれこれ言えるほど立派じゃない
だろ

「では、どうぞお座りください。何かお飲みになりますか？」

「悪いが俺と一緒にお茶するのは女の子だけだ」

「クツクツク……そうですか。なら私はコーヒーを頂くとしまし
う」

何だこいつ？

そのナリでコーヒーなんて飲めるのか。

凜太郎はゆっくりと周辺を見渡す。

場所は目の前の謎の人物に連れて来られた寂れた喫茶店。店内に
客は居らず、自分たちだけの貸切状態だ。従業員は1人、ロボットの
店員がいそいそと注文を取ると店の奥へと消えていった。

なんでこんな状況になってるんだか。

席に着いた凜太郎はテーブルに肘を置いて、頬杖をつきながら眼前
の人物に視線を向ける。とりあえずなんか黒い奴がいる。

黒いスーツをピツシリと着込んでおり、その体は影の様に黒く無機
質。人間離れた容姿に、実は呪霊だと言われても驚かないような姿
見。寧ろこいつ呪霊なんじゃないかと訝しんですらいる。

どうしてこんな怪しき満点の黒い奴と一緒に喫茶店になど足を運
ぶハメになっているのか。そんな疑問に、つい昨日の記憶が脳裏を過
ぎる。

『クツクツク……津上 凜太郎さん。少々お時間よろしいですか
？』

『……あゝ？ てめえは誰だよ。挨拶は大事だって知らねえのか
？』

『これは失礼……こんばんは、いい夜ですね』

『あつそ。悪いな、誰だか知らんが用があるならまた明日にしてくれ。眠くて仕方ねんだわ……明日の昼過ぎくらいに、ここに来てやるから。用があんならその時で頼むわ……ふわあ……ねむう』

『……え?』

『んじや、また明日。ねみい……ふわああ』

『……ええ?!』

——その日、昼間にホシノと共にたつぷりと気持ちよく昼寝をしてみました為か、その夜は中々寝付けずにいた。時間は疾うに深夜を過ぎていく。対策委員会の面々もその日の活動を終了しており自宅へと帰宅していた。

横になったものの、中々寝付けなかった凜太郎は誰も居ない静まり返った教室で眠気に襲われるのを待っていたが、妙に目が覚めてしまっていた。

それなら少し散歩にでも出掛けて体でも動かしてくるか、夜のアビドス市街に出かける事にした。身体を動かして疲労を感じれば、自ずと眠気もやってくるだろうと。

なのでとりあえず、アビドスの荒廃した砂漠まで走り込みを行い、かめはめ波を砂漠に撃ち込んで修業という名目でトリガーハッピーを行なっていた。

『きさまは助かって地球はコナゴナだ——っ!!』

恐るべし深夜テンション。

誰も見てない事をいい事に、ちよつとクオリティの高いベジータのモノマネをしながらギャリック砲を撃つてたりしていた。その最中で、なんだか妙にデカい蛇のような生き物の影を砂漠の中で見つけたりなんかもあった。

まあ、気のせいだろうと凜太郎は気にしていなかったが。

それからだいたい時間が経ち、いい汗を流した凜太郎は眠気に襲われながら帰路へとついた。そんな帰り道に、この謎の人物と出会ったの

だ。

その時は眠気のあまり適当に相手をしていただけだが、朝が目が覚めてアビドス対策委員会の面々が学校に集まり出した時間帯。

シャーレの先生も出迎えてみんなで仲良く昼食を食べていたタイミングで謎の人物との会話を思い出し、約束してしまった以上はと思いい一応昨日出会った場所へと赴いてみればそこにはしつかりとあの不審者が待ち構えていた。

『おや？ おはようございます。津上 凜太郎さん』

『うっそだろ……マジでした』

『え？』

『あ……いや、なんでもない』

そんなこんなで、凜太郎はこの謎の人物と共に寂れた喫茶店へと足を運んでいた。正直言ってバックればよかった、何て思っていたりもする。だって明らかに面倒ごとだと、そんな気配をひしひしと感じていた。

「で、話って何なわけ？ 言つとくけど、長話は嫌いなんだよね」

「ご心配には及びませんよ。私も手短に済ませるつもりではありません。ではまずは自己紹介を、私のことはどうぞ『黒服』とでもお呼びください。この名前が気に入ってましてね」

「なんだそりや、俺の自己紹介は……いらねえか。てか何で俺の事知ってんだアンタ」

「それはもちろん。あなたにはとても興味を惹かれていますから」
「……うげえ、なんかキモいなその言い方」

内心で警戒する。

そもそも、自分とこいつは接点も面識も何もない。だと言うのに、まるで以前から自分のことを知っていたとでも言いたげな口ぶりに、嫌でも警戒心が上がる。何が狙いなのかもまったく見当がつかない。

そして何より、なんだかきな臭い。

相手を疑う事から始めてしまうのは申し訳ないが、割と碌でもない人種の類だろうと、凜太郎の呪術師として培った経験と勘で黒服という人物の“人間性”をなんとなく推理していた。

「私……いえ、私たちはキヴオトスの外部からやってきた者です」

「……は？」

「そして津上 凜太郎さん、あなたもキヴオトスの外部の者……しかし私たちとはまた違った次元、領域の存在ですね？」

思わず、思考が止まった。

なんて事のないように話を切り出した黒服の言葉に、つい漏れ出たような言葉がこぼれた。

いまこいつなんて言った？

キヴオトスの外部からやって来た、それはまだいい。その事を知っているのは、シャールレの先公とアビドスの生徒たちだけの筈だが、疑問が残るがそれはまだいい。だけど、違う次元やべつの領域など聞き逃せない一言があった。

「……アンタ、何者だ？」

「ふふっ……あなたの興味を引けたようで何よりです」

「……ああ、そうだな。おかげで興味津々だよ」

呪術師としての、意識が引き出される。

黒服が凜太郎に興味を持つように、凜太郎もまた黒服に対して多少の興味を抱いた。目の前人物がなぜ、何を目的として、わざわざ自分に接触してきたのか。

「てことはアレか、アンタもしかして宇宙人とか？」

「宇宙人……なるほど、そういった観点を持たれるのですね。しかしそれで言うあなたも似たようなものでは？」

「んなわけあるか。どっちかつーと、流行りの異世界人って奴だな」
「異世界人……ククツ、そうですか」

キヴォトスの外とやらの謎が深まるばかりだ。

席に届いたコーヒーを手に取り、マグカップを傾ける黒服。

そんな様子を静かに凧太郎は観察していた。声のトーンや纏う雰囲気、その変化から相手が楽しげに会話しているのはわかったが、異形の容姿ゆえ表情の変化が読み取れず不気味でやり難い。

「というか飲食できるか。」

優雅にカップを持つ姿に再び同じような感想を抱いてしまう。

「んで？ 何が目的で俺に接触してきたんだ」

「目的、ですか？ そうですね。あなたと楽しくお茶でも……言ったらどうしますか？」

「おいおい、つまんねえって……惚けんよ」

「おや、惚けるとは？」

「俺は長話は嫌いだが、無駄話をもっと嫌いなんだ。最初に言つたら、一緒にお茶するのは女の子だけだって。さっさと理由わけを言えよ」

鋭い双眸で黒服を射抜く。

ピリピリと、意識せず僅かに漏れ出た殺気。空気が重くのし掛かって来るのを肌で感じながらも、黒服は喉を鳴らして笑う。

カタンツ、とマグカップを静かに置いて両肘を机の上に立て、両手を口元で組む。

「そうですね。ならあなたの言う通り、無駄話は抜きにして単刀直入で行きましょう」

「……………」

「津上 凧太郎さん。私たち『ゲマトリア』と協力するつもりはありませんか？」

「は……ゲマ……な、何だって？ とうか協力う？」

「ええ。あなたは自分が思っている以上に、私たちにとって『不可解な存在』であるんです」

突拍子もない申し出に眉が寄せられる。

よくわからない単語と共に想像の斜め上を行くような黒服の言葉に、凧太郎は頭の上に疑問符を浮かべる。どう反応を返せばいいかわからず、とりあえず続きを促すことにした。

黒服が口を開く。

「そして何より、あなたにとっても興味を惹かれています。私は、観察者であり、探索者であり、そして研究者です。『神秘』もなくあなたが宿す『恐怖』、その根源を是非とも隅々まで研究させていただきたくあります」

「いや、何言ってるんだおめえ」

「もちろん。タダでは言いません」

「おい人の話を聞けこら」

矢継ぎ早に語られる。

興奮冷めやらぬとでも言えればいいのか。まるで新しい玩具を買ってもらった子供のよう、無邪気な笑みを浮かべながら嬉しそうに語る。しかしそんな様子とは裏腹に、口にする言葉は物騒極まりない。凧太郎も何を言われているのか分からず、思わず間抜け面になってしまう。しかし凧太郎の反応など気にした様子も無く、黒服は言葉を続ける。その眼には、隠しきれない探求心が見え隠れしていた

「労働に報酬は付きもの、その対価としてあなたが望むものを用意する事もできるかもしれませんよ？」

「へえ、そりやどんな？」

「例えば、アビドスが抱える借金……その半分近くを肩代わりするというのは？」

「現実味がない……話になんねえな」

「でしたら……そうですね。アビドスに通う生徒、彼女たちの身の安全を保証するというのはどうでしょう」

「——あ？？」

——現在、シャーレの先生は困っていた。

場所はアビドス高等学校。その本館の一角にある対策委員会本部の教室。アビドス対策委員会の面々が日頃から利用する事の多い、活動の拠点となる場所だ。

先生は、静かに鳴り響く時計の針の音に耳を傾けながらお茶を啜っていた。

(……………気まずい)

いまこの場にいるのは、ホシノ、シロコ、ノノミ、そして先生を含む4人である。セリカとアヤネは午前中から別件で席を外しており、

凜太郎もちよつと用事があると言つて少し前から姿を見ていない。

そういえば、行き先を聞いてなかったな。

まるで現実逃避するかのように先生はいまこの場に居ない、生徒と先生というよりは気安い男友達とも言える能天気な男子生徒の存在を思い出していた。

あまりにも空気が重い。

いつもなら楽しくお菓子でも食べながらお喋りをして、対策委員会のメンバーのまとめ役でもあるノノミも困つたように様子を見ている。

(……………いや、本当に気まずいんだけどお!?)

速く帰つて来いよあのバカ。

そして1秒でも早くこの空気をどうにかしてくれ、先生は絶対絶命の状況下で最後の頼みの綱にでも願いを賭けるかのようにそんな事すら考えていた。

今すぐにも教室のその扉から『みんなー、お疲れサマーランドく！ みんなの凜太郎がただいま帰宅しましたよ！』なんて、鼻の下を伸ばしながらふざけたテンション飛び出して来てくれないかと祈っている。

いったいどうしてこんな気まずい空気になっているのか？

それは数分前の出来事が原因だ。

先生とセリカとアヤネの三人が、先日のアビドス自治区に乗り込んできたゲヘナ風紀委員会との戦闘。その際にアビドス高等学校近隣に店を構えるセリカのアルバイト先の柴関ラーメンが被害をくらい、店主が軽い怪我を負ってしまったって、三人は店主のお見舞いに出かけていた。

幸いにも店主の怪我は軽いものだったが、戦闘の被害で店は吹き飛んでしまい更地と言つてもいいような状態。

その事にセリカが悲観していたが、店主は気にしていない所か『バイトできなくなちやつてごめんな』とセリカに対して申し訳なさそう

に笑っていた。

そしてその時、奇妙な話を聞かされた。

元々あの店は退去通知を受けており店を畳むのも時間の問題であったと。

その話を聞いて、アヤネは困惑を隠せなかった。

なぜならアビドス自治区の建物の所有者はアビドス高校である筈なのだから。

そんなアヤネの反応に、大将は少し驚いたような顔をして黙り込んだ後、静かに語った。何年も前に、アビドスの生徒会が借金を返せなくなり、建物と土地の所有権が既に別の所有者へと移っていると。

それからアヤネは少し調べたい事があるといい、セリカもそれに同行する事となった。そして先生は先にアビドス高等学校に戻ってきたのだが、そこである問題が起きたのだ。

『……いつまでしらを切るつもり？』

『いたた……痛いじゃん、どうしたのシロコちゃん』

大きく響くような物音が空き教室から響いたと思えば、そこには困ったような表情を浮かべるホシノとそんな彼女を鋭く睨みつけるシロコの姿があった。状況に理解が追いつかない。

問いただすシロコとどこか戯けるホシノ。

慌てて先生とノノミが駆けつけた頃には、既に一触即発とも言えるような重苦しい雰囲気と化していた。

その場は、誤魔化すように足早に去っていったホシノと、仲裁に入ったノノミのおかげでなんとか収まったが、この場に居ない者の帰りを待つ現在、対策委員会本部は何とも言えない気まずい空間となっ
てしまっていた。

頼む。

誰でもいいからこの空気感をぶち壊してくれ。もう何度目かわからない、そんな願いが胸の内ですべて溢れる。いくら外面は取り繕っていても、気まずさのあまり内心で冷や汗を流しながらいまにも号泣してい

まいたいくらいだ。

「——先輩たち、大変!! これ見て!……え?」

「アビドス自治区の関係書類を持ってきました!これを……?」

「あ、あれ?……な、何この雰囲気、どうしたのみんな?」

「お、か、え、り、な、さ、い、!!」

「へ!? ちよ、ちよつと先生!? どうしたのよ、なんでそんな泣きそうに……つてくっついてこないでよ!」

そんな願いが聞き入れられたのか。

ドタバタと、足音を鳴らしながら慌てふためいた様子で教室の扉が乱暴に開けられて、この場に居なかつたセリカとアヤネが教室へと駆け込んでくる。

勢い良く飛び込んで来たのはいいものの、自分たちが少し離れていた間にまるでお通夜状態のような重苦しい雰囲気戸惑ってしまう。

まさに救世主。

先生は感動のあまり目に涙を浮かべながらセリカへと抱きついてるが、顔を赤くしたセリカに強制的に引き剥がされて教室の床に転がった。しかしそれだけでは終わらず、すぐさま起き上がると彼女の足に組みついて涙を流す。

視線で先輩たちに助けを求めてもなぜか視線を逸らされたり、苦笑いされるだけで終わってしまう。

「ありがとう! ほんつとありがとう! おかえり二人とも!」

「え、ちよ、なに!? わ、わかつたつてば、一旦離れて……んぎぎぎ、先生力強つ!」

「え、えつと、先生大事な話があるのでセリカちゃんから離れて話を……」

「……ふう、わかつた」

「……へ、ヘンタイだ。リントローと違うタイプのヘンタイだ」

先生の突然の奇行に恐怖を覚えたセリカだったが、気を取り直して持ち帰った情報を全員に伝える。

その時、若干先生から距離を取ったのだが、その何気ない仕草が先生の心にダメージを負わせる。自業自得だが。

「それよりも、これ！ とんでもない事がわかったの！」

「皆さん、まずはこれを見てください……！」

アヤネは持ち帰った資料を数枚鞆から取り出すと、みんなから見やすい位置へと広げた。

「んん、これって……地図？」

「これは直近までの取引が記録されている、アビドス自治区の土地の台帳……『地籍図』と呼ばれるものです」

「それって土地の所有者を確認できる書類、という事ですか……？」

アヤネが持ってきた地籍図を手に取り、ノノミが疑問の声を上げる。わざわざ書類を確認せずとも、アビドスの土地を管理と所有しているのはアビドス高校であり、ノノミの疑問は当然のものであったが。

「私もさつきまでそう思ってた！ でもそうじゃなかったの！」

「え……？」

「……お見舞いに行った時、大将から話を聞いたんです」

空いた口が塞がらないとはこういう事だろう。

アヤネの口から語られた話はアビドス対策委員会のメンバーにとって衝撃的なものだった。

市街地や建物、アビドス自治区内のそのほとんどがアビドス高校が所有している事にはなっていなかった。所有権がまだ渡っていないのは、アビドス対策委員会が本館として使っている校舎と、周辺の一

部の地域のみ。

これには三年間アビドス高校に通いメンバーの中でも長く学籍を置いているホシノも、驚愕で小さく声を漏らしていた。

アビドス自治区である筈なのに、アビドスの所有ではない。これに對して、そんなわけがないと。

そして何より驚かさされたのは、現在の所有者が——カイザー・コンストラクションだという事。それはカイザーコーポレーションの系列企業。

学校の自治区の取引など、普通はできない。だがそれは普通ならやらないだけであって、できないわけではない。

学校の資産の議決権は、その学校の生徒会にある。

自治区の取引が可能なのは、議決権を持つ生徒会だけ。

それは数年前の生徒会、現在のアビドスに生徒会は存在していない。

生徒会がアビドスが抱える借金を返そうとして土地の取引をして、しかし砂漠に埋もれたアビドスの土地に高値が付くはずもなく、借金を減らすにすら至らなかった。返せるのは精々、利息分だけ。

カイザーローンが、学校の手になんて貸して、利子だけでも払ってもらうために土地を売るように仕向ける。そこからは、利子を払いまた土地を売ってしまう、負の循環。

つまり、最初から悪質な罠にアビドスは捕えられていたのだ。

最初こそ要らない砂漠や荒廃した土地を売ればいいと、どうせ砂漠と化した使い道のない土地。しかし安値で売ったところで借金が減るわけもなく、土地を失っていく一方。

最終的にはアビドス自治区が、ゆつくりとカイザーコーポレーションのものになる。

「……元々、そういう計算だったのかもしれない」

「アビドスにお金を貸した時点で、こうなるように……」

「だいぶ前から計画してた罠だったのかもね。それこそ何十年も前から、それくらい規模の大きな計画だったのかも……ッ」

「なにそれっ!?! たただだカイザーコーポレーションのやつらに弄ばれてるだけじゃん!」

怒りのあまり、噛み付くような物言いになってしまった。

今更こんなことを言っても仕方が無いことなのは分かっている、言わずにはいられなかった。

そもそもこの学校に通っている生徒達は、誰一人として気付いていなかったのだから、今の今まで自分たちの住む場所がどんな状況に置かれているかすら理解できていなかった。

「生徒会のやつら、どんだけ無能なわけ!?! こんな……こんな詐欺みたいなやり方に騙されてさえないなければっ!」

「セリカ、落ち着いて」

「先生……でもっ」

「それでも、悪い事は……騙されるよりも騙す事だと思っよ」

「……そ、それはわかってる! 私もわかってるわよ! 悪いのは騙した方だっつて事くらい……っ」

「——うんうん。それには俺も同意見かな」

「でも……悔しいっ。なんでこんな、どうしてッ」

「よしよし、辛かったんだね。好きなだけお兄さんの胸の中で泣くといっや」

「……………ん?」

一瞬の静寂。

この場に全員の視線が一箇所に集まる。理不尽に晒されるアビドスの現状に溢れそうになる涙を堪えていたセリカだったが、いつの間にか自分の隣で背中を優しく摩っている男の姿に目が点になる。

アビドスのジャージと黒のウィンドブレーカー、外にハネた黒髪のショートヘアの男性、津上 凛太郎がそこに立っていた。

「やつほ! 津上 凛太郎ただいま帰りました! 俺が居なくて寂

しかつたんじやなくい?」

「うええ!! あ、あんたいつの間に!」

「ははっ、セリカちゃんナイスリアクション。あ、これお土産のたい焼きね。実は柴関の大将にもお見舞いで渡してて、みんなの分も買って来ちやった!」

「ちよ、あんたこんな大変な時にお土産買ってから来たっての!」

「餡子とカスタードどっちがいい? あ、オススメはカスタード」

「話を聞きなさいってば!……ならカスタード」

「オツケー!」

みんなも選んでいいよ。

なんとも緩い雰囲気で教室に入って来た凧太郎がその場に全員へとお土産を配っていく。突然過ぎる登場と今までの張り詰めた空気を見事にぶち壊された事に面喰らいながらも、凧太郎からのお土産を素直に受け取る。

「ほら、先公の分もあるぞ。感謝しろ」

「ありがとう。それよりも、リンタロウは今までどこに?」

「ん? あー、ちよつと野暮用というか。なんかこう……スーツ着たまつくろくろすけの擬人化みたいな奴に会いに行ってた」

「——え?」

「くろ……? 何それ?」

「ま、気にすんな。お話して来ただけだ……ほい、ホシノちゃんも選んでいいよ」

「タロー、くん……な、なんで……ッ」

何気ない一言だった。

凧太郎の発言に、ホシノは膝から力が抜けそうになった。なにせ凧太郎の言葉の相手に身に覚えがありすぎた。凧太郎の手から渡されるお土産をただ力なく受け取る事しかできなかった。

その指先が。

その声音が。

まるで親に叱られる事を恐れる子供のように震えていた。凜太郎が土産として持ってきた菓子を頬張り、周りはホシノの様子に気がついていない。

正面に立つ凜太郎は気がついていない。

肩を震わせ血の気が失せたような顔で、まるで嘘だと言ってほしいと懇願するような表情で自分を見上げるホシノの様子にしつかり気がついていない。

「ホシノちゃん」

「——ッ！」

「この後、時間ある？」

「……………」

「ちよつと俺と火遊びしようよ」

「……………え？」

呆然と見上げる。

視線の先には、悪戯が成功した子供のように歯を見せて笑う凜太郎の姿があった。

「ククツ……振られてしまいましたか」

「ですが、とても有意義な時間でしたよ。彼が宿す恐怖、その残穢とはいえ貴重な“サンプル”も手に入れる事が出来ました」

「それでは、また近い内にお会いする事になるでしょう。津上 凜太郎さん」

ワシとポツキーゲームじゃ!!

「お、出店やってんじゃん……おじちゃん！ たこ焼きくださいな！」

「はいよ！ 何個入りにするんだい？」

「んじゃ10個入りにしよっかな。あっちの子と一緒に食べるから」

「お！ そっちの子は可愛い子は彼女さんかい？」

「おお！ おじちゃん見る目があるねえ。でも残念ッ、まだお友達なのよね。これから口説いてくること」

「なんだ、こんな可愛い子侍らせようなんて隅に置けない坊主……ほらよ」

「羨ましいっしょ……ほいこれ、お金置いとくよ」

「へっ……少しおまけしといたから、精精ががんばんな応援しとくぜ」
「お、マジで！ サンキュー！」

既に日は傾き、アビドスは夕闇に包まれかけている。

砂漠に呑まれ、荒廃しかけているアビドスだがそこに暮らす住人がいないわけではない。アビドスの都心にこそ住人は少ないが、郊外に近づくにつれて活気付き街ゆく人々の姿をチラホラと見かけるようになる。

仕事帰りなのか、着崩したスーツにビジネスバックを片手に二足歩行で歩くパグや柴犬などの犬種の姿をした住人。それだけではなくスーツ姿で自立歩行するペッパークんの親戚のようなロボットまでいる。

知り合いに呪骸しゅがいかいの物騒な人型ロボットがいるが、生きていけると言うよりあれはどちらかというと遠隔操作されたラジコンみたいなものなので、キヴォトスで見かける人型ロボットとは別物だ。

行き交う街の人々の様子に、マジで自分は異世界に来たんだな、なんて考えてしまう。

感慨に耽るのもそこそこに、人を待たせているので踵を返して歩き始める。ついでに近くの自販機で飲み物も購入して、待ち人のいるベンチに向かう。

「ホシノちゃんお待たせー!」

「……うん」

「コーラとお茶どっちがいい?」

「うへ……タローくんが買ってきたんだから私はどっちでもいいよ」

「なら俺はコーラにしようかなつと」

ベンチに座る彼女の隣へ腰を下ろす。

飲みきりサイズの小さなペットボトルをホシノへと手渡しして、凧太郎はコーラの缶のタブに指をかけて封を開ける。カシュッと炭酸が抜ける音が耳に心地いい。コーラを口にすると、炭酸がしゅわしゅわつと口の中を刺激した。その刺激に目が覚めた感じがする。

「はいホシノちゃん。あーん!」

「え……!」

「ほらほら遠慮せずに、ささ! はい、あーん!」

「さ、流石にそれはおじさんも恥ずかしいといえますか」

「ほらお口あーん!」

「……あ、あーつ……熱っ、はふはふう」

先手必勝と言わんばかりに有無をいわせず割り箸で挟んだたこ焼きを彼女の口元へと運ぶ。動揺しながらも羞恥から遠慮しようとしたホシノだが、数秒逡巡した後笑顔で押しつけてくる凧太郎の圧に押し負け渋々と口を開く。

口内に放り込まれるたこ焼き。

覚悟決めて頬張ったはいいものの、出店で買ったばかりで出来立てホヤホヤのたこ焼きの熱さに目を見開く。凧太郎が軽くふーふーと

冷ましたとはいえ、それでもまだ熱かったようで熱に苦戦しながらはふはふと咀嚼する。

「どう美味しい？」

「美味しいけど……ちよつと舌が火傷したかも」

「あははっ、ごめんごめん」

ムツと恨めしそうに視線を向けてくるホシノの様子に笑ってしまふ。凜太郎も続くように口にたこ焼きを放り込む。

熱い、確かに熱い。

噛めば外はふわふわと柔らかく、中からはトロツとした中身と少し大きなたこが口の中に流れてくる。ソースも美味しい、味の感想をその手の達人のように伝える事は凜太郎には出来ないのもその程度の感想しか出てこないが、また買おうと思えるくらいには美味しかった。熱々のたこ焼きを飲み込んだ後、そこに炭酸を流し込む。うん、美味い。凜太郎はとりあえずもう一口と、更に放り込んで咀嚼する。

「んぐっ……ん、もう一個食べる？」

「……あーっ」

「どうぞどうぞ。遠慮なくお食べくださいホシノ先輩や」

箸で搦んで差し出せば恥ずかしいそうにしながらも、もきゅもきゅと頬張るホシノの姿に癒される。ずつとこのまま眺めていたいところだが、そもいかない。コーラを傾け一口飲んだ後、本題を切り出すことにした。

「ふう……さてと、俺に聞きたい事あるんじゃないのホシノちゃん」

「——……っ」

「ははっ、そんな顔しないでよ」

凜太郎の言葉に、何処か影のある引き攣った表情を浮かべるホシ

ノ。そんな彼女の姿に凜太郎はつい苦笑いをしてしまう。そんな哀しそうな顔をさせるつもりはなかったのだが、仕方ない。自分と彼女の間でこの話は避けては通れないものだ。

「……黒服の人に、タローくんは会ったの？」

「一緒にお茶する羽目になったよ。おかげで無駄に時間使ったかな」

「——ッ。どう、して？」

「向こうから接触して来た。んで、俺に協力してくれないかって言って来たよ。しかも報酬としてアビドスの借金も半分肩代わりしてくれるとき」

太っ腹だよね、なんて言いながら笑う凜太郎とは対照にホシノの表情は明るくはなかった。何せ自分が恐れていた「最悪の結果」に行き着いてしまいそうになっているのだから。

“なぜ？”

“どうして？”

“その話は受けてしまったのか？”

ホシノの胸中に様々な言葉にならない声が渦巻き、頭の中はパンクしてしまいそうになるくらいに嫌な考えが加速するように過ぎていく。凜太郎の答えを恐れ拒絶する様に、問いただす言葉が出てこない。

そんなホシノの心情を知ってか知らずか、凜太郎は呑気にカラカラと笑う。しかしそんなホシノの心配も徒労に終わる事だった。

「——けどまあ、信用できるかよって断って来たけど！」

「……え」

「だってそうでしょ。いくらなんでも胡散臭さ過ぎるっての、いきなり現れて借金の肩代わりとかさ……だからさ、ホシノちゃんもあんな奴を頼るくらいならもつと俺を頼ってよ」

「つ……おじさんの話も、聞いちゃった？」

「ん〜全っ然！ けどホシノちゃんって意外とわかりやすいから」
「うへ……そっかあ」

凜太郎は黒服からホシノについては何も聞いていない。そもそも、黒服が深く話を切り出す前にあの会合の場を潰してしまったのでそんな話を聞く時間も余裕もなかった。

ただここ最近の彼女の思い悩むような姿と、何より自分が黒服の話題を出した瞬間の驚いた様子から推測してあの謎の人物がホシノへと接触してしいた事はなんとなく理解した。

「ホシノちゃんはアイツの話を聞いてさ、要求を飲むつもりだったんじゃない？」

「それは……」

視線を逸らし言い淀むホシノの姿に、疑惑が確信に変わる。彼女も同じような売り文句で接近されたのだろうと。

苛立ちが募る。

それはホシノに対してなどではなく、立場の弱い人間の善意に潰け込むような薄汚いやり方に対してどうしようもない苛立ちが募るのだ。あの黒服と喫茶店で会った時に、*“軽い警告”程度ではなく“半殺し”*にすべきだったかとすら考えてしまいくらいだ。

「いや〜、悲しいなあ。俺ホシノちゃんの事頼りにしてるのに、ホシノちゃんは俺やみんなの事を信じてくれないのかあ〜」

「……うう」

「よよよー、悲しくて涙が出ててきちやうなア！ 俺がこの話をしなかったら、きつとみんなに黙ってあんな怪しい話に同意してたかもしれないんだからさー」

「う、ううう……」

「あ〜、もう胸が張り裂けちゃいそうだな〜！」

嘘泣きもいい所だ。

もはや相手を煽っていると言ってもいいようなオーバーリアクション。幼児がぐずるようなモノマネをしながらチラチラと視線向けている。そんな凧太郎の反応に気まずそうにするしかホシノには出来ることはない。

凧太郎は彼女の反応に内心で「やっべ。なんか楽しくなってきたよ。ちやっつた！」なんて思いつつも、ほどほどにしておくことにする。あんまりイジメすぎて嫌われるような事はしたくないので。

高専で周りに女の子たちは、みんな気の強い女性ばかりだったので、なんだか新鮮な気分だ。

「まあ、ホシノちゃんを揶揄うのはここまですてと」

「なんか、タローくんって意外と意地悪だよ」

「男の子は可愛い子に意地悪したくなる生き物なんだよ。そういうバカな生き物なの」

教室で凧太郎の話聞いた時、彼に連れられてここまで歩き、核心に迫る発言を切り出された時は足元が崩れ落ちるような激しい眩暈に立ち眩む感覚に襲われた。

だが隣で楽しそうに笑う男の姿に、自分が申し訳なくなっていたのがなんだか馬鹿らしくなってくるような気がした。

引き攣っていた表情もいつの間にか消え、心なしか柔らかな表情を浮かべている。

「あのさ、ホシノちゃん俺さ」

「んー、なに〜？……あ、たこ焼きもらうね」

「どうぞお召し上がりくださいな。あ、俺に食べさせてくれてもいいのよ〜」

「それは恥ずかしいからやだ。んっ、はふはふ、おいひひ」

「あらやだ。うう〜ん、ホシノちゃんのいけずう〜！」

隣で喧しい凜太郎を無視してホシノはたこ焼きに舌鼓を打っている。先程とは固い様子とは打って変わっていつもの調子に戻ってきた彼女の様子に安心しながら、凜太郎は伸びをしてベンチの背もたれに寄りかかる。

視線の先には夕闇に包まれた街並み、そして夜空に浮かぶ星のように光を灯す街灯や窓からもれる灯が地面に太い光の縞を描いている。光に照らされる通行人を静かに眺める。

「ね、ホシノちゃん……君と俺はさ、似てるって勝手に思ってたんだよね」

「私と、タローくんが……え、なんで？」

「だってホシノちゃんは、きつと大事な何かを託されて影を追って歩いて来た……そうでしょ？」

「……………え」

「俺もそうだよ。すごく苦しくてさ、自分の罪すら逃げる言い訳にしようとして、それでも目を背けられなくて吐きそうになりながらずつと歩いてきた」

「タローくん……」

「後悔だらけだよ。色んなモノを取りこぼした……目の前で失うつてのは結構キツイよ。俺はそんな思いホシノちゃんにも、アビドスのみんなにもしてほしくない」

思い出すのは自分の原点。

消してしまいたい忌まわしい記憶。

自分にもつと力があれば結果は変わったのかもしれない。そうすればきつと、大切な友人や初めて好きになった初恋の人も、今もどこかで楽しく元気に暮らしていたのかもしれない。また一緒に笑い合えていたのかもしれない。

渋谷の戦いでもそうだ。

もつと力があれば大勢の人を救えたかもしれない。五条先生を助け出せた、宿儺との戦いでも敗れる事なく、後輩に重荷を背負わせる

事はなかっただろう。

けど、そうはならなかった。

きつと自分は、自分を一生許せない。

今までも、そしてこれから。

いつだって力不足の自分を殺したくなる。

瞼を閉じれば今でも思い出す、遠い昔に抱きかかえたあの子の身体

から熱が、あたたかさが失われていく感触を。

それが凧呪術師太郎の始まり。

「ホシノちゃん、君は——何を託された？」

「——ッ。私は、わた、しは……」

「答えが見つからないのならゆつくりでいいよ。けど、もしも答えがもう見つかつてるなら、俺も君もその想いに恥じない生き方をしようよ」

「……うん」

胸が痛くなる。

吸い込まれるように視線が逸らせなかった。

彼は気づいているのだろうか、ホシノは考える。目の前の少年の横顔は寂しそうに、悲しそうに、今にも泣き出してしまいそうな表情を隠すように静かに微笑んでいた。

そんなどこか痛々しい姿に瞳が揺れる。

少年は自分と似ていると言った。

自分が引き摺る影を見抜き、自分と同じで託された側の人間だと。確かにその通りだ、ホシノの心象には今でも先輩の姿が焼き付いている。

彼女の後を継いでアビドスを、大事な後輩たちを守る為にホシノは先の見えない荒野を必死に歩いてきた。

「タローくん、ありがとうね」

「どういたしまして、礼を言われるような事はしてないけどね」

「それでも、こういう時は感謝するものだよ」

「そう？ それならその感謝は素直に受け取っておくよ」

「そうそう。先輩からの感謝の言葉は素直に受け取っておくべきだよ」

そしてそんな自分の痛みに理解を示す少年の姿に、ホシノも静かに微笑んだ。

「それじゃ、そろそろ帰ろうかホシノちゃん」

「そういえば、もう真っ暗だね。うへへ、なんだか真面目な話してたらおじさん疲れちゃった」

「俺も。さつさと帰って寝たいです……あ、暗いし送ってくよ」

「んー、ならお言葉に甘えようかなあ」

こうやって面と向かい合い、真面目な話をするのは慣れないものだ。ましてや、相手に道筋を示唆するなんて凧太郎は自分のガラじゃないと思っている。

欠伸を溢しながら帰路につく。

ひとまずは安心してもいいだろう。思い悩み話を真剣に聞いてくれたホシノの姿に、彼女が間違った選択をしないだろうと凧太郎は確信した。自分と同じような思いは優しい彼女にはしてほしくない。

「——あ、明日ちゃんとシロコちゃんたちにも説明しなきゃダメだぜ」

「……うえ!?!」

「なんで驚いてるのさ。みんな心配してたんだから、当然でしょ」

「うへ、シロコちゃん怒ってたからなー。はあ、大事な後輩に怒られなきゃいけないなんて……おじさん気が滅入っちゃうよお！」

「大丈夫だって、ちゃんとフォローするし。なんなら一緒に謝るよ」

あちらをご覧ください　ワタシの実家です。

a月p日

天気は晴れ。

窓から差し込む日差しがなんとも心地いい。外から聞こえる鳥のさえずりが

……いや、なんかキモいなこれ。

才能あふれ出る知的な文書から始めようと思ったが、なんかキモいからやっぱやめよう。そもそも知的な文書とかさっぱりわからん。

仕切り直し。

とりあえず、ホシノちゃんの件はもう大丈夫だろう。俺の話も真剣に聞いてくれてたみたいだし、次の日には対策委員会のみんなとシャーレの先公にもしっかりと自分の口で説明していた。

怪しい大人との取引。秘密裏に前からスカウトを受けていた事。退学を交換条件に借金の肩代わりしてくれるという話を受けようとしていた事や、みんなにアビドスを託してこっそり居なくなろうとしていた事など。

ポツポツとゆっくり、腹の底から出た彼女の本音を語ってくれた。話を聞いた面々の反応も様々だった。

今のいままでそんな話を聞いてこなかったから、すごく驚いていたし、そりやもうすごかった（語彙力）。シロコちゃん、セリカちゃん、ノノミちゃん、アヤネちゃん、対策委員会のみんなはホシノちゃんに對してどうしてもっと頼ってくれないのか、なんでもかんでも抱え込まないでと全員で怒って、悲しんで途中からビービー泣いていた気がする。

因みに俺とシャーレの先公はそれを後方腕組み彼氏面で眺めてた。衝突し仲が深まるのは良きことかな。

後輩たちに囲まれ、もみくちやにされるホシノちゃんから助けを求めめるような視線を向けられたが、とりあえず笑顔で見捨てておいた。ハハ、しっかりと後輩ちゃんズからお灸を添えられるんだな。

正座させられながら、まるで裏切られたとでも言いたげな顔でこつちを見るホシノちゃんを見下ろすのはちよつと楽しかった。

まあ、ホシノちゃんが俺も秘密裏に動き回って、黒服の人物から接触されてるだの、コソコソ何かやってるだのと暴露してくれたお陰でターゲットがこつちに代わり俺も一緒に正座させられるハメになった。おのれ小鳥遊ホシノオ。

それからなぜか、学校でお泊まり会をする事になった……は？

目を離れた隙にホシノちゃんがこつそりどこかに行ってしまうのではないかと、後輩たちから疑いを掛けられノノミちゃんの提案でお泊まり会が実行される事となったのだ。

疑いを掛けられたホシノちゃんは思い当たる節があり過ぎて気まぐすそうに下手くそな口笛と共に視線を逸らしてたりした。こら目を逸らすんじやありません。

とりあえず夕飯はみんなで鍋パしました。

こういうイベントの時はどうせなら奮発して外でバーベキューとかしたかったんだが、風が吹けば砂埃が飛んでくるようなアビドスで砂まみれになりながら肉を焼いてダメにするのは勿体無いので大人しく室内で食べることにした。

毎度不思議に思うんだが、俺のいた世界やキヴオトスでも食文化があまり変わらないことに驚く。ジューズだったり料理だったり、まあ生活しやすいからありがたいんだが。

キヴオトスだけにしかない珍味とかあれば食ってみたい所存。そういうのに詳しい人たちっているんだろうか？

鍋パは楽しかった。

やつぱり大人数で食卓を囲むのはいいモノだ。高専は寮生活だったし、同級生や後輩たちとも、よく一緒に飯を食いに行ったりもしたもんだ。叶う事ならもう一度行きたい。

因みにT O L O V E なる展開はなかった。残念です。

みんなでパジャマパーティや枕投げなんかを期待していたがそんなモノはなかった。就寝時間になれば男女で別れて先公と別室で寝ることに……ちきしよう。

しかも先公^{あいつ}うるさかった。なにが楽しくて野郎と夜中に恋バナなんてせなアカンののじやい！

目を光らせながらルンルンで「実は男同士の夜通し^{オレ}語り^ルって憧れてたんだよね！」じゃないわボケ。彼女いない歴年齢の恋愛事情を根掘り葉掘り聞き出そうとするんじゃない。

おかげで全然寝れなかった……。

まあそのあと校舎徘徊してる時にシロコちゃんと出会して二人でこっそりお話できたのでよしとするが！

a月m日

カイザー絶許。

この世界は暴力でしか救われない（曇りなき眼）

やはり暴力……!! 暴力は全てを解決する……!!

今日はシャーレの先公とアビドスのみんなで、ゲヘナ風紀委員会とやりあった時に聞いたヒナちゃんの情報確かめに行ってもらったのだが……俺は便利屋とのちよつとした別件で参加できなかった。

いま思えば、一緒に行つて暴れてくれればよかった。後悔時既におすし。

ヒナちゃんの情報によれば、アビドスの捨てられた砂漠でカイザーコーポレーションが何かを企んでいるという。

こそこそとなにをやってるか知らないが、その情報の真偽を確かめる為に出向いてもらったのだ。そして最悪なことに、カイザーコーポレーションは本当に砂漠の辺境で悪巧みしてたみたいなのよね。

現場に赴いたみんなから話を聞けば、そこには馬鹿でかい謎の施設が存在したらしい。ホシノちゃんの話によれば、こんなものは昔はなかったとのこと。

しかもその施設、ただの謎の施設ではなく民間軍事会社の施設らしい。その名もカイザーPMC、わざわざデカイロゴでわかりやすく自己主張してくれてた。

またカイザー。どこに行ってもカイザー、カイザー、なんなんだこ

いつら……。

アヤネちゃん曰く、「ヘルメット団のようなチンピラとはレベルが違います。本当に組織化されたプロの、文字通りの軍隊のようなものです」らしい。

民間軍事会社とか詳しくないし、戦りあつた事ないからプロの軍隊ってのがどれくらい凄いかわからないが、流石に武力や戦力的には渋谷にいた宿儺や特級呪霊程じゃないでしょ。

五条先生？ あれはレベチ……殴られただけでマジで吐くレベル……というか吐いた。(無下限打撃経験済み)

……あれ？ もしかして俺って感覚バグってる？

ま、それは置いておいて。

そのカイザーの施設で対策委員会とカイザーPMCで一悶着あつたらしい。そしてこれまた最悪な事に、その場に居合わせたカイザーPMCの理事を名乗るものが遊戯感覚でカイザーローンに指示してアビドスの借金、その利子を9130万円などという馬鹿げた数字にまで跳ね上げさせやがったのだ。

しかも面白みに欠けるなどほざき、9億円の借金に対する補償金として一週間以内にカイザーローンへ3億円を預託しろと。

……もうカイザー理事暗殺するか。というかカイザー系列の会社も全部物理的に潰すべきだな。今ならホシノちゃんたちに止められようと、この衝動のままやりきれぬ自信がある。というか自信しかない。

とりあえず今日はここまで、明日は作戦会議だ。

「——『カイザー』潰すゾ！」

「あ、あの？ リンタロウ？ ちょっと落ち着いて……」

「ああ？ なんだよ、ノリ悪いな先公。てか落ち着いてるよ、超元気だよ。その上で言ってるんだよ俺は、もうカイザー潰そうぜ！ 任せろって、組織の一つや二つ、潰すなんてわけねえよ！ 寧ろお手のもんだよ!!」

「はあ……お願いシロコ」

「ん、リンタロー落ち着いて……あと机の上に乗っちゃダメ」

「はい。凜太郎落ち着きます……ごめんね大きい声出しちゃって」

「うわ、切り替え早いなこいつ」

「なんか言ったか先公」

「なんも言っていないです」

暴力最高ー！ などと物騒な事を叫び始めていたおバカが一人
なんとか落ち着きを取り戻した男子生徒の姿に呆れながらも安堵の息を吐く。

このままでは本当にカイザーの元へと単騎で乗り込み、暴れ散らかさんばかりの勢いであった凜太郎の姿にシャーレの先生は早くも頭が痛くなりそうだった。

どうにかしてこの暴馬の手綱を握らなければならないが、もはやそこから辺はシロコや他の女性陣たちに任せればいいか、と考えてすらいる。

とりあえず、隣に座るシロコにデレデレと鼻の下を伸ばし始めたバカは無視して教室を見渡す。視線の先にはここアビドスの校舎では見慣れない生徒たちの姿があった。

「えっと、作戦会議って事でいいんだよね先生」

「ちよっと出鼻挫かれたけど、その通りだよ。便利屋のみんなも集まってくれてありがとうね」

「気にしないで……私は個人的にリンに恩があるし、力になれるな

ら嬉しい」

先生の視線の先にはアビドス対策委員会の面々だけではなく、この場に招かれた便利屋68の姿がある。

なぜ彼女たちがこの場にいるのか？

それは前日に便利屋68のメンバーと顔を合わせに行っていた凧太郎が、シロコたちからアビドス砂漠であった一通りの出来事を聞いた時に、何かと頭の回転が早いカヨコへと電話越しに相談したところ、彼女からの申し出で解決の糸口を探す為に協力してくれることとなったのだ。

「あ、皆さん何か飲みますか？」

「あーっ！ 飲む飲む！ けどムツキちゃんはジュースでお願いね眼鏡っ子ちゃん♪」

「わ、私なんかがこの場に来てしまっても良かったんでしょ？ ……なんの力にもなれない役立たずな私が……ふ、ふふふ、役立たずで場所を取るだけの私が……あ、このお煎餅おいしい」

「きゅ、9億……しかも一週間以内に3億円!? くっ、これだけあればもっと立派な事務所も……ってそうじゃないわ！」

「ちよ、狭いってば！ 大人しく座ってなさいよ！」

「うへへ、大人数だね。ここに人が多くいるのってなんだか変な感じかも」

「うふふ、そうですね。あ、アヤネちゃん私もお手伝いしますよー☆」

なんか増える。

凧太郎としてはカヨコのみを声を掛けたつもりだったのだが、なぜかおまけと言わんばかりに便利屋68のメンバーが対策委員会本部に全員集合してしまった。まあ、全員可愛い子ばかりなので結果オーライだと思っている。

「けど、よかったの？ 協力してくれるのはありがたいけど、便利屋にはなんのメリットもないし。報酬だってないんだよ？」

「……さっきも言った通り、リンには助けてもらった恩があるから。それに、社長たちも普段からご飯に連れてってもらったりしてるから、そういう意味では報酬はもうもらってるよ」

「くふふつ……。そうそう！ タロちゃんには美味しいもの食べさせてもらってるから。それにアルちゃんだって自分の会社の新人が力不足を嘆いているのを見て見ぬふりはできないもんね〜！」

「……ふつ。そうよ、いくら見習いのバイトとはいえ便利屋68の名を背負っている以上はその看板に泥を塗るなんて真似は許さないわー！」

「くくツ。さ、流石です！ アル様!!」

「当然よ……け、けど、金銭面的なトラブルはちよつと、寧ろ私が助けて欲しいというか」コソツ

「アル様？」

「なんでもないわ！ 大船に乗ったつもりでいることね！」

アウトローを目指す者として部下の前でカツコ悪い姿は見せられない。一瞬、これってアウトローというよりただの人助けなんじゃと思いかけたが、深くは考えないようにした。

心優しき便利屋68のメンバーたちに先生は思わず感動してしまう。それと同時に心配してしまう、どんなツテで凜太郎あのカと知り合ったのか。大丈夫？ 優しさに漬け込まれてない？

「おうコラ。なんだ人の顔見てその表情は」

「……いや、もしかして人騙すのとかって得意？」

「お前失礼な奴だなマジで。なにがどうなってそんな言葉が出てきた」

「だってリンタロウだし」

「お、喧嘩売ってんのかクソモヤシ」

「ハハ、野生のゴリラに喧嘩を売るなんてそんな」

「はは、殺す」

「はい、そこ喧嘩しない」

こいつマジで俺に遠慮なくなったな。

凜太郎はシャーレの先生に向かって首を掻っ切るようなジェスチャーを送れば、それに対してシャーレの先生も笑顔で同じようなジェスチャーで返した。

バチバチと視線をぶつける二人を見兼ねたホシノが間に割って入る事によつてその場は治つた。

カイザーの前に先生をこいつシメるべきかと凜太郎は本気で悩んだ。

「よっしゃ、カイザー潰すゾ！」

「……リン、多分それ言いたいだけだよね」

「そうだよー！」

因みにまだなんの解決策も出ていない。

眠そうな人 おはようでやんす（再掲）

呪力を練り上げる。

肺の中の空気を空にするように息を吐き、一息で大量の酸素を血中に取り込む事で、血管や筋肉を強化する。

充填。

膂力にものを言わせた豪快な一撃。

なんの抵抗もなく、剛腕が吸い込まれるように突き刺さる。一瞬にしてスクラップへと姿を変えたオートマタから腕を引き抜く。糸の切れた人形のように動かなくなったそれを端へと蹴り飛ばして視界から退ける。

「数だけは一丁前に多いな……」

思わずため息が漏れる。

そして遠くからガチャガチャと、特徴的な駆動音と共に慌ただしく響いてくる足音からこちらに向かって来ている存在を凜太郎は感知する。

「……んぐ。なーんかやりづらい、生物や呪霊と違ってロボットの気配を捉えづらいと言うか。ま、ぶちぶち潰してゴミ掃除しながら慣れていくしかないか」

欠伸が出る。

情報を聞きプロの軍隊とやらが持つ武力がどの程度のもかとして期待していたのだが、拍子抜けというか期待外れもいとこだった。これなら二級程度の呪霊と戯れていたほうがまだ楽しめる。

まあ、だからと言って油断はしない。

呪力で強化もせず生身の状態で頭や喉をぶち抜かれたら普通に死ぬ。流石にそれは勘弁……もう一回死んでるけど。

「——いたぞ！ 対策委員会だ！」

「はっ、雁首揃えて団体客のご登場だ。いらっしやいませ、お帰りはあちらになりますよお客さま」

「無駄な抵抗はするな！」

「そりゃ、こつちのセリフだつての。死にたくなかったら失せろ、逃げる奴をわざわざ追うなんて面倒な真似はしないからな……ま、お前から鉄屑に“死”なんて概念があるのかは知らんが」

「……総員！ 構え！」

「そうかい。そつちがその気なら……遠慮なく粉々にしてやるよ」
「撃てえ！」

視界に映るのは、自身に向けられる銃口の数々。

構えたアサルトライフル、そのトリガーに指が掛かり発射される寸前に動く。予め仕込みは済ませてある、あとは出力を調整すればいい。

銃口が火を噴く。

放たれる弾丸の雨。

全身に浴びせられんばかりの銃撃を前に、ただ静かに凜太郎は片腕を前へと突き出す。

再現するのはかつて戦った事のある人型で頭部には目玉は4つあり、ケタケタと気持ち悪い笑みを浮かべる“宿讎の指”を取り込んだ呪霊が披露した呪力操作。

本音を言えば実際にこれが高度な技術と呼べるものかすらわからないが、当然ながら呪力の制御は一朝一夕にはいかないものだ。それなら、呪力のコントロールの末の高度な技術と呼んでも問題はないのではないだろうか。

銃撃の波に晒される。

息をつく暇も与えんばかりに叩き込まれる銃弾。銃火器から発せられる耳を劈くような銃声、そして鼻につくような火薬と硝煙の香りが辺りに充満する。

やがてマガジンは空になったのか、耳障りなほど響いていた銃声が収まる。銃撃に飲まれた標的の姿を確認しようと煙が晴れるのを待つ事数秒、カイザーPMCは自分の目を疑う光景が存在した。

「じゃじゃーん！ どーよ、その名もなんちゃって無下限バリア！」

「な、なんだ!? 弾が空中で……!?!」

弾丸がなにもない空間に阻まれ、空中で動きを停止させた後 軽い金属を響かせながら地面に転がっている。

「すげーっしょ。ま、実際はただの呪力のバリアなんだけどね！」

並の術師相手ならまだしも、腕っぷしのいい奴なら普通にぶち抜いてくるからあんま使えないけどさ〜」

「くっ！ 構うな撃ち続けろッ！」

「けど、使い勝手は良いわけよ。例えばこいつの範囲を広げれば、呪力をぶつけて文字通り押し潰す事だつて出来る」

「……っ！ 回避——っ」

「遅えよ。警告はしたんだ、なら——仕方ねえよなあ!!」

押し留めていた呪力を解放する。

呪霊や呪力といった“負のエネルギー”を視認する術を持たないオートマタたちは困惑することしかできない。

凜太郎の近くにいたオートマタたちは彼が歩みを進め近付くほどにまるで見えない何かに——呪力による不可視の壁によってギチギチと圧力を加えられ仲間が一人、また一人と不可視の壁と壁面に板挟みとなり派手な爆発と共に潰されていく。

「ほら次」

「く、くそっ！ どうなってる!?!」

距離を取れば良いと判断して、不可視の壁の範囲から抜け出した

オートマタが狂った様に乱射するが、意味はない。

軽いステップと共に壁を蹴り付け、側転するかののように頭を下にして空中に身を躍らせ、弾丸の雨の僅かな隙間を掻い潜り接近する。

そして機械仕掛けの顔面を蹴り上げ、そしてその足をそのまま踵落としとして叩き込む。

蹴りの威力のあまり、もげた頭部が地面に転がる。

「な、なんだ……なんなんだ貴様はッ!？」

「おいおい、つまんねえ質問すんなよ。とつくにござんじなんだろう!? オレは地球から貴様を倒すためにやってきたサイヤ……じやなかった、あつぶね遊んでる暇はないんだった」

「くそ、ふざけるな!」

「ああ? ふざけてんのはカイザーそつちだろ。んじやご苦労さん、粗大ゴミの日には綺麗に並べておいてやるよ」

腰を落として、上段から叩き落とすように拳を打ちつける。

拳撃は胸部を容易く貫通して、コンクリートブロックもろともに砕き潰す。

絶命。

機能を停止させた鉄の塊を冷めた目で見下ろしながら、ズルリと拳を引き抜く。このキヴォトスという世界において存在する、オートマタのような人型のロボットに命や魂という概念が存在し当て嵌まるモノなのか、わからない。

だが、もし仮に当て嵌まったとしても、凧太郎の胸の内に罪悪という感情はきつと存在しないだろう。何せ今まで呪霊や人間を相手にしてどれだけその手を汚してきたかなど、わざわざ数えてなんていない。今更それが増えたところなんだというのだ。

どうの昔に自分は呪術師ひとでなしなのだから。

「……ふう」

『リントロー、聞こえる?』

「お！ シロコちゃん。感度良好、バッチグーよ」

装着された耳掛け型のイヤホンから、ここ数週間で聴き慣れた少女の声が聞こえてくる。スピーカー越しとは言え聞こえてくる声音がなんとも心地いい。翳る自分の心を洗い流してくれるような気分になる。

『ん、よかった。そっちの様子はどう？』

『モーマンタイ無問題。こつちにいるカイザーの奴らはあらかた片付けたよ。そつちは大丈夫ぞ？』

『こつちも大丈夫。少し数は多いけど、私たちだけでなんとかなる』
『了解。ならこつちもカヨコちゃんのプラン作戦通り、ホシノちゃんの救出を急ぐとするよ』

『あー、あー、マイクテストマイクテスト！ リンタロウ聞こえてる？？』

『うるさつ?! おま、もうちよい音量下げろバカ！ 鼓膜が死ぬつ！』

これから会話に花を咲かせようというタイミングで割って入ってきた空気の読めない男の声が聞けてきた。しかも音量調整を明らかに間違えているであろう爆音。

凜太郎は思わず反射でイヤホンをぶっ壊すところだった。

スマホで曲を聴いている時に間違えて音量をMAXにしてしまった時くらいに音がデカい。ついイヤホンを外してマイクに向かって叫ぶ、あとちよつとで鼓膜がオシヤカになるところだった。

『あゝ、ごめん。ってそれよりも、報告！ いまリンタロウがいる位置から8時の方向。接近してくる部隊がある！ 恐らくカイザーの増援！』

『マジ？……ほんと数だけはいいな。了解、速攻で潰してから行く』
『……やり過ぎ注意だからね？』

「あー、なんも聞こえない。なんか電波悪くなってきたわ、んじや通信終了〜」

『いや本当に加減してね!?!』

なにか言っていたが無視して通話を終了する。

加減をしろと言われてたところで、充分に加減してやっているんだからあーだこーだと文句を言われる筋合いはない。寧ろ邪魔するとか、脆すぎるだとか、こつちが文句を言っつてやりたいくらいだ。

思わず本日二度目のため息が漏れる。

——瞬間、不意打ち対策の保険として纏っていた呪力の膜が反応する。それは御三家に伝わる対領域秘伝術の触れたものを自動で呪力で弾く呪力操作のプログラム。

「簡易領域」のように自らは領域を展開せず、必中の術式が発動し触れた瞬間にカウンターで呪力を解放し身を守ることができるという優れもの。

その名も秘伝『落花の情』

と言っても本場の『落花の情』と比べればもどきもいいところだ。何せ見よう見まねで習得し凜太郎が自己流でアレンジを加えている代物だ。

それ故にどちらかというと、性能でいえばシン・陰流 簡易領域のフルオートの迎撃に近い。

『落花の情』によって呪力の膜に触れた物体を呪力が自動で迎撃する。呪力の膜に触れた物体、およそ手のひらサイズ鋭利な弾丸は爆ぜるように砕けた。

「っ……。（頭部狙いの狙撃か。ちよつと危なかったな、氣い抜き過ぎた）」

「対策委員会の一人を発見した」

「うげ〜。ガキ一人にこんな大人数連れてくるなんて、ちよつと大気ないんじやない?」

「ふっ、そうか? お前を相手にするなら、これくらいは必要だと思

うが」

気づけば包囲されている。

いや、気づけばというのは間違いか。忍び寄る気配に気づきながらも、あえて包囲されたというべきか。向こうからこつちにやつて来てくれるなら、わざわざ出向く必要もなく手間も省けるというものだ。周囲にはカイザーPMCのオートマタ、そしてカイザーPMCに傭兵として雇われているであろうどこかの学生だった子供。

聞いた話によれば、退学した生徒や不良の生徒たちを集めて、企業が私設兵として雇っているとかなんとか。

噂話程度だったらしいが、どうにもマジらしい。

凜太郎は顔を顰めて気怠げに息を吐いた。

「あんた、アビドス対策委員会の津上 リンタロウだろ？」

「あれ？ 俺ってもしかして有名人？ いや、困っちゃうなー！」

この部隊のリーダー格ともいえるのか。

こちらを見下ろすように高台に立ち、まるで友人に挨拶でもするみたいに気さくに話しかけてくるカイザーPMCの雇われているであろう兵士。全身をゴテゴテとした鎧のようなもので覆ったロボット。デカイ。

熊のように太く、身長も自分が見上げるくらいにはありそうだ。壁に張り付いたり、隠れたりせず、堂々と仁王立ちして構えている。その立ち姿は貫禄すら感じるくらいだ。

なんだこいつ、馴れ馴れしいな。

なんて考えながらもとりあえず言葉を返す。

「ああ。あんたの噂をいくつか聞いた事がある」

「へえ……それってどんなやつ？ イケメンがいる的な？」

「いや。なんでも、アビドス高校にはヘルメット団や賞金首を相手に全裸で襲い掛かってくるヤバイ男子生徒がいるらしいじゃないか」

「ちよつと待て」

どうしても聞き逃せない一言があった。
え、なにその噂？

いやまあ、確かにキヴォトスに来たばかりの頃に凜太郎はフルチン状態でヘルメット団を相手に戦ったことはあるがその一回きりだ。だというのになぜそんな噂が広まっているのか。

話だけを聞けば、まるで露出狂の変態趣味を持ったヤバい奴が見境なく相手を襲っているようにも聞こえてしまう。どう考えたって悪意のある噂の広め方だ。

え、その噂はどこまで広まっているわけ？

場合によつては噂の出所をしらみつぶしに突き止めた際には、実力行使も厭わないつもりである凜太郎。え、マジでなんなんだその噂は。

「さて、無駄なお喋りはこれくらいにして」

「全然無駄じゃないんだが？　ちよ、噂の出所はどこなんだよマジでさ」

「強いんだって？　相手してくれよ」

「おうこら、頼むから話聞け？」

もうこの際、戦闘とかどうでも良く、その場に座り込んで頭を抱えたくなるくらいだった。いったい全体、なにがどうなつてそんな噂が広められたのか、アビドス在住の全裸の男子生徒とか不名誉にもほどがある。

——因みにこの数ヶ月後、トリニティ総合学園に在籍しているネジの外れた好色家の女子生徒への誤解を必死に解く事となるの凜太郎はまだ知らない。

意識を切り替える。

とんでもない話を聞かされて気が緩んでしまったが、これ以上この場で時間を浪費することはできない。凜太郎は呪力を練り上げなが

ら眼前の敵を睨みつける。

「はあ、くそ……んじゃルールを決めよう」

「ルール？」

「ついさつき先公から釘を刺されたばつかなんだ。やり過ぎて怒られたくないからな……そうだな、泣いて謝れば殺さないでやるよ。これがルールね」

「……調子に乗るなよクソガキがっ」

「うつせーえな。さつさとかかって来い、たつた今お前のせいで機嫌が悪くなったんだ。八つ当たりさせてもらうぞ」

「えっと……聞き間違いじゃなければホシノちゃんを囮に使うって言った？」

「うん。多分それが一番手っ取り早い」

「そっか。聞き間違いじゃなかったか」

「ちよ、ちよつと待ってください！ ホシノ先輩を囮にして、一体どういうことですか!?!」

「大丈夫。ちゃんと説明するから落ち着いて」

時刻は約半日ほど前まで遡る事となる。

場所はアビドス高校の対策委員会本部、便利屋68のメンバーを含め凛太郎たちはカイザーの思惑に対して作戦会議を行っていた。

対策委員会の面々がアビドス砂漠の片隅でカイザーPMCの理事と一悶着あった後、PMC理事の嫌がらせによって9130万円という馬鹿げた数字にまで引き上がった利子。

そして9億円の借金に対する補償金として一週間以内にカイザーローンへ3億円を預託する事なった詰みと言つていい現状に、打開する為の策が出ないでいたところに突然、カヨコが小さく呟いたのだ。そんな彼女の発言に理解できないと身を乗り出そうとしたアヤネを凜太郎はドードーと落ち着かせる。

「そんで、ホシノちゃんを囿につて話……詳しく聞いてもいい？」

「うん。けどカイザーの目的がなんなのか、まずはそこを改めて理解しなきゃいけない」

「カイザーの目的？ あいつらアビドスで宝探ししてるんじゃないの。そうなるとカイザーつて意外とロマンチスト？」

どんな時でも童心は忘れるべきじゃないよねー、なんて場違いな発言。

記憶を放り起こせば、カイザーがアビドスの土地を買った理由はアビドスのどこかに埋められているという“宝物”を探しているとか何とか、そんなでまかせで眉唾染みた話を聞かされた凜太郎は皆から耳にしていた。

カヨコの言う、カイザーの目的とやらに首を傾げるばかりだ。

「私もその宝探しとやらがどこまで本当なのかはわからないけど、それだけじゃない事は確かだと思うよ」

「まあ、そーかもね」

「情報を共有してもらつた中で出てきた“スカウト”の話や、カイザーPMCの理事……それとリンや小鳥遊ホシノに取引を持ち掛けた『大人』の存在。どれも一筋縄じゃいかない話だけど」

「ふむふむ」

「もしかしたら、カイザーを潰すつていうリンの目的も、アビドス対策委員会の抱える借金……というよりも無理に挙げられた利子に關してもどうにか出来るかもしれない」

深く考え込んだ様子で話を切り出した彼女の言葉に全員が驚いた。

まず第一に、ホシノに「スカウト」の話を持ち掛けた『大人』とカイザーは別の企業また組織である可能性が高いとのこと。そもそもカイザーからの9億という借金をカイザーの人間がその半分を肩代わりするというのもチャンチャラおかしい話だ。

借金の肩代わりが仮に本当だとするならばアビドスとカイザー、そしてそこに加わった関係のない第三者と考えた方が自然だ。

そして第二に、ホシノが彼らの「スカウト」の話を呑んで自主退学した場合に起こりうる事態の話。

現状このアビドス高校には生徒会が存在していないともいえるが、生徒会が存在した頃より在籍し、所属していた最後の生徒会メンバーとも言えるホシノが学校から去ってしまえばアビドス生徒会は完全に存在しないも同然となる。

学校の資産の議決権などは、その学校の生徒会にある。

だが公的な部活も、委員会も、生徒会も、自治区すらもない。

そんなアビドスは学園都市の学校として自立・存続が不可能だと判断され土地の所有者であるカイザーコーポレーションにこのアビドス高校までもが吸収されてしまうのがオチだ。

カヨコの口から語られる、充分にあり得る可能性の話に口を開けて驚くしかない。

「なるほどね。大体わかった、説得力もある……けどそれがどうして囿の話に繋がるの?」

「要は、そこを利用する」

「とどう?」

「さっき言ったように小鳥遊ホシノがスカウトに応じたとして、学校から生徒会が消えれば実質的にここもカイザーの自治区になる。そうなれば退去命令が対策委員会にも出されるはず、現に街の住人たちにも退去通知が出る」

その時、カイザーはきつと実力行使に出る筈。

なにせ生徒会のメンバーも消えてアビドスの自治区全てがカイ

ザーのモノとなれば私有地に入り込んだ侵入者や居座り続ける余所者を追い出す為という大義名分だつてあるのだから。

だからそこを利用しようと、カヨコは言う。

簡単にいうところつちもホシノの救出という大義名分で凧太郎に存分に暴れて来いと言っているのだ。これには脳筋思考の凧太郎もニツコリの作戦である。

「オツケー。カづくつてのはわかりやすく大歓迎だ。やはり暴力が全てを解決する……！」

「……カヨコさんの作戦の概要は大体理解出来ました。けど、借金の利子の方はどうやって？」

「そつちに関しては……ごめん。正直に言つて確実とは言えないかもしれない」

「そんなんっ!？」

「けど、カイザーローンのブラックマーケットでの不法な金融取引の証拠をアビドスが持つてる」

そういえば、銀行強盗した時にゲットしてたな。

危うく記憶の彼方へと葬り去られるところだった。みんながカヨコの話に聞き入る中、凧太郎は神妙な顔をしながら証拠とやらの存在を今しがた思い出していた。

「それなら連邦生徒会の調査がブラックマーケットに入る筈なんだけど……問題は今の連邦生徒会が動けるかどうか。一応私のゲヘナの風紀委員会の知り合いに掛け合ってみるけど」

「それについてなら、考えがある。協力してくれそうな子にもアテがあるよ」

「先生が？」

「……なるほど。そっか、シャーレなら」

そんなこんなで救出作戦の決行が決まった。

囚われのお姫様役となったホシノも、自分に出来ることがあるのならばと作戦の概要に快諾してくれた。

「……決まった後で言うのもなんだけど、良かったのホシノちゃん」「んー、何が？」

「あの黒服とやらのところに行つて、囚われのお姫様役をこなすの」「うーん、囚われのお姫様っていうのはガラじゃないかもだけど。まあ大丈夫でしょ。黒服の人に一杯食わせるっていうのも面白そうだし……それに、タローくんを頼りにさせてもらうからね」

「！……了解。頑張っちゃうよ、カイザーの私有地とか更地にするレベルで」

「そ、それはちよつと頑張りすぎかなあ」

疾走する。

視界から得られる情報、景色の全てを置き去りにするような速度で加速する。踏みしめた地面が脚力によって罅が入る。

術式は既に使用していた。

凜太郎は基本的に倍率^{ギア}を4段階に分けて術式を使用している。術式「呪力強化^ト」は一時的に呪力総量と出力を増幅させる事ができる、少ない呪力消費で膨大なリターンを得る事ができたとしても上昇した倍率に応じて消耗も激しくなる。

よつて現在は最もコストパフォーマンスの良い1段階目のギアを主軸にしていた。

「アヤネちゃん。後どんぐらい？」

『この速度のまま街を抜けてアビドス砂漠の方へと出てもらえれば、ホシノ先輩を乗せた車が向かった場所へと10分も掛からずに到着する筈です!』

「了解! ちよつとしつこいかもしれないけど、そつちは大丈夫なんだよね?」

『はい。問題ありません! カヨコさんの言っていた通り、ホシノ先輩が相手の取引に応じたと思われるタイミングで襲撃してきたカイザーPMCの撃退も完了しています!』

「ひゅー! 流石だね対策委員会ツ! んじゃこつちも、街で暴れる鉄屑を処理しながら住人の救助とホシノちゃんのお出迎えでいいんだよね?」

『お願いします! 私たちも相手を無力化しつつ便利屋68のみなさんとは別ルートでそちらに向かっていますが、リントアロウさんは一足先にホシノ先輩の救出を!』

「んじゃ、またあとで!」

通信を切り上げ、市街地通路を走り抜ける。

既にカイザーPMCが街で暴れているのか、周辺の建物からは黒煙が上がりどこもかしこも火の手が上がっているように見える。

「うわあああああつ?!」

「早くつ、早く逃げろツ!」

「……この自治区には、既に退去命令が下っている!」

アビドス砂漠への入り口、市街地と砂漠への境界線が目と鼻の先まで来た。時間が惜しい。更に速度を上げようとした瞬間、凜太郎の耳に悲鳴が聞こえてきた。

踵を返す。

向かう先はカイザーPMCから逃げ惑っている動物の姿をした住民たちの元。一息で踏み込む。

勢いを殺さず、そのまま最高速度でブチ抜く。

片手に呪力を集中させて、手首から先の全体を包み込みように30cm程度の長さを持つ呪力の刃を作りあげる。呪力出力にモノを言わせれば、鋼鉄を切り裂くことなんて造作もない。

「――邪魔だッ」

まずは一体、すれ違いざまに首を落とす。

続けざまにその隣にいたカイザーPMCのオートマタを胴体から真っ二つにして泣き別れにする。凜太郎の接近に気づいた相手が銃口を向けて構えるが引き金を引く前に、ライフルの先端が切り落とされる。

膝に蹴りを叩き込み、体勢を崩して下がってきた頭を切り離す。ロボットの残り数は三体。そちらも抵抗する暇も与えずに、カイザーPMCの部隊を全滅させる。

時間で言えば約40秒。

カイザーPMCの兵士を瞬殺する。

「……へ？ あ、あれ？」

「んじや、先急いでるからもう行くぞ」

「ま、待ってください！ せめて助けてくれたお礼を……！」

「それならアビドス対策委員会の子たちに頼むよ、俺はそういうの求めてないから。それと怪我したくなきゃ隠れてな」

「え、ま、待ってください……早っ!？」

安全なところまで避難誘導をするべきなのだろうが、生憎とこれ以上時間を無駄にすることはできない。

ここに来るまでの道中、遭遇したカイザーPMCの兵士は潰してきた事と、対策委員会のメンバーも向かって来ているので彼女たちがどうにかしてくれるだろうと、住民をその場に残して凜太郎は再び走り出す。

一瞬の出来事でなにが起こったのかわからなかったが、状況から判

断して助けてくれたであろう人物へ礼を伝えようとするも、既にそこには凜太郎の姿はなく呆然と佇む犬の姿をした住民だけが残された。

「……相変わらずひでえ場所だな」

それから更に走り続けること数分。

市街地を抜ける。かつては賑わっていたであろう街並み、今では砂嵐に襲われ砂漠に埋れてしまったゴーストタウンに到着した。

ここに来る途中で、恐らくホシノを乗せて来たであろう車の走行した痕跡を見つけて追いかけたが、それも既に砂塵に隠されて見失ってしまった。

アヤネやシャーレの先生にナビゲートしてもらおうにも、通信状況が不安定なのか応答はなくイヤホンからはノイズのみが聞こえる。

「人の気配もない……こんな事ならホシノちゃんに俺の残骸を残せるようなモノでも持たせておくべきだったか？」

「——敵発見！」

「兵力を集結させる！ これ以上好き勝手はさせるな！」

「チツ、またお前らか……（けどこいつらがここにいてるって事は、場所合ってるってことか）」

本日何度目の邂逅か。

いい加減、カイザーPMCのロボットたちの量産機のような姿を視界に映すのも飽き飽きしてきた。とりあえず手っ取り早く片付けてこちら周辺を探索してホシノを見つけ出そう。

凜太郎が術式のギアを上げようとした瞬間。

「なんだ……ッ！」

地面が揺れた。

カイザーの兵士たちによる攻撃か、凜太郎は警戒するがどうにもそ

うではないらしい。向こうにとつても予期せぬ事態なのか、突然の地震に驚き慌てふためいていた。

立っていることも難しくなるほどに激しさを増し揺れ動く。

地震とは今も動き続けている地球の表面、地下で起きる岩盤の「ずれ」により発生する現象。

しかしいま味わっている激しい揺れは地震というよりは、まるで自分たちの足元から何かが高い上がって来ているような、そんな感覚に襲われる。

「……い・なにか来るッ」

地面が捲れ上がる。

いちはやく察した凜太郎は全力でその場を飛び退いたが、対応に遅れたカイザーPMCの兵士たちはそのまま砂の波に襲われて地面に飲み込まれていく。

「……マジ？ キヴオトスってなんでもありか？」

思わず渴いた笑いが込み上げて来た。

凜太郎は見上げる。

自分を見下ろす巨大な双眸。頭部に存在するヘイロー。まるで特撮の怪獣映画の中から飛び出して来たかのような、圧倒的な存在感を放つ巨大なその図体。

「■■■■■■!!!」

ビナー降臨。

オレとしたことが花束を忘れた

「——随分と落ち着いていますね」

「ん、そうかな？ 表面上取り繕ってるだけで、もしかしたらそうじゃないかもしれないよ」

「ククツ……そう怖い顔で睨まないでください」

「ま、悪い大人に騙されるのは慣れっこだからさ……不本意だけどね」

用途の不明なパイプや電線、見るからに異様で気味の悪い空間。

砂漠化が進行し、今は砂の下へとその大半が埋もれてしまい捨て去られたアビドスの廃墟。そこにはかつてキヴオトスで一番大きく、そして強大だった学校も砂漠に飲まれた。

今ではその残骸もゲマトリアの依頼の元、カイザーPMCによって地下に隠された実験室と化していた。

ホシノはいま、黒服と共にそこにいた。

まるで映画の中で出てくるような、悪巧みに勤しんでいる悪の組織が利用していた舞台セットみたいだ。なんてホシノはカイザーPMCの兵士に連行され薄暗い空間を歩き見渡しながら、呑気にもそんな感想を抱いていた。

「……聞いてもいいかな？」

「ええ、どうぞ」

「どうして、アビドスを……街を攻撃するんだ」

そして、カイザーに連れて来られるまま辿り着いた場所で答え合わせをするように疑問を投げかけた。

ホシノは見ていた。

カイザーの兵士に乗せられた車の小さな窓から、隊列を組みまるで

自分たちが持つ武力を見せびらかすように進行するカイザーたちを。そして奴らが、アビドスの市民を襲い、アビドスを攻撃して、火と煙を立ち昇らせ大切な街並が傷つけられる様を見せつけられていた。覚悟はしていた。

カヨコの話聞いて、作戦を決行するにあたって、こうなる可能性があることは十分に理解していた。理解している、つもりだった。まざまざと見せつけられる光景に、拳を強く握った。

怒りがあつた。

それはアビドスを虐げるカイザーや黒服、そしてそんな悪い大人たちをあてにして、後輩も学校も全てを失うかもしれない無知な馬鹿な自分に対しての怒りがあつた。

「どうしてと言われましても……何もおかしいことなどありませんよ、ホシノさん」

「……………ツッ！」

「あの借金の大半はきちんと返済させていただきますとも。それが、私たちの間に交わされた約束ですから」

——それはそれとして、もうあなたもお気づきになっているのでは？

黒服のその言葉を聞いた瞬間、ホシノの中で抑え込めないほどの怒りが湧き上がった。手足が拘束されておらず、自由の身で武器が手元にあれば迷わず襲いかかっていただろうと自負するくらいの怒りがあつた。

悪びれた様子もなく、なんてことないように振る舞う黒服の姿に今すぐにでも銃口を突きつけてやりたいくらいだった。

「ツ……………やっぱり、最初からそういうつもりだったのか」

「あなたが退学してしまい、残念ながらアビドス高等学校にはこれ以上、公的な生徒会メンバーが残っていないようですね。それでは学

校は成り立たないでしょう」

黒服は語る。

まるで聞き分けにない子供に、淡々と言い聞かせるように。

なぜ、ゲマトリアがカイザーなどとくだらない企業の詐欺まがいの行為を支援を続けていたのか。アビドス自治区の土地を奪ったところで、ブラックマーケットのような無法地帯が増えるだけのことだ。

そんな場所はこのキヴオトスにいくらでもある。

しかし、もしも生徒ではなく、企業を主体とした新たな学園がキヴオトスに誕生したら？

アビドスという地に現れた新たな存在が、学園都市キヴオトスにどんな影響を及ぼすのか。その結果に、興味を惹かれると黒服は好奇心を隠そうとせずに語った。

しかし、それは単なる余興に過ぎないと続けて語る。

「ホシノさん、私たちの目的は最初からあなたでした」

「……………」

「あなたに契約書へサインをしていただき、そしてあなたに関する全ての権利を頂くこと……目的の為に利害関係が一致したので、あの企業に協力していた。それだけのことです」

ホシノは肩を震わせ俯いていた。

まるで自分の考えの至らなさから招いてしまった事態を悔いるように。そんなホシノの姿が、黒服には無知でいたいげなひとりの子供として見えていた。

「何か勘違いをされていたようですね。誤解を招いたのなら謝罪しましょう……しかし私は最初から『私共の企業』がカイザーだとは、一言も言っていないはずです」

「……………」

「欲を言えば、彼との交渉もうまくことを運びたかったのですが、ホ

シノさんというカードがあればきつと協力してくれるでしょう……！」

黒服が言葉が続けようとした瞬間、実験室が揺れた。

そして黒服が持つ通信機器から発せられる電子音がこの薄暗い不気味な空間に鳴り響いた。黒服はまるで邪魔が入ったと言わんばかりに、重い息を吐いた。

「……どうかなさいましたか？」

『どうかなきいましたかだど?! これはいったいどういうことだ!』

「……おや、なんのことですか？」

『攻撃を受けている！ なぜ我々の計画がアビドスの奴らにバレている!!?!』

「……は？」

通信の相手は協力関係にあつたカイザーPMCの理事。通話に出るなり、突然スピーカー越しから発せられる怒号とも取れる叫びに黒服は理解が及ばず、一瞬思考を停止させてしまった。

そして次の瞬間——肩を震わせ俯いてホシノが、もはや堪えきれないと言わんばかりに喉を鳴らして笑い出した。

「ぶっ……くくっ、あははっ……うへー、もう我慢できない。あー、タローくんつてばやり過ぎてないといいけど」

「……どういことですか？」

「ごめんね黒服の人……確かにさっき私は契約書へサインしたけど、そもそも契約を結ぶ為の“前提条件”を私は満たしてないんだよね」

「……まさか、ホシノさん」

「だから契約自体もきつと無効になるんじゃないかな……何か勘違いをしてるみたいだから言っておくけどさ……私は“退学届”を出

してからここへ来たなんて、一言も言っていないよ」

してやったりと言わんばかりに、ホシノは口元に弧を描いて笑っていた。そんな彼女の表情に、黒服は自分やカイザーいま置かれている状況に気がついた。

裏をかかれた。

このような事態を陥ることを黒服は予想できなかったわけでもなかった。しかし彼女に限ってそれはないと考えていた。なぜなら小鳥遊ホシノは、眼前にいる子供は後輩や仲間を巻き込んでそんな一か八かの大胆な賭けに出れるだけの、胆力はないと考えていたからだ。仲間を巻き込むくらいなら、自分ひとりで抱え込んで解決しようとする類の人間だと。

「……クククツ、なるほど。どうやら私は、あなたのことを軽んじていたようですねホシノさん」

「だろうね……知ってた？　子供は大人の予想よりも、ずっと早く成長するんだよ」

「どうやらそのようですね……彼やシャーレの先生があなたにそこまでの影響を与えたのですか？」

「んー、それもあるけど……みんなに背中を押されたからね。後輩の見てる前じゃ、先輩はカッコつけたくなるんだよ」

そういつてホシノは微笑むように笑みを深めた。

そんな彼女の様子に黒服は、やれやれと言わんばかりの身振りと共にため息を吐いた。憤りはない、失望もない、あるとすれば自分の予想を越え見事に大人を出し抜いた子供への感嘆といったところだろう。

——地面が激しく揺れた。

今度は実験室全体が激しく揺さぶられるように。

それと同時に、黒服が持つ通信機からアラートののような音が響いた。

今度は誰からの通信だ、ホシノは怪訝な表情で片手をポケットに突っ込んだまま通信機を操作する黒服を見る。異形の容姿ゆえに、表情の変化はわかりずらいが彼の纏う雰囲気から何やら驚いていることを感じ取った。

「……どうやら、予期せぬ来客も現れたようですね」

「来客……なんのこと？」

「本来なら、あまり望ましい顕現とは言えませんが……面白いものが見られそうですよホシノさん」

スツ、と差し向けられた通信機の画面に目を向ける。

「……っ！ タローくん」

外の状況を映し出した小さな液晶。

その画面の向こうでは全身を装甲で包んだような巨大な怪物と戦う凜太郎の姿があった。

「ちよ、なによあのデカいの!？」

『わ、わかりません……こちらで確認できる情報には何も……!』

「うわーお。デカいなあれ……キヴォトスの生態系だとあれくらいって普通なの？」

「……いや、あんなに大きな動物はいないと思う」

全身を装甲で包んだ巨大な怪物——『違いを痛感する静観の理解者』たるビナーの姿はアビドス砂漠を指す対策委員会の目にも写っ

ていた。

カヨコが計画したホシノを囿にする作戦。

アビドス対策委員会の面々は予想されていた通り、市街地で見せしめのように暴れ出したカイザーPMCの兵士たちを撃退しながら市民の救助を行い、そしてホシノを救出するべく先行している凜太郎の後を追って市街地をかけていた。

それから突然、アビドス全体を揺らすような激しい地震に襲われた。

そしてタイミングを示し合わせたように現れたビナーに困惑を隠せずにいた。デカい、それが皆胸の内で共通で抱いた感想。全員が困惑して、眼前の怪物に対して恐怖に近い感情を抱く中、シャーレの先生は若干目を輝かせながらビナーを見ていた。

合体ロボットや怪獣なんかの特撮系は例え大人になって好きなものである。

『……ッ！ 気をつけてください！ 何かがこちらに飛んできて

……あれ、これって』

「ええ!! 飛んでくるって何が!!? あれが攻撃してくるってこと

!?’

「……全員気をつけて! こっちに何か落ちてくる!’」

アヤネの報告に警戒のレベルを引き上げる。

シャーレの先生の目にも、ビナーにいる方角から放物線を描きながら落ちてくる物体が見えていた。全員が身構える。

弧を描いて落ちてきたそれはビルの壁へとぶつかり、勢いよく突き破った後、僅かに落下地点を変えながら落下して最終的に道路脇に駐車してあった無人の自動車の上へと落ちてきた。

「つゝー……あんのクソトカゲ、やりやがったな。タダじゃおかねえ、ぜってえ蒲焼にしてやる」

「……あ、あれ? もしかして、リントロウくん……ですか?’」

「ん？ おお！ ノノミちゃんこんちやーす！」

勢い良く落下してきたのは凜太郎であった。

あまりにも突然すぎる上に、派手な登場をした彼に皆がポカンとするなか、凜太郎は叩きつけられた衝撃でルーフやボンネットがひしゃげフロントガラスなどが粉碎された車の上で寝転んだまま手を振っている。

「やつほー。そつちは順調そう？」

「いや順調そうって、どういう状況なの!? なんであんたが吹っ飛んでくるのよ！ というかあのデカいのなに!？」

「いやー、わからんちん。いきなり出てきたと思ったら攻撃してきやがった、戯れてくるってレベルじゃないよマジで」

意外と痛かった、なんて眩きながら起き上がる。

パラパラと粉々になったガラスの破片を払い落としながら、車の上から降りる。落ちてきた衝撃でピー、ピー、と鳴り響いている警告音が煩わしかったので、ついでと言わんばりに蹴りを入れて音を止めた。

その場で何事もなかったかのように、グツと伸びをして身体の節々の調子確かめるように動かす凜太郎の姿に呆然とする。

「……えつと、リントローー 頭から血が出てるけど」

「これくらいなら大丈夫だつて。多分骨もイッてないし、内臓にまだダメージが響いてるわけでもないっばいから」

「前々から思ってたけど、君ちよつと頑丈過ぎない？」

「んゝ、まあ多少はな。というかお前が貧弱過ぎるだけだつて、筋トレしろ」

「いや筋トレとかでどうにかなるレベルじゃないから!？」

ギョツとした顔で、怪物を見るかのような目を向けてくるシロコと

シャーレの先生。とりあえず凜太郎はいい笑顔でサムズアップを送っておく。

内心で術式のギアを上げておかなかつたらヤバかったなどと、ビナーが身を捻って攻撃してきた瞬間に咄嗟でギアを上げて防御した自分の判断を褒める。生身で受けてたらミンチは確実だっただろう。

肉体にダメージが入っていない事を確認し終えた凜太郎が息を吐く。

「んじゃ、ちよつと行ってくるわ!」

「……はあ!? い、行くって……まさか」

「そのまさかよ。ちよつくらあのクソトカゲを一狩りしてくるから、作戦はこのまま続行で!」

『ちよ、待ってください! あの機械が何かわからない以上、単独で動くより固まって慎重に動いたほうがっ』

「大丈夫。俺 最強だから……とまでは言わないけど結構 強いから。あれくらいなら、一人でどうにかできるって……後あのクソトカゲ俺のこと狙ってるっばいし」

「え、なんで?」

「さあ? 俺って動物にもモテるんじやない?」

「うわ、そのドヤ顔はキツイ」

「しばくぞ」

心配そうにこちらを見るシロコたちを安心させようと笑みを浮かべ、シャーレの先生へ視線を向ける。凜太郎から向けられた視線の意味を理解した先生は神妙な顔持ちでうなづいた。

「無茶はしないようにね」

「善処するよ。そっちこそ、巻き込まれないように気をつけろよ」

——呪力を練り上げる。

凜太郎は一人でもどうにかできるとは言ったが、それは自分が加減

なしで全力で戦った場合の話だ。凧太郎は全力で戦えるようになるまで時間がかかり、基本的に後手のスロースターターを強いられる。

だから再起不能にさせるといふよりは、撃退を目的としている。まだ術式は温まり切つてはいない。

渋谷での戦い。

呪いの王との戦闘で凧太郎は初めて全力を出しきつて暴れた。その戦いで無茶な強化による反動と術式の強化に肉体が耐えられる限界寸前のラインを身を持つて理解した。

だから肉体の限界を超えず、負担を軽減しながらも高いパフォーマンスを得る方法を考えた。

「ひてん飛天”」

それは呪詞の詠唱による出力の増加。

「しやうぶく降伏”」

凧太郎の術式は「呪力強化」。

本来ならこの術式には呪詞による詠唱は存在しない。

なぜなら術式としての恩恵はあっても、その根本はただの基本的な呪力操作であるからだ。故に呪詞の詠唱が存在しない。

「ほろ滅びの光”」

本来ならば必要のない工程。

例え呪詞の詠唱が存在しなくとも、高い攻パフォーマンス撃が可能である。

だが本来は必要のない過程を生み出して、晒さなくてもいい隙を敢えて晒して、自身にデメリットを課すことでその効果を底上げする即席の「縛り」によって凧太郎は呪詞による術式の出力を増加させる事に成功した。

「――術式順転」

凜太郎は術式の倍率^{ギア}を4段階に分けて使用している。現在はビナーの攻撃を防ぐ際にギアがひとつ上がり、ギアが2nd状態に入っている。

そして呪詞の詠唱と「縛り」によって、負荷を最小限に抑えながら最大限のパフォーマンスを獲得した。

呪力という負のエネルギーを知覚できないシャーレの先生やシロコたち対策委員会の面々だが、凜太郎が纏う雰囲気やナニカが大きく変わったの肌で感じ取っていた。

まるで別人。

目の前で人が変わったような雰囲気、凜太郎に対して抱いた感情は恐怖だったかもしれない。

「り、リントロー……なんだよね?」

「――もちろん。そんじゃ行ってくるから、カイザー潰してホシノちゃんも助けて、打ち上げでもしようか!」

「う、うん」

「よし。行ってきますー!」

なんとなく、凜太郎にもそれは伝わっていた。

だから少しだけ苦笑いを浮かべた後、地面を蹴って跳躍した。怖がらせてしまうのも忍びないので早々にその場が立ち去る。

顕現したビナーの元へと向かう。

吹き飛ばされた距離で言えば大体300mと言ったところか、凜太郎は漲る呪力を放出させて爆発的に加速する。そしてビナーも高速で接近してくる凜太郎へと気がついた。

「お前なんでもありだな!」

ビナーの背から砲門が開く。

発射装置が顔を見せ、接近する凜太郎に目標を定めて発射される。砲門から放たれた6発のミサイル。

それを指先から放つ呪力弾で撃ち落としていく。

「うーん、怪獣と言えば合体ロボットや光の巨人がテツパンだよな。ま俺はライダー派だったけど!……つと、あぶねえく」

放たれたミサイルが自立誘導式ではない事を見抜いた凜太郎はそのまま勢い良く突っ切る。アビドス砂漠にミサイルが着弾するにはいいが、人のいる市街地の方に落とされても困るので、そちらを警戒して撃ち落とす。

呪力の放出によって得た僅かな推進力と、強化した肉体の跳躍力で宙を飛び回りながらビナーへと着実に接近する。そして。

「鬱陶しい攻撃ばっかしてきやがって、けど近づけばこっちのもんだ。脳天ガラ空き、かち割ってやるよ!」

空中、距離は残り60mと言ったところか。

相手の虚を突くように、凜太郎は壁を蹴り加速して一息で距離を詰める。そして叩き込む一撃、ビナーの頭部が大きく跳ね上がった。

『■■?? ■■■■■?!!』
「悪いが、痛めつけさせてもらうぞ!」

生物としての体格差をものともしない一撃。

喰らわせた打撃で頭部が跳ね上がる影響で、僅かに距離が離れるが。凜太郎は宙を蹴って更に加速しようとするが。

ビナーの背びれと装甲の隙間から覗く部分が強い光を発し始めた。警戒を強め動きを止めた凜太郎へ、ビナーが頭部を向けると口を大

きく開いて極光を収束させる。まさかな、と表情が引き攣る。

「ですよね!？」

そして破壊の奔流がゼロ距離で放たれた。

「——あっつー!」

直撃は避けられなかったが、ダメージは最小限に抑え込んだ。

今のを喰らってなぜ生きているのか、とでも言いたげな様子で目を見開いたビナーを尻目に凜太郎はビームの所為で焼け焦げてオシヤカになった上着ジャージを脱ぎ捨てる。

「てめえもビーム撃てたのかクソトカゲ。奇遇だな……なら、どつちのビームが強えか火力勝負と行こうか?」

砂漠に埋もれ傾いた崩壊寸前のビルの屋上へと着地する。

眼前には既に2撃目をチャージし始めているビナーの姿がある。凜太郎も腰を落として重ね合わせた掌へ呪力を収束させる。

——決着の時は近い。

せやかて工藤

「うーん。どうすつかな」

凜太郎は現在全力で疾走していた。

上はぴつちりと張り付くような半袖の黒いインナーシャツ、下は白いジャージにランニングシューズ。側から見れば砂漠に埋もれたアビドスを走る彼の姿は早朝に日課のランニングをこなすスポーツマンのようにも見えるだろう。

「もう一段階ギアあげるか？　けどそれだと周りの被害がやばいしなく。あー、しんど。やり過ぎて皆からドン引きなんてされたら俺の心が死ぬって」

ちらり、と後ろに目を向ける。

そして嫌なものでも見たかのように凜太郎はゲツ、つと顔を顰めて更に速度を上げる。

側から見れば普通にランニングをこなす青年。

先程はそう述べたが、凜太郎の状況を見れば明らかに普通ではない光景だと理解できるであろう。

「■■■■????
■■■■????!!!」

「うげ、あの夕ソトカゲ元気だなー！」

怒り心頭といったようで凜太郎を追いかけるビナーの姿がある。

砲門から放たれるミサイル。

凜太郎は更に速度を上げ、アビドス砂漠のかつての残骸を盾にし滑るするように建物の隙間を縫って走る。至近距離で響く爆発音に耳がイカれそうになるが、どうにか堪えて直撃しそうなものだけ呪力の

バリアと呪力弾によって対処する。

「あいつ意外と硬いな。お兄さんそれはちよつと計算外だったよ……うお、あぶねえ！」

件のビームでの火力勝負。

実をいうと、その勝敗は凜太郎の敗北で終わった。

というのも、純粋な火力勝負で負けたというわけではない。

凜太郎が得意とする呪力の高出力指向放出。それはビナーが放つ熱線「アツイルトの光」にも勝るだけの威力は十分にあるものだ。凜太郎本人も自負している。

しかしそれは最大出力で放てた場合の話だ。

凜太郎が呪力を溜めて高出力指向放出が最大出力に達するよりも早く、ビナーの「アツイルトの光」が収束を完了させて放たれた。

凜太郎もビナーの熱線を相殺すべく、最大出力に満たない呪力放出で対抗して完全とはいかないものの「アツイルトの光」をギリギリで打ち消す事には成功している。しかし受けたダメージは最小限に抑えるという事はできなかった。

衣服は煤けて、顔や腕には熱線によって肌が焼け焦げたような傷が残っている。肉体が反射で行う反転術式の治癒は術式のギアが3rd状態に入らないと使えない。なので現在、傷を修復することもできない。

「近接フルボッコで行くか？……ま、なるようになるか！」

攪乱するようにビナーの周りを駆け回る。

様子見の呪力弾を飛ばすが、どうにも効きが弱い。ビナーの頭部や胴体を跳ね上げさせるだけの脅力はある。しかし近接フルボッコで叩きのめそうにも、あの馬鹿でかい体躯にどれだけ打撃のダメージが響くかもわからない。

だがこれ以上時間を無駄にするわけにもいかない。

そして何より、いちいち面倒くさいことを長く考えるのも性に合わない。凜太郎はとりあえず殴って解決することにした。

「〃力は重さと速さ〃……だったか。それには俺も同意見だぜドブカスウ！」

加速する。

呪力をジェット噴射の要領で逆噴射させて速度を上げる。

凜太郎の脳裏に蘇るのは亜音速で加速する呪術師の姿。禪院家相伝の術式「投射呪法」の使い手。己の視界を画角とし、1秒を24分割した動きをあらかじめ頭の中でイメージし、その後実際にその動きをトレースできる能力。

加速度には限度があるが、絶えず術式を重ねていくことで限度を超えた加速が可能になる。しかし、失敗すると1秒間フリーズする。また、作った動きは途中で修正できず、過度に物理法則や軌道を無視した動きを作れずフリーズしてしまう。強力な反面、非常に扱いが難しい能力。

だが扱いこなせば五条悟を除いて最速へと至れる術式。

(ムカつくが……あの野郎の打撃は中々痛かった)

〃投射呪法〃の使い手、禪院直哉の戦闘。

パワーも耐久性も、身体能力では凜太郎が上回っていた。ただ一点、敏捷性に関しては直哉が上手であったのだ。そして〃投射呪法〃によって繰り出される加速した攻撃は凜太郎に大きなダメージを与えるだけの重さがあった。

加速し続ける素早い相手に苦戦を強いられた。

「ま、初速は俺の方が速かったけどー！」

全身を呪力で強化する。

そして凜太郎は最高速度で放つ一撃の為に下半身を重点的に呪力で強化した。筋肉の繊維の一本一本、血管の一筋一筋まで呪力を巡らせる。力を脚に溜めに溜め込んで、一息に踏み込んで力を爆発させる。

ドンツ、と空気が爆ぜた。

「光」の速度で蹴られた事はあるかい？」

『……!!』

「因みに俺は……ねえッ！」

粉碎。

限界まで速度を乗せた前蹴り。

文字通り、ビナーを蹴り飛ばす。

初撃で宙へと大きく浮き上がったビナーを追いかけて跳躍する。そこから更に連続で蹴りを叩き込んで上空へと打ち上げる。ビナーの長く大きな全身を空中へ放り出すことは流石に出来ないが、それでも体をくの字に曲げ怯むビナー。

隙を作る事は出来た。

凜太郎はビナーの背へ張り付くと、そのまま頭上付近まで駆け上がる。

ビナーの装甲が硬い事は理解した。

しかしその硬さにも漸く慣れてきたところだ、拳を叩きつけビナーの背にある砲門を破壊する。ビナーが悲鳴のような雄叫びを上げるが、容赦なく畳み掛ける。

そして装甲の縁を掴み呪力出力にモノを言わせて力づくでその巨体を投げ飛ばす。

「ふうく……さてと、これで大分シロコちゃんたちから距離は取れたかな？」

『■■■■??!!!』

「ちよつと乱暴しただけだろ、そんなに怒るなよ……何言ってるか

「……凄まじいですね」

場所は変わる。

学園都市キヴオトスにおいて三大学園に数えられる一大勢力、トリニティ総合学園。その一角で、現在アビドスで発生している戦闘を映像越しに見ている者がいた。

トリニティ総合学園の生徒会。

かつて無数の学園が紛争を繰り返していたトリニティ自治区。そんなトリニティ自治区で調停の場として存在したのが『ティーパーティー』である。やがて各学園は統合され、その中でも主要な3つの学園であった『パテル』『ファイリウス』『サンクトウス』は、学園内の三大派閥へと姿を変えた。

——語れば長くなる複雑なトリニティ総合学園の内部事情は今
は置いておこう。

トリニティ総合学園は各生徒会長が一定期間ごとに変わり、最高意思決定者となる。『ホスト』と呼ばれる役回りを交代して運営している。

そしてファイリウス分派の代表である桐藤ナギサきりふじ。彼女はティーセットの用意されたテラスにて、食い入るように映像を流す小さな通信機を眺めていた。

当初は彼女が寵愛している後輩の阿慈谷ヒフミの頼みと、シャーレの先生へ〃貸し〃を作るつもりで牽引式榴弾砲を扱う野外授業という名目で先生と対策委員会に支援をヒフミに任せていた。

その様子を生徒の一人にカメラで記録させ、影ながら見守っていたのだが予期せぬ光景を見せられる事となっていた。それがビナーの顕現と、突然現れたビナーと戦闘を繰り広げる凜太郎の姿だ。

はつきり言つて、それは異様な光景だった。

何せ圧倒的な体格差のある巨大な怪物を武器も使わずに、殴る蹴るなどの体術のみで圧倒しているのだから。凜太郎が蹴り一つでビナーを空中へと打ち上げた時は驚きのあまり飲んでいる紅茶を吹き出しそうになった。

「……ミカさんも相当アレなほうでしたが、ひよつとしてこの方はそれ以上なのでは？」

いや、寧ろ同じくらいか。

ナギサの脳裏には、「やつほー！」なんて軽い挨拶と共になんて事のないように壁をぶち抜くことのできる友人の姿が浮かぶ。そして理解した彼もまた彼女と同じようなパワータイプであろうと。

映像の向こうでは凜太郎が電柱を根本からへし折り武器として使いビナーをタコ殴りにしている。まるでアクションシーンが豊富な怪獣映画でも見ている気分になってくる。

「確か、津上 リンタロウさん……でしたね」

ヒフミの報告からカイザーについて調べた時、アビドス対策委員会についてもある程度のごことは調べていた。

その中でも一際異彩を放っていたのは彼だった。何せ経歴は一切不明でアビドスに突然現れた対策委員会の協力者。ヘイローをその身に宿さず、シャーレの先生と同じでキヴォトスの“外部”からの来訪者だと予想は出来たが、あまりにも異質だった。

人間離れしている。

凜太郎という人間を調べていくうちにそう感じた。調べによると、武装した不良生徒や懸賞金を掛けられた組織を相手に生身の徒手空

拳で制圧したらしい。最近ではゲヘナ風紀委員会相手にも一人で完封し、その事からとてつもない実力を有していることがわかる。

「——恐ろしいですね」

凧太郎がヒフミや正義実現委員会、トリニティ総合学園の生徒やゲヘナ風紀委員会の生徒とも個人的な友好関係がある事は調べがついている。ゲヘナとの「例の条約」が目前に迫っている、今は下手に動くわけにはいかないが彼を中心に不要なトラブルが生まれないことを祈るばかりだ。

「——あれれ？ どうしたのさナギちゃんってば浮かない顔しちゃって、紅茶の飲み過ぎでお腹痛くなっちゃった？」

「っ……ミカさん。いつからそこに？……というか、いい加減な事を言わないでください」

「あはは、ごめんごめん。さつきから声かけてたのに気が付かないんだもん」

気がつけば背後から覗き込んでくるように顔を近づけてくる友人の姿があつた。どうやら自分が思っていた以上に思考の渦に囚われていた事にナギサはため息を吐いた。隠すように通信端末の電源を切って懐にしまう。

「……？ なになに、映画でも見てたの？」

「——内緒です。それよりも、約束していた時間から大分遅れています……なにか申し開きはありますか？」

「えー、少し遅れただけじゃん。それに遅刻してるのはセイアちゃんも一緒でしょ」

「セイアさんからは予め連絡を頂いています。時間にルーズなあなたと一緒にしないでください」

「うわ、その言い方はちよつと傷ついちゃうなく！」

悪びれた様子もない友人の姿について眉間に皺がよってしまおうが、もう彼女とも長い付き合いになる。今更強く言ったところで素行が変わるわけでもないの、諦めるように思い息を吐いて紅茶の注がれたティーカップを口元に運ぶ。

——凜太郎と彼女たちが邂逅する事になるのはまだ先の話だ。

「——オラアッ！」

全身の筋肉をしならせて振りかぶる。

凜太郎は近くにあった電柱を根本からもぎ取り、呪力を纏わせて武器としていた。両腕で掴み、大剣を肩へと担ぐように構える。

そして跳躍して、ビナーへと上段から振り下ろす。

人形サイズの自分と規格外の大きさのビナー、気分はモンスターを一狩りしに行くハンターだ。まるでVRゲームみたいだなと少しだけ心が躍る。

ビナーの顔面を捉えた一撃。

まるでビナーは重力に引つ張られるように頭部から地面に叩きつけられた。衝撃で地面が激しく揺れて砂埃が舞い上がる。

「終わりか？……ッ！」

「――魔貫ツ光ツ……殺砲オオツツ!!」

空気を切り裂く。

大地を震わせる雄叫び。

攻撃の収束・発射共に工程を完了させるのはビナーの「アツイルトの光」が速かった。放たれた熱線の威力を肌で感じ取る、僅かに遅れて凧太郎の指先から練り上げられた高密度の呪力の高出力指向放出が放たれる。

放たれたエネルギーの激しいぶつかり合い。

しかし拮抗は一瞬だった。

白熱する呪力の奔流。

針穴に糸を通すように、凧太郎の放った魔貫光殺砲が「アツイルトの光」を削るように切り裂き直進していく。そして、魔貫光殺砲がビナーの頭部を捉え撃ち抜いた。

強烈な呪力の流れは、流星のように空の彼方へと伸びて消えていく。

頭部を大きく抉り取られたビナーは断末魔を上げる暇もなく、動きを止めてゆっくりと瓦礫の山の中へと倒れ込んだ。

「……悪いな。俺の勝ちだ」

『よつと、やつほ助けに来たよホシノちゃん』

『うへ、タローくんってばボロボロだね……大丈夫？』

『モーマンタイ無問題。ホシノちゃんこそ大丈夫だった？』

『おじさんの事より、自分の心配もしなきやダメだよ。派手に暴れてみたいだけど』

『いやー、ちよつと暴れ過ぎちゃったかも。さてみんなの所に戻ろつか、ここ通信機使えないし。あつちの状況も気になるから』

『いやー、おじさんの無事を知らせてあげないとまたみんな泣いちやうよ』

『結構余裕そうで安心したよ、歩けそう？』

『大丈夫だつてば、タローくんつてば心配性だなく』

『ははっ。そりゃ、年寄りには労わらなきやね』

『……ねえ、タローくん。ありがとうね』

『ん？お礼を言うのはまだ早いんじゃない？』

『今回ことだけじゃなくて、色々だよ。いっぱい助けられたからさ。正直に言つて、いくらお礼を言つても言い足りないよ』

『気にしないでいいよ……つて言つても気にしそうだよね。うん、あつ！ それならほつぺにチューなんてどうよ！ 俺頑張つたし

……ははっ、なんちゃ——え？』

『くくくツツ！……それじゃみんなの所に戻ろうか！』

『……………』

『……………み、みんなには内緒だからね。おじさんとの約束だよ！』

『……………ひゃい』

気がつけば貯金残高がZERO♪

a月★日

我、帰還の王なり。

色々ごちやついたが、無事に帰還。

前に日記を書いた時から、だいぶ日が空いてしまった気がする。忙しかつたから仕方ないと思いたいが、これは3日坊主になってしまうのか気になるところ。

……まあ、ほんと色々あったね。

結果からいうと、作戦は成功だ。

ホシノちゃんを救出した後、シロコちゃんたちの元に辿り着いたのだがどうやらまだカイザーPMC理事が率いる部隊と交戦中だったようで、ホシノちゃんと一緒に戦いに参戦した。

彼女もカイザーに思うところがあつたのだろう。

鬱憤を晴らすかのように暴れていた。いや、容赦なくてちよつとびびったね。盾でぶん殴った後に怯んだ相手の顔面にショットガン叩き込むとは思わないじゃん……ヒエ。

とりあえずカイザーPMC理事もしばいておいた。みんなで一発ずつ殴りました、はい。まあ俺は手が滑つちやつて何発も殴ったが、手が滑つちやつたから仕方ないよね。

スクラップにされないだけ感謝しろ。まあ、色々強請つておいた。今度はお前が搾り取られる番だぜ……なんて思ってたけどホシノちゃんに怒られてやめた。

それとあれだ、シャーレの先公が公的な認証してくれたおかげで対策委員会がアビドス高等学校の正式な委員会として承認された。それに伴いアビドス対策委員会が生徒会としての役割を担う事になった。はい、拍手ぱちぱちぱち。

対策委員会が非公認だった所為で割と酷い目にあっていたので、これで一安心だろう。

アヤネちゃんはホシノちゃんに生徒会長になって欲しかったみた

いだが、ホシノちゃんはそのれを断固として拒否していた。そのやりとりは側から見ていて中々面白かった。

そういえば、柴関ラーメンも復活していた。

店は潰れたが、屋台という形で再開していた。客も結構来ているよ
うでセリカちゃんもバイトとして復帰している。犬の大将も元気そ
うで安心したよ。

俺もつい先日小腹を満たす為にラーメンを食いに行き、セリカちゃんを
押揃って遊んでいた。押揃い過ぎて危うくセリカちゃんから出
禁認定される所だった致します。

アビドスの借金に関しては、未だ9億円という馬鹿みたいな数字の
ままだ。アビドス自治区の土地に関しても大半がカイザーが所有し
たままとなっている。

これに関しては、まあそうだよなといった感じだ。アビドスとカイ
ザーの取引は自体は違法ではなかったようだし、仕方ない。

とはいえ、あの無理に上げられた利子に関しては前よりも遥かに少
ない金額で利子の支払いが済むようになった。これには思わずアヤ
ネちゃんも手を繋ぎ二人でおおはしゃぎしてしまった。

なんでもカイザーローンはブラックマーケットでの不法な金融取
引バレて連邦生徒会とやらの調査が入るとのこと。その際に引き上
げられた利子が問題として上がって利子の支払いが少なくなった。

それと今回、協力してくれたカヨコちゃんたち。便利屋68はアビ
ドス自治区を出て、どこかに事務所を設けたみたいだ。それがゲヘナ
の自治区なのか、はたまた別の自治区なのか、場所は詳しくわかって
いないがこの前カヨコちゃんたちから写真入りの手紙が届いた。楽
しそうにやっってるみたいで何よりです。

……借金の問題が消えたわけじゃないが、以前のような重苦しい雰
囲気もなく和気藹々とアビドス対策委員会みんなが定例会議をし
ている姿を見て、誰一人かける事なく障害を乗り越えられた事に嬉し
くなる。

ま、ッシャーレの先生”にも感謝だな。体力もなく、へなちよこな
モヤシ野郎だが……生徒の為に頑張る姿は間違いなく先生として認

めるべきだろう。

よかったよ、本当に。

a月×日

「そういえば打ち上げてなくね？」

俺のそんな一言で急遽、ホシノちゃんの救出成功とカイザーの借金の利子が常識的な範囲内に減った事を祝して打ち上げが決行される事となった。

これにはみんなもニッコリ。無駄使いはいけませんとアヤネちゃんやセリカちゃんから怒られるかと思ったら結構ノリノリだった。

という事で今回の功労者たちを募ろうと思っただが、アビドスの問題が一応解決したからと帰っていったシャーレの先公だけしか来れなかった。

あいつの連絡先は知っていたので連絡したが、なんでお前だけなんじやい。俺にもアロナちゃんとお喋りさせる。

以前連絡先を教えてもらっていたので、カヨコちゃんに連絡してみたのだがどうにも新しく設けた事務所の方で仕事が舞い込んで来たみたいで忙しいらしくパスになってしまった。残念。

その代わり今度一緒にご飯にでも行こうと誘われた。うれちい。

それからゲヘナ風紀委員会の方にも連絡してみた。どうにもカイザーとやりあった時に先公が助っ人として呼んでいたらしい。なにそれ、俺は知らされてないけど。

カヨコちゃんから風紀委員会宛の連絡先を聞いて電話してみたのだが、窓口の電話に出たのがアコちゃんだった。しかし電話の相手が俺だとわかると問答無用で即切りされてしまった。その後も何度かかけてみるが即切りされる。なんでやねん。

おうこら、なんのつもりだあの横乳。今度遊びに行った時マジで覚えてろよ横乳。ヒナちゃんにチクるからな、震えて眠れこの横乳が。

トリニテイの方でも、ヒフミちゃんが色々協力してくれていたみたいだから誘おうと思っただが、連絡先がわからなかったので誘え

なかった。今度トリニテイに遊びに行つて個人的にお礼を言いに行こうかと思つている。

というわけで、打ち上げ参加はシャーレの先公のみ。

なんというか、以前とあまり変わり映えしない光景になった。

それから、どうせなら盛大に打ち上げをしようという事になり焼肉ぱーちーをする事になった。どつか店でも予約するのかと思つたが、アビドスの教室でやる事になった。

というか先公がお家用のデカイ焼肉プレートを持参して来やがつた……なんだこいつ。

食材の買い出しはこつちでする事になったのだが、なんと先公が金を出してくれた。やるやんけ、これが大人の余裕というやつか……高い肉買つて財布に悲鳴上げさせてやつた。

んで、買い出しに行く為のメンバーが選ばれたのだが……それが俺とホシノちゃんだった。いや、めつちや気まずつ……。

他のメンバーは準備してたりして手空きになった俺とホシノちゃんで行く事になったのだが、いまこのタイミングでホシノちゃんと二人つきりにされるのは俺の心が持たないって。

ホシノちゃんは何事もなかったかのように振る舞おうとしてくれるのだが……ふとした瞬間にこつちを見てボツと顔を赤らめたり、一人でニマニマと笑つていたり声のトーンが妙に高くなつたりと、声をかけてみれば慌てふためいたりしているのだ。

ホシノちゃんめつちやかわいい（食い気味）

死ぬ。

可愛さで殺されるかと思つた。

今思えばふざけてほつぺにチューなんて言つたはいいものの、一瞬だったのと動揺してて気が付かなかつたが、あれつてほつぺじゃなくてくちびるだった

よし変な事考えるのはやめだ。これ以上深く考えたら頭がおかしくなりそうだ

俺は別に気にしてない。

そう、俺はべちゆにあばばぶーん。

ダメだ！

脳みそおかしくなる!!

いつもの自分の調子を保てない。

こう、なんていうか、こういうのは俺のキャラじゃないって。そういうのは可愛い系の顔してる憂太のほうが女子受けいいって！ 里香ちゃんだって絶対そういつてるよ！

とりあえず買い出しはお互いにギクシヤクしながらも、なんとか無事に乗り越えられた。シロコちゃんたちは不思議そうにこつちを見ていたがニヤニヤしながら眺めてたシャーレの先公は許さん。その場で足四の文字固めを喰らわせておいた。

焼肉パーティーも無事成功、楽しかった。

肉を焼く係は俺がやった。よく猪野さんとかにも連れて行ってもらってたし、猪野さんとナナミンが二人で飲みに行ってるところに乗り込んだりしてた。こつそりお酒を飲もうとして、「成人してからです」ってナナミンに言われたこともあったな。

五条先生とかにも任務帰りに連れて行ってもらった事はあったが、妙に高い店とかに連れてかれるから流石に遠慮が勝る。そういや五条先生って酒飲めないから結局二人でファミレス行ってドリンクバーで遊んでたなあ。

……本当に楽しかった。

結構遅い時間まではしゃいでいて、そのせいで先公がアビドスから郊外に出る為の終電もなくなってしまうという事態に襲われたのだが……。

なんと布団セットと寝巻きまで持参して来てやがった……なんだこいつ（二度目）。

どうやら最初からお泊まりするつもりだったらしい。なんでそんな学生気分なんだよお前。

そして唐突に始まった全員集合のお泊まり会（2回目）。

はしゃいでたとの事もあって早めに寝たかったのだが……どんだ

け恋バナしたいんだこの野郎。しつこく話を聞いてこようとする先公がウザかったので顔面に枕を叩きつけてやった。

そしてそのまま、枕投げが開始。

意外と肩が強いのか、割といい投げ方をしてくる先公に腹が立って俺も全力で応戦してしまった。その結果、物音を聞きつけたシロコちゃんたちが様子を見に来てしまい遊んでいるのはバレてしまった。

遅い時間になにをしているのかとアヤネちゃんからお叱りを受けてしまったが、そんな彼女の顔面にシロコちゃんが枕でダイレクトアタック。そして悪ノリし出したホシノちゃんやノノミちゃんが俺や先公に、いつの間にか持つて来ていた枕を投げつけてくる。

状況に流されたセリカちゃんも参戦して、若干キレ気味のアヤネちゃんもシロコちゃんの顔面に枕を投げつけてやり返していた。

まあ、楽しかった。

気がつけば遊び疲れて全員寝落ちしていた。朝起きたら全員同じ部屋で泥のように眠ってるんだからびっくりしたね。

a月 ▶?日

シャーレの先公からスカウトを受けた。

「うろうう……シロコちゃん寂しくなるよおお」

「ん、寂しくなったらいつでも戻って来ていいよ」

「うろうう……じゃあ明日には戻ってくるから」

「……う、うーん。それはダメだよ。自分が決めた事ならちゃんとやり通さないと、こっちは大丈夫だからリントローも頑張って」

「つらいッピ」

翌日。

アビドス高等学校の校門の前で、凧太郎は駄々を捏ねる子供のようにシロコへとしがみついていた。そんな凧太郎の様子にシロコはどうすればいいかわからず若干困りながらも、元気付けるように彼の跳ねた黒髪を撫でている。

「おーい！ リントロー、準備できたー？」

「じゃかあしい！ ぶち殺すぞ貴様ア！ 俺とシロコちゃんの仲を引き裂こうってのか!? てめえの○○○^ピ腕ぎ取ってやろうかッ！」

「うわ怖。ていうか、大声でそんな事叫ぶんじゃないやしません」

「地獄見せてやるう！」

背後からヒョイ、と現れたシャーレの先生に凧太郎はシャー！つと威嚇する猫のような姿で先生を睨みつけている。そんな彼の姿に

呆れるように息を吐いた後、つい苦笑いを浮かべてしまう。

視線の先ではセリカに首根っこを掴まれた凜太郎がシロコから引き剥がされている。「イヤッ、イヤ、イヤ!!」とまるで保育園に通う園児が母親から引き剥がされているのかと勘違いしそうな情けない姿を晒している凜太郎。

巨大な怪物を相手に圧倒的な力で戦っていた頼り甲斐のあった同じ人間とは到底思えないような姿だな、なんて先生は思ってしまった。

——なぜこのような状況になっているのか？

それはつい先日の出来事が原因だ。

打ち上げが終わり、はしやぎ疲れたアビドス対策委員会の面々がまだ眠っている昼下がりの時間帯。目を覚ましたシャーレの先生と凜太郎は打ち上げで出たゴミや教室の後片付けを行っていた時だ。

『……は？ 俺をシャーレに……なんで？』

『アビドスのこれからの事とか考えて提案してみたんだけど……どうかな？』

『え、やだよめんどくさい』

『め、めんどくさいって……』

『シャーレってあれだろ？ 自分から面倒ごとに首突っ込みに行くやつだろ？……なんでそんなダルい事を俺がやんなきゃならんんじゃない。んな事わざわざやってられねえーっての』

ゴミ袋を纏めていた凜太郎にシャーレの先生がそう言った。

なぜそんな話を急にして来たのか、それはアビドスの借金の問題を解決するために先生が出した提案だった。カイザーと派手にやりあい、カイザーローンに連邦生徒会の調査が入った事で月々の利子が格段に安くなったが借金の問題自体は解決していない。

そこで先生は凜太郎に住み込みでシャーレの仕事をしてみないかとお誘いをかけたのだ。キヴォトスでは学生の部活動などでも給料

がもらえることがある。

そこで現状無所属の凜太郎にシャーレに所属してもらい、他校の生徒と交流を交え仕事をこなしながらアビドスの借金問題の解決の為に力になればと、先生は提案していた。

『あとお給料はこれくらい出ます』

『へ〜……ん？……??……ぜ、ゼロの桁多くないか？』

『そう？ これでも最低賃金よりは少し高いくらいだけど』

『……嘘だろ』

『因み他の学校の生徒とかも仕事を手伝いに来てくれて……あと可愛い子も多いよ』

『——やりまアす！』

欲望には正直な凜太郎だった。

そんなこんなで話はトントン拍子で進んでいき、凜太郎のシャーレに所属する話が決まった。

いま思えば早計な判断だったかもしれない、なんて後悔してももう遅い。ニッコニコで凜太郎を出迎えに来た先生の姿が囚人を迎える来た看守の姿にも見えて来た。

その場のノリで引き受けたが、これから面倒ごとに巻き込まれていく事になると考えると気が進まない。

シャーレへの引き抜きに、アビドスのみんなからは渋られるものかと凜太郎は思っていたがそんなことはなかった。信用されているのか信頼されているのか、暖かく見送り出してくれるみんなの姿に違う意味で涙が出そうな凜太郎である。

「うー、セリカちゃん。オデは寂しいよ……」

「しれっと私にも抱きついてこないでよ。ちよ、コラ放しなさいってばー！」

「……セリカちゃんいい匂いする。なんかフローラル、洗剤変えた？」

「キモい!? ぶつとばすわよあんだ!」
「ごめん。今のは自分でもキモいと思った」

もう少しセリカ成分を堪能して起きたかったが、横からジツとこちらに視線を向けるホシノの姿が尻目に映り冷や汗を流しながら離れる事にした。なんだが最近彼女の笑顔に圧を感じてビビっている凜太郎。

重く長い溜め息を吐いて、軽く荷物を纏めたりユツクを肩にかける。元々、そこまで私物は多くなかったので荷造り自体は数時間も掛からずに済んだ。持っていくものとしても、数着の私服や、シロコからもらった寝袋、がっこうぐらしをする上で使用していた消耗品くらいだ。

学校の空き教室を自由に使わせてもらってはいたが、そこまで大きな買い物もしていなかったなのでその程度で済んでいた。

「はあく……かつたるい。俺の楽園生活が……」

「そ、そんな重い溜め息をしないでくださいリントロウさん」

「これから毎朝、アヤネちゃんの制服姿を眺められなくなると思うと……俺はっ……!」

「な、泣くほどのことですか!?!」

「アヤネちゃんはもう少し自分の可愛さを自覚した方がいい。じゃないと怒るよ」

「ええ!? す、すいません……っ」

理不尽な謂れを受けた気がするが、あまりの凄みについ謝ってしまふ。ちなみにそんな凜太郎の発言に、ホシノと先生が納得するように後方腕組み彼氏面で頷いている。

「すみませーん! お待たせしました〜!」

「お、ノノミちゃん。来てくれないんじゃないかとヒヤヒヤしてたよ」

「ふふ、リントロウくんへのプレゼントを受け取りに行ってたら遅くなっちゃいました」

「……へ？ プレゼント？」

この場に唯一居なかったノノミが少し慌てた様子で走って来た。

ちよつと遅れるかもしれないと、言伝をシロコたちから聞いていたが出発のタイミングになっても姿を見せなかったのもこのまま会えずに終わってしまうのかと若干焦っていた。

そして遅れて現れたノノミのプレゼントととやらに、凧太郎は首を傾げて疑問符を頭に浮かべていた。

手に持っていた大きな紙袋を漁るノノミの姿に、なにも聞かされていなかった凧太郎は袋から飛び出て来るのかワクワクしている。そんな彼の様子にノノミは笑みを深くして、勢いよくプレゼントを取り出した。

「じゃーん♪」

「……え」

「えへっ、どうですかリントロウくん☆」

彼女が袋から取り出したプレゼントとやらに凧太郎は思考が止まる程の衝撃を受けた。思考が乱れて完結しない、まるで無量空処でも喰らわせられたかのような凄まじい衝撃だった。

「……は……え？……これっ……どうして？」

「えっと、実はこっさり回収してたんですよ」

彼女が袋から取り出したのは制服だった。

それは宿儺との戦いを経て、自分がこのキヴォトスに訪れた際には、既にボロ雑巾のような姿になってしまっていた呪術高専の制服だった。

記憶の中では右腕の袖は消し飛び、どこもかしこも切り裂かれた傷

があり、血と泥で汚れきっていた制服。

もはや着るに着れないような状態だったそれを、凜太郎はゴミ箱に突っ込んでいたはずなのだ。自分がこの地に持ち込んだ数少ない私物、別の世界からやって来た呪術師だという事を証明する衣類。

凜太郎は過去や未練でも断ち切るかのように、キヴォトスに訪れて数週間の間にこれを廃棄していたはずなのだ。

それが今、凜太郎の目の前にあった。

染みついていた血と泥は綺麗に落とされ、穴だらけで失くなった部位は修繕されており、新品同然と言っていいような状態で目の前にある。

「ほらほら！ 着てみてくださいいいリンタロウくん！」

「えっ……あ、うん」

ノノミに促され、制服に袖を通す。

一年以上は愛用し続けて着慣れた感触、廃棄してから数週間ちよつとしか袖を通していなかったただけだというのに、ひどく懐かしく感じた。

そっくりそのまま、レプリカを用意したのかとも思ったがそうでもないようだった。

本人にしかわからないような、小さな傷の入った見覚えのある呪術高専の校章を模ったボタン。一眼見ただけではわからないが、僅かに修繕した痕跡のある箇所。

それは紛れもなく自分がこの世界に持って来た制服だった。

「どうですか、リンタロウくん。派手に破けてた箇所なんかはちよつと違和感があるかもしれませんけど……」

「……………グスッ」

「……………え、リンタロウくん？」

「やばい……………泣きそう……………ウウ……………これ直すの結構高かったでしよ」

「あ、そ、それは私の実家の方でどうかしてもらったので気にしないでいいですよ……?」

「……誰かティツシュ頂戴、は、な、かみたいい」

「ちよつと、ガチ泣きじゃない!」

「ほら、タローくんお鼻ちーんして」

あまりのサプライズにガチ泣き寸前、というか泣き出した凧太郎の様子に周りも慌ててふためいてしまう。そんな生徒たちの様子に先生は嬉しそうに笑っている。

「……うし、メンタルリセット」

「ん、リンタロー目が赤いよ」

「それは気にしないでシロコちゃん。目にゴミが入っただけだから」

「ガチ泣きだったじゃない……」

どうにか持ち直した凧太郎だが、今更何事もなかったかのように振る舞おうとする姿に周りから温かい視線が向けられてしまっている。それを凧太郎もわかっているのか、気恥ずかしそうにしながら視線を逸らしている。

空気を変えるかのように、パンツとノノミが手を叩いた。

「うふふ、実はプレゼントはこれだけじゃないんですよ」

「え、まだあるの……これ以上はちよつとお兄さんもたないかも」

「ほらほらそんな事言わずに、こっちに来てよタローくん」

「うっ……ホシノちゃん」

「うへへ。流石にそんな反応されるとおじさん傷ついちゃうよお」

「いや、その、ごめんなさい」

手招きされるまま、凧太郎はホシノの前に立つ。

凧太郎の身長は179cm、それに対してホシノの身長は145cm

mと両者の間に圧倒的な身長差が生まれている。だからか、ホシノは身を屈めるようにジエスチャーを送る、それを理解した凜太郎も素直にそれに応じた。

自分を見上げてしている様子に内心で、ちっちゃいなあなんて凜太郎はほっこりしている。

「タローくん大きいから、おじさんの身長じゃ一苦労だよ……ちよつと動かないでね」

「はいはい、了解ですつと」

なんだか距離の近いホシノに少しドギマギしながらも、言われた通りに大人しくしておく。そしてホシノが懐から取り出した何かが凜太郎の首にかけられた。

それはアビドスの校章が刻まれた学生証だった。

実は以前からアビドス対策委員会の面々が、凜太郎の為にこつそりと用意していたアビドスの生徒である事の証。これには凜太郎も目を見開いて驚いた。

「うん……これでよし、つと」

「マジか」

「大マジ。離れた場所にいても、タローくんはアビドスの仲間だからさ。いつでも顔を見せに来てよ」

「……ははっ、それなら毎日来るよ」

「ん、それならおじさんも毎日お出迎えしないとねえ」

顔を綻ばせるホシノの姿に、つい自分の頬も緩くなってしまう。

自分は恵まれている。

アビドスのみんなの暖かさに、凜太郎はつくづくそう思った。だからこそ名残惜しいのだが、そのアビドスの為にも頑張らなければならぬと自分に喝を入れることができる。

「——うん。それじゃ、そろそろ俺も行くよ。先公準備バツチりだ！」

「え……もういいの？」

「ああ。これ以上は、本当に離れたくなくなつちまうからさ……それに会いに来ようと思えばいつでも戻って来れる、そうだろ？」

「……わかった。それじゃあ行こうか」

荷物を抱え直して、先生の後が続く。

振り返れば、アビドス対策委員会の面々が笑顔で手を振って送り出してくれている。凜太郎も笑顔で手を振りかえして、その光景を目に焼き付ける。

「サボるんじゃないわよー！」

「ん、今度遊びに行くから」

「お身体には気をつけてください！」

「いつでも遊びに来ていいですからねー！」

「……うへー、またねタローくん」

——因みにこの後、先生が忘れ物をしたとの事で一度アビドス高等学校へと戻り早すぎる再会を果たす事になる。

キャラクタープロフィール

◇プロフィール

名前 津上 凜太郎 学園 東京都立呪術高等専門学校
部活 アビドス対策委員会兼シャーレ所属 学年 二年生
年齢 17歳 誕生日 12月26日 身長 179cm
趣味 ナンパ、読書（漫画）、映画鑑賞

「お疲れサマンサ〜！ 津上 凜太郎ただいま見参、よろしくオナシヤーツス！……げつ、お前かよ……帰っていい？あゝ、ダメ？まじか」

◇基本情報

シャーレの先生と同じく「キヴオトスの外部」からやって来た少年。アビドス対策委員会に所属しており、現在は先生の厚意からシャーレに加入して住み込みで仕事を手伝っている。過去の経歴などは不明、聞けばある程度は答えてはくれるがよっぽどのがない限りは自分から話そうとはしない。本人曰く「人に聞かせても楽しい話じゃない」との事。

人間離れた身体能力を有しており、驚かれることもしばしば。凜太郎曰く「自分よりも強い奴は何人もいる」とのこと。そんな彼の能力の秘密を探求しようとする者も多にいる。

◇容姿

青目で外にハネた黒髪ショートヘア。顔立ちも整っており所謂イケメン。割と人相は悪く悪人面、本人もそれは自覚しているので表情

はなるべく意識して柔らかくしてる。第一印象は大事！

誰かイラスト描いてくれ、ワシには無理だ…（強欲の壺）

チカゲサアン様がしがない男子メーカー（木屑しがない作）で凜太郎をイメージして作成してくださいました。感謝です…っ！とてもイケメンです。

こちらサイトのリンクでございます。

https://picrew.me/ja/image_maker/355601

いや、その…なんというか。出来心で…、作成してもらったキャラがあまりにもカッコよかったでカスタマイズしたくなったとか、自分で髪の毛の部分だけ描いてみたらしっくりきちやつて……はい、すいません（なに様だお前）
やばそうだったら消します…。

これは自作した凜太郎です。

ほぼトレスですけど、割とうまくできたんじゃない？

◇性格

わりとクソガキ。

だからと言って、礼儀を重んじていないわけでもない。

相手が素直に尊敬できるような人物であれば、しっかりと対応することもある。相手によって接し方を変えたりしたりすることもある

ので、向こうがフランクに接してくれば同じような返し方をしたりする。例えばシャーレの先生に対してはそんな感じ。

逆を言えば、立場関係なく気に食わない相手であればとことん喧嘩腰になったりする。御三家だろうと上層部だろうと、笑顔を浮かべながら平気で唾を吐いて中指立てたりと問題児ではあった。

戦闘に関してもかなりの脳筋。

難しい事は考えるのは苦手なので、とりあえず殴ってから考えるタイプ。

それとかなりの女性好き。

「どんな女がタイプだ！」と聞かれると答えに迷う。過去にとあるチョンマゲゴリラか戦闘中に好きな異性のタイプを聞かれてかなり言葉に詰まっていたが、気がつけば戦闘そっちのけで談話が始まりわりと仲良くなった。

◇術式・技

・呪力強化

文字通り、呪力によって肉体を強化する術式。しかしそれは呪術師ならば誰もができるような、呪力操作の基本とも言っているようなものであり、術式としてはあつてないようなもの。しかし術式として恩恵がないのかと言われれば、それは違う。一時的に呪力総量と出力が増幅される。

・拡張術式

4段階のギアにわけて凧太郎が使用する『界王拳』はこれに当てはまる。凧太郎が自分の術式の『強化』という解釈を『倍増』という解釈に広げる事によって習得した術である。

倍率分上昇して行く事から、五条悟に「界王拳じゃん」と言われた事もありそれで本人も納得している。

わかりやすく噛み砕いて例えるならば、通常の術師が行う強化が『たし算』による強化だとすれば、凧太郎が術式を介して行う強化は

『かけ算』によって恩恵を得る強化といったところだ。

もちろん術式効果にはリスクがある。

倍率を高めれば高めるほど、必要以上に術者本人に負荷が掛かる。そして倍率の高い強化ほど肉体への「跳ね返り」の反動がある。

この強化には、「理論上は上限がない」。

凧太郎自身が負荷に耐えられるかどうかが問題となる。

術式発動中はドラゴンボールのスーパーサイヤ人やラグナクリムゾンの銀気闘法 状態のように髪の毛が逆立つ。

・術式反転

「強化」の反転である「弱化」の反転術式。

文字通り、呪力強化の反対である弱化の能力。術式対象は凧太郎ではなく、任意で対象を選択して効果を発揮する。攻撃する際や、ダメージを受けたタイミングなどで使用することができれば相手の呪力出力を強制的に下げることができる。

それによって相手の呪力による防御力を低下させるデバフを与えたり、自分への術式ダメージなどを最小限に抑える、などといった使い方もできる。しかし現在 凧太郎は反転術式を習得していないので、例外を除けば自分の意思で使用することはできない。

・呪力特性

凧太郎が持つ呪力特性。凧太郎の呪力は「非常に鋭い」「性質を持っている。単に呪力を込めただけの打撃でも釘や刃物で刺されたような激痛を与えることができる。

・呪力放出（加速式）

全身や部分的に呪力をジェット機のように逆噴射させて瞬間的な推進力を得て、空を飛んだり速度を上昇させることができる。イメージとしては舞空術というよりは、『家庭教師ヒットマンREBORN！』の死ぬ気の炎を噴射させて飛んでるイメージに近い。

・呪力の高出力指向放出

凧太郎が得意とする呪力の高出力指向放出。「かめはめ波」や「魔貫光殺砲」がこれらに該当する。対象の術式・呪力を視覚情報として精細に読み取れる「六眼」を持つ五条 悟の指導のもと呪力操作を鍛え上げて高レベルなものとして習得した。威力に関しては現代最強と呪いの王のお墨付き。

・呪力の刃

手に呪力を集中させて作り出す呪いの刃。ぶちやけスピリッツソード。

◇領域展開

・國裂懺鬼哭こくれつざんきこく

掌印は金剛夜叉明王印。

渋谷での宿儺戦にて使用された凧太郎の領域展開。通常の領域が外殻境界生得領域であるならば、外殻肉体精神もまた領域であると定義して繰り出した領域展開。

凧太郎が「縛り」によって成り立たせた為、必中効果などがなくなっている。

潜在能力を最大に引き出し、呪力出力を爆発的に高めるための領域展開。領域展開中は200%の効力を得ることができる。がしかし負荷が凄まじく、自滅技にも近い。

凧太郎曰く「二度とやりたくねえー」とのこと。

◇交友関係

キヴォオトスで凧太郎が築いた交友。

ブルアカという絆ランク、ペルソナ風に言えばコープやコミュL
v。

ランクは0〜10といった感じ。

アビドス編終了時点でのキヴオトスの生徒たちからの凜太郎への評価。

——アビドス高等学校

・砂狼 シロコ：7 pt

「え、リントローのこと？……なんでだろう、放って置けないというか。一緒に居たいと思うというか……ん、一人ぼっちはきつと寂しいから」

・黒見 セリカ：6 pt

「へ？ あいつのこと？……ど、どう思っているとされても……一応感謝はしてるけど、それにヘンタイだけど大事な友達というか……ちよ、なんでニヤニヤしてるのよ！」

・奥空 アヤネ：5 pt

「リントローさんですか？ とても感謝してます。あ、もちろん先生にもですよ！」

・十六夜 ノノミ：5 pt

「リントローくんは二年生なので、同級生という事になるんですね？ ふふっ、なんだか可愛くて頼り甲斐のある同級生が出来ちゃいましたね♪」

・小鳥遊 ホシノ：8 pt

「タローくんのこと？……うへ、それは内緒かな」

——便利屋68

・陸八魔アル：4 pt

「うちのバイト従業員強すぎ……？」

・鬼方 カヨコ：7 pt

「……命の恩人、でいいのかな？ まあ、それだけじゃないけど一緒にいて楽しいよ」

・浅黄ムツキ：5 pt

「タロちゃん？ 面白いしご飯奢ってくれるし、ムツキちゃん的にはすっごい助かってるかな。あとはカヨコちゃんと……くふふっ、

今はオフレコでお願いね？」

・伊草ハルカ : 3 p t

「え、えつと……その、私なんか話を聞いたところで何の力にもなれないと思いますけど。そ、そその、すいません！」

——トリニティ総合学園

・阿慈谷ヒフミ : 4 p t

「リントロウさん、ですか？　そうですね、変わった人……といいま
すか。あ、でもペロロ様の可愛さに気づいてくれたみたいで嬉しいで
す！」

・仲正 イチカ : 5 p t

「え、お兄さんのことつすか？　一度だけ一緒に戦ったことがある
るつすけど、ヤバかったですね。多分、ツルギ先輩といい勝負できる
んじゃないつすかね？……あと一緒にいて楽しかったつす」

——以上がシャーレの先生による特別取材である。

幕間

平穩はいつも近くに

『〃——ねえ、凜太郎』』

頬を優しく撫でる微風。

木々の隙間から差し込む月明かり。

どこか遠くから響いてくるような小川からせせらぐ音が心地よい。その全てが鮮明で、記憶の底に焼きついた懐かしい記憶。ずっとずっと、ここにおいてしまいたくなるような、そんな優しい空間。

だからこそ、この全てが自分の願望でかたどられた偽りの憧憬であると認識できる。

『私ね、大きくなったらパン屋さんになりたい！ おっきな街でたくさんの人に美味しいって言ってもらえるようなすごいパン屋さんになる！……その時はりんたろーもいつしよにやろ！』

穢れを知らないような綺麗な眼だった。

そんな純粋な彼女の言葉に、自分は照れくさくなって濁すように返事を返していた。いま思い返せば、自分の気持ちを素直に言葉にするべきだった。

そんな後悔を抱いたところで、もう遅いというのに。

『うつ……こ、今回のテストあんまりいい点数取れなかったかも……凜太郎は、ってなんで自分のは隠してるの！ ちよ、見せてよ！』

つまらないと思っていた。

何の面白みもない。窮屈で、退屈な場所で育った。

その退屈な場所で過ごした平和な時間がどれだけ幸せだったのか

なんて考えもしないで。刺激や変化を求めて、巢の外へ羽ばたくことを夢見ていた。

『ほ、本当に行っちゃうの？……もう少しだけここにいても……そっか。ううん、わがままだったよねごめん。ちゃんと連絡してよ……うん、その時は私も一緒！』

彼女と共に6、7回ほどの冬を越したくらいの時だったか、親の仕事の関係で引っ越しが決まった。両親は仲の良い夫婦、*“だった”*。小さく無知であった自分は、仕事の都合でなんて……そんな嘘を信じて父と共に生まれ育った小さな村を出た。

再会を約束し、幼馴染の少女を残して外の世界へと飛び出した。

どれだけ時間が経とうとも、彼女とは連絡をとり続けていた。慣れない環境や、新しくできた友人、難しい勉強なんかにも苦戦しながらも、週末に必ず家に届くあの子の手紙をポストから取り出すのが一番の楽しみだった。

そんな手紙のやり取りが突然終わってしまったのはいつだっただろうか、記憶が曖昧で思い出せない。彼女から手紙の返事が返ってこなくなったのだ、どれだけ待っても手紙が自分の元へと届くことはなかった。

嫌われてしまったのかな。

自分でも気がつかない内に怒らせるような事をしてしまったのか。そんな不安を抱いて、朝起きれば学校に行き、帰ってきたら手紙を書いて眠る。そんなことを繰り返していた、毎日のように手紙が届いていないか、自分の身長よりも大きなポストを背伸びして必死に覗いていた。

ある日、小さな自分は直接あの子に会ってごめんねと言いに行こうと思ったのだ。父親に黙ってこっそり、少ないお小遣いとお弁当なんかを用意して、電車を乗りついであの小さな村に帰ろうと足を痛めながら長い道のりを歩いていった。

楽しみだった。

ワクワクしていた。

顔を合わせたら、最初に謝ろう。

村では食べたことのないよなお菓子もいっぱい用意した、父親が隠していた高そうなお菓子も内緒で持ってきた。彼女が許してくれたら、どんな話をしようか必死に考えていた。

どんなつまらない話でも、あの子なら笑って聞いてくれると信じていた。それからお母さんにも会いに行こう、背も高くなっただけできつと自分だと気づいてくれる——僅かな不安を抱えながら、揺れる電車の中で一人で笑っていた。

そして地獄を見た。

あの小さな村に帰った自分を出迎えたのは、立ち入り禁止と書かれた大きなバリケードと至る所に巻かれた無機質なテープの山だった。なにも残ってなかった。

あの子と遊びに行つた場所も、小さな秘密基地も、自分を可愛がってくれたおばあちゃんの駄菓子屋さんも、なにもかもが残っていない。自分の家も母親の姿もなく、村の友達も、あの子の姿も家もなかった。

なにもなかった。

どうやって家に帰つたのかは覚えていない。

偶然その場にいた黒いスーツを着た大人に話を聞いても、詳しいことはわからず、焦げたような嫌な匂いと変わり果てた故郷の姿が脳裏に焼きついていた。

9月19日に村民惨殺事件が起きたらしい。

村の住人112人が死亡、村は放火によつて7割が全焼した。小さな自分はそのことを言われたって理解できなかった。

ぽっかりと、胸に大きな穴が空いたような感覚だった。なにをしても、どれだけ頑張っても、埋めることができない大きな穴だった。そんな日常を過ごしていた。

——その日を境に、俺は化け物が見えるようになった。

ただ呆然と、静かに灰色の景色を眺めて過ごした。

そして年月が経ち自分も中学生になり、二度目の春がやってくるような時期だったか……俺はある事件に巻き込まれて呪いの世界に足を踏み入れた。そして再会したのだ、死んだはずの幼馴染と。

呪いを植え付けられ『変わり果てた姿』のあの子と再会したんだ。いつだって力不足の自分を殺したくなる。

瞼を閉じれば今でも思い出す、遠い昔に抱きかかえたあの子の身体から熱が、あたたかさが失われていく感触を。

『——ねえ、凜太郎』

忘れるはずがない。

忘れることなんてできない——だって俺が殺したんだから。

『……えへへ、だいすき』

今でも手に染み付いてる。

彼女の柔らかく細い喉が跳ねるあの嫌な感触を。

『ごめんね』

「えつとー、リントロウ……？ うなされてたけど大丈夫そう？あとできれば手を離してくれると嬉しいかなー、なんて思ったり」

「……………は？」

「気分は大丈夫……じゃなさそうだね」

「……………最悪だよ。なんで寝起きで野郎の顔を眺めなきゃいけないんだっての」

目が覚めた。

状況が理解できず混乱する。目の前には驚いたような表情を浮かべながらこちらを見ているシャーレの先生、そしてそんな彼の胸ぐらを凜太郎は寝転んだ体勢のまま掴み上げていた。

手を離す。

ここはどこだったかと、記憶を掘り起こす。そしてすぐに思い出した。自分はいよいよ先日アビドスを離れ、このシャーレへと住み込みで先生の仕事を手伝うためにスカウトされたのだった。

シャーレの居住区へと自分が寝泊まりする専用の個室を用意してもらい、その日は軽く荷解きをしてすぐに眠った。そして朝早くに目を覚ました。先生の出勤時間まではまだ時間があり休憩室のソファの上で休んでいたのだが、気がつけば二度寝してしまっていた。

壁に掛けられた時計を見てみれば既に昼過ぎだ。

「えっと、大丈夫？」

「……………悪い。シャワー浴びて来る、仕事の話って後でも大丈夫か？」

「あ、うん。大丈夫だけど」

「なら、ちよつと待っていてくれ……マジですまん」

「じゃあ、何か飲み物でも買って来るよ」

「……………さんきゅー」

最悪の気分だった。

相当うなされてたいいたのか、びっしりと汗をかいていた。なにも聞かずに送り出してくれたシャーレの先生へと感謝しながら、凜太郎はソファの背もたれへ脱いだ制服を掛けると重い足取りで歩き出す。休憩室を出てすぐ側の、トレーニングルームの近くにあるシャワー

室の扉を開ける。衣服を放り出すように脱ぎ捨てロッカーの中へと
しまう、そして並ぶように設置されているシャワールームの一つへ
入っていった。

綺麗な場所だな、なんて現実逃避するような感想を抱いた。

「……………少しは“マシンになった”と思ってたんだが、ダメだなこ
りや」

なんて顔をしてるんだか。

今にも吐きそうな最低な面構え、鏡に写る自分の顔に凜太郎は自嘲
的な笑みを浮かべる。悪夢にうなされるような夢見の悪さに襲われ
るのは今に始まったことじゃない、キヴォトスに訪れアビドスのみん
など過ごす内にマシになっていたのだが。

まるで自分の罪を忘れるなど言わんばかりに、悪夢に襲われた。

「はあ……………くそつ。先公には嫌なところ見られたな、変に気にしな
いでくれるといいんだが」

バルブを軽く捻ってお湯を出す。

壁に備え付けられたシャワーヘッドから勢いよく放出されるお湯
を頭から被り、排水溝へと流れていく小さな水溜りの波を呆然と眺め
ていた。あんな夢を見た後だからか、どうにも気分が落ち着かない。
いつもの自分”に戻ろうと思ってもなかなかスイッチが入らない。

「……………元気かな、みんな。今頃なにしてんだろうなく、五条先生の救
出失敗して全滅！……………なんて事になってなきやいいんだが」

——切り替える。

パンツ、と自分の頬を張って凜太郎は自分を鼓舞する。

これ以上ウジウジと考えたところでどうにもならない。あの時、自
分は自分が納得できる行動をした。どれだけ後悔したって今更結果

は変わらない。やれる事はやって最善を尽くしたのだ、ならば後は自分の仲間を信じて祈るしかない。

「……ん、腹減った。先公と飯でも食いに行くか」

そうと決まればさっさと準備しよう。

凧太郎はお湯を止めてシャワールームを出る、そこでふと思いついた。バスタオルを脱衣所のロッカーに突っ込んだまま持つてくるのを忘れてしまった事に。

このシャワールームを利用するにあたって、先にタオルをロッカーから取り出して、そのままシャワールームへと向かい利用し終えたらその場で体を拭いて湯冷めする前に脱衣所へと戻り着替える、そのような手順で利用する事になっているのだが。

先程まで気が動転していて、凧太郎はそれを忘れていた。

びしょ濡れのまま脱衣所まで戻る事になるが、まあ床が濡れて掃除する手間が増えるだけだ。凧太郎は深く気にせず、濡れた前髪を掻き上げてタオルで足を滑らせぬよう気をつけながら脱衣所へと戻る。

その時だった。

『——先生！　もう、どこにいるんですか先生!!』

どこからかそんな声が響いてきた。

シャワー室の外だろうか、ズンズンとシャーレの廊下を踏み締めるように歩く大きな足音が聞こえてきた。聞いたことのない声だな、凧太郎はそんな事を思っていたが。

『どこに隠れたんですか先生！　この領収書はなんですか、またシャーレの経費で変な物を買いましたね！　何度も注意してるのに、どうして浪費癖が止まらないんですかっ!』

そんな少女の憤った声が聞こえる。

状況はよくわからないが、なんとなく理解はできた。

「……なにやってんだあいつ」

思わず呆れてため息が漏れた。

そういえばこの間、デカイホットプレートとかその他色々を持参してアビドスに来てたな。凜太郎は財布の紐が緩そうなシャーレの先生の姿を脳裏に幻視する。

そんなことよりも、湯冷めする前にさっさと身体を拭いて着替えてしまうか。そう思い、ロッカーの扉を開いてタオルを取り出した後、扉を叩くように閉める。

ガンツ、と大きな音が響いた。

「もう逃しませんよ！ こんなところに隠れてないで、ちゃんと説明を……して、くだ……さ……」

「……………ん？」

突然、脱衣所の扉が勢いよく開かれた。

「……………へ？」

「……………あ、ども」

とりあえず挨拶はしておく。

なぜなら「挨拶は大事」だと、仮面の少女ことアツちゃんも言っていたのでしっかりと挨拶はしておく凜太郎。たっぷり数十秒ほど、無言の時間が空間を支配していた。

「え……あ……なん、お、おと……き、き」

「きやああああっ！ のび太さんのエツチイー！」

「きやああっ、てなんであなたが悲鳴をあげてるんですか!!? のび太さんって誰?!……じゃなくて前、前を隠してください!!」

「ふっ……照れるなよ。こっちまで恥ずかしくなる」
「それが普通です!？」

平穩はいつも近くに②

b月a日

シャーレ就任3日目くらい……いや4日だったか？（記憶が朧げ）

長い長い、激動の日々だったよ……。

え、シャーレの仕事ってこんなに大変なん？ お兄さんもうやめたくなってきたんだけど……今からやっぱリスカウトの話はなしにできたり、あ、ダメですか。

キヴオトスってロスサントスだったんだな。民度というか、なんでどこもかしこもグラセフみたいに問題ごとばっかりなんだよ。騒動鎮圧にかなりの回数で駆り出されてるんだが……。

この世界は銃の引き金が軽すぎるツピ。

流星に日に何度もスケバンちゃんたちやなんとかヘルメット団の騒動を止めるのにも疲れてきて、再び騒動を止める時に鬱憤を晴らさんと言わんばかりにあの子達が乗り回してた戦車を原型を留めないレベルで叩き壊してしまった。

素手でぶっ壊したせいかがチビビリされた……ごめんね……。先公にもやりすぎと怒られた、許してヒヤシンス。けどいいストレス発散だった。

今なら本当の意味でナナミンの言葉に共感できる、労働はクソ!!

ナナミンン！ そのうちストレスで10円ハゲ出来てそうとかバカにしてごめーん!! 伊地知さんもごべえええん!!! 俺迷惑ばっかりかけてた気がするう!!

あ、五条先生はもつとちゃんと仕事して。周りにあんまり迷惑かけんでください。

いやほんと、仕事って大変だね（小並感）

最近じゃどう工夫して仕事を早く終わらせるかよりも、どれだけサボって仕事を終わらせられるかを考えてる。これが、社畜……っつてコト!?

けど悪いことばかりでもないかもしれない。

ミレニアムサイエンススクールなる学校の生徒であり、セミナーと呼ばれる生徒会の会計担当であるユウカちゃんがかわいい。

うん、かわいい。

そしてなにより、太い。どこがとは言わないが太い。うおっデカいね、あれで蹴りを喰らったら確実に首が吹っ飛ぶ。(確信)

目の保養になってとても癒される、その後で書類の山を見て吐きそうになるけど。

そういえばシャーレに就任してから、街を歩いている時など妙に喧嘩を売られることが増えた気がする。なんというかいかにもなガラの悪い不良に絡まれたり、スケバンちゃんに絡まれたり。

ガラの悪い野郎を相手なら容赦なく返り討ちに行っているが、スケバンちゃん相手に同じようなことは出来ないので上手く言いくるめて一緒にお茶したりした。根はいい子そうなんだよね。

どうしてこうも絡まれることが多いのかと疑問に思っていたが、この疑問にはユウカちゃんが答えてくれた。どうやら銃を持ち歩かない生徒というのは相当目立つらしい。

銃を持っていない生徒よりも、裸で歩いてる生徒の方が統計的にも実際にも多いくらいってどうことなの？

そういえば今更だが、ユウカちゃんに俺のスッポンポンの姿が見られたのだが、その後騒ぎを聞いて駆けつけた先公にも俺の全裸と逆T O L O V E するな状況を目撃された。

誤解を解くのに時間を有してしまった。けど今思えば俺は別に悪くない気がするんだが、事故とはいえ俺のサービスシーンを覗いてきたのはユウカちゃんであって、俺が覗きに行ったわけではないし。

俺だけお叱りを喰らったのは遺憾でございます。

なのでしばらくはユウカちゃんとお仕事する時にお手洗いに行く時は「覗いちやダメだよ」と揶揄うことにします。一日一回を目標と

しよう。もしくはデイリー。

b月b日

美食ってなんだ（哲学）……？

ここ最近、シャールで仕事し始めてから色々なアクシデントに巻き込まれているせいか頭がおかしくなりそう。俺の知ってる常識とキヴォトスの常識がかけ離れすぎて、なんだか洗礼を受けている気分になる。

アビドスで過ごして、それなりにキヴォトスにも慣れてきたと思っただがそんなことはなかった。アビドスが割と田舎だったからか、こつちのはちやめちや具合がレベチに感じる。あれだ、都会と田舎じゃ呪霊のレベルが違う的なやつ。

美食研究会なるものと顔を合わせたのだが、あれはやばい。とにかくヤバイ……みんなかわいい子なんだけど、あの集団はやばい（確信）

キヴォトスで目覚めてから俺を拾ってくれたのがシロコちゃん、というかアビドスのみんなでよかった。

エナドリ飲みながら、先公が無駄に溜め込んでいた書類を整理していたのだが突然ゲヘナ風紀委員会からシャールの窓口に電話が掛かって来たのだ。電話のお相手はなんとヒナちゃん。

電話の相手がヒナちゃんである事に驚いたが、向こうも俺がシャールの窓口の電話に出ている事に驚いていた。自分がシャールに所属した事の経緯をカクカクシカジカと伝えたら納得していた。

久しぶりにお話し出来たのが嬉しくて長話をしてしまった。ちよつと揶揄えば、電話の向こうで慌てている姿が想像しやすくてなんともかわいい。

彼女と世間話をしていて話が脱線してしまったが、どういった要件

でシャーレに電話を繋いだのか聞いてみればこれまたビックリな話だった。

なんとシャーレの先公が風紀委員会の留置所で拘束されているらしい。彼女の言葉に思わず「……はいい？」と間抜けな返事をしてしまったくらいだ。

訳がわからなかったが話を聞くと、どうにもシャーレの先公が学校のプールで全裸になって泳いでいるとの通報があつて身柄を取り押さえたらしい。

あいつ俺に仕事押し付けてなにしてた。

ちよつと本気で一回どつておくべきかと思つたくらいだ。

要は身柄を引き取りに来てほしい的な連絡だった、とりあえずそつちに向かうことを伝えてから爆速でゲヘナまで飛んでいった。なんで補導すべき立場にいるような人間が補導されてんのじゃい。

そんでゲヘナに到着してから、わざわざ迎えに来てくれたヒナちゃんに話の詳細を聞いたのだが、誤解というかヒナちゃんの早とちりだったようだ。

彼女曰く「先生の日頃の行いが…」と言っていたが、あいつ普段なにしてんだ？

わざわざ足を運んでもらつたのにごめん、と彼女から謝罪を受け取りつつも留置所にいる先公を迎えに来たのだがそこでヤバイ光景を見た。

留置所の中には数名の女子生徒とシャーレの先公が確かにいたが、問題はそこじゃない。

そこにはなんと女性物の下着に顔を埋めて一心不乱に匂いを嗅ぐ変態がいた……は？

留置所の扉を開けてもらい中に入った瞬間、思わず彼女の体を引き寄せ、その光景を見る前に目元を押さえて強制的に視界をシャットアウトさせたくらいだ。

突然の行動にヒナちゃんは困惑していたが、我ながらナイス判断だったと思う。

先公はまるで現場を押さえられた犯人のように慌てて弁解してい

だが、既に絵面がギルティ。よっぽどのがない限り他人の趣味にとやかく言うつもりはないが、それはダメだろう。

とりあえず、視界を塞いだまま困惑している彼女の背中を優しく押しながら留置所を退室させた後に、先公にはマジビントを喰らわせておいた。

そのまま本気でタコ殴りにしてやろうかと思っていたが、俺の憤怒を察したのか側に居た女子生徒数名が割って入り必死に弁明してくれた。

その女子生徒、美食研究会なる彼女たちの話を聞くとこうだ、彼女たちが問題を起こして風紀委員会から逃げている時に、偶々行き着いた先の広場で生えていたトリユフをゲットしたらしい。

美食研究会のひとり、ハルナちゃんが言うにはトリユフは採取してから5分以内の下処理が命……らしい。そして鮮度を維持するには清潔な布が必要だったとのこと。

そこで採取したトリユフ包んだのが美食研究会一員であるアカリちゃんが持つていた未開封の予備の下着、とのこと。

いや意味がわからないよ。

ハルナちゃん曰くアカリちゃんは潔癖症らしいのだが、だからと言ってなんで予備のパンツ持ち歩いてんだ。

そして先公が下着に顔を埋めていたのは風紀委員会に没収されたトリユフの残り香を嗅いでいたらしい。だとしてもアウトだろ、なんでパンツに顔埋めてんだお前。

理解し難いが、状況の前後を理解した後で先公を留置所に放置して来た。廊下で久しぶりに顔を合わせたイオリちゃんとちよつとお喋りした後、厳しめの処罰をお願いしてそのまま帰還。

あと、ヒナちゃんがシャーレの仕事を手伝いに来てくれたのでその日を楽しく書類仕事を出来た。あつという間に書類の山がなくなつたね、すごいよあの子。

そして後日、偶然再会した美食研究会の面々に巻き込まれて、改めて彼女たちの食に対する狂人っぷり理解されられた。

美食ってなんだ……？

b月c日

先公とボードゲームして遊んでた、あいつ強くね？

人生ゲームとか運が絡むような要素のあるゲームは割と互角に戦えるんだが、チェスとか将棋とかそういうボードゲームじゃ今のところ負け続けてるんだが？

まあ仕事サボって遊んでた所為でユウカちゃんから、すんんんっつごい怒らたけど。二人して正座させられた……床がちべたい。

太ももが喋っている。(正座の体勢から見えた光景)

b月d日

な、な、な、なんと!!

この度、先公からスマホを受け取ってしまった!

津上 凜太郎、キヴォトスにて新たなスマホデビューですう!

仕事用として使ってもいいし、プライベート用としても自由に使っていていいことだ! ヒュー、お前太っ腹だなあ!……変態だけど。

キヴォトスに来る前に使ってたスマホは宿儺との戦いで修理どころか買い替えた方がいいだろレベルでバツキバキに壊れてたし、仮に修理しても電波的なアレで使えるかもわからなくて放置していたんだが、まさかスマホが支給してもらえるととは。

マジで助かる。

外にいる時とか、緊急で連絡する時は公衆電話探し回ってたし、ようやく文明の利器を存分に扱える! いやー、アビドスにいた頃とか

スマホの使えない生活って意外と苦しかったからなあ。

スマホ依存って訳じゃないが、今まで普通に使ってたのがいきなり使えなくなるのは違和感すごいって。

しかもこのスマホ割と良いやつなのか、スペックが凄そうな感じだ。

お高かったんじゃないのかとそれとなく聞いてみたのだが、ほぼ自作とのことで実質タダらしい。いやどういうこっちゃねん。

どうにも話を詳しく聞くと、連邦捜査部「シャーレ」の地下にあるクラフトエンバーとかいう謎の物体で製造したらしい。

クラフトエンバーとはなんぞやといったところだが、すっごい簡単にいうと素材をポイポイ投げ込んでありとあらゆる物質を生成することが可能な超凄い大型3Dプリンターの感じらしい。いやどういふこっちゃねん。

そんなやばいモンが地下にあるのか……（戦慄）

それからあーだこーだと、それを色々と弄って生み出されたのがこのスマホらしい……え、これ大丈夫なやつ？ 爆発したりしない？

性能に関してはスーパーAIのアロナちゃんのお墨付きらしい。おうこら俺にもアロナちゃんとお喋りさせろ羨ましいぞこんちきしょう。

なんでも先公が持つタブレット、「シツテムの箱」？とかいうオーパーツなるものをグレードダウンさせたコピー品のようなものらしい。マジで大丈夫なのかそれ、そのうち爆発しそうです怖いんだけど。

OS？はほぼ同じ、とのことなのでアロナちゃんがサポートしてくれることも可能らしいんだが……俺には肝心なアロナちゃんの声が聞こえへんのじゃない。

まあ結局はパチモンなので、「シツテムの箱」の管理者たる先公と同じように全ての権限が使えたりするわけではないらしい。

俺が使っても精々、超高性能なスマホってだけだとき。

因みにどうやって製造したのか聞いたら「なんか遊び半分で作ってたら気づけば出来た」とのこと。このスマホ怖すぎるんだが……

ヒエ。

まあスマホが使えるようになっただけヨシとしよう。以前使っていたスマホは捨てずに残しておくつもりだ、こっちのスマホにはキヴオトスに来る以前に撮った写真やらなにやらと大事なモンが詰まってる。

出来れば修理してデータの復元なんかもしたいところだ。今度そういうのが出来そうな場所とか人を探してみようと思う。

……まあいいか!! スマホをゲットしたとなればやることは決まってるよなあ!

「ふう……こんなもんっすかね」

手にとった書類に目を通した後、特に問題がない事を確認してひと段落ついたことに安堵の息を溢した。

場所はトリニティ総合学園。

その委員会の一つであり、学園や校外等での違反行為を取り締まる治安維持活動を主としている委員会。正義実現委員会、その執務室に彼女は居た。

様々な生徒が所属する正義実現委員会の中で、仲裁を主に担当しその秀でたコミュニケーション能力によってトリニティ内外問わずに友

好的な関係性を築いている事から、学園間や組織間の外交やトラブルの仲裁を任されることが多い。

今しがた片付けた書類の山もそんな彼女が任された仕事の報告と後片付けを兼ねたものだった。

「もう肩がバキバキつす……んんっ……はあく、うっ腰が……」

グツと体を伸ばせばポキポキと小気味良い音が聞こえてくる。

彼女——仲正イチカはスマホを手にとつて時間を確認する。そして液晶画面に表示された数字に、うげつと僅かに顔を顰めてため息を吐く。既に時間はランチタイムを大幅に過ぎていた。

休憩がてら外で食事を済ませた後に仕事を終わらせようと考えていたのだが、思っていたよりも集中していたらしい。

「……んん。仕方ない、コンビニで何か買ってくるのでしょうか」

欲を言えば気になっていたお店のランチタイム限定メニューを食べに行ってみたかったが、今から向かったところで間に合いはしないだろうと諦めることにした。

仕方ないので購買か近くのコンビニまで行って、何か軽く食べられる物でも買ってそれで昼食を済ませてしまおうか。そうと決まれば、イチカは書類をまとめた後に執務室を出ようとする。

そんな時だった。

「し、失礼します!」

「……あれ、どうしたんすか?」

バン、と勢い良く音を立てて扉が開かれた。

視線の先には正義実現委員会の黒いセーラー服を着た後輩の姿がある。深く被ったベレー帽、目元が隠れた長い前髪の隙間から僅かに紅潮した頬が垣間見える。息を切らせた様子から、何やら慌てている

ことがわかった。

イチカはそんな後輩を落ち着かせ、息を整え終えるまで優しく待つてあげる。

「そ、その……外で……っ！」

「大丈夫っす。ゆっくり、落ち着いてからでいいっすからね。ほら深呼吸、深呼吸っ」と

「は、はい……すう、はあ……す、すいません！」

「それで、なにがあつたんすか？」

慌てていた様子から、なにかトラブルでも起きたのかと推測する。現在、正義実現委員会の委員長と副委員長は別件で出払ってしまっておりこの場にいるのはイチカやその他の一般委員のメンバーだけだ。面倒事を好まない彼女としては、大きな揉め事ではないことを密かに願いながらも、後輩の言葉に耳を傾けて返事を待つ。

「その、イチカさん呼んでこいと頼まれて……」

「……ええ？ 私を？」

「は、はい」

思わず目が点になる。

まさかトリニティにカチコミに来た相手が自分を名指しで指名しているのか、身に覚えのないトラブルに巻き込まれているような気がして来てイチカは困惑してしまう。

どれだけ頭を捻っても、呼び出しを喰らうような真似をした覚えはないので心当たりがない。

「えーっと、どういう状況っすか？」

「あ、その、外でお、おお、男の人が……っ」

「ふむふむ……男の人？」

「はい。それでイチカさんに『俺ちゃんが遊びに来たよ』って伝

えてくれと……た、多分それで通じるからって言われて」

「はい？……——え、まさか」

「……………♪」

スマホを取り出して画面をスワイプさせる。

こっちに来てからスマホに触ったのなんて何日ぶりだろうか。

インターネットやソシャゲ、動画サイトやミュージックアプリなどは暫く無縁の生活をしていたのでなんだか浦島太郎にでもなったような気分だったが、体に染み付いているとでも言えればいいのか、やはり手に馴染む感覚がある。

——現在、凜太郎はトリニティ総合学園の校門、その脇の壁へ寄りかかりながら鼻歌混じりにスマホを弄っていた。新しく手に入れたスマホになんだか気分も上がってしまう、所謂現代っ子なだけあつてかこういった携帯電話などの必需品は持っていてテンションが上がる。それがおニューだとあれば尚更だ。

「……へー、こつちにもフリマアプリとかあるんだ。案外、元いた世界とそんな変わらない感じなんだなあ」

本やゲームなどの娯楽品、それどころネットオークションにも銃やら弾薬やらが並べられているページに驚きながらも、元いた世界では見慣れない光景になんだか新鮮な気分になって興味深くなり画面をスクロールさせていく。

(……しっかし、随分と見られてるな)

ヒシヒシと突き刺さるような視線を感じ取る。

バレないように、チラリと目を向けて見れば何やら数名の生徒たちがこちらに視線を向けてヒソヒソと小声で何かを喋っているではないか。他所の学校の人間が来ているとなれば、少なからず注目を集めるのは仕方がないのかもしれない。

しかし、だからと言ってここまで珍しがられる程の事なのかとも疑問に思う。

(………あ)

ここに来るまでに色々と店を物色して来た凜太郎。

なんとなく足を運んだアパレルショップで、どこぞの現代最強が装着しているような丸メガネのサングラスを発見したことにより、それを購入して身につけていた。

そんなサングラス越しに、こちらを興味深そうに見ていた生徒と視線が合った。

とりあえず手を振って挨拶をしておく。

すると彼女は驚いた様子で、顔を赤く染めた後おそおそと手を振りかえして挨拶をしてくれた。すると、なんだか周りから黄色い声援が上がっている気がする。

(……ちよつと楽しいッ)

口角が上がりそうになるのを必死に抑え込んで澄ました顔を浮かべる。

——そっか、そういや俺ってイケメンだったわ。

ハッ、とまるで世界の真理にでも気づいたかのような顔付き。

なんとも気持ちの悪いナルシスト思考になる凜太郎。事実、ムカつくことに言葉の通りその顔立ちも整っており女性受けも良さそうな顔をしている。

彼の隣にかつての同級生たちがいれば呆れたような様子で、武力行使と共に目を覚まさせてくれる一撃を喰らわせてくれるのだが、今はそんな同級生たちも側に居ないので凜太郎の暴走が加速することになる。

「——あ、あの！」

「ん？……ふっ、どうかしたのかなお嬢さん」

「えっと、お兄さんってどこの学校の人ですか？」

「ははっ、ごめんごめん。珍しいよね、こんなお嬢様学校の前に男一人で来るのって。所属は一応アビドスってところかな。あ、シャーレって言った方が伝わりやすいかも」

「え……シャーレの人だったんですか!？」

「そうそう、あのシャーレ。ちよつくとサボって友達に会いに来ちゃった」

意識を瞬時に切り替える。

意を決したような様子で喋りかけて来た学園の生徒、凜太郎も気取ったようないつもの調子で応じる。すると、それを皮切りに遠目で様子を見ていた周りの生徒たちも凜太郎の元へと集まり出した。

「え〜〜!？」

「うわ、背え高!!」

「え、誰に会いに来たんですか!？」

「アビドスって砂嵐に吞まれちゃた学校ですよね?」

「あ、あの……できればモモトークとか……」

「おにーさん足長いですね……わっ、腰の位置すご……」

「うーん、聖徳太子じゃないから一遍には答えられないかなあ!」

なんだか客寄せパンダにでもなった気分だが悪い気はしない。

割とグイグイ来る彼女たちの姿に少し困ったように凧太郎は苦笑いを浮かべる。

「おにーさんグラサンとってよ!!」

「……ふっ」

「「うわく!! イケメンだくく!!」」

調子乗んなよ。

シャーレの先生がこの場にいればそう言っていただろう。

自分の顔の良さを自覚している凧太郎は、注目通りに目元のサンダラスをスツと外すと髪を靡かせて目元を柔らかくして微笑を浮かべる。とうかすごいカツコつけた。同級生や後輩の呪術師がここに居ればドン引きするレベルでカツコつけた。

しかし、そんなファンサを忘れないアイドルのような仕草に周りの女子生徒たちはドキツとして一斉に黄色い声援を上げている。

(——やっぱ! トリニティこの学校すげー面白いな!!)

トリニティ総合学園の生徒たちってこんな感じなん?

凧太郎は疑問に思いつつも、なんだか楽しくなってきたのでヨシとする。とりあえず一緒に写真撮っていいですかと聞かれたので、まるでアイドルの握手会のようにツーショットを撮ったり集合写真を撮ったりする。

「ちよ、コラそこ〜！ なにしてるんすか〜!!」

「ん……おお！ イチカちゃん！ 遊びに来たよ〜!!」

「げ!!」

「うわ！ やばい、正義実現委員会だ!」

「退散退散！ おにーさん写真ありがとう!」

「え、というかいまイチカちゃんって……まさか彼氏!?!」

「私たちを取り締まろうってのに、自分だけ自由恋愛なんて横暴だぞ〜!」

「はいい!ち、ちが、そんなんじゃないっすから、って逃げ足早ッ!……あ、あっちの人たちは任せるっす!」

「わ、わかりました!」

「あ、さっきのメカクレちゃんだ。ありがとうね〜!」

「く〜ッ!……ど、どういたしまして〜!」

蜘蛛の子を散らす、とはまさにこの事だろう。

現れた正義実現委員会の姿に、その場に居た生徒たちは一斉に逃げ出していく。

「はあ……えーつと、それで……なんでここにいるんすか?」

「やつほ、お久しぶりぶりだねイチカちゃん。いやー、賑やかだね」

「あ、お久しぶりっす……って! そうじゃないっすよ! どうしたんすか突然トリニティに来るなんて」

呑気に手を振って挨拶をしてくる凧太郎。

そんな彼の様子に毒気を抜かれるような感覚と共にイチカは律儀に挨拶を返すが、我に帰って凧太郎がこの場にいる意図を探ろうとする。そもそも、何か予定など組んでいたかと唸り始めてすらいた。だがその疑問もすぐに解消された。

「いやー、実はヒフミちゃんにアビドスの件でお礼も言いに来たん

だけどき。どーも本人がいなかったみたいで……あ、そういやアビドスの話って聞いている？」

「あ、一応知ってるっす。なんだか大変だったみたいっすね、それにリントロウさんも最近シャールに所属して活動してるとかなんとか」

「そうなのよね。毎日大変で、もうクタクタよ」

「ははっ、お疲れ様っす。シャールでどんな事してるんすか？」

「ん、最近だと……なんだっけ『自害の怪盗？』だかなんだかど鬼ごっこした。あ、俺は銭形警部役ね、ルパンよりも銭形警部派だし」

「いや誰すかそれ……？」

あなたの心です。

なんて、よくわからないモノマネをイチカは披露されて困惑する。

凧太郎の記憶に新しいのはシャールの仕事もない日に、懸賞金目当てで適当に請け負った仕事で出会したよくわからない自称怪盗の白いコスチュームを身に纏った女の子との壮絶な鬼ごっこ。ワイヤーアクションのようにあっち行ったりこっち行ったりで、追いかけるのが大変だった。

最初は捕まえる気満々だったが、なんだか途中から凧太郎も怪盗の真似事も手伝わされていた気がしなくもない。

まあ、この話題の詳しい話は後日としよう。

「まあそれはともかくとして、本題はここからです……イチカちゃん」

「はい。なんすか？」

「この度、なんとスマホを手に入れましたね……モモトク交換しようぜッ！」

「……ぶっ。その為にわざわざここまで来たんすか？」

「その通り、今んとこモモトクの相手が野郎ひとりだけしかいないくてなんとも寂しいことになってるのよ」

「はは、私でよければ全然いいっすよ！」

モモトークの友だちリスト第一号を無事ゲット。
因みにこの後、メカクレ委員ちゃんとイチカを誘い食事に行つて
帰った凜太郎である。

■穏はいつも近くに③

b月m日

メカクレちゃんとイチカちゃんの連絡先をゲットした、やったぜ。いやー、やっぱりスマホがあると便利だね。

ネットサーフィンとか、ソシヤゲとかで時間潰せたりできるし。けどやっぱ一番の恩恵はLINE……じゃなかったモモトークで女の子たちとメッセージでやりとりできることかな。

昨日は結構遅い時間までイチカちゃんとモモトークでお喋りしてしまった。イチカちゃんって割とフランクな感じで話しかけてくれるのに、モモトークとかメッセージ越しだとすごい丁寧な言葉使いでおにーさんビックリだよ。

こんど一緒に遊びに行く約束しました、とても楽しみぎます。

メカクレちゃんもすごいかわいいね。

そういや、ちよくちよく似たような髪型の子を見かけたがあれが流行とかそんな感じなの？

けどヒフミちゃんに会えなかったのが残念だったな。

できればアビドスの件でお礼を言いたかったのだが、また今度遊びに行った時にでもあのキモいぬいぐるみ……じゃなかった、とても可愛らしいモモフレレンズのぬいぐるみでも用意してプレゼントしましょ。

でもヒフミちゃん、ペロロ様のぬいぐるみを求めてブラックマーケットに一人で足を運ぶくらいには収集欲がすごいみたいだし、プレゼントした物が既に持つてるとかだったら嫌だから、シヨツピングにでも誘ってみるか！

そういうや、イチカちゃんに案内されてトリニティ総合学園を少しだけ見てまわったが、めちやくちやデカかったなああの学校。敷地内が

喋ってる自分にはミジンコ並みのゴミカス野郎なんだとわからせられるくらいの光属性だった。ウワーヤキコロサレルー!??

この世界の女の子って普通に変人だったり、どこかはっちゃけた性格をしている者が多かったが、そんなキヴォトスには絶滅危惧種なんじゃないかというレベルで真面目で優しい、常識的で清楚な性格をしていた。

ほんとに年下なのかと思うくらいに包容力のすごい女の子だった。普通に惚れそう。

五条先生助けて、俺この娘好きになっちゃう。

連絡先は交換したが、邪な思いを抱きながら彼女と接することは最早死刑にも等しい重罪なので常に自分をセーブして丁寧に接してま

が言い訳させてもらおうと、普通に難しいツス。これ本当に高校生の問題なんですかって感じ。

しかも国語とか数学とかはまだギリギリわかるんだが、歴史系はマジでわからんて。俺キヴオトスの歴史とか社会科系なんてマジで無理よ、いきなり別世界の知識全部詰め込めとか言われても俺には絶対無理です。

しかもこっちの授業って教師が教えるんじゃないやなくて、教育BDを使って勉強するのね。びっくりし過ぎて暫く脳みそがフリーズしてた。それから戦術ノートってなんだ、こっちだと授業でこれ使うのが当たり前なのか？

未だにキヴオトスは未知数。

俺の知ってる常識が通じないし、知らん事ばかりで適応しきれないゾ。え、戦術対抗戦？ なんぞソレ？

ひとまず、予習復習は大事だとテストの結果に呆れていたユウカちゃんが助け舟を出してくれて一緒に勉強した。

知識力のパラメータがアップした気がする。

それとユウカちゃんって凄い面倒見がいいと言うか、なんだかんだでメチャクチャ助けてくれる。すっごい細かく教えてくれるし、なによりもわかりやすかったね。

学力テストの結果がアレな感じだったので、代わりに新体力テストでは暴れまくっておいた。日頃から鍛えてただけあつて体力はあるし、そこら辺のチンピラ如きに負けるような鍛えかたはされてない。

ま、キヴオトス人とかいう半分真希ちゃんみたいな身体能力してるこっちの女の子たちと、生身のままガチでやるとなると流石にしんどいが。

ユウカちゃんが持ってきたミレニアム製の握力計をぶっ壊してしまった時はドン引きしたような目で見られてしまった。やめて、そんな目で見ないでクレメンス。ちよっと取っ手の部分を握ぎ取っただけだって。

シャトルラン的なやつもやらされたのだが、これにはシャーレの先公も強制参加させておいた。なぜ、と聞かれればなんかムカついたからとしか言いようがない。

こっちは今更やりたくもない面倒なことをやらされているというのに、あの野郎だけ優々とコーヒー片手に記録係をやらせるつもりはない。とりあえず、あの野郎が息切れでくたばるまで強制的に走らせておいた。もつと体力つける貧弱モヤシめ。

あ、最後に一言だけ……体操服姿のユウカちゃんも可愛かったです。無言で写真撮ったらバレて追いかけてこ始まりましたけど。

b月r日

忍者つていいよね……。

本日のシャーレのお手伝い担当は忍者っ娘この久田くだイズナちゃんです！

うん、かわいい。

キヴォトスつてマジでかわいい子ばつかやな。イズナちゃんは狐耳と大きな尻尾があるんだが、なんだか子犬感があってすごいかわいい。

なんでもシャーレの先公とは桜花祭とかいう伝統のあるお祭り？
で出会ったらしい。詳しくは聞いてないからよくわからんが。

そしてシャーレの先公を支えるべき主殿と認めているらしい……
こいつはメチャ許せんよなあ。つまりあれか、あの野郎はイズナちゃんと主従関係を結んであんな事やこんな事をしてるってのか？

なんて羨ま……ゲフンゲフン、けしからん奴だ！

とまあ冗談はさておき、そのイズナちゃんが主君と認めているシャーレの先公は割と、いやかなりの変態なので何か変なことされないか心配だったのでそれとなく聞いてみたが、特に問題はないらしい。

い。

ほんとに大丈夫か？

あいつ生徒のパンツに顔突っ込む奴だぞ？

イズナちゃんは真の忍者になる事が夢みたいなんだが、忍者ってかつこいいよね。ドーモ、はじめましてイズナIIサン、リンタローです、と自己紹介しておいた。忍者といえばアイエエエ！か、だってばよ！の忍者くらいしか思いつかなかった。

忍者トークでテンション上がったせいで「実は俺も忍者なんだ」と嘘ついてイズナちゃんの前で横に並べた空き缶を呪力を飛ばして吹き飛ばしたら、彼女はそれが本当に忍術だと信じ込んですぐくテンションが上がっていた。

正直、罪悪感がすごいです。

彼女の視点から見れば、呪力というエネルギーは視認できないので忍術で空き缶が吹っ飛んだように見えているかもしれないが、俺からしたらビー玉サイズの呪力を指先から発射してぶつけているだけなので、純粋な子を騙しているみたいで心が痛いです……。

いや本当に、そんなキラキラした視線を向けてこないで……。そんな大層なことはしてないんです、これ忍術じゃないから伝授とかはできないうんだった。

螺旋丸もどきは使えるけどさ。

んー、心が……こころがいたいっ。

彼女は百鬼夜行連合学院という学校の生徒らしいのだが、百鬼夜行という言葉が聞くとなんだが嫌な記憶が蘇ってくるのでどうにも慣れない。彼女からその言葉が出てきた時は思わず変な反応をしてしまった。

思えば、あの戦いはもう一年も前の出来事なのか。

あんまり思い出したくないようなことばっかだが、あの時はみんなに迷惑ばかりかけてた気がするな。命令を無視して独断専行で暴れ回ってたし、いやまあ……私情優先というか感情をコントロールできない未熟な自分が悪いんだが。

んー、やめだ。

この話は終わり、わざわざ嫌な記憶を掘り起こしたっていい事はないだろう。そういや、百鬼夜行と言えば元凶となったあの野郎に心酔してるってくらいにベツタリだった『金魚のフン共』はどうなったんだ？ あいつらも渋谷に居たよな？

ま、どこでのたれ死んでようがどうでもいいが。

とりあえず明日は百鬼夜行連合学院の方にお仕事に行くことになった。といっても、仕事とは名目だけで単純に観光といったところだ。言い方を変えればオリエンテーション的なやつだ。

シャーレの先公が、他の自治区にも足を運んで見学してくればと提案してくれ、わざわざ公務扱いで観光してこいと言ってくれたのだ。なのでその言葉には素直に甘えることにした。

イズナちゃんが案内してくれるとのことので楽しみだ。

「ここが百鬼夜行連合学院自治区の中心部です！」

「おおおお!!……………おお?……………いや、ここだけ日本じゃん」

「にほん?……………何が2本なんですか?」

「あ、ごめんね。独り言だから気にしないで……………やっぱ日本だよな、時代背景だいぶ古そうだけど」

凜太郎は思わず口を大きく開けて驚いた。

何せ目の前に広がる光景はどこか見覚えのあるような風景ばかりで、どこもかしこも親近感を覚えるような建築物が並んでいるからだ。こういう木造建築設計の建物を京都に遊びに行つた時に見たなー、とキョロキョロと周囲を見渡してしまふ。

「ではでは、イズナがこの百鬼夜行を案内いたします！ 準備はいですかリントロウ殿ー」

「うっす！ よろしくオナシヤーっす！」

「はい！ まずはおそこ、屋台で百鬼夜行の名物のキツネせんべいが売っていますー！」

「おっけ！ ダツシユで買ってくるー！」

「それから、つてリントロウ殿!？」

小腹が減っていた凧太郎、とりあえずなんか食べようと思つていたので食い物の話を聞いた瞬間に走つて屋台に突撃していく。そんな彼の後を、イズナも慌てて追いかける。

混み合う時間帯ではなかったのか、特に行列に待たされることなくキツネせんべいを手に入れる事ができた。二人分買つていた凧太郎は一つをイズナへと渡して適当なベンチに腰を下ろした。

「あむっ……どうですか、名物キツネせんべいのお味は？」

「うん、美味しい……しかしキツネの顔でせんべいって、京都で似たようなの見たことあるな」

「きょうと？」

「ごめんまた独り言……他に何かおすすめつてある？」

「そうですね。あとは、桜の花びらで作つたサクラ大福もとっても美味しいですよー」

「よし、ならそれも食べに行こうかー」

「はいー！」

イズナの案内の元、百鬼夜行の名物や名所を見て回る。

途中で動揺のあまり「映画村かよここ!？」と叫びたくなかったが、不思議そうにこちらを見ているイズナの姿に凧太郎はグツと言葉を飲み込んだ。その後も何かとツツコミたくなる場面はあったが、なんとか堪える事ができた。

百鬼夜行はどこかしこも、親近感を覚えるような場所ばかりで逆に怖くなってきたくらいだった。これ絶対に京都にある○○城だろ、そのまま持ってきたんじゃないかと思うようなものばかりだった。

「どうかあの桜の木でつけく、と自治区の真ん中に聳え立っているご神木とやらを見上げてしまおう。」

「……百鬼夜行ってすごいな」

「リントロウ殿に百鬼夜行を気に入っていただけだけで、イズナも嬉しいです!」

「あ、うん」

イズナと共に忍者トークを交えながら百鬼夜行を見て回ることで数時間、凧太郎は百鬼夜行の街並みを見渡せる展望台で休憩していた。この数時間で、なんだかドツと疲れたような気がするが、これ以上は深くは考えないようにする事とした。

スマホを取り出して時間を確認する。

「時間は、昼過ぎってところか。結構買い食いした気がするけど、イズナちゃんはお昼ご飯食べられそう?」

「あ、でしたらコラボ商品として期間限定の忍者ラーメンを売っているお店があるんです!」

「忍者ラーメン……つまり一楽ってことか」

「忍者が食べるラーメンは豚骨がベースとなっており、細麺、ニンニク多め、チャーシューのトッピングが常であることらしいです!」

「おお、普通にうまそう!」

そうと決まれば、善は急げという。

イズナが求める忍者ラーメンとやらを食す為に彼女の後ろを歩いてついていく。そこでふと、何かを思い出したようにイズナは少し慌てた様子で凧太郎の方へと振り返った。

「あ、そうでした！ リンタロウ殿、ごはんを食べに行く前に寄りたところがあるんですけど……」

「了解。なら、先にそっちに行こうか」

「ありがとうございます！ 実は近くでパン屋を開いている知り合いがいるんですけど、挨拶だけしに行きたくて」

「へー、パン屋さんか」

「美味しいパンを食べさせてくれるいい人です！……あ、でも休日にはお猿さんに柿をぶつけに行つてるとかなんとかで、偶によくわからないことを言いますね！」

「ごめん。何言ってるかさっぱりわかんない」

百鬼夜行つて意外と飲食店が多いのか？

観光客とか多そうだもんなく、そんなどうでもいい小さな疑問を抱きながらも、進路を変えたイズナに引つ張られる形で石レンガ造りの通路を歩いていく。

道中、古来より忍者が動物と会話をする時に使うという動物語とやらで必死に猫に喋りかけるイズナの姿に和まされながら足を進めること数分。

入り組んだ道を進んでいた為、案内役のイズナが途中で何度か迷子になりそうだったがどうにか彼女の案内により、その知り合いとやらが経営しているパン屋に到着した。

「ここがそのパン屋です！」

「へえ、結構綺麗な店だなあ」

中々、オシヤレな外観だった。

百鬼夜行は大体の店は木造で和風テイストな外観だったが、ここだ

けが百鬼夜行という自治区から切り離され、トリニテイの自治区にありそうな洋風な小さな店だった。

白いレンガ作りの壁に、店内の様子を伺う事のできる大きな窓ガラス。そしてまだ営業前なのか、茶色い木製の扉には『準備中』と小さな札がかけられている。

所謂、隠れ家的な雰囲気醸し出している小洒落た店だ。

「準備中らしいけど、入っていいの？」

「大丈夫です！ 何度かお邪魔していますので、リントロウ殿も入ってください」

「ならお言葉に甘えて」

扉を開けば、カランカラン！と扉に掛けられていた小さな鐘が心地よい音を鳴らしている。

店内はカフェテリアのように小さテーブルとイスが並べられており、この場で飲食もできるようなスペースが確保されているようだ。店内にはパンが焼ける芳ばしい匂いが充満しており、なんとも食欲がそそられる。

「店主殿〜！ イズナが来ましたよー！」

「なんかスタバみてえ……ほえー、ドリンクとかも注文できるのか」「聞こえてますか店主殿〜？」

店の奥へと呼びかけるイズナを尻目に、凜太郎は店内を興味深そうに見渡していた。精算レジ等思わしき場所の横にはショーケースがあり、中には惣菜パンや小さなカップケーキなどの並べられている。そのどれもが、完成度が高く食欲が刺激される。

お土産になんか買って帰るか、なんて思いながら眺めていた時だった。

「———そんなに大きな声を出さずとも聞こえているよ」

「あ、店主殿！」

「やつ、イズナちゃん。今日も元気だね君は」

——それは聞き覚えのある声だった。

凜太郎の視線が、ゆっくりと店の奥からやってきた人物に向けられる。何せ、知人のイズナの許しがあつたとはいえ見ず知らずの自分が勝手に営業前の店に上がり込んでいるのだから、挨拶ぐらいはしておくべきだと思つた。

——心臓が音を立てて跳ね上がったのがわかつた。

店の奥から現れたその姿に凜太郎は目を見開いた。

黒髪の長髪に一房だけ垂らした特徴的な前髪、大きなピアスを付けているのが特徴的な印象づけになっている。その特徴的な姿を、彼は知つていた。

もう過ぎたことだと、記憶に蓋をしていたのに渋谷での事件で再び記憶を掘り起こされるハメになつたのだから。割り切れたわけはなかつた、彼の中で憎悪の炎は今もなお燦つていたのだから。

それは蓋をした記憶の一部。

『……まさか、君に向けて放つた特級相当の呪霊を全て片付けて来るとは、悟が目をかけているだけあるね……それで、そのボロボロな体で私と戦うつもりかい?』

『……アンタに聞きたいことがある』

『おや? 何かな、私の思想については初めて会つた時に乙骨や君には聞かせたと思うけど……気になることでもあつたかい?』

『……旧■村つて知ってるか』

『ん〜?……はは、すまないね。わざわざ猿共が集まつてるような場所を細かくは覚えてないんだ』

『ふざけてんじゃねえぞ……ッ! 俺のツ——いや、あの子の故

郷も人生もツ、全部メチャクチャになった原因はテメエかつて聞いてんだよツツ!!」

『……なるほど。そういうことか、悟も人が悪いね。ならこう答えれば満足してもらえるかな——その通りだよ津上 凜太郎』

『——殺すツツ!!!』

今もなお、憎悪の炎は彼に宿っている。

この瞬間、そのドス黒い炎へと薪が焚べられたのを理解した。

「なん、で……お前が……ツ」

「ツ……君は、津上 凜太郎……？」

それは凜太郎にとっても彼にとっても、予期せぬ訪問者であり、予期せぬ再会だった。

「——夏油 傑ウ……ツ！」

■ 穏はいつも近くに④

(なんで、こいつが……ここにいるんだ……ッ!?)

視界が揺れる。

心臓は痛いくらいに激しく鼓動して、知らず知らずのうちに呼吸何荒くなる。

困惑を隠せない。

凧太郎は目の前にいる男の姿に、自分は幻覚でも見せられているかとすら考えていた。偽物？ それとも変身の術式？ 頭の中で様々な可能性を考慮して、情報を完結させようと思いが渦巻いている。

答えが出ない。

しかし、凧太郎の中で眠りかけていたドス黒い炎が夏油 傑という男を前にして息を吹き返した。

そしてそのドス黒い殺意の炎が、目の前の男は紛れもなく本物であると肯定していた。この男の姿を、魂を、どれだけ精巧に偽物を作り上げようと、自身に刻まれた怨嗟が宿敵を見間違える筈がないのだから。

「えっと……店主殿？ それにリントロウ殿も、どうかしたんですか？」

「……………」

「……………ッ」

重たくて苦しい雰囲気だった。

状況を飲み込めずに不思議そうにしているイズナの言葉に答える余裕は凧太郎にはなかった。いや、そもそも彼女の言葉が聞こえてすらいなかった。

彼の意識が向けられているのは、ただ一点。

呆然と、驚いたような顔でこちらを見ている男にだけ意識が集中していた。明らかに自分を知っている人間の反応、疑惑は確信へと変わる。明らかにこの男は自分が知る夏油 傑本人であると。

間合いを凶るように、靴底を床に擦る。

切り替える。

意識が研ぎ澄まされていく。

それは普段のおちやらけた凧太郎としてではなく、仮面を脱ぎ捨て呪術師としての凧太郎が顔を見せてハッキリと意識を切り替えている。静かに、それでいて荒々しく、予備動作を悟られぬよう最低限の呪力を練り上げて肉体を強化させた。

「――」

静寂。

互いに相手の出方を伺い、身構えている。

次の瞬間、カラン！と小さな鐘の音が響いた。それはイズナと凧太郎がこの店に入った際に開きっぱなしになっていた扉がゆつくりと元の位置へと戻っていき、そして重い扉が閉められた音だった。

その鐘の音を合図に、凧太郎が弾かれるように飛び込んだ

「――シッ！」

「――……っ!!」

一瞬で懐に入り込んだ凧太郎が上段回し蹴りを放つ。

凧太郎の攻撃に瞬時に反応した夏油は身を屈めることで蹴りを回避したが、すぐにそれが悪手であったことを悟った。続け様に放たれた二撃目の蹴りを視界に捉える。

今の一撃はフェイント、本命はこっちだった。

軸脚にしていたもう片方の脚で宙へ飛び上がると、回し蹴りを放った勢いを殺さず利用することによって放たれた後ろ回し蹴り。当たる、そう確信してインパクトの瞬間に練り上げた呪力を乗せて威力を

増加させる。

直撃する寸前、夏油はどうか滑り込ませた両腕で防御するが堪えきれずに押し飛ばされた。押し出されて衝突した衝撃で奥の部屋へと続く扉が無惨な姿になっている。

「ええっ!?! リンタロウ殿いったいなにを!!」

「……イズナちゃんはここから離れてろ」

「ま、待ってくださいいリンタロウ殿!?!」

突然の事態に状況を飲み込めず困惑しているイズナ。そんな彼女を無視して、舌打ちを溢しながら自分の想定以上に吹き飛んでいった夏油の後を追うように突き破られた扉を潜り抜けて奥の部屋へと入った。

(チツ……あの野郎、蹴られた瞬間に自分から後ろに跳んでダメージを最小限に抑えやがった!)

男の姿はすぐに見つかった。

奥の部屋は厨房となっていたのか、キッチンや大きな冷蔵庫。そして部屋の中心には大きな作業台があった、作業の途中であったのか作業台の上には専用の調理器具や紙パックの食材が並べられていた：

それらに視線を向けた後、凧太郎は男の方へと視線を戻す。

眼前には予想通りあまりダメージを受けた様子もなく、なんて事のないように衣服についた埃を払いながら立ち上がる呪詛師の姿がある。

無意識のうちに、爪が深く食い込むほど拳を強く握っていた。

「いてて……まったく。ひどいなく、何もいきなり仕掛けてこなくたっていいじゃないか」

「……………」

「やれやれ、店がめっちゃくちやだ。これから営業時間だというのに、

これじゃあ今日は臨時休業かな「オマエさ」……ん？」

「もつと言葉を選んだ方がいいんじゃないか？——ま、遺言がそれでもいいのなら話は別だがな」

「ッ!!」

肌に突き刺さるような鋭い殺気。

その強烈な殺気は、長らく戦闘から遠ざかっていた男の意識を現役時代にまで引き戻すほどの殺気であった。夏油の顔から貼り付けたような胡散臭い笑みが姿を隠し、スツと細められた目からも動揺が消えていた。

凜太郎もその変化に気がついて、警戒心を引き上げた。

——夏油 傑。

日本に4人しかいない特級呪術師の1人にして、百人を超える一般人を大量に呪殺して呪術高専を追放された最悪の呪詛師。現代最強と言われる五条 悟の高専時代の同級生にして親友であり、凜太郎にとっては自分が呪術師として呪いの世界に足を踏み入れることになった要因の人物である。

(ツツ……凄まじい打撃だ。咄嗟だったとは言え、呪力で防いで威力も殺したというのに腕にダメージが残ってる……呪力込みの単純な殴り合いでも分が悪いか)

(どういことだ……？ こいつの十八番は呪霊操術での物量攻撃だろ。なのになんで、未だに呪霊を呼び出そうともしない？ いや、できないうのか？……理由があるとしたら近くにイズナちゃんがいるからか？)

「ま、関係ないか。だからなんだっつー話だ、やる気がないならそのまま死ねばいい」

「できれば、お手柔らかにお願いしたいところなんだが……それも無理そうだね」

両者は腰を落として構える。

互いに相手の一挙手一投足を見逃すまいと鋭い視線を向けた。ジリジリと間合いを詰めて、喉元に手が届く距離まで接近する。相手の動きを誘うようにゆつくりと腕を伸ばす、凧太郎の動きに合わせるかのように夏油も腕を伸ばした。

「……………」

「……………」

ゆつくりと伸びた腕が、両者の手の甲に触れた瞬間。

それを皮切りに、素早く動き出す。

目にも止まらぬ驚異的な速度での加速、風を切って繰り出した拳がぶつかり合う。

「くっ……………」

「オラア!!」

拳が弾かれる。

力比べに押し負けた夏油の体が大きくのけ反り、その隙に凧太郎が拳を振りあげ、更に加速して突っ込んでいく。しかし、夏油も吹っ飛びそうになる自分の体を必死に押さえ込むと、強引に姿勢を立て直して凧太郎を迎え撃つ。

凧太郎の頬に夏油のパンチが喰い込む。

だが凧太郎は怯むことなく、僅かに顔を傾けただけで拳を受け止めた。そのまま固めた拳を夏油の腹へと打ち込んだ。

「かあ……………」

「その程度かよッ……………」

一瞬、動きの止まった夏油に凧太郎の重い蹴りがまともにヒットする。そのまま吹き飛ばされ、背後の壁へ激突した夏油が壁に背をつけ

て沿うようにズリズリと下がっていき尻餅をついた。

叩きつけられた衝撃で肺の中の空気が無理矢理押し出された。どうにか息を整えようとした夏油だが、追い討ちをかけようとする凧太郎の姿が視界に映ったことですぐさま横に転がって回避する。

次の瞬間、凧太郎の膝蹴りが壁に直撃して大きな穴が空いた。止まらない。

息をつく暇も与えず、まるで全ての怒りをぶつけるかのように、呪力を乗せた拳を床を転がって回避する夏油目掛けて連続で振り下ろす。連続で叩きつけられる拳によって床に穴が空き、無惨な姿へと変わっていく。

「逃げるなよ……ッ！」

「これ以上、暴れないでくれると助かるんだけど……ねっ！」

「ガッ!……ぐ、おおアアッ!!」

「おいおいマジか……グウ！」

夏油は体勢を整えてネックスプリングの要領で飛び上がると、その勢いのまま凧太郎へドロップキックを喰らわせる。それに反応できなかつた凧太郎は腹部へともろに蹴りを喰らった。

しかし、凧太郎は吹き飛ばされる直前に蹴りを放った夏油の足を掴むと、吹き飛ばされた勢いを利用して夏油の体を弧を描くよう反対方向の床へと叩きつけた。

まさかあの体勢から反撃をされるとは考えてもいなかった。抵抗する間もなく、片腕でそのまま持ち上げられ夏油は床へと激突する。どうにか受け身をとった。

凧太郎の追撃を警戒してすぐさま身を起こしたが、自身の目に映った光景に目を見開いた。ゾクツ、と全身の産毛が逆立つ。

そこにはピンポン球サイズにまで圧縮した呪力を両の掌で包み込み、両腕を前へと突き出す凧太郎の姿がある。

その構えには見覚えがあった。

(……まさかっ!?)

「――『穿血』!」

「――やっぱりか、容赦ないなッ!」

圧縮された呪力が解放された。

『穿血』とは名ばかりの呪力放出。加茂家相伝の術式である赤血操術から繰り出される本家の『穿血』のように、音速を超えるような事は決してない。

しかし、その威力は直撃すれば人間ひとりの命を軽く奪う事など造作もない。見様見真似の『穿血』。貫通力を高めた呪力放出、いわば凧太郎が使う魔貫光殺砲の簡易版であった。

(速いッ!)

防御という選択肢は捨てる。

いくら呪力で固めたところで、それを容易く貫通してくるであろうことを夏油は凧太郎の圧縮された呪力出力からそう判断した。そして何より、本場の穿血ほどの速度はない事を見抜いていた。

速いが、それでも見切れない速度ではない。

発射された穿血もどきを身を屈めることで回避すると、穿血の構えをとったまま動かない凧太郎の懐へと入り込む。そしてガラ空きとなった凧太郎の腹部目掛けて掌底を叩き込む――!

「――そうだよな、撃った直後の隙を狙う……俺だってそうする」

「――……ッツ!!」

「馬鹿が……わかってんだから対処してない訳がないだろ」

――誘われた。

そう気づいた瞬間には、背後から重く鋭い衝撃に襲われた。空気が吐き出される。

いったい何が起きたのか、夏油には理解できなかった。だがしか

し、今この瞬間に自分とつては致命的であり、凧太郎にとっては好機である状況が生み出されたのを理解した。

「はあっー！」

「があっ……!!」

よろけた夏油に腹部に凧太郎の拳が突き刺さる。

一瞬の静寂。

次の瞬間、溜めに溜めた力が解放され炸裂する。

確実に芯を捉えた重い拳。夏油の体がくの字に曲がり、そして勢いよく吹っ飛んだ。腹に呪力を集中させて拳を防いでいたが、凧太郎の拳はその防御を容易く打ち砕いてきた。

背後の壁を突き破って隣の部屋まで吹き飛んだ。

——何が起きたのか？

答えは単純だ。

凧太郎が放った穿血が軌道を変えて戻ってきた、それだけだ。

赤血操術の穿血は所謂ウオーターカッターだ。

圧縮した血液を一点から解放して撃ち出す、それが本来の赤血操術にて最大火力を誇る穿血という技。しかし凧太郎が放った穿血は、どこまでいっても「もどき」であり「贗作技」である。

本来の赤血操術のように自分の血液とそれが付着した物体を自由に操ることなどできない。

凧太郎の放つ「穿血」は呪力によって形式を近づけただけの「呪力弾」。殺傷能力こそあるものの、威力も速度も本家の穿血には及ばない。

だが、限界まで血液を圧縮して前方に放つ本来の穿血とは違い、凧太郎の放つ穿血は指向性を持たせた呪力放出である為、撃った後の応用も効くし軌道変更は容易にできる。

簡単に言えば、穿血のフリをした繰気弾といわけだ。

「……………」

ゆっくりと歩く。

大きく崩れた壁を入り口にして、隣の部屋へと入る。部屋の中にあつた置き物や棚などが衝撃で散乱している。そして壁に背を預けて、ぐつたりと座り込む男の姿があつた。

手応えはあつた、故にそれが演技ではないことを理解していた。呪力を拳に纏わせて近づく。

「ぐつ……………はあ……………つ、まったく……………本当に容赦がないな」

「……………言い残す事はそれだけか？」

「本気で、私を殺す気かい？」

「……………寧ろ、お前を殺さないでおく理由があるか？」

「ははっ、それもそうか。そうだね……………それを実行に移すだけの理由も資格も君にはあるか」

弾丸で撃たれたところで「痛い」程度で済む超人が集まるキヴオトスであろうと、殺人は重罪だ。どこの世界であろうと、命を奪う事は等しく悪だ。だが凜太郎にとってそんな事はどうでも良かった。

そもそも、殺意の理由なんて後付けでいい。いまはただ、この怒りをぶつきたいだけだった。もしかしたら、キヴオトスで出会った友人たちには悲しまれるかもしれないが、その時はその時だ。

元々、自分と彼女たちとは住む世界が文字通り違うのだから。

「……………ッー」

ボツ！と拳に呪力が迸る。

「……………ひとつ聞きたい」

「ッ……………はあ、何かな？」

「どうして、術式を使わなかった？ お前の十八番があれば逃げる

くらいはできただろ」

「ん？……ああ、そうか。くくつ、悪いね……私は呪霊操術は使わなかったんじゃないくて、使えないんだ」

「——は？ それってどういう……いや、もういい」

これ以上、言葉を交わすつもりはない。

練り上げた呪力を拳に集中させる。せめて安らかに、なんて慈悲をかけるつもりはない。そんな情けをかけるくらいなら、凧太郎はできるだけ苦しんで死んでもらえるように努力するつもりだ。

アビドスのみんなになんて言い訳しようかな、そんな事を頭の片隅で考えながら固めた拳に殺意と呪力を乗せて振り下ろした——。

「そこ、退いてくれよ……イズナちゃん」

「ぜ、絶対にイズナは退きません!!」

命を奪う一撃が叩きつけられるその寸前、拳を止めた。

凧太郎の視線の先には両手を広げて、夏油を守るように立っているイズナの姿があった。声は震え、凧太郎を見る瞳には明らかに怯えの色が混じっている。

それでも彼女は凧太郎の前に立っていた。

そんなイズナの姿に、どうするべきかと凧太郎は鬱陶しそうに溜め息を吐いた。

■ 穏はいつも近くに⑤

「……退いてくれイズナちゃん」

「い、嫌です！　なんと言われても絶対にイズナは退きません!!」

両手を広げて夏油を守るように立ち塞がるイズナ。

そんな彼女の姿に凜太郎は頭が痛くなつてきそうだった。この状況をどうするべきかと、本気で悩んだ。彼女と夏油の関係がどういったものか、そんな事は凜太郎は知る由もない。

——拳が震える。

「頼むよ、退いてくれイズナちゃん」

「なにを言われても、イズナは退きません!」

——真っ直ぐな目だ。

彼女は、いま自分が守るように庇っている男の正体を知っているのだろうか？　この男が、夏油 傑があの子の全てを奪った……いや、違う。こいつの所為であの子の救いのない悲劇に陥れられたんだ。

苛立ちが募る。

「……退いてくれて、言ってるだろッ」

「ひっ……り、リントロウ殿と店主殿の間に何があつたのかイズナは知りません!　いまこの状態でイズナは完全な部外者です!」

「……それなら」

「けど、それでも、イズナが知っている事はあります!　店主殿は変なところはあるけど、優しい人です!」

「……………ッ」

苛立ちが募る。

それは目の前で震えながらも、自分に立ち向かおうとしているイズ

ナにはではない。そんな彼女の後ろで守られながら、驚いたような表情でイズナを見ている男に対して。

そして、いまこの瞬間。

無関係である筈の彼女がこの場を仲裁しようしている、そんな健気な少女を怯えてさせてしまっている自分自身に対しても。

握る拳に力が増していく。

「それにリントロウ殿も本当に優しい人ですっ!!」

「……………え?」

「ちよつとえつちなところもあります、シャーレのお仕事をサボって遊びに行っちゃう事もあります、それでもリントロウ殿はイズナの『夢』を笑わずに聞いてくれた優しい人ですッ!!」

「……………違う。俺は君が思っているほど、『良い奴』なんかじゃない……………寧ろ悪い奴だよ。どうしようもないクソ野郎なのに、『そうありたい』と自分にもみんなにも嘘をついて取り繕ってるだけだよ」

やめてくれ。

そんな目で自分を見ないで欲しい。

イズナが自分に向ける視線が眩しすぎて、凜太郎は苦虫を噛み潰したような表情と共に視線を逸らしてしまう。

「そんなことないです! リントロウ殿と出会ってそんなに長くはありません、けどリントロウ殿は自分が思っているよりもずっと優しい人です。あなたは優しい目で私たちを見てます! 店主殿だってそうです!」

「————」

「それに、店主殿が前に言っていました。たった一人の『親友』と喧嘩別れをしてしまったと、そしてその『教え子』の一人にも癒えない傷を残してしまっただって申し訳なきように店主殿は言ってたんです」

「————…ッ」

「だから、その、えーつと……………そんな優しいお二人がこれ以上喧嘩を

するようなら、イズナは泣きます。恥も外聞もなく泣いちゃいますよ！」

途中から、自分でもなにを言っているのか理解できていないのだろう。あまりにも必死な様子でどうかこの状況を収めようとしている彼女の姿に、どうしてか肩の力が抜けてしまう。

(……………ああ、そっくりだ)

いつの事だっただろうか、自分がまだ何も知らない無知で無力な子供の頃のことだ。

凧太郎が同じ学年の男の子と派手に喧嘩をしたことがあった。

喧嘩の原因はなんだっただろうか、記憶はあやふやだが確かその男の子の持っていた大切な物が無くなってしまいその場に居合わせた凧太郎が疑われてしまった時のことだったか。

当然、凧太郎はその子の物を盗んではないし完全なとぼっちりだった。だが子供とは理屈ではなく感情で動いてしまうものだ、どれだけ自分がやったわけではないと言っても聞く耳を持つてはくれなかった。

その子のあまりの言い掛かりに、我慢も限界に達していた凧太郎はつい大きな声をあげて怒鳴ってしまったのだ。それを皮切りに、殴る蹴るなどの喧嘩に発展した。周りの子たちは戸惑うばかりで遠くから様子を見ているだけだった。

そんな時、あの子が喧嘩を止めようと割って入ったのだ。

こっちが心配になるくらい泣いていた。

怖い思いをしていたのだろう、巻き込まれたくないのなら遠くから眺めていればよかったのに、それでもあの子は臆することなく眼前に立っていたのだ。

『喧嘩しちゃダメ!!』

(……………こんな眼を、してたっけな)

姿が重なる。

容姿など似ても似つかないのに、その在り方に力強い瞳に彼女の存在を思い出した。イズナから視線を向けられるだけで、ひどく泣きたい気分になってきてしまう。

凜太郎が、ゆっくりと拳を下ろす。

——許せるのか？

許せるわけがないだろう。

自分の故郷も家族も友人も、全て奪ったのは目の前の男だ。

そして何よりもあの子があんな目にあつたのは、目の前の男の所為でもある。だけど、それ以上に彼女があんな結末を迎えることになつたことに関しては、夏油 傑が直接的な原因ではない。

言うなれば、この男は導火線に火をつけただけだ。

こいつが居なければ彼女もあんな事にはならなかつたのかもしれない、けどそうはならなかつた。全ては取り返しがつかない過去の話なのだ。

見つめるべきは過去ではなく、いま現在なのかもしれない。

「あく、クソツ！……つたく、自分よりも年下の女の子に何やってんだか」

「り、リントロウ殿？」

凜太郎はしやがみ込むと、頭を掻きむしりながら大きな溜め息を吐いた。突然大きな声を出して蹲った凜太郎の姿に、イズナはビクリと驚いて肩を震わせた。

そんな彼女を見上げて凜太郎はへにやりと笑った。

「……うっしー！」

重い腰を上げるように立ち上がる。

そして次の瞬間、凧太郎は自分の頬を勢いよく叩いた。
パンツ、と大きな音が響く。

突然のことに驚いて眼を見開いているイズナに向き直ると、凧太郎は彼女に向かって深く頭を下げた。

「……イズナちゃん。本っ当に、ごめん!!」

「……へ?」

「いや、マジでごめんね……怖がらせちゃったよね」

「——ッ!! リンタロウ殿!」

凧太郎の謝罪に、イズナは口を大きく開けてポカンとしている。そしてその言葉の意味を理解したイズナは、パアッと花が咲いたような笑顔を浮かべて、感極まったように凧太郎へと飛びついた。

凧太郎も抵抗することなく受けれて、そんな彼女の様子に苦笑いを浮かべてしまう。あまりにも激しく飛びついて来るものだから首がガクガクと揺れている。

「はは、イズナちゃん首取れちゃう……」

「ハッ! す、すみません嬉しくてつい……」

イズナから視線をその背後にいる男へと戻す。

夏油は状況が飲み込めていないのか、ポカンと間拔けな表情を浮かべている。凧太郎はこの男もそんな顔をするんだな、なんて思いつつ肩を掴むと少し乱暴に立ち上がらせた。

「いつまで座ってんだ。さっさと立てよ」

「……どういう、つもりだい?」

「これは呪術師俺たちの問題だ……あの子を巻き込むわけにもいかねえだろ……勘違いすんなよ、てめえを見逃すわけじゃねえ」

「……」

「まずは、てめえに聞かなきゃならねえことが山程ある。お前をこ

ろ……ぶっ飛ばすのはあとでもいい。それなら先に洗いざらい吐いてもらっただけだ」

「……ふっ、そうかい」

「コーヒーでよかったかい？」

「は？ 俺はメロンソーダもってこいつて言ったんだよ。誰がコーヒー持ってこいつつたよ」

「悪いね。うちはファミレスじゃないんだ、そこまで大きなドリンクサーバーは用意してないよ」

「ならコンビニまで走るくらいの気合いを見せろやエセ坊主」

「君ってもしかして私に対して遠慮ない感じ？」

場所は先程と同じ店内、凧太郎と夏油は荒れた店内に設置されていたテーブルへ向かい合うように腰を下ろしていた。少し離れた場所で、イズナがパンを齧りながら心配そうに凧太郎たちへと視線を向けている。

それに気がついた凧太郎と夏油は、心配をかけまいと笑顔を浮かべて手を振る。そんな二人の様子にイズナも笑顔を浮かべて手を振りかえした。

「……イズナちゃんかわいい」

「……なあ、あの子が向こうを向いた瞬間にテーブルの下で私の足を蹴るのはやめてくれないかい」

「黙れカス。気安く話しかけんな」

「おっと手厳しい……とところで何か食べるかい？」

「いらん」

視線だけでも人を殺せそうなくらいに怖い顔で自分を見て来る凛太郎に夏油は頬を引き攣らせる。そして自分が持ってきたコーヒーマグカップを口元に運び傾ける。

「それで、私に聞きたいことってのはなんだい？」

「もちろん全部だ。俺の質問に嘘偽りなく答えろ」

「わかってるよ。その為に、私との間に『縛り』を結んだんだろ」

凛太郎が夏油との間に結んだ『縛り』。

凛太郎の許可なくこの場から去る事は許されない。

そして夏油が凛太郎に対して嘘をつくことが許されないというものだ。正直に話す限りは凛太郎は夏油に対して攻撃を加える事はなく、夏油も嘘をつかなければ凛太郎から攻撃されることもない。

凛太郎から持ちかけられたこの『縛り』を夏油はすんなりと受け入れた。

「なら、まず一つ目の質問だ」

「いつでもどうぞ」

「……てめえ、マジで俺の知ってる夏油 傑 本人なのか」

「もちろん。正真正銘の夏油 傑本人さ、それは君が一番理解してるんじゃないかい？」

「……ああ、そうかもな」

やはり、と言うべきなのか。

凛太郎の眼前にいる男は夏油 傑本人で間違いないようだ。その事実を再度理解して、思わず拳を握る力が強くなる。わかっていたことではあったが、そうなる疑問が疑問を生み出していく。

「なんでここに、キヴオトスにお前がいる」

「恐らくは、君と同じさ。君と戦い乙骨に敗れ、そして気がつけこのヘンテコな世界で目を覚ましたと言ったところかな」

「なるほどな……いや待て、憂太に負けた後って言ったか？」

「ん？……ああ、その通りだが」

何を今さら、君だつて知ってるだろと言いたげに不思議そうな顔をする夏油。『縛り』によってその言葉が嘘ではないという事は理解できた、何よりもその程度のこと嘘をつく必要もないだろう。

夏油の言葉に凜太郎は口元に手を当てて考え込む。

「となると、渋谷にいたお前はやっぱり偽物ってことか」

「渋谷？　いきなりになんの話だい」

「いや、てめえの偽物が渋谷で五条先生を封印しやがったんだよ」

「へ……は？　私の偽物が悟を封印？」

「まあ、それはいまは置いておくとしてだ」

「いやいや、ちよつと待ってくれ！　さらつとすごい事言わなかったか!」

「うるせえ。色々やややこしいんだよ、詳しく知りたきやあとで教えてやる」

凜太郎の言葉に、夏油は口を大きく開けて驚いている。

まあ、五条　悟という男のチート具合を知っている人間からすればその反応は当然だろう。そして何より、あの最強を一番間近で見えきたと言つてもいい人間なら尚更の反応だ。

(……やっぱ、渋谷にいたこいつは偽物だったのか)

渋谷での戦い。

随分と小さくなったメカ丸の保険とやらから聞いた情報、その情報を元に大体の予想はついてたが実際にこの目で見える限り確信はなかった。

五条先生が秘密裏に夏油を逃していた、または夏油 傑と組んで渋谷での事件を起こしていた、なんて他の呪術師は予想していたがそれはないと凜太郎は考えていた。

『僕の親友だよ たった一人のね』

——そう言って、寂しさそうに笑った恩師の顔を今でも覚えてい
る。あの時には既に夏油 傑という男の物語は終わっているのだか
ら。

「とりあえず、とんでもない状況になってたのはわかった……だ
いぶ不味いんじゃないか？」

「ま、やばいだろうな。俺も途中で死んだからどうなったのかま
ではわからんが……頼れる大人と後輩、同級生たちもいるんだ、なん
と
かしてくれてるだろう」

「……そうか。それで、因みに君の死因は？」

「あ？ あー、ちよつと両面宿儻とバトつたら死んだ」

「……ん？……はい？」

「いやだから、呪いの王とバトつて死んだ」

「……ええ、私の反応がおかしいのかこれって」

——あ、因みに後輩が両面宿儻。

——え、嘘、マジで？ 呪いの王が後輩？

次々と凜太郎の口から出て来るとんでもない情報量に理解が追
いつかず夏油の顔が宇宙猫のように面白い事になっているが、ひとまず
は無視して話を進めていく。

「一旦話を戻すぞ……てめえこつちに来てからどれくらい経つ？」

「鋭いね……そうだな、詳しくは覚えていないが一年半ってところ
かな。そっちは？」

「俺は一ヶ月とちよつと……いや、待ていま一年半って言ったか」

次は凜太郎が夏油の言葉に目を見開いて驚く番だった。

何せ夏油の言葉は凜太郎からしたらありえない、聞き逃せない発言であつたからだ。

「ああ、だいたい一年半くらいのはずだ。毎日細かく記録をつけたりなんてしていないが……それがどうかしたのかい？」

「……マジか」

まるで自分はおかしなことでも言ったか、そう言いたげな顔で夏油は凜太郎を見ている。

「嘘じゃねえだろうな」

「そんな嘘をつかないさ。そもそも、縛りで嘘はつけないし……私がいつ死んだのかなんて君なら把握してるだろ」

「……ああ、お前が死んでから一年も経ってないはずだ」

「——なんだって？」

夏油の言葉が嘘ではないことは理解していた。

夏油の言う通り、“縛り”も含めてそんなことでわざわざ嘘をつく必要がない事は理解している。

だからこそ解せない。

なにせ、夏油 傑という男が死んだのは2017年12月24日に彼が主犯となつて行われた“百鬼夜行”という大規模なテロ行為とも言える事件の最後に彼は乙骨 憂太に敗れそして五条 悟の手によつて命を落としているはずなのだ。

そして津上 凜太郎は2018年10月31日に渋谷で両面宿儻に殺されたのだ。

夏油の死から一年も経過していない。

凜太郎の説明に夏油も驚いて言葉を失っているようだった。

「ふう……よし、一旦難しい話は無しにしよう。これ以上ややこしくなれば俺の頭が痛くなるから」

「ええ〜……」

「うるせ、次に行くぞ」

凜太郎は夏油が持つて来ていたコーヒーを飲んだ後、気になっていたことを問いかけた。それは先程目の前の男と殴りあった際に聞いた興味深い事だ。

「術式が使えないってのは、どういうことだ」

「言葉通りさ、私の術式……呪霊操術はキヴオトスに来てから機能してないのさ。術式は既に死んでいると言ってもいい、寧ろそういう君は使えるのかい？」

「あ？ 普通に使えるが、俺の術式は元氣ピンピンだよ」

「なるほど。ある程度の個人差があると考えれば納得できなくはないが、仮に私が術式が使えたところでこのキヴオトスに呪霊が存在しない以上は宝の持ち腐れってやつさ」

「は、何言ってるんだ。呪霊ならキヴオトスにもいるぞ」

「……は？」

「結構前に一級程度の奴を一体祓ったぞ」

凜太郎が脳裏に思い浮かべるのは、キヴオトスに訪れまだ数日の頃。カヨコと初めて会った日のことだ、呪霊はこの学園都市に存在しないものだと思っていたがそうではなかったと予想を裏切られたような呪いと邂逅。

妙に一級レベルの気配を感じづらい呪霊の存在。

またもや理解が追いつかない夏油は頭を抱えて項垂れるようにテーブルに肘をついていた。

「……私はこのキヴオトスに訪れて一年半、今まで呪霊を確認した

事はない」

「——マジで言ってるのか」

「ああ、マジだ。この百鬼夜行以外にもゲヘナやトリニティ、他の自治区に足を運んだ事はあるが呪霊の気配なんて微塵も感じなかった。君もわかってるだろう、この都市の生徒たちが宿している呪力とはまた違う力を」

「……『神秘』ってやつか」

「その通りだ。原理は不明でどういう訳か、その神秘とやらで満ちたこの都市は呪霊が発生しない……君の話聞くまではそう思ってたんだがね。祓った呪霊はその一体だけかい？」

「ああ。今のところはな、そもそもアレが本当に呪霊だったのかも怪しいが」

疑問が尽きない。

謎が謎を生む、情報が少なくお手上げとも言える現状に二人は揃って首を傾げて頭を悩ませていた。答えが出ない以上、深く考えても仕方ないかと凜太郎は思考を切り上げる。

そして次に気になったのがこの男がキヴオトスに訪れてからの交友関係や諸々の行動だった。

「そういや、イズナちゃんと出会ったのはいつだ？　そもそもこの店はどうした、なんでパン屋なんてやってんだ」

「彼女と出会ったのは、半年前くらいかな。この店はキヴオトスに来て、猫の姿をした老夫婦に助けられてね……後継もいなく取り壊す予定だった店を私が譲り受けて経営させてもらってるというわけさ」

「けっ……呪詛師にパン屋が務まるかよ」

「っ……はは」

「あ？　何笑ってるんだ」

「すまない……私も昔似たようなことを言った覚えがあったなどと、つい笑ってしまった」

「そうかい……一応聞いてくが、その老夫婦とやらは殺してねえだ

ろうな」

「もちろん、無事だよ。近くの一軒家で仲良く暮らしているさ、私も週末にはそつちに顔を出して色々お手伝いをしてる」

「……なるほどね」

「優しい人たちだよ……本当に」

——夏油の脳裏に過ぎるのは自分がこのキヴオトスに来て間もない頃の記憶。呪術師だけの世界を作るといふ夢を掲げ、道半ばで親友の教え子に敗れ最後は親友に看取られる形でこの世を去った。

そして気がつけば、この百鬼夜行の路地裏で彼は倒れていた。

乙骨 憂太との最後の戦いの影響で身につけていた袈裟はボロボロ、体も血で汚れていたが失った筈の右腕は何事もなかったかのように元通りとなっており、肉体に蓄積されていた疲労やダメージといったものも、最初からなかったかのような五体満足の状態だった。

当然、彼は困惑した。

確かに死んだ筈の自分がなぜ生きているのか。

様々な疑問があった。それでもまずは現状を確認するべく、彼は身を隠すように行動した。そしてこのキヴオトスという世界を知っていくうちに、その困惑も強くなっていった。

何せこの世界の住民たちは犬や猫といった動物の姿をしており、まるで普通の人間のように流暢に言葉を話すのだ。そして動物ではなく、人間の姿をしている女子生徒たちは本物の銃火器を当たり前のように装備しており時折抗争が起きてもいた。

そして何より、呪いの気配が存在しなかった。

最初はタチの悪い悪夢でも見せられているのかと思った。

当然、夏油はこの世界では完全な部外者だ。

帰る場所もなく、自分を知っている人間がいるわけでもない。自分が知ってる常識も通用しないような、完全に別世界の住人。

どれだけ強かろうと、夏油もただの人間だ。

飲まず食わずでは限界が来る。一ヶ月と言う短いようで長い期間、彼は野宿をしながらどうにか生きながらえていた。状況を飲み込め

ず、ただ一人別の世界へと放り出された。

空腹やストレス、彼は限界だった。

そんな時だった、自分に手を差し伸べてくれた人間と出会ったのは。

「あの時は、残飯の残りを食って生きながらえていたさ……もう少
しで物取りにすら手を出すコソ泥になるところだったよ」

「……そうか」

懐かしむように、どこか遠くを見つめる夏油の様子に凜太郎は何も
言えなかった。なにせ自分はこのキヴオトスに来てすぐ、運良くシロ
コたちアビドス対策委員会のみんなに拾われたが、目の前の男はそう
ではなかった。

見知らぬ地で彷徨う。

自分だってそうなる可能性は十分にあったのだ。自分を拾って
くれたアビドスのみんなに感謝すると同時に、自分はやはり恵まれて
いたという事実を噛み締める。

「彼女との出会いはこの店を手伝うようになってすぐだったかな。
何度か遊びに来てくれて、今じゃお得意様だよ」

「——なあ、今も『猿』は嫌いか？」

「……そうだね、『猿』は嫌いだ」

「……っ」

「——だけど、そうだな。こっちに來てから、それもよくわからな
くなってるかな……呪いも見えない呪術も使えない、そんな世界の住
人たちに助けられて私は今ここにいます」

「……」

「少しだけ、自分の定義や信念が揺らいだ……というべきなのか。
彼らに助けられ、そして彼らを助けるここでの生活は……悪いもの
じゃなかった」

夏油の言葉を凜太郎は静かに聞いていた。まるで憑き物でも落ちたかのような柔らかい表情で笑う彼の姿に、凜太郎は何を言えいいのかわからなくなつて顔を逸らした。

それから二人は様々な情報を交換した。

ある程度の情報を交換し終えた、その事に気がついたイズナが二人の元へと混じりにはなんだか重くなつていた場を空気を換えようとして会話に花を咲かせてくれた。

イズナと親しげに会話をする夏油を観察しながら、凜太郎も談話に参加すればあつという間に時間が流れていった。

気がつけば、既に日が傾き始めていた。

「……うっし。じゃあ俺はそろそろ帰るよイズナちゃん」

「はい。今日はありがとうございました！色々ありがとうございましたがりンタロウ殿と一緒に百鬼夜行を見て回れてイズナは楽しかったです！

「そりゃこつちのセリフだって……イズナちゃんには色々な意味で助けられたよ」

「今度は店主殿も連れて一緒に遊びに行きましょう!!」

「あー、それは……うん、じゃあ3人で遊びに行くか」

「はいー」

いい笑顔で返事を返してくれるイズナの姿に、凜太郎は鼻の下が伸びてだらしない顔になりそうだったが、どうにか堪えて視線をその隣にいる夏油へと向ける。

「——いいのかい?」

「何がだ」

「……私を、見逃すつもりかい」

「勘違いすんな。俺は、アンタを許すことなんてできない」

「……そうだろね。それなら、いったいなぜ」

「だけどさ、今のアンタを憎み続けることができるのかって言われたら……正直よくわからない」

「――」

「俺バカだからさ、難しいことはわかんねえ……だからアンタのことは一旦保留にする。けど、もしお前がイズナちゃんの信頼を裏切るような真似をするんだったら、容赦はしない」

「――そうか……私は」

「謝罪なんてするなよ。そんな真似してみろ、問答無用で殺すから……わかったら、生き恥でも晒しておけ」

話はそれだけだ。

まるでそう告げるかのように、凜太郎は背を向けて歩いていく。そんな彼の後ろ姿が見えなくなるまで夏油は見つめていた。

これでよかったのだろうか。

凜太郎も自分の選択が正しいものだったのかなんて事はわからな
い。もちろん夏油に対する憎しみがなくなったわけではない、だから
と言ってあの男を許せるのかと言われたら許すことなんて絶対でき
ない。

だけど、あの時イズナの妨害を無視して夏油にトドメを刺していた
として、それで凜太郎の気が晴れるのかと言ったら、それは絶対にな
いだろうと本人は思っていた。

どれだけ自分が暴れても、嘆いたとしても、あの子は帰ってこない。
夏油を殺して彼女が帰って来るなら、嬉々として殺していただろう

が、そうでないなら無駄な時間を割いただけだ。

「あーあ、俺なにやってんだろ……」

夏油は憎い。

八つ裂きにしてやりたい、惨たらしく殺してやりたい、そう思えるくらいには負の感情を抱いていた。だけでも、結局この感情も自分の復讐も、とうの昔にあの百鬼夜行が行われた日に消化不良のように煮え切らない形で終わってしまった。

夏油 傑の亡骸の側に立つ五条 悟の後ろ姿を見たあの時、凜太郎は自分の復讐に一区切りがついた気がしてしまっていたのだ。あの事件以降、胸の内の復讐心というドス黒い炎、それは既に残りカスのようなものだった。

ただこの復讐心を忘れてしまえば、あの子の悲劇すらもなかった事のようになってしまいそうで怖かっただけなのだ。

「……お前があ頃のクソ野郎のままできてくれたらどんだけ良かったか」

帰り道。

その足取りは酷く重いものだった。

平穩はいつも近くに⑥

「リントロー。こっちは終わったよ」

「……………」

「リントロー？」

「…………え？ ああ、えっと…………どうかした？」

「ん…………頼まれてた書類は終わったけど、そっちはどう？」

「へ…………あつと、ごめん…………俺のほうはまだ、です…………」

「…………大丈夫？」

「…………え、大丈夫大丈夫！ ほら元気いっぱいだって、さっさと終わらせてご飯でも食べ行こっか！」

「…………うん、そうだね」

場所はシャーレオフィス。

事務室にて凧太郎は山積みになったシャーレや他の自治区関連の書類整理の作業を行っていた。その隣にはシャーレの先生から助っ人として呼び出されたシロコの姿があった。

約一週間と数日ぶりの再会であろうか。

凧太郎はシロコとの再会を喜びながらも、シャーレの先生が残していった書類の山を前にして素直に喜べずにいた。シロコも凧太郎の再会に笑みを浮かべていたが、積み上がった書類を見るや否や表情を険しくして席についた。

「ん、この書類はそっちで確認して」

「……………」

「リントロー、聞ってる？」

「あ、はい。ただいま確認いたします」

「…………そっちじゃなくて、この書類だよ。そっちは先生が確認しなきゃいけないやつだから」

「へ？ あ、やべっ」

シロコの言葉に凧太郎はギョツと目を見開いた後、今しがた自分が確認したサインをつけた書類を見直してみれば、確かにその書類は自分ではなくシャーレの先生がサインをしなければいけないものだった。

凧太郎はシロコから手渡された書類ではなく、別の場所に積み重なっていた関係ない書類に手をつけてしまっていた。

その事に気がついた凧太郎は慌てた様子でどうにか間違いだらけの確認済みサインを消そうとしたが、シャーペンや鉛筆などで書いたわけではないので消せるはずもなく、修正液を探してゴソゴソと机の引き出しを弄り回している。

「……………」

そんな凧太郎の様子を、シロコはジツと見つめていた。

どうにかこうにか書類を修正しようとした凧太郎だが、下手に修正して書類が使い物にならなくなるくらいなら、シャーレの先生に丸投げしちまうかと諦めて、先生の事務机の上にそつと書類を放置しておいた。

なんの解決にもなっていないのに、まるで一仕事終えたかのような姿で席に戻って仕事を再開しようとする。

「——リントロー、何かあった?」

「…………え、いや別に、何もありませんよ」

「…………ん、嘘はつかなくていい」

「い、嫌だなあ。シロコちゃん、俺嘘なんてついてナイヨ」

シロコの言葉にドキッ、と心臓が跳ね上がるような感覚に襲われる。

「今日のリントロー、何か変だよ」

「…………そんなことないって」

「うん…………そのセリフは私の目を見ていべき」

「いや、その、日差しが強くて逆光が」

「今日は曇り、それにここはカーテンもある屋内だから関係ない」

「……あ、あっち向いてホイでもする!？」

「ん、それは後でやろう」

シロコがシャーレに到着し仕事を始めて1時間程度だろうか、とうとう痺れを切らしたような様子で彼女は凧太郎へと詰め寄った。

なんだか少しだけ怒っているようにも見える彼女の姿に凧太郎も戸惑った様子、場を和ませようとしてみたがそんな凧太郎のフオーロはバツサリと切り捨てられた。

グイグイと詰め寄って来るシロコに戸惑いが隠せない。

鼻先が触れ合いそうになるくらいに接近され、なんだがシャンプーのいい匂いがしているが、ドキドキしてられる余裕もない。なにせ目の前には明らかに不機嫌そうなシロコが座った目でジツとこちらを見つめているのだから。

「リントロー」

「は、はい!」

「もう一回だけ聞くよ……なにか、あつたんだよね?」

「い、いや、そんな事は——」

「リントロー」

「——あつたかもですねえ!」

ハア、とシロコは重い溜め息をついた。

そんなシロコの姿に凧太郎は冷や汗を流しながら、落ち着かない様子で視線を右へ左へとキョロキョロと忙しなく動かしている。なんだが自分に向けられる視線が鋭く突き刺さっているのを肌で感じる事ができた。

鋭すぎる視線に耐えきれず口が滑る。

「何があつたの?」

「そ、その、お財布無くしちゃって」

「嘘……さつき自動販売機でジュースを奢ってくれた」

「……す、スマホどっかに落としちゃったかな、なんて」

「それも嘘……さつきリントローのスマホの待ち受け画面を私とのツーショットに変えておいた。スマホのロックくらいは掛けておくべき」

「ッ!？」

これ以上誤魔化すようならこちらにも考えがある。

まるで視線でそう訴えかけて来るようなシロコの鋭い目つきに、凧太郎は顔を背けて気まずそうにしている。なんで彼女がこんなに怒っているかのようににじり寄って来るのか見当がつかない凧太郎。

しかし、シロコからしたら当然とも言える反応であった。

なにせ彼女がシャーレに到着して彼と仕事を始めてからというもの、凧太郎はずっと心ここに在らずと言った様子でボケーっとしており何度もミスをしているのだ。先程のようなミスも初めてではなく、何度も不注意でミスを起こしている。

話しかけても無反応、漸く反応したかと思えば話は聞いておらず、その上書類の上に飲み物をぶちまけていたりもした。

(……もしかして、先生が私を呼んだのってリントローの事で?)

時間は丁度お昼時と言ったくらい頃だったのだろうか。シロコの前元突然シャーレの先生から連絡が届いたのだ、その内容は溜まりきった事務仕事を一緒に片付けて欲しいとの事だった。先生の頼みということもあり、何より凧太郎とも久しぶりに顔を合わせることができると考えたシロコは二つ返事で承諾した。

しかしシャーレに到着してみれば先生の姿はなく朝から他の自治区へ出かけているという、そしてその場にはなんだか様子がおかしい凧太郎だけが残されていた。

そのうえ頼まれた事務仕事はどれもまだ余裕があるものばかり

だった。

以上の事から、シロコは自分がなぜ呼び出されたのかを何となく理解した。ならば、彼女がやる事は一つだけ。

「あー、えーつと……」

「……………」

これ以上、言い訳をするな。

シロコの視線がそう訴えかけて来ているの理解した凜太郎はダラダラと冷や汗を流している。まるでプロの殺し屋にでも尋問を受けているかのようなプレッシャーすら感じる、今の彼女にはそれだけの圧があつた。

「リントロー」

「な、なんでございましょうか？」

「私は、リントローに感謝してる」

「…………へ？」

「アビドスで、リントローにはずっと助けられて来た。それなのにリントローが困ってる時に力になれないなんて、私は嫌だよ」

「……………」

「…………それとも、私やみんなには相談できない事？」

純粹にこちらを心配している優しい眼差しだった。

凜太郎は彼女からそんな視線を向けられるのがなんだかむず痒く、なんて言葉を返せばいいかのかわからなくて気まずそうに視線を逸らしてしまう。

彼女が一步も引かないであろうことを理解させられた凜太郎は、根負けしたようについポロッと言葉をこぼしてしまった。

「——シロコちゃんはさ、誰かを殺したくらいに恨んだことってある？」

「……え？」

「……ごめん。今のやつば無し、聞かなかつた事にして。あの、その、ほら、あれだ！ ちょっとシャーレの仕事してるとそういう相談とか来るのよ、だからその、なんとなく気になったけというか……ほんと、気にしないで」

——やらかした。

予想だにしないような質問に、顔色を変えたシロコの様子からすぐに己の失態を理解した。いきなり自分は何を言っているんだ、こんなことを彼女に相談したところで相手を困らせてしまうだけだ。そう思つて、なんとか誤魔化そうとするが凜太郎は途中から自分でも何を言つてるのかわからなくなつていた。

「と、とりあえず、さつさとこの書類整理終わらせてご飯でも行こうか！」

「……ふう」

「大丈夫だつて、さつきのはなかつた事にしてくれていいから」

「ん、リントロー、ちよつと時間もらうね」

「へ？」

つい、ポカンと口を大きく開けて固まる。

そんな凜太郎をよそに、シロコは彼の手を掴むと有無を言わせず立ち上がらせる。一体何をしようとしているのか、見当もつかないまま凜太郎は抵抗する事なく手を引かれるがまま彼女についていく。

向かう先にあつたのは来客用の大きなソファだった。

「こつちに座つて」

「は、はあ……？」

誘導に従い、素直にソファに座ると彼女もその隣には腰を下ろした。

「えっと、シロコちゃん……これってどういう状況？」

「ん……くすぐりたいからあんまり動かないで」

「す、すんません！」

理解出来ない事に襲われると思考が止まるというが、こういう事なのだろうか。凜太郎は現在自分が遭遇している状況に思考が止まり、呆然と視線を向けている。

後頭部にはなんだが柔らかい感触、そして視線の先には自分を見下ろすシロコの整った顔立ちが広がっている。簡単に状況を説明すると、凜太郎はシロコに膝枕をされている。

なぜに膝枕をされているんだ？

ソファに座ったと思ったら、シロコに肩を引かれて半ば無理やり押し倒される形で膝枕をされていた。急すぎる彼女のアクションに呆気に取られ困惑するしかない。

「……リントロー、最近ちゃんと寝れてる？」

「あ、いや、寝付きは悪いかも、です……」

「睡眠は大事だから、しっかり休まないとダメ」

心配そうにこちらを見る彼女に、見抜かれた事に驚きながら苦笑いを浮かべて誤魔化すしかない。

ここ最近、どうにも寝つきが悪い。

眠る事はできても、すぐに目を覚ましてしまうのだ。夢の中に出て来る少女、奥底に封じ込めたはずの記憶を、脳裏に焼きついた変わり果てた姿と少女の命を奪う瞬間を繰り返し再生するかのように何度も見せつけられる。

その原因を、凜太郎はなんとなく理解していた。

あの日、百鬼夜行の自治区で偶然にも再会した夏油 傑との邂逅の後、どうにも夢見が悪く寝付けない日々が続いていた。元々、悪夢に魘される事はあったが更にそれが酷くなっているように感じた。

「ここには、私とリントローしかない。私はシャーレの仕事をしてた……だからリントローの独り言にもきつと気づかない」

「……ははっ、人に話せるような事じゃないよ」

「大丈夫。私は独り言に相槌をうつだけ」

「そっか……じゃあこれは俺の独り言だ。そうだな、俺の友達からの相談事って事にしようか」

強引な子だな。

けれど、とても優しくな声色で語りかけてくれる少女に自然と笑みが溢れた。自分の抱えている悩みなど、とても人に聞かせられるような話ではない。

だけど、なぜか彼女に自分の話を聞いて欲しくなった。

「そいつはさ、子供の頃は娯楽も何もない小さい集落に住んでたんだ。無知で馬鹿で、喧嘩ばかりなやんちゃ坊主だった。問題事ばかり起こしてたからしょっちゅう大人に怒られて、周りの子たちからもちよつと避けられてたんだよ」

「……………ん」

「けど、生意気なガキにも大事な友達がいたんだ。その子は大人しくて優しく、周りの子達からは好かれてる……そいつとは正反對な女の子だった。周りからの評価とかレッテルとか関係なしに接してくれる、優しくて聡い子だ」

凜太郎の言葉をシロコは静かに聞いていた。

彼女はただ静かに、膝の上で今にも泣きそうな震えた声で喋る少年のハネた黒髪に指を通し梳かしていた。

「最初は鬱陶しいなんて思ってた……けどいつの間にか、その女の子の事が好きになってたんだ」

「ツ……そっか」

「ずっと一緒に居られたらよかったのに、それも無理だった。女の子とは離れ離れになっちゃって、気がついた頃にはもう手遅れで、帰る場所も友達も、好きな子だって、いつの間にか『悪い奴』のせいで全部なくなってたんだ」

少しだけ、言葉を濁して伝える。

呪いを知らないこの世界の少女に、殺し殺されなどと伝えられるはずもない。凧太郎は言葉を選びながら、掻い摘むように話していた。なんとなくそれに気がついたシロコも、何も言わずに話を聞いている。

「それからそいつは、心に大きな穴が空いたみたいで過ごしてたよ。どれだけ暴れたって、どんなに勉強したって、何をしても……全然満たされなかった。何の為に生きてるのかだってわからなくなってた」

「そんな時、そいつは居なくなった筈の女の子と偶然再会したんだよ。女の子は自分の事なんて忘れてて、様子もおかしくて別人なんじゃないかって思うくらいに人が変わってた。それで……うん、最終的には女の子とは喧嘩別れみたいな感じで、もう会えなくなっちゃったんだ」

「それからそいつもちよつとだけ大人になって、前を向いて歩こうなんて思ってた時に……今度は自分の大事なものを全部奪って行った『悪い奴』と再会したんだ」

「許せなかったよ。殺してやりたいとすら思うくらいに、そいつのことを恨んでたんだ。悪い奴からも奪われないようにって護る為に身につけた力も、今度は自分が悪い奴になって奪い尽くす為に使うとしてた」

凧太郎の脳裏に過ぎるのは、2017年12月24日に新宿で夏油傑が引き起こした未曾有の大規模呪術テロである『百鬼夜行』。彼はこの戦いに参加していない、いや参加できていなかった。

自分の前に姿を現した夏油 傑という存在によって、この時の彼は

怒りを露わにして「暴走状態」とも言えるような様子であった。わざわざ相手の都合を待つ必要もないと、夏油が呪術高専に姿を見せた時に彼は周りの被害を考えずに派手に暴れた。

その事から、彼のこれ以上の暴走を危惧した五条 悟や高専関係者たちによつて取り押さえられ問題が片付くまでの間だけと、呪力を封じ込められ高専の一室に拘束されてしまっていたのだ。

しかし百鬼夜行当日に夏油 傑は新宿に現れず、乙骨 憂太を狙い高専内部に侵入して来たのだ。その事に気がついた凜太郎は自身に施されていた封印の拘束具を無理やり破壊して、夏油の元へと辿り着き彼と戦った。

怒りと言った負の感情は呪術師にとって重要な起爆剤^{トリガー}。この時の彼は怒りで我を忘れながらも自身に差し向けられた特級相当の呪霊を退けながら、夏油を圧倒できるほどの力を発揮していた。

しかし彼は夏油に敗れた。

凜太郎は自傷を顧みず、捨て身の攻撃によつて戦闘では呪霊の大群と夏油を相手に優位に立てていた。しかし、一瞬の隙を突かれて凜太郎は夏油に敗北した。

「——けどさ、結局そいつはビビってたんだ。肝心なところで足が止まっちゃまった」

本気で殺してやろうと思つてた。

あの殺意も憎しみも、紛れもなく本物だった。

トドメとも言える瞬間。

呪力を乗せた拳を叩きつける寸前。

凜太郎の拳は止まった、止まってしまった。

その瞬間、凜太郎の脳裏を過つたのは自分が殺した少女の姿だった。忘れたくても忘れる事のできない色濃く焼きついてしまった、命を奪うという行為の感触。

自分のトラウマがフラッシュバックした。

凜太郎が人の命を奪ったのは、両手の指で数えられる程度だ。凜太郎本人はわざわざ数えてなどいないと言っているが、それは嘘だった。しっかりとその数と相手のことを覚えている。

そのどれもが、自ら望んで人を殺したわけではない。

助けられた筈なのに助けられなかった人間、嬉々として人を殺す呪詛師との戦闘、事の経緯は様々だった。

呪術師としてなりたての頃、とある任務で自分を狙い襲い掛かって来た呪詛師と戦闘。戦闘経験も浅く、凜太郎は苦戦を強いられた。止むを得ず、殺害という手段でしか決着をつけられなかった。

戦闘後に何気なく覗いた自分が殺した相手の荷物の中から、幼児向けのおもちやが入ったプレゼントと、メッセージカードが添えられた小さなバースデーケーキが無惨な姿となって出てきた事があった。

どういった理由で道を踏み外したのかなんて知らない、だけど自分が殺した呪詛師にだって家族がいたのだ。

足が震えた。

耳鳴りと眩暈が止まらなかった。

小さな子供から自分が奪った、それに気がついた凜太郎は胃の中が空っぽになるまで吐いた。いつまで経っても彼が帰って来ないことを不審に思った補助監督になってまだ日の浅い新田明が迎えに来るまで、凜太郎はその場で吐き続けていた。

それが凜太郎にとって二度目の殺人。

「イキるだけイキっておいて、大事な時にビビって何もできなくなる……本当は意気地なしでみっともない、そーいう奴なんだよ」

夏油に敗れ、自分が目を覚ましたのは全てが片付いた直後だった。痛む体に鞭を打って、気配と残穢を辿り逃げたと思われる夏油の後を必死に追った。辿り着いた先で凜太郎が見たのは、既に事切れた夏油の姿とその側に静かに立ち尽くした恩師の姿だった。

れでスッキリできるほど殺し殺されを心の奥底で恐れている凜太郎には単純に考える事はできなかった。

「——カッコつけてるだけで本当は臆病者で狡くて卑怯な奴なんだよ、それがそいつの……津上 凜太郎って男の正体なんだ。どお、幻滅しちやったシロコちゃん？」

自嘲するように笑う。

彼女からの返事はない。

シロコは何も言わずに、ただ静かに凜太郎の髪を撫でていた。まるで教会の懺悔室で己の罪を告白する信徒になった気分だ、彼女から何を言われるのか怖くて逃げたくなる。けど、己の身を案じてくれる優しい少女の前からまで逃げ出す訳にもいかない。

「リントロー」

「……ッ」

彼女の呼び声に、肩が震える。

なんて言われるのだろう。

蔑まれるのだろうか、もしくはそんな人だと思っていなかったなんて絶叫されるだろうか、例えどんなことを言われても凜太郎は受け入れるつもりである。

「幻滅なんて、するわけない」

「……………」

「さっきのは、リントローの独り言……だから、今度は私の独り言だよ」

凜太郎の予想とは裏腹に、彼女は優しく微笑んでいた。

視線を逸らそうとする彼の頬に手を添えて、揺れる瞳に真っ直ぐ視線を合わせてた。触れれば壊れてしまう、シロコにはそう思ってしまった

うくらいに今の凧太郎が脆く小さい、年齢相応の子供のようにも見えていた。

だからちゃんと言葉にして伝えようと。

「——ん、ありがとう」

「アビドスに来たのが、私たちを助けてくれたのが、リントローでよかった。私は本当にそう思ってるよ。今だって、これから先だつてずっと……あの時、あの場所で、私が出会えたのがリントローで本当によかった」

言葉足らずで不器用な彼女なりの、精一杯の気持ちの伝え方だったのだろう。シロコは凧太郎のことを一切責めなかった。ただありのままを受け入れて、そしてお礼を言った。

凧太郎が何に対して悩み自責の念に駆られていたのか、シロコは理解してはいない。呪術師としての責務や責任、血生臭い呪いの戦いなど彼女には語り聞かせてはいない。根本的な解決方法など、わかりはしない。

それでも、あまり自分の事を多くは語ろうとしない少年に寄り添い手を差し伸べるべきだという事は理解していた。

自分を臆病者だと罵る少年は、いつだって自分たちの前に立って戦ってくれていた。

「リントローは、優しいね」

「……そんなことないよ」

「ううん、私が知ってるリントローは優しい人だよ。いつもはふざけてて、色んな女の子にデレデレしたりしてるけど、必ずみんなの前に立って戦ってくれた。どんな時も、ずっと私たちを助けてくれた」

「……ッー」

「だから、ありがとう」

言葉が出て来なかった。

彼女の言葉を否定しようとしても、声にならない言葉が掠れた息となって小さく吐き出されるだけだった。こちらを見下ろす彼女の優しい瞳に、ただ飲み込まれていった。

——差し込む日差しを背に影が一つに重なった。

『嫌な事も、辛い事も、たくさん……あるかもしれない。神さまは心地悪だからな……けど、だからってめげるな。生きてりやそのうち、全部笑い話にできる日が来るさ……人生、そう悪いこと、ばっかじゃない』

『だから、死ぬな』

『宿讎の器がなんだってんだ……俺さ、割とお前の事気に入ってんだぜ後輩。そんなお前が、死んだら……おれは……かなしいよ』

『あー、クソ。どうせ死ぬなら、男じゃなくて女の子に看取って貰いたかったね』

『……ははは、んな顔すんな。ほら、もう行けよ……つ……お前にはまだやる事があるだろ……おれはここでリタイア、悪いな情けない……せん、ばいで』

「——悠仁」

「………ツツツ!!」

意識が引き戻された。

壁に寄りかかり、微睡に包まれかけていた自分を意識をどうにか繋ぎ直した。バツと身を起こして即座に周辺を警戒する。周辺に人の気配はない、あるのはただドッキリと浸かり込んだような呪いの気配だけだ。

「……時間は？」

「ざっと15分と言ったところか。それよりも、怪我に具合はどうだ？」

「……黒閃をくらったところ以外は、まあ平気」

どれくらいの時間、意識を失っていたのか。

少年——虎杖 悠仁は確認の意を込めて、なぜか自分と殺し合った仲だというのに自分の身を案じて行動を共にする脹相へと視線を向ける。視線の先にはこちらを見守るように立つ、独特な髪型と浮世離れた雰囲気醸している端正な顔立ちの青年。

「多分、宿儺の影響だ。アイツの力が大きくなってるのを感じる」

あの渋谷での戦いから、まだ一週間も経っていない。

だというのに疲弊し傷ついた肉体は万全とはいかないものの、既に十分な行動ができる程に回復していた。あれだけ傷だらけだった肉体は反転術式による治癒もなく完治しかけている。

悠二はそれが自分のうちに潜む呪いの王の力の影響である事を理解していた。

無意識のうちに、強く拳を握る。

「悠二、俺に気をつかうな。高専に戻ってもいいんだぞ、俺も焼相たちの亡骸を回収したいしな」

「つかってねえよ……俺が高専に戻りたいかどうかの問題じゃねえんだ」

戻れる筈がない。

あれだけの事をしでかしておいて、今さらどんな顔して戻れというのか。悠二は幽鬼のように力なく立ち上がると。腸相に背を向けたまま暗闇を歩き出した。

脳裏を過ぎるのは、両面宿儺が引き起こした虐殺。

そしてそれを止める為に力を尽くしてくれた大事な先輩の最後の姿。

「宿儺が伏黒を利用して、何か企んでる」

「それに俺は人をいっばい殺した」

「自分を止めてくれようとした、先輩だって……俺の所為で死んだ………！」

ごめん先輩。

俺はもう皆と一緒にはいられない。

——約束は、守れそうにないかもしれない。

時計じかけの花のパヴァーヌ編

私　ぶつちやけ　今日ノリで来たんで

b月☆日

アビドスの女子生徒に唇を奪われる男、スパイダーマツ！（やけくそ）

あー、ダメです！

女の子がそんな軽々しく男に近づくのはお兄さんの良くないと思います！　男つてのはね、どうしようもない狼なんですよ！　エツチすぎるのはダメ！　もっと段階踏んでいこうや！

そうじゃないと俺の心臓が持たないっすわ！

とりあえず、手を繋ぐレベルからお願ひします！

……ふうく、落ち着けよ津上　凜太郎。

男はいつだつてクールに行こうじゃないか。

まだ慌てるような時間じゃない。

心頭を滅却すればなんとやらだ、この程度の苦難なんていくらでも乗り越えて来たじゃないか。そう、今までの血生臭い戦いとか宿讎と殺し合うハメになった事とかを考えれば、なんてことないトラブルのはずだ。

そうだ、ふざけて女装してたバカ目隠しの姿でも思い浮かべれば、萎えて心が落ち着くはずだ。

そう、なんてことのないトラブルだ。

たどえそれがシロコちゃんに……き、いや、接吻をされるような事であろうと、俺は余裕を持つて対処できるはずだ。そうべちゆにくあwse dr ft gyふじこip……ンツ、なんの問題もない。

そ、そんな簡単に墮とされるなんて、俺はちよろくななんてないんだからね！

——いや、やっぱむりでち。

一瞬だったけど柔らかった。

というかシロコちゃんめちやくちや可愛かったんですけど！いきなり過ぎて何が起こったのか理解できなかつたけど、そんな簡単に男の子との距離を詰めるのはやっぱりダメだってありがとうございませす！

唾然としてる俺を見てちよつと恥ずかしそうに笑うのは反則です。

あー、しんど。

可愛いは正義って言うけど、可愛い過ぎるのは罪だよね。もうハートは射抜かれちゃったも同然だよ。まあ、俺はちよろくないからまだ堕ちきつてはないけど！

何度でも言う。

そう、おれはべちゆにちよろくない。

b月j日

——うわ、きも（前のページを見返しながらか）

動揺が酷すぎてくださいぶキモい事になってる。

え、これほんとに俺が書いたん？ あ、そっか俺か、いつもこんな感じで殴り書きしてるか。しかし我ながらどんどん酷い事になって行くなこの日記帳、絶対誰にも見せられないって。シャーレの先公とかに見せたら絶対ネタにされる。

よし、とりあえずメンタルリセットは完了したので落ち着いた。

まさかシロコちゃんがあんな大胆な行動に出るとは。もしかして俺ってそんなに態度に出やすいほうだったのか？ だいぶ前から先公にも妙に心配されてたし、当番手伝いに来てくれたユウカちゃんとかも俺の顔見るなり「ちよ、大丈夫!？」って驚いてたからな。

うん。今度からは気をつけよ。

それもこれも、全部あの夏油 傑って奴の所為だな。うん、アイツが悪いわ。今度あいつの店のネットレビューに「店員が胡散臭くて変な前髪です」って低評価爆撃でも叩きつけてやる。あとデカイドリンクサーバーも付けろ。

いやしかし、まさかまさかの、とうとう俺にもモテ期到来……ってコト!? いや、前から割とモテてたけどね!

でも、これってつまりそういうことではないんだよね!?

俺のクソダサい勘違いとかではないよね!? 意外と距離感の近い子に対してもしかして俺に気があるのかってなった後に「津上くんのこととはそういう目で見れないかな」とか急に言われたりしない、よね!? あれ結構トラウマになるよ!?

いやマジで、すげー怖いんだけど!

……うん、思わせぶりの女の子って怖いよね。

いやまあ、シロコちゃんとかホシノちゃんに限ってそんなことはないだろうけどさ。

いや、だとしても心配だ。もし仮にこれが俺の勘違いでないとしてだ。こんな事言うのは失礼かもしれないが、彼女たちその内悪い男に捕まりそうで怖いよ——そんなヤローが居たらもちろん捻り潰すが——俺を、というかシロコちゃんたちはもう少し男を見る目を養ったほうがいいよ(曇りなき眼)

とりあえず、俺も距離感もうちよい考えたほうがいいのかも。

思春期の女の子に対してそんなにベタベタしに行くのもやっぱりダメだよね。いや、けどやっぱ女の子とイチャイチャしたい。俺はいつたいたいぐらいがいいんだ。いつそのこと今度マリーちゃんに懺悔しに行くべきか?

まあ、それはそれとして話題を変えよう。

どうやら俺が百鬼夜行でちよつと暴れたことがシャーレの先公の耳に届いていたらしい。もちろん、しっかりとお叱りを受けた。どこから情報が漏れたのか気になったが、どうにもイズナちゃんがちよつとだけ口を滑らせてしまったらしい。

といつても彼女も夏油から口止めをされていたようで、必死に誤魔化したようだ。シャーレの先公が知っているのは俺が百鬼夜行のどこかで揉め事を起こした、という程度の認識みたいだ。

いやまあ、事情を知らない人からしたら、0対100で俺が100悪いんだろうけど。

わざわざひげらかす様な事情でもないの、右から左へ聞き流すよ。うお叱りの言葉は受け取っておいた。で、その際シャーレの先公がお詫びの品を持って謝罪をしに行こうとしていたが俺がそれを必死に食い止めた。

いや、大丈夫だってあの変な前髪にそこまでしなくても。

それでも「生徒が問題を起こしてしまったなら、大人としてしっかりと誠意を見せに行かないと」なんて菓子折り片手にちよつといい事言いなから食い下がってきたので「実はその相手はイズナちゃんに手を出そうとしてたロリコンなんだ！」って咄嗟に嘘をついておいた。

その言葉に先公は驚いた顔をした後「そ、そうなんだ」ちよつと引き気味な顔をした。今度イズナちゃんに何かされなかつたか事情を聞きに行くとかなんとか。

というか、お前がそんな顔する資格ないからな？

お前生徒のパンツに顔埋めてただろ？

なんか余計にややこしくなった気がする。

それと夏油、正直すまん。俺の所為でシャーレの先公からの認識が百鬼夜行にいるロリコンになってしまったが、まあ甘んじて受け入れてくれ。

b月・日

呪い発見。

ちよつとめんどくさいことになった。

b月@日

現状確認。

生得領域？もしくは結界術？と思わしき場所に閉じ込められた。なんだか気配がチグハグな為、これがどちらに属するものなのか判別ができない。というか結界術はそこまで熟練度が高いわけじゃないのでわからんちん。

しかも俺だけが閉じ込められたわけじゃない。

この場には俺だけではなく、最悪な事にキヴォトスの生徒も一緒だ。その子はなんと以前、シャーレ経由で警備の仕事を受けた時に出会った自害の……じゃなかった『慈愛の怪盗』だがなんとか呼ばれている怪盗ちゃんだ。

あらやだかわいい。

白いタキシード風の衣装に目元を覆う白いドミノマスクが特徴でなんとも可愛らしいね。それとこの怪盗ちゃんは『七囚人』と言われる人物の一人らしい……いや、なにそれ知らんって。

軽い自己紹介をした時に、怪盗ちゃんの話聞いていて首を傾げていた俺に少し驚いたような反応と共に説明してくれた。どうもどうも。すいませんわざわざ、優しいね。ところでモモトークやってる？なんでも、元々は『ヴァルキューレ警察学校』の『連邦矯正局』とやらに収監されていたマジもんの囚人達だったらしいが、『連邦生徒会長』とやらが失踪したことで各学園や『連邦生徒会』の施設各所が混乱した隙について脱獄した……らしい。

え、それコスプレじゃなかったの？

という事はもしかして君って本当に怪盗だったの？

前に追いかけてこした時もマジで盗みに来てたのか。

まあ俺もそれを阻止できず結局は物を盗られたけど。万引き犯追いかけてるくらい気持ちだった。

ほけーつと話を聞いていたら呆れられた様にため息をつかれた、ごめんで。「まさか私わたくしが、こんな間が抜けてそんな人に捕らえられそうになったなんて」とか言わないでちょうだい、普通に言葉の棘が鋭くてグサグサくるから。

とりあえず、なぜこんな状況になったかを軽く説明すると。

そう、あれは確か、先公がゲーム開発部？なるものたちに救助を求められシャールを離れた後、俺が先公から任された一向に書類の減らないシャールの仕事に恐怖を感じて逃げ出した時だったか。

とりあえずこの後の書類仕事のお供としてコンビニでお菓子と飲み物を買って、適当にブラブラしようかなー、なんて思っていた時だ。そんな時にこの怪盗ちゃんとお会したのだ、向こうは俺の顔を見るなり「うげ！」みたいな反応を見せて逃げたのだが、それが面白くて俺は彼女を追いかける事にした。

いつぞやの鬼ごっこの再開ですね。

途中で「なぜ追いかけてくるんですか!？」と悲鳴にも似た絶叫をされたが、そりやあんな反応を見せられたらこつちも楽しくなって追いかけてやうって。

んで、怪盗ちゃんが小道具を駆使して逃げ回り、ビルの上を走ったりで散々追いかけてまわした後、先に怪盗ちゃんが先にばてた事によって追いかけてこは終了した。彼女には途中で俺の呪力をくつつけて残骸を残すようにしておいたので逃げきれないって。

息も絶え絶えでプルプルしてる彼女に「大丈夫？水でも飲む？」とさつき買った水を差し出せば「誰のせいだと……!」って感じで睨まれた。

あ、水は素直に受け取って飲んでた。

話を聞いていくうちに、どうやら彼女が「一仕事」終えた後であるうことがわかった。「ふふ、私をこのまま捕まえますか？」と聞かれた

が正直、捕まえるつもりはない。というかあの時と違って今の俺は警備員でもないし、捕まえる為の動機も理由もない。

それと怪盗ちゃんと話していて、そんなに根が悪い子でもなさそうだな、と感じていたので自分がどうこうする理由にはならない。思ったままのことを伝えれば、彼女は少し呆れたように笑っていた。うん、笑顔も素敵だ。

まあ、彼女が何をやらかして『七囚人』なんて呼ばれる存在になったかは知らんが、これで彼女がとんでもないことをやらかしてたらそれは俺が人を見る目がなかったというだけだ。

そして、問題はここからだ。

彼女が手に入れた美術品とやらを見せてもらったのだが、その美術品の片方が明らかに「異質なモノ」だった。彼女にこれをどこで手に入れたのか聞いてみたが、闇オークション会場で妙に目を惹かれて手に取ってしまったと、困惑混じりに言っていた。

それを見た瞬間、思わず動揺してしまった。

何せの彼女が見せたその美術品とやらが、明らかに呪いを孕んだ「呪物」だったからだ。彼女と追いかけてくことをしていて、実際に目で確認するまで呪いの気配に気がつかなかったのだ。

形状は小さなステッキといえいいのか、ステッキ自体に問題は無い。問題があるのはステッキの持ち手と思われる部分、不気味な顔がデザインとして施された彫刻。

それが明らかに呪物と思われる物だった。

俺の様子に怪盗ちゃんは困惑していたが、俺はすぐにでもそれを破壊しようと思っていた。宿讎の指や他の特級呪物のように「縛り」で存在を保証していかないのなら破壊は可能だ。

呪力を込めて破壊しようとした瞬間、問題が起きた。

先程も説明したように、眩い光に包まれ生得領域もしくは結界術の中に怪盗ちゃんと共に閉じ込められてしまったのだ。

場所はホテルの一室とでも言えればいいのか。

馬鹿でかいサイズのベット、ピンクのネオンで彩られた、如何にもと言った雰囲気、シャワーや冷蔵庫なんかもあり、どう見ても「アレ

な”場所だ。

——うん、明らかにラブホですわここ。ほんとありがとうございます
ました。

眩い光と共に閉じ込められた瞬間、目の前の光景に五条先生の無量
空処でも喰らったかのような宇宙猫状態になってしまった。じよ、情
報が完結しない……っ!?

いやなんでラブホなの？

もつとこう、なんかあったでしょ、廃墟とか廃村とか、そういうジ
メジメした場所が大好きじゃん呪お前らいって、いや確かにこういう場所も
ドロドロとした負の感情があるかもしれないけど、なんでラブホなん
？

隣にいた怪盗ちゃんも状況が飲み込めず、ポカーンとした顔だった
し。とりあえず、呪いの気配もそれとなく感じ取れるようになったの
で警戒しながら部屋の中を探索してみたのだが、部屋は普通のホテル
といった感じだった。

動揺している怪盗ちゃんをジョーク混じりに落ちつかせようとし
たが、あえなく失敗に終わった。顔を赤くして距離を取られてしまっ
た……え、なんで？

b月h日

とりあえず、元凶であろう呪いをぶっ殺してチャチャつとこの空間
から脱出しようと思っていたが、想像よりも厄介というべきかそう上
手くはいかなかった。

うん。

恐らくというか、十中八九ここは呪霊の腹の中って感じだろう。スマホも圏外で使えないしかなりめんどうくさい状況かもしれない、物理的な強硬手段での脱出は不可能だと思われる……多分。

いや、こつちも領域を使えばワンチャンいけるか？

だとしても不確定要素が多いので、領域を使うのは最終手段としてしよう。そもそも、俺も安定して領域を使えるかわからん。宿儺と戦った時はほとんど自己流だったし、うまく機能してくれるかどうか。

この空間を調べてわかったことなのだが、まずあのピンクの光がキツイ室内から外に出る事はできた。が、しかしどういう事か俺と怪盗ちゃんはこのホテルの階層、六階から脱出することができない。

妖しい証明で照らされた長い廊下、なんとこの長い廊下はつき当たりが存在しないのだ。途中で上の階と下の階に繋がる階段を発見したのだが、これも使えない。

簡単に言うと、空間がループしている……とでも言えばいいのか。どれだけ歩いても同じ場所に戻ってくるのだ。階段の方も同じだ、上下の空間がループしていて、ずっと同じ階層をぐるぐる回っている。

気がつけば、最初に自分たちがいた『601号室』の前に戻って来ている。こういう系統の空間に閉じ込められるのは初めてだが、以前に冥冥さんや歌姫先生をナンパした時に過去に似たような状況に陥ったという話を聞いたことがあった。

その時は五条先生が乱入して来てどうにかなったらしいが、その五条先生はいないし俺がどうにかするしかない。

というわけで、過去に歌姫先生たちが試そうとしたらしい、二手に分かれて全力疾走する事でループする空間に綻びを生じさせるという方法を怪盗ちゃんに協力してもらい試したが無理だった。

曲がり角に入った瞬間、逆方向へと疾走したはずの怪盗ちゃんが目の前から出て来て思いっきりぶつかってしまった。お互いに慌てて急ブレーキをかけようとしたが遅かったね。

キヴォトス人の全力疾走タツクル恐るべし。

呪力を使わず生身の状態だったので、咄嗟に彼女を受け止めるところか力負けしてそのまま吹き飛ばされるレベルで押し倒されて廊下

をゴロゴロと転がってしまった。

肋骨折られるかと思つた（ガチ）。

華奢な身体でどこからそんなパワーが出てくるんだ。マジでこの住人つて天然のフィジカルギフトでしょ。あれは最早美少女の皮を被つたダンプです。

ダメージで膝が震えて立ち上がるのに時間かかったよマジで。それなりの衝撃があつたので怪盗ちゃんから割とガチ目に心配された、ごめんつて俺が貧弱なだけだからそんな顔しないで。

そんなこんなで脱出失敗。

他の方法を試そうかと思つたが、脱出の糸口を探す為の探索は強制終了させられた。二人で廊下に座り込んでどうするべきか唸つていたが、突然廊下の天井に取り付けられたスピーカーから放送が流れ出したのだ。

『お客様に ご案内申し上げます。』

『本館は、まもなく消灯のお時間でございます。』

『お客様は速やかに、お部屋の方へとお戻りください。』

とかなんとか、こんな感じのアナウンスだった気がする。

この放送に怪盗ちゃんは驚きながらも、そんなの知つた事ではないと脱出する為に探索を続けようとしていたが、それとは逆に俺はヤバいと感じていた。

何せこの放送が流れた直後、静まり返つていた呪いの気配が尋常じゃないくらいに膨れ上がったからだ。本能的に危険を察知できるレベルでヤバかった。

一目散に怪盗ちゃんの手を引いて『601号室』の中へと戻つた。急にどういふつもりなのか、なんて怪盗ちゃんは若干ポンポンしていたがそんな彼女を宥めつつ、数分後に自分の判断が正しかった事を理解させられた。

部屋の外から感じる呪いの濃さが先程とは嘘のように変わった。呪霊も見えず、呪いを感じられない怪盗ちゃんが呪いの気配にあてら

れるくらいだ。

俺だけなら外に出てもなんとかなるかもしれないが、怪盗ちゃんがいる以上は彼女を置いてきぼりにして無茶はできない。

それと恐らくだが、この結界には「ルール」が存在する。

例えるならば、宿儺や俺が使った領域の必中効果を消して逃げ道を与える事で効果を底上げする「縛り」のような、それに近いものがある。

その証拠として室内、この『601号室』は廊下とは真反対に呪いの気配がまつたくしない。予想が当たってれば、この室内が用意された「逃げ道」……的なものといったところか。

こんな事ならもう少し結界術について勉強しておくべきだった。

それはそうと、異性がすぐ近くでシャワー浴びてる状況ですごくドキドキします！

すごく心臓に悪いです！

うごご、なんでこう、もつと警戒心持とうよ俺だつて一応男だからね！　そういう目で見られてないか、もしくは大丈夫って信頼されてるって感じなんですかね!?　ありがとうございます！　その信頼に応えたいと思います!!

b月&日

多分、閉じ込められて4日目。

時間の感覚がよく分からなくなってくる。

しかし昨日は中々眠れなかった、いつものように悪夢に魘されたとかではない。悪夢に関してはシロコちゃんに胸の内をぶちまけるように話した後、少しはマシになった。

眠れなかった理由は別で、所謂怪奇現象といえればわかりやすいか。

壁や扉を強く叩かれたり、ガチャガチャとドアノブが動いたりインターホンをならさたりと、とにかくうるさくて寝る気にならなかった。

喧しい、小学生のイタズラかよ。

けどあれは多分、扉を開けちゃいけないやつだ。

あ、怪盗ちゃんに呪いの存在について説明した。

呪いを感じできず視認することもできない彼女だが、特殊な状況下ともなればパンピーであろうと呪霊なんかは見ることもできるし触れることだってできる。

巻き込まれている以上、そうなった時の事を考えて説明していた。その方が緊急事態にはお互いに余計な混乱を招いたりしないだろう。話を聞いた彼女は「何を馬鹿な…」とでも言いたげな顔をしていたが、実際に巻き込まれあのアナウンス直後や呪いの存在の片鱗を嫌でも感じ取るハメになったのだ、俺の言葉に理解を示してどうにか納得していた。

彼女からの質問にも色々丁寧な答えた。結界術のことや、今置かれている状況なんかのことも、なるべくわかりやすく説明した。知識があるのとないのとは、対処法なんかもだいぶ変わってくるだろうから。

彼女の様子にも気をつけようと思う。

いきなりこんな訳のわからない事態に巻き込まれて、不安やストレスを感じないなんて訳はないだろう。少しでも彼女が安心して落ち着けるようにしてあげよう。

それと恐らくだが、非術師である以上はキヴオトスの生徒であろうと呪いに対する耐性は高くはないはずだ。神秘とやらを宿しているも、それがどこまで彼女を守ってくれるかわからない以上は警戒しておくべきだ。

守れたはずの人間が俺の油断で憑り殺されるなんて、笑い話にもならない。

何か異変を感じたり、助けが必要になったら大声で俺の“名前”を呼んでくれと伝えた。

それとアナウンスが入ったら、何がなんでもこの部屋に戻って来るように言い聞かせておいた。多分これも時間制限を課した“縛り”に近いものだろう、身近な人で言えばナナミンの時間外労働という残業フイーバータイムに近いか？

となるとアナウンスも“縛り”か何かか？

相手に自分の出方を教える、または警告を促す、とかそういう感じの。それなら自分の手の内を明かす、術式の開示にも近いだろうし。

あとは気がついた事とか何か変化があったとすれば、廊下の壁一面に不気味な血痕と手形が大量に貼り付けられてたり、変な足跡が日を追う後に『601号室』に近いて来ている事とか？ このペースだと2〜3日くらいで足跡が部屋の前まで来るな。

それを見て怪盗ちゃんは小さく悲鳴を上げてた。

なんかホラー映画みたいな展開になって来たな。

ま、こつちから手出しができない以上、相手が痺れを切らしてアクションを起こすまで待つしかないか。俺の読み通りなら、そのうち向こうから出て来てくれる筈だ。

こういう術式？ の相手となると単純に殴って済ませられないから面倒だ、本当にだるいつたらありやしない。

あとは時間との戦いか？

俺が持ってた食料が持つてくれればいいんだが。

b月y日

怪盗ちゃんが夜中に扉を開けそうになっていてビビった。
とりあえず呪いは確実にぶつ殺す。

どういう訳なのかは知らないが、アレはタチが悪いというしかない。

—— ゆっくりと意識が覚醒する。

重くのしかかってくるような瞼を開いてみれば、ここ数日で見慣れてしまった趣味の悪い室内が視界に映り込んでくる。変わり映えない光景と未だに変化のない状況に溜息を吐いてしまう。

睡魔の誘惑に抗いながら少女—— 清澄アキラは寢床からゆっくりと身体を起こして、凝り固まった四肢を伸ばした。

(……状況に変化はない。いったい、いつまで続く事になるのやら)

チラリと、視線を部屋の隅へ向ける。

そこには自分と一緒にこの気味の悪い謎の空間に閉じ込められた男子生徒の姿がある。彼は部屋の隅へと寄せた小さなソファの上で猫のように丸くなりながら、スースーと小さな寝息をかきながら心地良さそうに眠っている。

こんな状況だというのに、慌てた様子もなく眠りにについている神経の凶太さに呆れるどころか感心してしまうくらいだ。

記憶と感覚が正しければ、彼とこの空間に閉じ込められて既に6、7日ほどの時間が過ぎてている筈だ。ここでの過ごす時間は思っていたよりも快適だ……自分の意思とは関係なく閉じ込められている点を除けばだが。

(……食料も心許なくなってきましたね)

ガサリと、袋を漁る。

それはアキラと凧太郎がこの空間に閉じ込められた時、凧太郎がシャーレの仕事をサボって買いに行ったお菓子や飲み物といったものだ。この隔絶された空間、なぜか水や電気は使うことができるため最悪の場合は飲料に困ることはないが、食料はそうはいかない。

自分はまだ問題ない。

だが、先に限界が来るとすれば彼の方だろう。

アキラは静かに、寝息を立てて眠る凧太郎に視線を向ける。

なにせ凧太郎はこの空間に閉じ込められてから、その食料のほとんどを彼女へと渡して自分は必要最低限のモノしか口にしていないのだ。本人は飲まず食わずでの活動は慣れているから大丈夫だと言っていたが、どこかで必ず限界が来る筈だ。

「……呪い、負の感情から生まれる異形の存在……こんな状況に巻き込まれてさえないなければ、興味深いものですが」

呟くようにごちる。

本来ならば与太話と簡単に切り捨ててしまえる話の内容、だが実際にその呪いという存在の片鱗を感じ取るハメになってしまったのだ。おかげで、“それ”が確かに実在するという事を嫌でも理解させられた。

理解の範疇を越えている超常的な現象、それに対処できる少年が一緒であったことは不幸中の幸いとも言えるべきか。

『出口の無い密室に閉じ込められた男女、何も起きない筈もなく……』

『はっ…』

『つまりここは○○しなきゃ出られない部屋……ってコトオ!? いやああ、俺の貞操が奪われるうう!!』

『もしかして結構余裕ありますか?』

『え、あ、うん。まあ別にこういう空間（呪霊の結界）に来るのは初めてじゃないし、閉じ込められるのに慣れたというか』

『こ、こういう空間（ドギツイピンクの照明に包まれたアレな部屋）に来るのが初めてじゃない!? 閉じ込められるのに慣れた!?!』

アキラから見て、津上 凜太郎とは随分とおかしな少年だ。

第一印象からして、飄々とした態度で軽薄そうなイメージのあった人間だがそんな態度とは裏腹に随分と紳士的な振る舞いをする一面もある。そして何より、この空間に囚われてから自分の事を痛いほど気遣っているのがわかった。

アキラが就寝する時も自分は床かソファで寝ると言い張り、彼女がシャワーを浴びる際なども地面に頭を打ち付けて気絶しようとするくらいだった。

他者とあまり深く関わることはなかったが、彼との生活は新鮮で退屈せず面白みのあるものだった。

凜太郎が悪い人間ではない、それはアキラも理解できた。だがそんな彼が、別人なのではないかと錯覚させられるほど恐怖を抱きそうになった時があった。

それは記憶に新しく、鮮明に覚えている。

脱出の一口は見つからず、『消灯時間』を迎えれば連日のように怪奇現象に見舞われる。どこからか聞こえてくる笑い声、一人でに電源の入る家電、誰もいない筈なのに響く足音、そして扉を叩き何度も鳴らされるインターホン。

その一つ一つが、着実に清澄アキラという少女の精神を疲弊させていっていた。

『お客様に ご案内申し上げます。』

『本館は、まもなく消灯のお時間でございます。』

『お客様は速やかに、お部屋の方へとお戻りください。』

その日も脱出の手がかりは見つからず、聞き慣れて来てしまったノイズ混じりの不気味なアナウンスに従いこの『601号室』へと帰還した。怪奇現象のせいでもろくに眠れず、疲れや気怠さの残る身体を引きずるように戻った。

さつさと眠りたかった。

趣味の悪いベッドへと倒れ込めば、まるで電源が落ちるかのようにアキラの意識は遠のいていった。だが熟睡などできなかった、その数時間後にはまるで彼女の眠りを邪魔するかのようにインターホンが響いたのだ。

何度も鳴らされる耳障りなインターホンの音によって彼女は目が覚めた。凜太郎に視線を向けてみれば、彼はそんなこと意にも介さないかのようなスヤスヤと眠っている。

それが腹立たしかった。

凜太郎からは「絶対に返事をするな」、「何があっても部屋の扉を自分から開けるな」とアキラは忠告されていた。それがなぜなのかは教えられなかった、だが教えてもらわずとも理由はなんとなくわかっていた。

それでも、限界も近く怒りで我を忘れそうになっていた彼女は文句を言つてやりたかった。苛立ちを露わにするように、未だ鳴り響く扉の前まで行き怒鳴り声をあげてやろうと思った。

——彼女が扉の前に立った瞬間、音が鳴り止んだ。
引き返せ。

扉の前に立った瞬間、冷静になった彼女の理性が悲鳴を上げていた。だが彼女の体は吸い込まれるように、扉のドアスコープへと引き寄せられていった。

『遊びに来たよりんたるー！』

そこには小さな少女がいた。

真っ白なワンピース姿。腰まで伸びた灰色の髪、暗闇の中で爛々と輝く青い瞳、自分よりも明らかに年下であろう小さな女の子が首を傾

げながら扉の向こうで立っていた。

『ねえ、お姉ちゃん。この扉を開けて、りんたろーと遊びに来たんだ！』

なぜ、少女がこんな場所にいるのか。

様々な可能性が脳裏を過った。自分たちと同じようにこの空間に閉じ込められてしまったのか、最初はそう思いもしたが彼女が発する言葉にその可能性はないと判断できた。

なぜ、凜太郎の事を知っているのか。

なぜ、見えていない相手のことを「お姉ちゃん」だと判断できるのか。

『……開けてよ、お姉ちゃん』

恐怖を覚える。

扉の向こう側で楽しそうに笑う小さな少女の笑顔が不気味に感じようがなかった。スコープ越しに目があった気がした、アキラはゆっくりと部屋の奥へと引き返そうとした。

『開ける！！』

小さな悲鳴が漏れた。

目を見開いて、絶叫するかのような声量。豹変した少女の姿に恐怖を感じずにはいられなかった。

だがその言葉を聞いた瞬間、彼女の身体は本人の意思とは関係なく、扉を開けようと動き出していた。まるで操られているかのよう、ゆっくりと自分の体が、ドアを開けよう腕が伸びていくのだ。

『——ストップだ、怪盗ちゃん』

『はあ……っ……は、え？ 津上……さん？』

『ごめん。気づくのが遅くなっちゃった、もう大丈夫だから』

アキラがドアのロックを外そうとする最中、大きな手が彼女の肩を掴むと扉から引き剥がすよう引き寄せられた。体勢を崩した彼女が呆然と見上げる先にはいつになく真剣な表情で、それでいて安心させようと笑いかけてくる少年の姿がある。

『ゆっくり深呼吸して……あとは、俺に任せて』

『っ……………！』

『……………あ！ りんたろーだ！ ねえ！ 遊びに来たよ！』

『……………あ、あ、？』

呼吸することすら忘れていた身体が、肺に空気をとり込もうとして息が荒くなる。そんな彼女の様子を気に掛けながら、凧太郎は聞き覚えがある声に意識が引つ張られていった。

なにせその声音は、記憶に焼き付いて離れない少女の声だったからだ

『ふふ、遊ぼうよ！ りんたろーに会いたくてここまで来ちゃった！』

『……………』

『もうっ、そのお姉ちゃんってばひどいんだよ。開けてっってお願ひしてるのに、全然中に入れてくれないんだもん！』

『……………』

『ん、何して遊ぼうかなあ。あ、かくれんぼでもしようか！ 隠れるのも見つけてくれるのも、上手だったもんね！……………あれ、聞いている？』

『……………なるほどね。ここはお前の結界内だし対象の情報を読み取る事くらいできるか。んでそいうやり方ってわけか、呪いらしくて随分と陰気なやつだな……………で、お前誰だよ？』

『誰だって……………も、ひどいなく、私は』

『いつまで化けてんだ……あの子は死んだ、俺が殺した、だからもういない。てめえを今すぐぶち殺してやりたいとこだが、怪盗ちやんの方が心配だ。さっさと失せろ』

『ふふふ、そっか、ひどいなく……』

少女は不気味な嗤い声を響かせ霧のように消えていった。

視線だけで人を殺せるような冷たい表情だった、そんな彼の横顔をアキラは確かに覚えていた。凜太郎に肩を借り、様子が落ち着くまでとずっと側にいてくれた。彼が発した言葉の中で気になるモノがあったが、アキラはそれに触れることはなかった。

——まだ新しい、数時間前の記憶を掘り起こしてアキラは重い息を吐いた。

(とりあえず、顔を洗って……どうせならシャワーも浴びてしまいまししょうか)

彼女は重い足取りで、シャワールームの横に備え付けられた洗面台へと向かう。ひとまず、まだ残る眠気を吹き飛ばしてしまうと冷たい水で顔を洗った。それからまだスヤスヤと眠る凜太郎の姿をジッと見つめた後、彼が目覚ましていない事を確認した身に纏う衣服のボタンに指を掛ける。

なにせこの部屋、そういう目的の為に利用されるホテルの為、シャワールームはガラス張りになっており殆ど丸見えの状態なのだ。いくら『七囚人』と恐れられるようなアキラといえど、彼女だって年頃の女の子である。恥ずかしいものは恥ずかしい。

「——ッッ!!」

シャツのボタンに手を掛けて、脱いでしまおうとした瞬間だった。ゾクツ、と全身の産毛が逆立つような感覚に襲われた。のしかかってくるようなプレッシャー、ジロリと不気味な視線を向けられる感覚。

彼女はここ数日で、呪いの気配を感じ取れるようになってしまった。呼吸が荒くなる、急いでまだ眠りこけている凧太郎を起こさなければ。そう思つてシャワールームからアキラは飛び出した。

「や、おはようアキラちゃん」

「きゃあ!! び、びっくりさせないでください」

「あはは、ごめんごめん」

いつの間にか、そこには凧太郎が立っていた。

周りを確認せず慌てて飛び出した為、口から心臓が出てくるんじゃないかと思うくらいにアキラはびっくりしてしまった。そんな彼女の様子に凧太郎は悪びれる事なく、面白そうに笑っている。

そんな彼を睨むように視線を向けながら、アキラは気崩していた衣服を整えていく。

「それよりも、今なら多分脱出できるよ」

「――、え?」

「気がついたでしょ、なんとなく空気が変わったの。俺の読みが正しければ、今ならここから脱出できる気がする」

凧太郎の言葉に、アキラは驚いて表情を固めてしまう。そんな彼女の姿に凧太郎は笑いながら、彼女の手を掴んで部屋の外へと続く金属製の扉を開けて廊下に出る。手を引かれるアキラも、突然の行動に驚き転びそうになったがどうにか凧太郎の後へと続いていく。

部屋の外は変化していた。

バチバチと照明は点灯と停電を繰り返し、まるで廊下全体が溶けていくかのように形を変えていき剥がれ落ちて来ていた。そんな光景に

「なぜ、今なら脱出できると!?!」

「説明してる暇はない。それに説明したところで、ややこしいから

アキラちゃんじゃ理解出来ないと思うよ。それよりもほら、急ぐよ走って」

「は、ちよつと待つててくださいー！」

長い廊下を走る。

どこか焦った様子で走る凜太郎の姿に、それをほど急を要することなのだ。アキラも走る足に力を加える。

ループする筈の長い廊下と階段、しかし今はあれだけ鬱陶しかった延々と続く廊下も階段も、その厄介な存在がなくなり確実に状況が変わっていることがアキラにも理解できた。

凜太郎に導かれるまま、たどり着いた先は長い廊下の行き止まりであつた。

そこには大きな“門”があつた。まるで壁を黒く塗つたかのような、異質な存在感を感じさせる不気味な“門”が存在した。

数メートル先に、佇むように存在する“門”に視線が奪われる。

「あそこから、この空間の外に出られるよ」

「……………」

違和感。

「ほら、行こうアキラちゃん。俺と一緒に外に出よう」

「……………」

違和感。

アキラは言い表しようのない違和感を覚えていた。

アキラにはそれが何かわからない、けれどもいまこの状況は絶対におかしいと彼女の直感が言っていた。先程から強くなり続ける呪いの気配、彼女はそれをヒシヒシと感じていた。

まさかと、アキラの表情に緊張が走る。

彼女の手を引いて進もうとする凜太郎だがアキラは立ち止まり、そんな彼に待ったをかけた。驚いて振り向こうとする凜太郎に、アキラは「そのまま動かないでください」と声を発した。

「……ひとつだけ、確認したいことがあります」

「はあ……？ それって今じやなきやダメ？」

「ダメです……ひとつだけ聞きたいことがあるんです」

——あなたは誰ですか？

「誰って、嫌だなアキラちゃん。俺は津上 凜——」

「私は、一度たりとも、彼に本名を明かしていません」

ゆっくりと、武器に手を伸ばす。

そう、それが違和感の正体だった。

彼女は、清澄 アキラという少女は凜太郎に対して自分の名を明かしてなどいないのだ。アキラは義賊紛いの前をしている怪盗だ、そんな彼女が簡単に自身の身分や正体を簡単にバラすような真似はしていない。

凜太郎が彼女の正体を知っていたという線はない、同じ『七囚人』であり『災厄の狐』と呼ばれる「彼女」とは違いアキラの正体は周りに知られていない。そもそも『七囚人』という存在すら知らずにいたような男だ、凜太郎に対してその存在を説明したアキラが一番よくわかっている。

凜太郎という男はアキラに対して説明を怠るような真似は一度だってしていない。呪い関連の質問には必ず答えていた、「教えたところで理解できない」などと無碍にされたことは一度もない。

そしてなにより、強くなり続ける呪いの気配は凜太郎から発せられていることがアキラには感じ取れていた。

「答えてください。あなたは誰で、彼はどこにいますのでしょうか？」

「いや何言ってるのさ、俺が凧太郎だって」
「くどい。二度も、同じ事を言わせないでください……タネが割れている手品ほどつまらないものはないですよ」

警戒する。

武器に手を掛けていつでも攻撃できるように構える、アキラ自身の純粋な戦闘能力は決して低くはない。だがそれが呪いを相手にして張り合えるモノなのかと言われるれば、難しいものだった。

何より、呪いは呪いでしか被う事ができない。だがそれでも、この状況を切り抜けることはできる筈だと考えている。アキラは意識を研ぎ澄ませる、一触即発とも言える状況は次の一手で全てが変わるのだから。

目の前の何かが、愉しそうに、面白そうに、喉を鳴らしながら不気味な嗤い声をあげている。

「なんだ 思 っ て た よ り も 頭 が 回 る
んだね」

「——ッ！」

膨れ上がる呪いの気配。

凧太郎？の首がグルン、とありえないような挙動で勢いよく後ろにいるアキラの方へと回転する。一瞬、動揺で動きが止まりそうになったアキラだが素早く武器を構える。銃身が長く杖のような形状の西洋銃にも似た彼女の愛銃、容赦なく引き金を引いた。

銃声が響く。

神秘を込めた強力な一撃。

「……なっ!?!」

『あー、痛い……なあー!』

驚愕の声。

アキラが放った一撃は頭部を容易く吹き飛ばすだけの威力はあった。

しかしアキラの視線の先には顔の半分が吹き飛んだというのに、平然としている化け物の姿がある。頭蓋とその中身をぶちまけるかのような光景に吐き気を催すが、すぐにそれは驚愕で塗り潰される。

損傷した頭部が修復されていく様に、アキラの思考が真っ白になってしまう。相手がそんな隙を見逃すはずもなく、彼女の腕を掴んだまま勢いよく振り回すとそのまま壁へと叩きつけた。

息が出来なくなる。

背から壁に叩きつけられ、肺の中の空気が吐き出される。

膂力にモノを言わせただけの一撃だというのに、たつたそれだけで動けなくなってしまう程のダメージがアキラには与えられていた。

ズキズキと肉体には痛みが走り、力は入らず立ち上がる事すらやっとなんと言った状態のアキラを掴んだまま、彼女を無造作に引き摺りながら進んでいく。

向かう先は、あの不気味な“扉”だった。

『いやー、すごいね彼！ 何度も影から襲おうとしてたんだけど、全部失敗しちゃってさ。あれには勝てそうにはないなア』

『私もさ、結構強い自信はあったんだよ。 “崇高” 信者の自称芸術家とババアに好き勝手弄られて出来上がった “作品” だからさ、けどどうやってもアレに敵う気がしないかなー！』

『けど、君という “神秘” を直接取り込めば、もっと強くなれる気がするんだ』

『だからさ、ここで君は死んじゃうけど許してよ清澄アキラちゃん』

何が面白いのか、楽しそうに耳障りな声でひとりでに喋り出す。

いったい何を言っているのかアキラには理解できない。

ただ自分があの不気味な扉の中に放り込まれるのだけは、どうにかして阻止しなければならぬという事だけは理解できた。

視線の先には、口を開けて待つかのように扉が開いている。扉の中からはいくつもの不気味な目玉が浮き上がり、幾重もの長い腕が供物が運ばれてくるのは今か今かと待ち構えている。その光景に、小さな悲鳴が上がる。

「……離し、なさいっ！」

『もー、暴れないでよ。これでも焦ってるんだ、〃向こう〃も相当暴れてるみたいだしさ』

「ぎ、ぐうー……かあ……ッ」

暴れる少女の首を掴み上げて邪悪に嗤う凜太郎の姿をしたナニか。腕を振り払おうとするも、首を締め付ける握力は増していくばかり。少女の抵抗する力は徐々に失われてゆき、ゆつくりと腕が力なく垂れ下がっていく。

視界に写る景色が色を失っていく。

耳鳴りに襲われて、五感の全てが遠くなっていく感覚。

迫り来る〃死〃という概念をアキラは確かに感じ取っていた。

『あ……遺言とかある？』

「……あ……う」

『なに？ 声が小さくて聞こえないよ』

嗤う。

生にしがみつく少女の姿に、必死に最後の言葉を絞り出そうとする姿に。口元が裂けるように、歪な笑みが浮かんでいく。

声にならない声だった。

だが、それでもアキラはしっかりと〃言葉〃にした。

「……たす、けて……津上ッ、さん」

『ぶ……ぶはは、いいね。ロマンチックじゃん！ けど残念だな、悲しいことに彼はもうこの結界の外に』

「——わかった。いま助けるから」

——空間に罅が入るように割れた。

その隙間から、少女と怪物の間に割って入るように飛び込んで来た赤い呪力の炎を纏った影。素早く懐へと潜り込んだ影が怪物を殴り飛ばして少女を回収する。

自分を守るように立つその後ろ姿に、少女は安堵の涙がこぼれそうだった。そんな少女に、空間を破って入り込んできた少年、凜太郎はニツと笑みを浮かべる。

「もう大丈夫！ 何故って!? 私が来た!!」

「けほっ、けほっ……うう……耳元で叫ばないでください」

「ごめん！ このネタ通じないか！ というか大丈夫!? 怪盗ちやんまだ生きてる!」

「か、勝手にころさないでください……」

自分を抱えたまま焦ったような様子の凜太郎の姿に、呆れを交えながらなんだか面白くなってアキラは小さく笑みをこぼしてしまう。そんな彼女に凜太郎も笑いかけて安心させる。

「ふふっ……もう少し、早く来てくださってもよかったですよ」

「ごめんって、ヒーローは遅れて到着しちゃうもんだから……でも間に合ったから許してちよんまげ」

「……なら、貸一つにしておきましょうか。私からの借りは高くつきますよ?」

「無問題。エスコートは任せてよ」

「そうですか。ふふ、でしたら楽しみにして、おき……」

ゆっくりと、電源が落ちるように意識を失った。

アキラを横たわらせて、彼女が緊張の糸が切れた事によって意識を失っただけだという事を確認すると凜太郎は安堵の息を漏らす。制

服の上着を脱いで眠る彼女に掛けるとゆっくりと立ち上がる。

袖を捲り上げる。

睨みつける視線の先は、殴り飛ばされたまま蹲る結界の主人であり自分と同じ顔をした謎の多い呪霊。

「随分と、好き勝手してくれたみたいだな。舐めたマネしてくれやがって、あの子に消えない傷でも残ったらどうしてくれんだ。女の子はもっと丁重にもてなせや」

『……ッ。そんなにカリカリするなよ津上 凜太郎。そんな顔してたら、その女の子とやたらに嫌われちゃうぜ』

「なんだ喋れるのか……まあいいや、黙れ。てかなんだその顔、ふぎけてんのか。俺の姿で怪盗ちゃんに怖い思いさせやがって、というか俺はもっとイケメンだ顔面作り直してこいハゲ」

『おいおい、怒るなよ』

凜太郎の姿をした偽物、結界の主人である呪霊は飄々とした態度で言葉を返すが、内心は焦っていた。既に別の結界へと分断したはずの呪術師が、なぜこの場に現れて立ち塞がっているのか。

そしてヒシヒシと叩きつけられる凜太郎が発する膨大な呪力のプレッシャーに冷や汗を流した。自分とは桁違い呪力に、無意識のうちに足が後ろに下がる。

『……どうやってここに？』

「んなもん、結界をぶち破って来たに決まってるんだろ。人が寝てる最中に別の空間に落とすやがって、ここまで来るのにちよつと苦労したぞ」

『……おっ』

その言葉に、まるで何を言っているのか理解できないと言った風に表情を歪めた。結界術というものは複雑だ。ぶち破ってここまで来たただなんて、散歩してたら目的地に着いたと言っても言うかのように軽い

態度の凜太郎に結界の主人は呆然としてしまう。

「あとは、そうだな。怪盗ちゃんか俺をここまで呼んでくれた……ってところかな。知ってるか、言霊ってのは意外と馬鹿に出来ないもんなんだぜ……女の子から助けを求められたらどこへでも駆けつけるがな！」

『……はは……なんだそれ』

「それと、時間を稼いで逃げようとかなんて考えるなよ。ハッキリ言って無駄だ、言つたよなお前はぶち殺すつて。ま、殺すのは色々と聞き出してからだけだな」

『……聞き出す？』

「お前、ただの呪霊じゃないな。ミソツカスとはいえ混ざってる、お前の“表面”にまとわりついてるのは神秘つてやつだろ。けど、だいぶめちゃくちゃにくつつけてるから気配がチグハグだ」

『……ッ』

「何を知ってるのか、喋ってもらうぜ。感謝するよ、お前が意思の疎通ができるレベルの呪いで……その後に殺してやる。人のタブーに踏み込んできたんだ、覚悟は出来てんだろ？」

祈るように両手を組み合わせた。

時間をかけるつもりは凜太郎にはない。

手早く済ませて、この状況に巻き込まれてしまったアキラを結界の外へと連れ出すためにも、彼女が目を覚ます前に呪術師（自）の仕事のささと終わらせてしまうと呪力を漲らせる。

——領域展開。

世界が塗り替えられる。

結界の主人である呪いが見た光景は、そこは蒼い炎に包まれて燃え尽きてゆく廃村。そして夜空に浮かぶ黒く大きな満月が涙を流すように泥を吐き出している不可思議な世界だった。

冒険の始まり…つてコト!?

b月Ω日

ひとまず、一件落着。

あのループする結界に閉じ込められた一件から、2日ほど経過した。

なんと驚く事に物理的に流れている時間が、結界の外と中では違ったように結界内で7日ほど監禁されていたというのに結界の外で1日くらいしか時間が経過していなかったようだ。

仕事をすっぱかした上に7日間も音信不通となってしまうていた為、普段から連絡を取り合うようなシャーレの先公やシロコちゃんたちに流石に心配をかけてしまっているだろうと思いい、どう言い訳をしてやり過ごすべきか考えていたがその必要もなかった。

なんだあの空間、精神と時の部屋みたいな性能しやがって。それだったらシャーレの先公に書類とか持参させてあそこに幽閉して仕事させてたぞ。流石に俺も書類整理という地獄からそろそろ抜け出したいっす。

それと怪盗ちゃんことアキラちゃんも無事だ。

あ、すっかりモモトークも交換した。やったぜ。

結界から脱出した後、気絶したアキラちゃんを背負ってシャーレへと駆け込んだのだがそのタイミングで時間の流れが違った事に気がついたのだ。

目を覚ましたアキラちゃんの警戒具合はそりや凄かった。何せ俺の姿を真似た呪霊に襲われたのだから仕方のない事なのだが、そんな敵意ビンビンの目で見られるのはちよつとシヨックやで。

どうにか不穏な空気を和ませようとした俺の一発ギャグが滑ったりしたけど、どうにかなった。流石だぜ?羽師匠、あんたの一発ギャグは最高だ(褒め言葉)

そういえば、あの人まだ芸人続けてるんだらうか。

冴えない地味な芸人って感じだけど、俺は結構好きなんだよな。なんかこう、みんなには知られてない掘り出し物を見つけたような感じがする。

寒さからか、可愛らしいクシヤミと共に震えていたアキラちゃんに上着を貸した後、なにか温かい飲み物でも飲ませてあげようとその場を離れてホットミルクを片手に戻ってきたのだがそこに彼女の姿はなかった。

彼女の連絡先と感謝の言葉が書き記された予告状チックな置き手紙がポツンとそこにあるだけだった。どうせならもう少しお喋りしたかったのだが、仕方ない。

あ、けどお気に入りのパーカー持ってかれちゃった。

また今度にも返してもらおう。

b月j日

今日はユウカちゃんとお仕事！

……の筈だったんだが、ちよつと緊急の用事ができたので彼女にお仕事を押し付けて抜け出してきてしまった。すまねえユウカちゃん、今度ミレニアムなんちゃらにお仕事手伝いに行くから許してクレメンス。

向かう先は百鬼夜行。

和菓子が美味しそうなカフェで時間を潰しながら、百鬼夜行のロリコンこと変な前髪の夏油を呼び出した。といつても、男ヤローと仲良くお茶飲みをする為に呼び出したわけではない。

もちろん、この男にあの呪霊の話をする為に呼び出したのだ。

あの呪霊との戦闘自体は呆気ないほどに決着がついた。流暢に人の言葉を話すことができ、その能力に見合うほどの知性を兼ね備えて

いるであろう混ざった呪霊。

その強さを警戒して領域を使用したはいいものの、使う必要はなかったのではないかと思えるほどにあの呪霊は弱かった。あの大規模な結界術、特級相当の実力はあるのではないかと思っていたが、その強さは高く見積もっても準一級といった所だろう。

兼ね備えた能力と実力が見合っていないとでもいうべきか、あれだジムバッチが足りてないのにレベルだけは高いポケモンでバトルをゴリ押しているとでもいえるのか、何かおかしい呪霊だった。

それと俺とアキラちゃんがああなループする空間に囚われる原因となった呪物、あれも一応回収しておいたが今ではうんともすんとも言わずなんの何の反応もない。

呪霊を尋問して途中で突然あの呪いは電源が切れたかのように動かなくなっただと思えば、ボロボロと姿形が崩れていき俺が祓うよりも早く事切れたのだ。悲鳴をあげながら消えていく様は、まるで口封じのように消されたかのようにも見えた。

その場に残ったのは呪霊の核となっていたであろう呪物のみだ。しかもこの呪物、崩れかけの外側を剥がしてみれば中からは水晶玉のようなものが出てきたのだ。

その見た目は、まるで呪霊操術によって呪霊を取り込む寸前の宝玉もどきにも見えた。

これを見た夏油も酷く驚いたような様子だった。夏油にとっては馴染み深いといってもいいものであるからだろうか。

とりあえず、今回の一件の詳細を夏油に伝えてそっちでも調べておいてくれと言っておいた。因みにこの協力は強制だ、いくら術式が使えなかりょうと呪力は使えるようだしアイツならそこら辺の呪霊や人間なんかにはそう易々とやられはしないだろう。

助けに行くのも何だか癪だが、手に負えないようなら遠慮なく俺を呼び出せとも伝えた。

俺と夏油の予測が正しければ、この世界に呪霊が発生した原因は俺たちの筈だ。当たってほしくない予測だけど。

後、カフェの支払いは夏油に押し付けておいた。

年下のガキに金を払わせようとすんな。「あー、五条先生なら奢ってくれたんだけどなく！けどお前じゃ無理だよなく！チラチラ」と視線を向けてみたら苦虫を噛み潰したような顔で財布を取り出していた。

お前マジックテープの財布使ってるのか（戦慄）

隣からベリベリ聞こえてきた時はビビったわ。今度財布買いに行けど、いくらなんでもそれはダサすぎる。マジでやめろ、俺の中での夏油傑という男のイメージがどんどん崩れていく。

b月b日

ミレニアムにて我 爆誕！

いやー、広いねここの学校、というよりも自治区か。アビドスの校舎何個分あるんだろ、というか学校の中で電車が走ってるってやばくない？ 想像を絶する広さなんですけど。

案内してくれてるユウカちゃんの隣で「ビルがデケええ!!」とか大はしやぎしてしまった。反省反省、そんな子供を見守るような温かい視線を向けてないでくれ。

あまりにも珍しいものばかりでキョロキョロしながら歩いていたのだが、隣を歩いていたらユウカちゃんが恥ずかしいからやめてくれと言うので仕方なく姿勢を正して真っ直ぐ歩く事にした。もー、我儘な子ねえまったく。

今回、なぜミレニアムなる学校に来たのかというところと少し前からこの学校に来た先公の方から緊急だということとで連絡があったのだ。廃部寸前のゲーム開発部なる部活を助ける為に来たらしいが、俺を呼んだ所でなんの戦力にもならないと思うのだが。

ゲームで遊びこそするが開発側となるとチンプンカンプンだぞオ

イラ。テストプレイヤーとかデバッガー要員的な感じで呼び出されたのかと思いきや、なんとこれから「廃墟」と呼ばれる連邦生徒会長が出入りを禁止したミレニアムの郊外付近にある謎の領域に行くらしい。

要するになんかやばい場所という事だ。

つまり、ゲーム云々は関係なくてそこに乗り込む為のお手軽武力要員的な感じで俺は呼び出されたらしい。

はっ倒すぞ。

さてはお前、俺のこと紛争地域に遠慮なく投げ込んでもいいゴリラかなんかだと思ってるだろ。どんなゲームがプレイできるのかちよつとワクワクしてた俺の純情を返せ。

ケツ、と笑顔で先公に中指を立てて踵を返して帰ろうと思ったのだがゲーム開発部の部員である双子ちゃんの姉の方に泣きつかれてしまった。

あの男、この状況だと俺が断れないであろうことを予測してやがったな。「計画通りニヤツ」みたいな顔してやがったぞ。

とりあえず、自己紹介を交わしながらその「廃墟」とやらに行くことになった。

まず初めに、ゲーム開発部の部員である双子ちゃんこと自称お姉ちゃんである、才羽^{さいば} モモイちゃん。なんとというか非常に陽気な性格で、所謂この部活のムードメーカー的なポジションの子だ。あとすごく喧しい、耳元で叫ぶのだけはやめてくれ。

栗みたいな口しやがって（褒めてる）。

この子はシナリオライター担当らしい。

そして双子の妹ちゃんこと、才羽 ミドリちゃん。この子はモモイちゃんと真反対とでもいうべきか、物静かとかちよつと大人びた子だ。双子というだけあって瓜二つだ。

お揃いの猫耳のヘッドホンも双子コーデみたいで可愛らしい。

こっちは絵やグラフィック等ビジュアル全般を担当しているらしい。すげえな、それ一人で全部やってるん？ 大変じゃない？

なんというか陽気で強引な性格をした姉と大人しくて内気な妹、と

いったところか。どっちが姉でどっちが妹かわからんが。

全然関係ないのだが苗字がサイバとは、なんか新宿を拠点に活動する超一流のスイーパーみたいでかつこいいじゃん。ちよつと羨ましい。

しかし、小さい。

馬鹿にしてるわけではないのだが、この双子ちゃん身長が凄く低い。恐らく140cmちよいかだと思う。俺が180行くか行かないかくらいだし、だいぶ高低差がある。

多分だけどパツとみホシノちゃんよりも身長低いんじゃないか。テンション高めなモイちゃんの性格も相まって、中学時代の近所にいたガキの相手をしてる気分になってくる。というかもう、そういう風にしか接せないかもしれない。

おいこら「うおお！足長え！」じゃねえんだよ。はしやぎながら背中によじ登ろうとするな、首根っこ掴んだまま引き摺り回すぞクソガキ。

ゲーム開発部の部長ちゃんにも挨拶したかったのだが、どうやら今は席を外してないらしい。んー、残念。面と向かって挨拶したかったのだが、まあ訳ありなら仕方ないか。

とりあえず、廃墟とやらに出発。

日記の続きは帰って来てからにしますわ。
何事もなく終わればいいんだが。

b月α日

ヘルプミー。

みんなでワイワイと廃墟探索に行った時、全裸で気絶してる女の子と出会った場合ってどういう反応すれば正解なんだろうか。え、もし

かして事件性アリ？

というか、その双子ちゃんはなぜ予備の制服と下着を持ち歩いてるんだ。キャンプに来たわけじゃないんだぞ？

パンパカパーン！

「あ、アリスちゃん……もう、無理だ……っ」

「……ダメです」

「限界なんだ……もう、無理なんだよッ」

「リントロウ。諦めてはダメです……っ」

凧太郎は己の無力を悔いるように蹲っていた。

そんな彼の嘆きに寄り添うように、傍には一人の少女が立っていた。

床に引きずってしまいう程に長い濡れ羽色の髪。長い前髪の間から少年を見つめる青く無機質な瞳。白いジャケットとミレニアムの制服に身を包んだ少女——天童アリスは心が折れてしまったかのように膝をつく凧太郎を再び立ち上がらせんとしていた。

無力さに打ちひしがれる少年の姿に、彼女の小さな瞳が揺れ動く。

「っ……ダメなんだよ。アリスちゃん」

「否定……貴方はこんなところで、立ち止まったりしないはずですよ！」

「俺は、もう……っ……戦えない……ッ！」

「そんな！ 目を開けてくださいリントロウ！」

「クソゲーオールナイトなんて、俺には無理だったんだ！」

「コラそこッ！ 製作者の前でなんて発言するのさ!!」

「じゃかあしい!! この諸悪の根源めが!!」

「んな!?!」

人間には「三大欲求」と呼ばれるものが存在する。

「三大欲求」とは、生きていく上で重要な3つの欲求の総称とされている。一般的にそれは『食欲・性欲・睡眠欲』のことを指している。欲求の程度、度合いは人それぞれ違うものだが、誰しも持っている欲求

だ。

睡眠は生命を維持する大切なもので、食欲は食べて栄養を摂取しなければ死んでしまう。また、性欲は子孫を残すために必要な、動物としての本能と言われている。この3つの根本的な欲求が働くことで、生命活動が成立しているのだ。

食欲は存在する。

同級生から「お前の胃袋はブラックホールか」と言われるくらいにはよく食べる方だ。テーブルの上に並べられた料理の数々をペロりと平らげ、空き皿の山を作り上げてしまいうくらいには食欲は旺盛だ。

それでいて腹が飛び出て太ったり、体重の増加や体型維持に気を使ったりすることもないので後輩ちゃんズの紅一点に「この女の敵が！」なんて恨めしそうに睨まれたりなんて事もあった。

当然、性欲だって存在する。

なにせ年頃の男子高校生だ。魅力的な女性がいれば目を引かれてしまうものだ、かといって盛りついた猿のように飛び込んで行ったりはしない。だってカッコ悪いし、それに必要以上に踏み込む度胸もない。

何より、自分の気持ちに折り合いがつけられていない中途半端な状態で「一線」を超えるつもりは絶対がない。「君と一緒にいるのは楽しいけど、お友達で」なんて、そんなポジションでいればいいかなんて立ち回ってもいた。

そして睡眠欲。

この睡眠欲こそがいまの凜太郎には喉から手が出るほどに求めているものであった。

「三大欲求」というものにも順位が存在するらしいが、ピラミッド形式で言えばもうてっぺんがこれだった。順番で言えば、睡眠、食欲、性欲、といったところだ。いや、もう、睡眠、睡眠、睡眠、ですらよかったです。

「なんで王道RPGやってたはずなのに、急に学園シミュレーションが始まってんだ！　というかこのクラスメイトでツンデレヒロイ

ンの幼馴染ってなんだ、こいつ勇者の始まりの村にいなかっただろ!?
どっから生えて来たこのぽつと出幼馴染!」

「た、多様性だよ! それにこのキャラは第二の幼馴染なんだって
!」

「そんな伏線今までなかったやろがい! とうか多様性の一言で
済まそうとするな製作者! もはや世界観がまるっと変わってるん
だよ! 魔王と勇者の設定どこいった!」

「う、うるさい!!」

「うるさくなあーい!」

なにゆえこのような状況になっているのか。

ここに至るまでの状況を振り返ろうとすれば頭が痛くなりそうな
くらいだった。経緯を振り返れば、隣にいる少女 天童アリスとの出
会いまで振り返ることになるだろう。

この天童アリスという少女は、ゲーム開発部が「廃墟」と呼ばれる
場所であ会った謎の多い少女だ……厳密に言えば少女の姿をした口
ボットなのだが。

「廃墟」の探索に向かい、文字通り転がり落ちるよう辿り着いた奥底
で彼女、天童アリスこと『AL-1S』は電源が切れた人形のように
眠っていた。生まれたままの姿で眠る少女の姿に一同はビツクリ仰
天と言ったところだったが、予備の衣服を持ち歩いていたミドリがそ
れを着せることでどうにかなった。

服装を整えて入る間、男性組の凜太郎とシャーレの先生は少し離れ
た場所そちらに視線を向けられないようにしながらあつち向いてホイを
してたりした。

不意に「あつち向いて、ホイッ!」のタイミングで毎度書類整理を
押し付けられる怒りを乗せたマジビンを繰り返して来た凜太郎に
先生は一瞬死を覚悟したとかしてないとか。

因みにビンをギリギリで避けられた凜太郎はガチめの舌打ちを
してた。

その後、先生の接触によりなぜか目を覚ました少女を「廃墟」に置

き去りにするわけにもいかず。

なんやかんやあって、アリスをゲーム開発部の部室まで連れて帰って来たのだが……目覚めた直後の彼女は自我も記憶もなく、機械的な受け答えしかできない状態であり、ゲーム機を口に含むなどまるで赤子のような状態だったのだ。

まだ非公式の部活であり部員が規定人数に達していないゲーム開発部だが、モモイの案によりゲーム開発部が廃部を免れる為にアリスをミレニアムの生徒として偽装して部員を増やす事によって、規定人数という条件を満たした。

そして今現在、機械的な受け答えしかできないアリスにゲームを用いた『会話』と『話し方』を教える為の英才教育の真つ最中でもあった。「エラー発生！ エラー発生！」と困惑し叫びながらゲームをプレイするアリスと、その横でアリスを応援するモモイとミドリの微笑ましい様子を眺めていた凜太郎だったが。

その時の彼はまだ知らなかった。

大人しく途中で帰っておけばよかつたなどと、後悔するハメになるだなんて。

「ダメだ。もうマヂ無理……お兄さんはもう眠いって、アリスちゃん
の膝枕で俺を癒して」

「癒し……なるほど、HPの回復ですね。それなら任せてください。
アリスは既に回復魔法も覚えています！」

「ありがとう。とりあえずちよつと休ませてくださいほんとお願い
します……起こすなよモモイ」

「なぜ名指した？……って、なんでうつ伏せで顔を突っ込んでるの
さ!?! アリスもそんな簡単に受け入れちゃダメだからね！」

「やわらかい……」

「おいコラー！ アリスから離れろ変態め！」

「ヤダーツ、イヤツ、イヤ!!!」

うつ伏せの状態で正面からアリスの膝に顔を埋めている凜太郎を

引き剥がそうとするモモイだったが、そうはさせないと言わんばかりに凜太郎はアリスの細い腰をガツチリとホールドして抗っていた。

とうのアリスはそんな二人を気にせず、コントロールを握りしめてゲームに夢中になっている。側から見ればだいたいヤバイ状況なのだが、凜太郎も長時間に及ぶクソゲー耐久によって精神力を擦り減らされてもはや正気を失ってすらいた。

なにせ彼がプレイしていたゲームはゲーム開発部が開発したRPG作品のひとつ。シリーズ1作目にして大爆死した上にクソゲーランキング1位にまで登り詰めてしまったある意味伝説のゲームなのだ。

それだけではなく、シリーズ2作品目を制作する為の構想段階のデモ版をプレイしたり、ゲームというものに取り憑かれてしまったかのようにアリスに付き合い連続で色々なジャンルのゲームをプレイしている最中である。

その結果、彼は全く悪意のないゲーム開発部がオススメした大量のソフトたちに囲まれて徹夜でのゲーム漬けになった。

「俺はっ、弱い……ッ！」

「そ、そんな情けない姿でカツコつけられても」

「まさかただのゲーム耐久がここまでキツいだなんて、五条先生たちとやった桃鉄100年もだいたいキツかったけど……あ、さっきアイテム回収し忘れてたよアリスちゃん」

「うわ、本当です！ すっかり見落としてました！」

「しかもちやつかりアドバイスしてるし」

「腹減ったから焼きそばパン買ってこいよモモイ」

「はあ？ なんだとこら〜！」

アリスのを膝枕に顔を埋めたまま動かないでいる凜太郎へと馬乗りになってポカポカとその背中を殴り始めるモモイ。もはや抵抗する気力すらない凜太郎はなすがままとなっており殴られることを受け入れてすらいる。

それどころか「最近、肩こりが酷くてよく。もうちつと強めで頼むわ」とリクエストする余裕すら見せていた。その言葉に「ぬぬぬっ！ コケにしおつてからに！」とモモイは鼻息を荒くしている。

「ふあ〜……んう、お姉ちゃんたち朝から元気だね」

「よつす。おはようミドリちゃん」

「おはようござ……どういう状況ですかそれ」

「ふっ、アリスちゃんがまた一つ世界を救う直前なのさ」

「い、いや別に、ゲームの進行度は聞いてないです」

「ちよつと聞いてよミドリつてば」

「お姉ちゃん朝からうるさいよ」

「うええ!?!」

凜太郎とモモイの騒々しさに、その隣で横になっていたミドリがムクリと起き上がる。夜遅くまでゲームコントローラーを握り薄暗い空間で画面を見つめていた筈なのに、気がつけば寝落ちしてしまっていた彼女は目を覚ましたと同時に飛び込んできた光景に目を丸くしてしまう。

アリスの膝に顔を埋めたまま微動だにしない凜太郎。そんな彼の上に馬乗りになって拳を振り下ろしている自分の姉。そしてそんな状況でも気にすることなく画面に食いつきゲームに夢中になっているアリス。

情報量が多すぎて寝起きで上手く働かない頭では処理しきれそうにはない。もうこのまま二度寝するのが正解なのではとすら思えて来ていた。

チラリと横に視線を向けて見れば、そこにはまだ気絶したように眠っているゲーム開発部の部長である少女、花岡ユズがスヤスヤと寝息を立ててクッションの上に頭を乗せて伏していた。

「あ、ユズちゃんは起こさないであげてね。2時間前くらいに寝落ちしたばかりだから」

「あ、はい。わかりました」

「それから俺も今から眠りにつきたいと思いますので起こさないでください」

「いやダメだからね!? アリスとリントローにはミレニウムを案内するって約束したじゃん!」

「嫌じゃい嫌じゃい! 俺はアリスちゃんの膝枕に包まれて眠るんだい!」

「年上の癖に情けなく駄々を捏ねてどうするのさ!」

「年齢は関係ないやろがい! なんじゃその言い方、こちとらまだピッチピチの17歳やぞ!」

「お姉ちゃんも駄々捏ねる時はこんな感じだよね……?」

「す、少し静かにしてようかマイシスター!」

朝から騒がしい二人の姿にミドリは苦笑いしてしまう。

凜太郎は臆げな意識を掘り起こしながら「そう言えばそんな事言ってたっけな」なんて、全員でパーティーゲームをやっていた時にモモイがそんな事を口頭で伝えていた事を思い出していた。

モモイの言うミレニアムの案内とは、どちらかと言えば凜太郎の為ではなくアリスへの為の提案である。

なんとこのモモイという生徒、住所不定無所属であるアリスの為に知り合いのハッカーたちにお願ひしてアリスの生徒としての身分証を偽造して、ミレニアムの新入生としてでっち上げたのだ。彼女の手際の良さに感心を通り越して呆れてしまうくらいだ。

そしてキヴォトスの生徒はみな、それぞれが自分の武器を持っている。調達する方法は様々だ。アリスの為にこのミレニアムで手っ取り早く、それでいてちゃんとした武器を見繕う為に、『エンジニア部』の元へと向かわなければならぬ。

「というわけで、さっそく行ってみようか!」

「おー、いってら〜。お土産よろしく」

「リントローも来るんだよ! アリスと一緒に武器をゲットしに行

かなきや！」

「いや、武器はいらんで。この鍛え抜かれた肉体こそ my favorite
O r i t e w e a p o n ……なのさ」

「無駄に発音がいいのがムカつく……って、『外』の人が素手で武装したキヴォトスの生徒に勝てるわけないじゃん！」

「馬鹿野郎お前俺は勝つぞお前！」

「ぐぬぬ、力強ッ!? ほら、アリスもリントローを冒険に連れて行くのを手伝って！」

「ッ! ……冒険、行きましようリントロー! 新たな出会いがアリスたちを待っています!」

「うぐぐっ……お、おま、アリスちゃんを使うのは卑怯だぞ!」

「全然卑怯じゃないですう〜!」

モモイの言葉に刺激されたアリスが彼女の側に立った事によって、凧太郎とモモイの間にあったパワーバランスが崩壊する。必死に抗っていた凧太郎だったが、抵抗虚しく両手両足を掴まれたまま持ち上げられ引き摺られるような形で連行されていった。

一部始終を側から眺めていたミドリは「意地でも外に出ようとしな
い引き籠もりの子供を力尽くで引っ張り出したみたいだ」もしくは「
捕まってしまった迷子の宇宙人が連行されているみたい」なんて、何
とも言えない感想をつい抱いてしまった。

ひとまず、スヤスヤと眠るユズを起こさないように気をつけながら
凧太郎を引き摺ったまま部屋を出て行った二人の後を追うことにし
たミドリであった。

汝右の頬を叩かれたら、うんたらかんたら

b月v日

ああ、なんて。

なんて、新鮮なインスピレーション……っ。

これが、「脳破壊」か……！

いやもう、とりあえずクソゲーはもうこりこりでち……。

何で主人公が買ひ物の途中で様々な理不尽な3択問題に挑戦するクイズゲームをやらされなきゃならんのじゃい。やり直し前提の理不尽選択肢のオンパレードで何度コントローラーをぶん投げてやろうと思ったことか。

選択肢を間違える度に「うわー、もしかしてまた死んだの？」なんて隣でしてやったりと言わんばかりにニヤニヤと笑っているモモイに腹が立ちついアイアンクローを決めてしまった俺は悪くないはずだ。

しばらくの間はゲーム機は触りたくないかもしれん。

きつと、あれはまだ人類には早すぎたゲームだったんだろう。

それはそうと、アリスちゃんが武器をゲットした。

いままで武具にはあまり興味なかったが、彼女が手にした武器はそんな俺でも羨むくらいにすごいものだった。

それがなんと、ミレニアムのエンジニア部が宇宙戦艦に搭載するべく、大気圏外での運用を前提として制作した実弾兵器。下半期の部活の予算を約70%とロマンをかけて作り上げた、人の身長ほどもある巨大なレールガンだ。

その名も「光の剣：スーパーノヴァ」だ。

いや頭おかしいって(褒め言葉)。

俺も同じような感じでガンダムとかビームマグナムとか作って欲しかったが、予算の半分以上がこのレールガンで消し飛んでいるので無理だと言われてしまった。

普通に羨ましい。

俺も「光よ!」とか「撃てませえん!」とか叫びながらズキユウウウン! って掠っただけでダメージを負わせるような、とんでもビームを撃ちたかった。こんどアリスちゃんに貸してもらってバナージごっこしよ。

まあ、ガンダムはユニコーンくらいしか知らんが。

先輩の金ちゃんと一緒に「ユニコオオン!!」ってパチの筐体の前で叫んだのも随分と懐かしい記憶な気がする。その日は大勝利だったので確か二人で焼肉食いに行つたっけな。

しかし、エンジニア部の部長であるウタハちゃんもいい事言うね。なんでこんなもの作ったのさ、なんてモモイに言われてたが「愚問だね。ビーム砲はロマンだからだよ!」と答えていた彼女の言葉にとても感動してしまった。

わかる。

ビーム砲のロマンを理解しているエンジニア部のみんなと一緒に「イエーイー!」なんてやってたら「最悪だ! 頭良いのにバカな集団の中に、ただのバカまで混ざっちゃった!!」とモモイが頭を抱えて叫んでいた。

ビーム砲の良さがわからんとは、それでもゲーム開発部か。

とりあえず、光の剣と聞いて目を輝かせていたアリスちゃんが可愛かったです。

しかし、重量が140kgだか200kgだかあるとんでも兵器を軽々と持ち運んで運用できるアリスちゃんには驚きだ。聞けば、キヴオトスの生徒でもあの重さと出力を出す武器を持ち運ぶことは難しいらしい。

あんな小さい身体でよくもあれだけのパワーが出せるもんだ。

重量で言えばお相撲さんを持ち上げて振り回してるようなもんだろうし。まあ俺も呪力で強化してれば余裕だろうが、いや生身でもいけるか?

で、ついでに俺の武器も見繕ってもらったことになったが、正直言っ

てそこまで武器を必要としてはいないから断ろうと思ったんだが、目を輝かせて武器を選ぼうとしてくれるアリスちゃんには勝てなかった……。

しかし銃は無理だ。

これでもかかってくらいにセンスがない。「ドットを打つように綿密に……！」ってミドリちゃんや他の子達に教えられながら銃を握って撃つてみたが、全然的に弾が当たらないだもん。

「目標をセンターに入れてスイッチ」なんて集中しながら色々な種類の銃を使ってみたが、エイムが悪すぎて狙ってる場所に全く当たらないのよ。

なんならもう、拳銃本体を敵に向かって投げた方がいいくらいだ。

イライラしすぎて的に向かって銃をぶん投げたらコトリちゃんが悲痛な叫び声をあげてた。いやマジでごめんね。

銃は無理っすね。

武器と言われても、今までステゴロで戦ってきたし。武器を使うとなつても、真希ちゃんの呪具を使わせてもらったりしたくらいだしな。まあ、壊して返した所為でもう貸してくれなくなっただけ。

けどあれだな、游雲は使いやすかったな。

2〜3回触った程度だが、雑に使っても壊れる事はなかったし。高専に攻め込んできた夏油から奪って游雲でアイツをぶん殴ったのも懐かしいな。あとは最近だと森の妖精みたいな呪霊相手に使ったくらいか。

まあ、銃は諦めて格闘戦で使える頑丈な武器を頼んだ結果、ゴツいアームギアなるものが出てきた。パツと見、機械仕掛けのガントレックトみたいなのだった。

性能を聞いてみたら、「ミサイルが撃てます！」とかなんとか言っていたが、流石にミサイルを発射する機能はいらん。

どうせならロケットパンチが出来るようにしてくれ、と頼んだら後日調整してロケットパンチの機能をつけてくれるらしいやつだぜ。それから色々弄って遊んでたんだが、割と殺意高めな武器だったという事もわかった。

ジェット噴射のブーストパンチが使えたり、それを利用したパイルバンカーみたいな機能があったりと、大丈夫？ これ喰らった相手死んだりしない？

けど、使った後の排熱機構みたいなのはカッコよかったです。

後日俺専用調整した物を受け取りに行くことになっている。

真希ちゃんから呪具を借りた時みたいに、すぐ壊して怒られるなんてことはないように気を付けておこう。

あ、それと俺がキヴォオトスに来る前まで使っていた宿儺にぶっ壊されたスマホも修理してもらえることになった。高専のみんなと遊びに行った時の写真とか動画が入ってるから、修理してもらるのはすごくありがたい。

これもまた今度受け取りに行こう。

b月&日

ひとまず、アリスちゃんが学校に馴染めている様子やゲーム開発部の一通りのことを報告する為にも、ミレニアムの自治区を離れてシャールレに戻ってきた。

どうせなら向こうでずっとゲームで遊びながらわちゃわちゃしていたいが、そうも行かないので仕方なくシャールレへと帰還して再び書類の山と向き合わなければならぬ。

シャールレに戻ってみれば、寝ないで仕事をしてたのかシナシナになった先公がまるで救世主でも見つけたかのような表情で俺を見てきていた。とりあえず、差し入れのエナドリと小腹を満たす為のお菓子などを渡しておいた。これだけの仕事量じゃ糖分などのエネルギー補充は必要不可欠だろう。

ま、今回は手伝う気はないが。

俺だつて今まで結構な量の書類を押し付けられたんだ、それくらい量の書類なら自分でどうにか片付けてくれ。俺は俺で、まだ余裕にある仕事を片付けておくので。

先公は絶望した顔で「『そんなく！』」なんて悲痛な叫び声をあげていたが、そんなことは知らんがな。今まで手をつけずにいた貴様が悪いだろうに、というかお前この前よくわからんプラモ片手にウキウキで職場で作ってたよな？

サボるな。

そんな事してる余裕があるならちやんと仕事を片付けてからやりなさい阿呆めが。流石に好き勝手遊んでた所為で仕事がギリギリになつてるやつのかツを拭いてやるほど俺は優しくない。

わかつたらキリキリ働くんだえ〜！（天竜人ボイス）

悔しそうな顔で仕事をしている先公を見ながら飲む紅茶はうまいのお！

グヌヌ、と表情を歪めながら嗜むティータイムはとても有意義な時間でございます。

b月f日

平和な1日でした。

なんかモモイからもつかい「廃墟」に行くぞオラ！みたいなメツセージが飛んできてたが、とりあえず既読無視しておいた。多分だけど、またゲーム開発部の存続の危機的な感じのあれだろう。

ユウカちゃんから一通り話は聞いていたので、ゲーム開発部が規定人数を満たしていても結果が出ていないから部活として活動できるのは今学期までとかなんとか、みたいな話は予め聞いていたのだ。

厳しくしつつも、なんだかんだで凄く甘やかしてるユウカちゃんは

優しいと思う。「ユウカちゃんは将来は良いお母さんになれるよ」なんて茶化したら顔を赤くして照れていた。

可愛い。

結婚しよう（唐突）

けど照れ隠しで尻を蹴るのはやめてけろ。

ユウカちゃんの太い脚（褒めてる）で蹴り上げられたら骨が折れるどころか口から内臓とか色々出てきちゃいそうになるって。いやマジで死ぬかと思った。

今日は一日暇をしていたのでゲヘナの方へと遊びに行つた。アビドスでの風紀委員とやりあってヒナちゃんと会った時に、今度遊びに行くよって言うってから随分経つがその有言実行と言うべきか、ゲヘナの方へアポなしで遊びに行く事にした。

ゲヘナの方へは中々遊びに行く事も少ないので道に迷ってしまったが、元気いっぱいな金髪のちびっ子に助けてもらいなんとかあった。

このちびっ子、名前はイブキちゃんというらしい。

いやー、元気があつて良いね。年齢相応とでもいうべきか、とても素直な感じでお喋りしてお兄さんはなんだか心が和んでしまったよ。最近ではモモイのようなクソガキタイプの子と一緒に居たからか、こういう純粹無垢なタイプはとても癒される。

どうにも保護者？とは逸れたらしい。

しかしゲヘナの生徒とは思えないほどにいい子だ。

とりあえず、飴ちゃんをあげてイブキちゃんとの友好度を深めておいた。

うん、可愛い。

孫を可愛がる親戚のお爺さんにでもなつた気分だ。

キヴォトスは物騒だからね、もし変な奴に絡まれたらお兄さん言つてみなさない。そいつがイブキちゃんを怖がらせるような男ならぶっころげフンゲフン……二度とキヴォトスを歩けないくらいにコテンパンにするからさ。

イブキちゃんを肩車しながら、道案内をお願いしてゲヘナ学園へと

向かった。身長差とかもあって、どうしても歩くスピードに差が出るので抱えて行く事になった。おんぶでもよかったのだが、肩車の方がイブキちゃんのテンションが高かったので肩車という形に収まった。そんなこんなでゲヘナ学園へと到着したのだが、俺と出会ったアコちゃんの表情が凄かった。嫌な奴と会ってしまったみたいないな凄いや顔をしてたね。

なんだこの横乳いきなり失礼な奴だな。

その横乳引つ叩いて不義遊戯発動させてやろうか。

それと驚いたのが、このイブキちゃんなんでも尸魂界だソウルソサエティがなんとかサエティーなんだとか、このゲヘナ学園の生徒会の一員らしい。ちびっ子の癖にすごいんだな。

褒めたら「えっへん！」と胸を張っていた。

うん、可愛い。なのでもう一個飴ちゃんをあげたら嬉しそうに頬張っていた。隣でガミガミ小言をいう横乳ちゃんを無視しながら、ヒナちゃんを探して挨拶をしに行った。

しかし、風紀委員会の仕事って相当大変なんだな。

目の下にクマが出来ているヒナちゃんを見て少し心配になってしまった。本人はメイクか何かで上手く隠しているようだったが、俺に指摘された事に凄く驚いたような表情をしていた。

周りの人間にも隠しているようだったので、流石に声を大きくしては言わなかった。任せてください、俺は気遣いの出来る男なので。

どうにもゲヘナの治安維持など武力面での揉め事など、風紀委員会の仕事は腕の立つ彼女が半分以上になっているようで、その活動頻度などは尋常ではないらしい。

明らかにオーバーワークだろう。

部外者が首を突っ込むべきではないのかもしれないが、不憫というか流石に無茶をやり通している友人ましてや女の子の姿を見過ごせない。

なので、ゆっくり休んでもらおうと思いついて明日は俺が一日ゲヘナ風紀委員会として活動する事にした。

俺の提案に驚いたようなヒナちゃんやアコちゃんの顔は面白かつ

た。

「よつと……いちち、こりや随分と派手にやったな」

凜太郎は砂埃を払いながら瓦礫の中から立ち上がる。

周辺には爆発で舞い上がった土煙が蔓延している所為でどうにも空気が悪く気分がいいとは言えないような状態となっている。

とりあえず、これから一悶着あるであろう事を予期して制服とその下に着込んでいたパーカーを脱いで動き易い黒いタンクトップの肌着姿となる。

せっかくアビドスのみんなに制服を修繕してもらったというのに、揉め事でまたボロボロにしては申し訳なさすぎる。脱いだ上着は腰に巻き付けて動きやすい格好となると、凜太郎は襲撃者が立つであろう土煙が烟る向こう側へと視線を向ける。

一体全体、なぜいきなり襲撃を受けるハメになってしまったのか。凜太郎にはまったく覚えがないのだが、とりあえず喧嘩を売られてしまった以上は対処するしかない。

「ふう、それで何が目的で襲ってきたのか。理由を聞いてもいいかな狐のお嬢さん？」

「?……あら、存外頑丈な羽虫ですね」

「そりやもちろん。鍛えてますから」

凜太郎が視線を向ける先に立つ女性。

セーラー服に和服を合わせたような黒い制服。そして何よりも目

を引くのは白い狐のお面だろう。制服から彼女がゲヘナの生徒ではないことを凧太郎は理解した。そして同時に、彼女が百鬼夜行の生徒であろう事もなんとなく理解した。

しかし謎は深まるばかりだ。

いきなり百鬼夜行の生徒に喧嘩を売られるようなことをした覚えは凧太郎には全くないのだ。

(うーん。もしかして、夏油絡みとか……?)

だが記憶を掘り返せば、百鬼夜行関連で問題事がなかった訳ではない。

少し前に百鬼夜行で夏油と軽くやり合いその男が経営していた店を無茶苦茶にぶっ壊したのだ。もし眼前の彼女が夏油の知り合いだとすれば、めっちゃくちゃに暴れた犯人の元へと仕返しに来たと考えれば自分が襲撃された事にも納得が行くと凧太郎は考えた。

事情を知らない第三者からすれば自分が完全に悪者だろうからなと、凧太郎は内心で表情を引き攣らせてしまう。

「——考え事とは、随分と余裕そうですね」

「おっと、悪いね。魅力的な女性を前にして感慨に耽ちやつたよ」

徐に向けられた銃口。

躊躇なく放たれた弾丸を首を傾けて回避する。

遠慮なくヘッドショットを狙ってきた事に驚きながら、続け様に放たれた弾丸と共に距離を詰めてきた狐面の少女の蹴りを背を逸らしながら受け流し、軽く足払いをして体勢を崩させようとするが。

「ちよ、容赦ないね!」

「まるで獣のような反射神経ですこと……!」

相手は体勢を崩しながらも、銃口の下に取り付けられていた銃剣を

外して斬りかかってきた。完全に崩したあの体勢から軌道を変えて襲い掛かってきた器用な身のこなしに驚きながら、顔面に突きつけられた剣先を手首を掴む事で止める。

凧太郎を振り払い攻撃を仕掛けてくる狐面の少女。

凧太郎は攻撃を掻い潜りながら、もしかして自分ってトラブルを引き寄せ易い体質か何かなのではないかと考えてしまう。

何故にゲヘナ風紀委員会の委員長を少しでも楽をさせてやろうと思いついた結果、いきなり見ず知らずの女性に襲われるハメになつてしまっているのか。女性との出会いを求めているが、こういったやり取りでの出会いは求めていないのだ。

なぜ自分が襲われているのかもわからないままだ。

手っ取り早く無力化してしまうか。

そう思い、呪力を練り上げて身体強化を施して向かってきた狐面の少女へと腕を伸ばすが。彼女は何かを感じ取ったのか、弾かれたように凧太郎から距離を取った。

「……やはり、不気味ですね」

「え、いきなり罵倒？」

「……貴方は、自分のその力の『異質』さに気づいているのですか？」

「……………っ！」

「貴方のような不穏因子を、あのお方の側に置いておくことなど……私は見過ごせませんッ！」

「……ん？ いやなんのこと？ てかさ誰ッ!？」

「ましてやあのお方と一つ屋根の下だなんて、なんと羨まっ……いえ許せません！」

「ちよつと待て！ さては君、実は結構愉快なタイプだろ!! とうか一つ屋根の下ってマジでなんの話だ!!！」

「黙りなさい！」

爆発するかのように少女の纏う雰囲気、『神秘』が急激に高まった

事を凜太郎は肌で感じ取った。まるで呪力の「起こり」のように急激に高まる少女の「神秘」に凜太郎は警戒して身構える。

そして舞い散る深紅の花弁と共に放たれた6連射。
受け止めるのは不味い。

「感覚的な理解」でそう判断した凜太郎は呪力の出力を瞬間的に爆発させ、拳を足元に叩きつける事によって地面を捲り上げ攻撃を防ぐ為の盾とすると同時に彼女の視界から身を隠す為の壁とした。

容易く壁を貫通する高威力の一撃を身を屈めて回避、そして捲りあげた地面に拳を叩きつけて少女目掛けて発射させる。

「——ッ！」

避けられないと判断した狐面の少女は小さく舌打ちを溢しながら素早く弾丸をリロード。そこから吹き飛んで来た壁を連続で弾丸を浴びせて撃ち砕く事によって直撃を免れた。

しかしそれは彼女にとつて明確な隙となつてしまった。
打ち砕いた事によつて飛散した瓦礫の影から凜太郎が身を小さく屈めながら飛び出してくる。丸腰の人間が武装した相手に飛び込んでくるなど、予想だにしていなかった彼女は一瞬反応が遅れる。

「——ッ!!」

すぐさま、銃口を向ける。

しかし、次の瞬間には彼女の視界から凜太郎の姿が消えた。

それは「膝抜き」と呼ばれる古武術において予備動作を消す技術。凜太郎は自分の後輩と同じく、膝のみならず股関節肩と抜いていき、倒れるよりも滑らかに狐面の少女の足元へと移動。

姿勢は低く。

力の流れを殺さずに巡らせてゆき繰り出された「蹴り」が狐面の少女へと直撃、させる事はなく彼女の眼前スレスレで意図的に蹴りを空振りさせる。

回避は間に合わず直撃してしまうと脳裏に通り、少女が硬直した一瞬に畳み掛ける。

初撃はフェイントだ。

そして一撃目を放った勢いを利用したまま、繰り出した二撃目の蹴りで彼女が持つ武器を破壊する勢いで空中へと蹴り上げた。少女は衝撃と共に手から弾かれた愛銃を呆然と眺める。

「さてと、ちよっとお話し聞かせてもらってもいいかな狐のお嬢さん?」

落下してきた彼女の銃をキャッチした凜太郎は銃口を彼女へと向けながら、してやったりと口元に笑みを浮かべて問いかけた。

黙って聞いてりやチピチピチャパチャパ……!

「えーっと、つまりだ……君の話を纏めると、俺が襲われた理由は君の勘違いだった……って事でいいのかな?」

「……ええ、貴方の話が本当ならそういう事になりますわね」

「いや、俺は一切嘘はついてないって。純度100%でマジだから!」

「近くで大きな声を出さないでくださいます?　　というか、いい加減この鬱陶しい手枷を外して欲しいのですけれど……」

「ちよい待ち……ん?……あ、ごめん。鍵失くしちゃった☆」

「……へ?……はいい!?　　いったいなぜ!!」

「仕方ないじゃん!　　君がめちやくちや暴れるんだもん!」

狐面を付けた謎の襲撃者との格闘から数分。

凜太郎は「一日ゲヘナ風紀委員会」として彼女を取り押さえ、その場で事情聴取的な事を行っていた。というのも、戦闘の最中で彼女の言い分から何やらお互いの間には勘違いが存在しているであろう事を予想したからだ。

チラリと視線を向ければ、まるで親の仇でも見つけたかのような鋭い目つきで睨みつけてくる少女——狐坂ワカモの姿がある。

狐坂ワカモ。

停学処分を受けて連邦矯正局入りして「いた」百鬼夜行連合学院の生徒であり、「七囚人」と呼ばれる凶悪な犯罪者の一人。襲撃事件を複数起こしていて、無差別かつ大規模な破壊行為を行う事から「災厄の狐」と呼ばれている、らしい。

凜太郎は記憶を掘り起こしながら、呪霊によって一緒に閉じ込められるハメになってしまった「七囚人」の少女、アキラがかつて自分に教えてくれた情報をどうにか思い出していた。

「かくなる上は、貴方の腕を切り落としてでも……っ!」

「ちよっ！ 落ち着こう！ その判断は下すのはまだ早い！」

本気でやりそうな彼女の「凄み」に驚きながらも、どうにか彼女の動きを押さえ込む。

ワカモの愛銃に付けられた銃剣、装着されていた短刀を取り外して構える彼女が狙い澄ます先——そこには自分と凧太郎の片腕を繋ぎ合わせるようにして掛けられた手枷がある。

簡単に説明すると、凧太郎とワカモは手錠によって仲良く手を繋いでいるような状態にあった。

なぜこんな状況になっているのか？

それは凧太郎がワカモを取り押さえる際に、ノリとその場の勢いで「確保——」と手枷を掛けた所為である。

数分前。

凧太郎に武器を奪われ、銃口を突きつけられていたワカモであったが彼女は、だからどうしたと言わんばかりに短刀と素手での格闘戦を仕掛けてきたのだ。これには凧太郎もビックリ。

まさかステゴロで挑んでくるとは思ってもみなかったが、流石に格闘戦で負けるつもりもなく何やら冷静さを欠いていた彼女をあっさり押しさえ込んだ。

とりあえず、他の風紀委員の人間に対応してもらおうか。

そう思っ取り押さえられたままジタバタと暴れたままの彼女に手枷をかけて風紀委員の到着を待っていたのだ。そしてその場のノリで彼女と自分の腕に手枷をかけた、というわけだ。

「うーん。つまりはあれだなワカモちゃん……あ、なんか飲む？」

「結構です……貴方、意外と馴れ馴れしいですわね」

「——話を纏めると、君はぶっちゃけシャーレの先公にホの字ってわけだ！」

「——ほおっ!!？」

「はは、いいリアクション。ウケる」

ボツ！ と顔から火が吹き出そうな程に頬を赤く染めた少女の姿に凜太郎は笑う。

最初は自分が襲撃を受けた理由は百鬼夜行での「揉め事」が理由かと思っていたが、そうでもなかったらしい。ワカモから話を聞き出すと、なんとなく理由がわかって来たのだ。

そして聞き出した話を纏めるところだ。

なぜ凜太郎を襲撃したのか？

それは凜太郎について飛び交っている根も葉もない噂話の原因だった。その噂話と言うのが、シャーレにスカウトされたアビドスの男子生徒が色々やばい……などと言う凜太郎からしたら迷惑極まらない噂話の数々だった。

まず、賞金首を相手に全裸で襲い掛かってくるヤバい男子生徒。

シャーレの業務中に他校の生徒に全裸を見せつけるなどの猥褻行為。

ゲヘナ風紀委員会の切り込み隊長の臀部を触るといったセクハラ。

正義実現員会のメンバーに言い寄るなど……その他諸々、全て間違っていると言を大きくして否定したいが否定しきれないような誤解を招くような噂話。

そして挙げ句の果てには、彼は男女問わない好色家でありシャーレの先生もその被害に遭っているのでは？ などという黄色い声と共に中々に肥大化した噂もあつたらしい。

一部ではどちらが「受け」なのか議論が行われているとかなんとか。

——凜太郎は激怒した。

必ずや噂の出所を突き止めて撲滅せんと。

そしてワカモだが、その噂話を間に受け「優しい先生の事だからきつと拒絶できないんだ！」といった形で先生を色欲魔の手から救い出そうと襲撃を執行したらしい。

因みに凜太郎とシャーレの先生が一つ屋根の下、なんて事はない。

凜太郎はシャーレの一室に住み込みで働いているが、先生は付近の社宅らしき物件で過ごしている。

「ふうー、とりあえず全部出鱈目……とは言い切れない部分もあるけど、先公に関してはガツツリ嘘だから。ワカモちゃん心配してるような事は、まっつったくないから！ マジで！ 俺は男には興味ないから！」

「先生には魅力がないとでも!?!」

「めんどくさいなこの子！」

頭を抱える。

恋は盲目というが、もはや失明してるだろと言いたくなるレベルで話を通じない。この思い込みの激しそうな少女にどう説明すれば誤解を解けるのか、凜太郎はもう帰りたくなって来てすらいた。

「……うし。じゃあこうしよう」

「弁明の余地があるか？」

「俺にそっちの気がない事を証明する為に君の恋の手助けを、愛のキューピットになってあげようじゃないか！」

「!?!」

「男の手助けをするのは腹が立つが……まあ、あらぬ誤解を解く為ならば仕方ないだろう。俺が男にまで手を出すような奴だと思われたまま話が終わるのは流石に困る」

凜太郎の言葉に彼女はまるで雷に撃たれたかのように驚愕を露わとした表情に染まっていた。

そんな彼女の反応に愉しげに口元を歪める。

「い、いいい、いきなり何を言って……!」

「お黙り！ この小娘ちゃんめ！」

「はいいい!?!」

「ワカモちゃん先公に好意を寄せてる。それはLIKEじゃなくてLOVEである！ L・O・V・Eのラブなんでしょ！」

「な、なぜそんなことを貴方なんかに……！」

「返答はYESかNO、どっちかで答えなさいな！ 隠すようなことじゃないだろうに、寧ろ胸を張って答えるべきだ！ それとも何か？ 君のその感情は羞恥心程度で隠すようなモンだったのか!!？」

「……ッー！」

ハッ、と大きく目を見開く彼女に凜太郎は言葉を繋げる。

ちよつと楽しくなった来た凜太郎は「熱くなれよお！」とか叫びたくなるような人物を心の中にトレースしてワカモへと暑苦しいくらいに語りかける。

彼の言葉に少女の瞳が揺れ動く。

しかし、すぐに正気を取り戻した彼女は凜太郎を鋭く睨みつける。

この狐坂ワカモ。

キヴォトスでは「厄災の狐」と恐れられる「七囚人」の1人である。罾だとわかっていながら、目の前に吊り下げられた餌に自分から食いつくほど彼女は安い女などではないのだ。

決して靡きなどしない。

そんな彼女が見え透いた甘い誘惑などに惑わされるなどある筈がない。

「……ふっ、甘く見られたものですね。その程度で私を動揺させ籠絡しようなど、あまりにも——」

「あー、あいつとよく恋バナしてるから色々と有益な情報も教えられるよ。例えば好みの女性タイプとか」

「——よろしくお願いします」

なお、成功するとは言っていない。

恋のキューピット（彼女居ない歴Ⅱ年齢）の爆誕。

「とまあ、そんなこんなでワカモちゃんの身柄を確保しました」

「ごめんなさい。まったく意味がわからないわ……」

「えー、そりやないぜチャンひなく。俺これでも凄い丁寧に説明したよ」

ぐでー、つと机の上に体を伸ばしている凧太郎。

そして今しがた伝えられた彼の「報告」から、得られた情報が何ひとつとして理解できなかったヒナは「何言ってんだこいつ」と若干真顔になりながらも困ったような反応をしようとする。

多忙な自分の負担を少しでも減らして一日くらいにゆつくり休ませようと、「期間限定のゲヘナ風紀委員」として立候補した凧太郎。

風紀委員会に嫌がらせをするゲヘナのトップや、トラブルばかりの場所で自分だけが休んではいられないと、そんな凧太郎の提案を最初は断ろうとしていたヒナであったがグイグイと有無を言わせぬような圧力に押し切られてついOKを出してしまった。

しかしそれでもヒナが抜ける穴は大きく、風紀委員会の仕事は忙しい為、非番とはいかず現場仕事ではなく委員長室での軽い書類仕事程度という形に収まっていた。

そんな彼女は、凧太郎からの報告に困惑するしかない。

ゲヘナ自治区で巡回中であつた凧太郎に襲撃を仕掛けて来たのは「七囚人」の狐坂ワカモであり、彼女との戦闘の終えて身柄を確保した後には彼女と恋バナで盛り上がった結果、ワカモが大人しく連行されて行ったなどと聞かされたところで訳がわからないだろう。

「それで、怪我なんかは大丈夫なの？」

「もち。モーマンタイ無問題ですぜー」

「そう、ならよかつた。それじゃあ、事後処理の書類なんかは手早く片付けちゃいましょう」

「うげ、ここでも書類仕事お……」

フンツ、と鼻息を荒く力瘤を作っていた凜太郎。しかし目の前にソツと差し出された書類に、「うひえ〜」と先程までの元気を霧散させてシナシナと萎れていく。

そんな彼の様子に、つい苦笑してしまう。

「風紀委員会って、いつもこんなに忙しいの？」

「今日はまだマシよ。ゲヘナでトラブルが起きない事の方が珍しいくらいなもの、それにマコト……万魔殿が余計な事をしていつも面倒ごとが増えていくから」

「ぱんでもにうむそさえてい？……ああ、イブキちゃんたちのところか」

「それにそういうあなたこそ、シャーレの仕事で忙しいんじゃないの？」

「ちよー忙しいけど……まあ、なんだかんだ楽しいからさ。面倒ごとばっかだけど……嫌ではないかなあ。ヒナちゃんも自分の仕事ってそういう感じ？」

「……そう、かもしれない。確かに面倒なことばかりだけれど、それだけじゃないのは確かだね」

「そっか。やっぱり偉いねヒナちゃんは……そんな君にご褒美をあげようジャマイカー！」

「ご褒美？……あ、あと、あまり頭を撫でないでくれる」

突然なにを言い出すのか。

凜太郎の言葉にヒナは小さく首を傾げている。

ふふふつ、と怪しげな笑みを浮かべながら凜太郎が何かをゴソゴソと取り出している。それは彼がここに来る前に寄り道してきたコンビニで購入した駄菓子を詰め合わせた大きなビニール袋だった。

困惑しているヒナをよそに、凜太郎はいくつかの駄菓子をテーブルの上に広げていく。

「一応、仕事申中のだけれど。適当に済ませようとしなくて、仕事はきちんとやって」

「気にしない気にしない。仕事するのは適度に肩の力を抜いてやった方がいいのだよ。ずっと気を張ったままじゃダメでしょ……あ、ちゃんヒナはどれ食べる？」

「……ポツキー」

「りよ。じゃあ、俺はねるねるねるねでも作っちゃおうかなッ！」

ある程度片付いていた重要な書類を横へ退けると、あつという間にテーブルの上ではお菓子のパーティタイムが始まる。

この光景をアコが見れば何をしているんだと悲鳴をあげて凧太郎にガミガミと小言を言うだろうが、彼女は拘束したワカモをヴァルキューレ公安局へと身柄を引き渡す手続きを凧太郎から押し付けられた為ここにはいない。

つまり、おサボりが得意な凧太郎を止められる者はこの場にはいないのだ。

「いつの間にこんなもの……」

「まあまあ、細かいことは気にせずにや委員長。あ……そういえばさ、話は変わるんだけど最近ゲヘナで変な事件とかって、起きてない？」

「変な事件？　寧ろ毎日のように大騒ぎしている生徒たちの方が多いけれど」

「あー、そうもそうかもしれないんだけど。どっちかというところ、生徒関連じゃなくて超常的な怪奇現象みたいな、なんかこう、特殊な感じのやつ！」

「よくわからないけど、特にそういった話はアコからも聞いたことはないわね……どうして？」

「いや、何も問題なければ全然いいんだよ。個人的な問題だからあまり気にしないでよ……ほら、ポツキーやで。ヒナちゃんお口あー

ん」

ゲヘナは毎日事件だらけだ。

休む暇もなく現場へと駆り出されている少女は何をいつてるんだと視線を向ける。

呪霊関連で何か問題が起きてはいないか、ゲヘナ風紀委員会の情報網ならば何か掴んでいるかと考えたのだが、不思議そうな表情で首を傾げているヒナの様子に凜太郎は彼女が本当に何も知らないであろうと話を強引に終わらせた。

そんな彼にヒナは怪訝な表情を浮かべていたが、小さく開いていた口の中にお菓子を強引に放り込まれたことよって目が点になる。それから少しして恥ずかしそうに顔を逸らす姿が可愛くて頬が緩んでしまう。

「……？」

そんな時だ。

もう少しヒナを揶揄って遊ぼうか、なんて考えていた凜太郎だったが自分の通信端末が激しく鳴り響いたことで意識がそつちに持つて行かれた。

いったい誰が連絡してきたのか。

取り出したスマホの画面を見て見ればそこには『クソチビ(桃)』と、凜太郎のスマホに登録された相手の名前が画面に大きく表示されている。

その相手が誰なのかといえば、モモイである。

正直言っただけ出たくない。

凜太郎はゲンナリとした顔でスマホを見つめている。

どうせ何か面倒ごとにもまた巻き込まてるんだろうと予測が出来てすらいいたからだ。これでまた『クソゲークリアするまで終われませんか！』的なやつだったら今度こそ精神がぶっ壊されることは目に見えている。

ゲーム開発部という子供のお守りを拭えない感のある場所で仕事するよりも今はゲヘナで女の子たちとキャツキヤウフフしたい凜太郎であったが、渋々といった様子で電話に出ることにした。

隣にいるヒナへ一言入れた後、電話に出て見れば喧しいほどに元気な声が聞こえてくる。

「……えー、おかけになった電話番号は現在使われておりません。電話番号を確かめる必要もないのでそのまま電話を切ってください。そうすれば汝もまた主の加護が得られることでしょう。死こそ救済です」

『え怖っ!? 急に訳のわからないネタをぶち込まないでよ! とうか前に既読無視したでしょ!』

「はて? 既読、無視? ……う、お……キュ、キュキュ、急ニデデ電波ガガガー。電話ガ途切レソウ、ダナー!」

『おいこらー! 電話を切ろうとするんじゃないやい!』

「ちつ……で、要件はなんじやい。くだらんことだつたらお前を縛り付けた後、目の前で一つずつゲームのセーブデータ消すからな」

『当たり前強っ。とかやろうとしてることがあまりにも惨すぎるう!』

「じゃかしい。そんで、電話してくるってことはなんかあつたんだろ。どうしたんだよ」

電話の向こうのモモイの姿があまりにも想像し易くつい笑いそうになつてしまう。

これ以上弄つても、無駄に話が長引きそうなのでとりあえずはモモイ弄りはここまですて本題を切り出すことにした。いくら弄り甲斐のある少女が相手だとしても、相手が年下の女の子である以上は年上として頼れる一面を見せてやるか。

なんて思いながら、モモイからどんな無理難題を突きつけられても付き合つてやるかなんて思っていた凜太郎。

『——そうだった！ ちよつとリンタロウに頼みたいことがあったんだ！ えつと、メイド服で相手を優雅に“清掃”しちやうミレニアムの武力集団と戦うのを手伝ってほしいんだけど!!』

「何言ってるんだオメエ？」

前言撤回。

ちよつと何言ってるかわからなかった。

わっぴーで埋め尽くして〜♪

「あー……なるほど。まあ、何となくわかった」

「わ、わかっていただけただけでしょうか……?」

「とりあえず、お前の罪状のおさらいといくか」

「罪状……っ!?!」

現在。

凜太郎は呼び出しを受けてミレニウムに来ていた。

この場にはゲーム開発部の面々とその協力者が集まっている。

場所はここ数日で見慣れたゲーム開発部の部室ではなく、寧ろあの生活感のある所謂“秘密基地”的な場所とは打って変わってモニターやコンピュータといった見たこともない機械が視界を埋め尽くすような謎めいた雰囲気に含まれた一室。

……いや、よく見ればジュースやお菓子の食べ残し。床に転がったゲーム機や起動したままのオンラインゲームがモニターに映っていたりと、あまりゲーム開発部の部室と大差ないように感じる。

凜太郎はため息をついた。

ミレニウムサイエンススクールにて、“非公認”な部活ヴェリタス。聞いた話によれば「真理の守護者であり、知識を探求する正義のハッカー集団」を名乗っているようだが、他の生徒からはよく騒ぎを起こす問題児集団だと思われるのかなんとか、とりあえずは深く考えないようにした。

要するに、お騒がせクラッカー集団だ。

二度目のため息をついてしまう。

そして凜太郎が呼び出された理由^{わけ}だが、それはまたもやゲーム開発部の存続の為であった。廃部寸前のゲーム開発部であったが、活動する為の規定人数を満たしたのはいいもののまたしても問題が出てきたのだ。

ゲーム開発部が活動を許されたのは「今学期」まで。

規定人数を満たすだけではなく、同時に部としての価値や成果を証明しなければならなかったのだ。その為、今月中に結果を出さなければたとえ規定人数を満たしていた所で活動実績がなければゲーム開発部は廃部になってしまう。

その話を聞かされた凜太郎は「まあそうだろうな」といった感想くらしいかない。部費が学校側から支給される以上、何かしらの成果やそれに見合うだけのものは必要だろう。ただダラダラと過ごせる訳もない。

そしてモモイたちゲーム開発部は今月中に結果を出す為に、『ミレニアムプライス』と呼ばれるミレニアム中の部活が各々の成果物を競い合う、ミレニアムで最大級の品評コンテストで受賞されるようなすごいゲームを制作しなければならないのだ。

そのの為に昔のキヴォトスにいた伝説のゲームクリエイターが作ったとされる神ゲーマニュアル『G. Bible. 』が必要だとのことらしいが、これに関しては以前、凜太郎が呼び出しを受けたが既読無視した際にゲーム開発部のメンバーが再び『廃墟』に向かい「謎の音声」に従いデータをモモイのゲーム機にダウンロードした事で解決はしているらしい。

——しかし問題はその後だった。

ミレニアムプライスに向けて『テイルズ・サガ・クロニクル2』を制作する為に神ゲーマニュアルを拝見しようにもパスワードが掛かっており中身が見れなかったのだ。そこでパスワードを解除してもらおう為にヴェリタスに解除を依頼したようなのだが。

「……で、その肝心なデータを見る為のハッキングツールはここにはないと」

「うっ」

チラリ、と視線を向けて見れば気まずそうに視線を逸らす美少女

ハッカー集団の姿がある。

入手したファイルのパスワードを解析するのは不可能、セキュリティファイルを取り除いて中身のデータを丸ごとコピーするという手段で解決しようとしたようだがそれをを行う為の『Optimus Mirror System』通称「鏡」と呼ばれるツールが必要になるとのこと。

そしてそれは生徒会に没収されてしまった為、現在は手元にはない。もはや詰みとも言える状況だったのだが。

その「鏡」とやらを取り返す為にモモイはヴェリタスと組んでミレニアムの生徒会を襲撃しようと計画しているのだ。どうしてキヴオトスの生徒は、こう、豪快というか大胆というか、凜太郎は頭を抱えなくなった。

凜太郎が呼び出された理由もそこにあつた。

要はその生徒会襲撃のお手伝いとして呼び出されたのだ。しかもそれだけではなく、彼女たちが直面している「問題」を解決する為に呼ばれたと言ってもいい。

その「鏡」はミレニアム生徒会の「差押品保管庫」と呼ばれる場所に保管されており、その保管庫はメイド部と呼ばれる生徒たちによって守られているのだ。

メイド部、正式には『Cleaning&Clearing』

ミレニアムサイエンススクールで活動する組織で、C&Cとも呼ばれている凄腕のエージェント集団。戦闘力は同校でトップクラスと言われるほど。彼女たちの「ご奉仕」によって壊滅させられた過激派サークルが部活は多い。

「要は、俺にそのメイドさんたちと戦ってこい……って事でいいわけ？」

「いやあ、そのー、リントローも腕に自信はあるみたいだし大丈夫そうかなーって、ほら先生もリントロウに頼れば平気だよって言ったから……あの、何で私の頭を掴んでいるのでしょうか？」

「うーん。デスベナルティ死刑」

「判決が重すぎる！……イダダダ！ 頭が潰れちゃううっ!？」

「自慢じゃないが握力には自信があるんだよね」

「アダダダ！ ちよ、普通に痛い!!」

とりあえずアイアンクローをお見舞いすることにした。

「ぬおー!!? ザクロになっちゃううう!!?」と頭を鷲掴みにされたままもがいているモモイを持ち上げたまま凜太郎は本日三度目のため息をついた。

そこでふと、ヴェリタスの面々とは初対面で自己紹介がまだであったことを思い出した。

「おっと、そうだった。聞いているかもしれないけど、ちゃんとした自己紹介はしてなかったよね。俺は津上 凜太郎、津上でも凜太郎でも好きなように呼んでよ。もしくは親しみを込めて凜ちゃんでもいいぜ」

——ふ、決まった。

凜太郎は自己評価MAXで完璧な自己紹介に内心でキリツとした顔を浮かべているが、周りの人間からは苦笑いが浮かんでいる。何せ片手には頭を鷲掴みにされたモモイが蹴き野太い悲鳴を上げているのだから。

「あ、あはは……。おっと、あたしは小塗マキ！ よろしくねリン！」

「ふむふむ……え、真希？」

「ん？ うん、マキだよ？ それでこっちが……」

一瞬、脳内に訓練と称して武具を片手に容赦なく殴り掛かってくる武闘派な同級生が過ったが、同名くらい珍しくはないかと気にしない事にした。

「私は小鈎ハレ。ヴェリタスではエンジンアをやってる」

「マキちゃんとハレちゃんか。最後にそつちの子は……」

「……音瀬コタマ。津上 リンタロウさん、あなたのことはそれとなく知っています」

「おろろ？ 俺ってやつぱ有名か？」

「先生との会話を盗ちよ……よく聞いていたので」

「いま盗聴って言わなかった？」

「……言ってます。きつと気のせいです」

「そつか。ほな気のせいか」

凜太郎の視線から逃れるように顔を背ける少女の姿に、あつ（察し）となつたがとりあえず深くは気にしないことにした。キヴォトスだもん、そういうこともあるよね。なんて段々と感覚が麻痺してきている凜太郎だった。

お団子ヘアで見るからに現代っ子で元気っ子といったマキ。

白衣のようなジャケットとサイズの大きなパーカーの隙間から見える生足に目を引かれてしまいそうなハレ。

前髪のヘアピンと首にかけたヘッドホンが特徴的なコタマ。

魅力的な女性たちの登場に、クール系で通そうと鼻の下が伸びそうになるのを必死に抑えている凜太郎。まあ、猫を被ろうにも色々ともう手遅れかもしれないが。

視線をモモイへと戻す。

「で、話を戻すけど……その『鏡』とやらを取り返す為に保管庫を守ってるメイドさんをどうにかしないとイケないんだっけ？」

「そうそう！ なにせ相手は強敵揃い。リンタローにはC&Cと戦闘になった場合、助けてほしいんだよね。それとそろそろ手を離してくれとありがたいかな!？」

「えー、でも俺はユウカちゃん相手に酷いことしたくないよ?」

「んな！ あの冷酷な太もも大魔王ユウカの味方をするの!？」

「俺も人のこと言えないが、お前口悪いな。寧ろチャームポイント

だろあの太もも。俺は好きだぞあの健康的な太もも」

「そんなこと聞いてない！ この鬼！ 悪魔！ 変態!!」

「はは、このまま握り潰してやろうか」

「既に頭蓋が潰れかけてますっ!」

ミシミシと嫌な音を立てている事が直で伝わってしまうモモイは悲鳴をあげる。

このガキいつそのまま振り回してやろうか、なんて思ったりもしたが驚掴みにされ宙に浮いているモモイの様子を側で心配そうに見守っているゲーム開発部の姿があるので流石にそれはやめておく事にした。

「た、大変です！ モモイが陸に打ち上げられた非力な魚みたいになつてます!?! すごく変な動きです!?!」

「はあ、お姉ちゃんってば……だから返事を聞いてから作戦を決めようって言ったのに」

「うう……っ」

とりあえず一旦モモイを離してやるか、なんて思っていた時だった。

「——あ、あの!」

「ん、ユズちゃん?」

凜太郎の前に、みんなの影に隠れるように立っていたゲーム開発部の部長であるユズが立っていた。いったいどうしたのか、そう思いながら彼女の様子を窺えば、まるで意を決したような表情を浮かべている。

対人恐怖症であり性格はおとなしく内向的な彼女、自分に対しても少し距離感を感じているのを理解している凜太郎だが、そんな彼女が何やら覇気のようなものを纏って自分の前に立っていることに少し

驚いてしまう。

「も、元々は私の所為なんです……っ！ 私に勇気がなくて部長会議に参加できなかったから、その所為でゲーム開発部が廃部になるかもしれないなんて……それで……っ」

「そ、それはユズちゃんの所為じゃないよ！ そういうのはお姉ちゃんが代わりに参加することにしたはずなんだから。原因があるとすれば参加しなかったお姉ちゃんであって、ユズちゃんのせいではないよ！」

「……だそうだが、そのお姉ちゃんはなんで大事な会議に参加できなかったんですかねえ？ ほれ、正直にゆうてみい」

「え、えへへ……ちようどその日はアイテムドロップ率2倍のキャンペーン中だったもので、おかげで進化素材もウハウハ……あ、無言で力を強めるのはやめていただけると助かりますう！」

「……生爪」ボソツ

「生爪っ!? ちよっ、怖い怖い！ なにするつもりさ!!?」

一瞬、ゲーム開発部の絆の強さに心打たれそうになっていた凜太郎だったが、最後の最後にやらかしてくれたモモイのせいで台無しになった。呆れてものも言えないとはこういう事なんだろう、本日何度目かわからないため息が溢れる。

重い息を吐きながら、ひとまずモモイを解放する。

頭から手を離され尻から地面に落下した彼女は「うごお！ 尻が割れるっ！」などと抜かしており、なにやらまだ余裕がありそうな様子だ。尻を押さえながら蹲る姿は、年頃の女の子とは到底思えない。

「……はああく。ったく、お前はもう少しよう……いや、やつぱいや。なに言っても効果なさそうだし、で生徒会とそのメイドさんチームから『鏡』ってのを取り返すんだな？」

「……へ？」

「へ、じゃなくて。協力してやるって言うてんの」

「ほ、ほんとにほんと?」

「本当に本当、ちよーマジだから」

「や、やったあっ!! さっすがだね!」

ポカンとした表情を浮かべたモモイ。

凛太郎の言葉を飲み込むのにたっぷり数秒ほど時間を使い、徐々にその表情をパアツとほころばせてゆき全身で喜びを表現するかのよう飛び跳ねている。

喧しいなこいつ、なんて思いながらもそこまで喜ばれては悪い気がしなくもない。

「いや、先生の言う通りだったね。『リントロウはツンデレだから文句言いつつもなんだかかんだで手伝ってくれる』って言ってたし。素直じゃないんだから! 最初からそう言えばいいのに!」

「やっぱ帰るわ、おつかれさまでーす」

「ああ!? ちよ、嘘です! ありがとうございます!」

——なんてやり取りがあつたのが、数時間前のことだ。

「まさか、てめえもそっち側だったとはな。それだったらわざわざ俺が手伝う必要はないんじゃないやねえか?」

『はは、ごめんね。でも、こういうのはみんなでやったほうが楽しいでしょ?』

「楽しいもクソもあるかよ。チツ、最初から俺が手伝う前提で作戦組みやがって。俺が拒否してたらどうするつもりだったんだよ」

『その時は、その時かな。それに、リントロウならなんだかんで手伝ってくれるでしょ』

「……このヤローっ。書類整理終わってなかったらおぼえとけよ」

『そこは大丈夫。もう、ある程度は片付けてあるから』

「へー、へー、そうですか」

不貞腐れたように通信端末に愚痴をこぼす。

その相手はもちろん、シャーレの先生だった。どうやら先生も彼女たちの作戦に手を貸しており、最初から協力者としての立場にいたらしい。

まるで最初から相手の手のひらで転がされていたような気がしてどうにもムカムカする凜太郎だったが、それで拗ねて帰るほど子供ではない。

——パンパカパーン！ リントロウがパーティに加わりました！
これで一緒に冒険ができますね！ アリスは嬉しいです!!

なにより、瞳を輝かせる純粹無垢な少女の喜ぶ姿を見てしまえばそんな気も失せてしまうものだ。凜太郎は一人っ子である為、兄や姉、弟や妹などの兄妹はいないが、実を言うとそういうのに対する憧れが少しはあったりもする。

なので妹属性の強そうな年下の子供にあそこまで喜ばれてしまったのは、悪い気がしなくもない。

「んで、そっちはどんな感じよ?」

『今の所は計画通り、つてところかな』

「ほーん、なるほどね。んじゃそろそろか」

『うん。準備のほうよろしくね!』

「りよー」

軽い返事をしながら、凜太郎は自分の“装備”を弄り回す。

それはエンジニア部より送られた凧太郎の専用武器。

金、銀、黒、三色のカラーリングを施された無骨な鉄の塊ともいっていい巨大な機械仕掛けなガントレット。なにやら試作品の段階よりも一回り大きくなっている気がするが、凧太郎は片腕にそれを装着させながら「組み上げていく」。

「ヒビキちゃん。このパーツってどこお？」

『それは手首の、そう内部フレームの少し横にあるネジのスペース、そうそこに嵌め込めるようになってるから。うん、そこだね』

「なるほどね。あ、ハマった。うわ懐つ、ガキの頃よく親父のプラモ作り手伝ってたの思い出したわ」

『そうなんだ……いま組み上げてるのはプラモデルとは言えないけどね』

「ははっ、確かにそうかも。こんなイカツイイプラモデルなんてそうそうないか」

エンジニア部より送られたアームギアだが、片方は既に改良と大まかな調整を済ませて後は凧太郎本人が自分にフィットするように調整すればいいだけという、九割完成状態であったのだが「どうせなら両手分作るか!」という深夜テンションにも近い状態の彼女たちの手によって予定にないもう一つのアームギアが誕生してしまった。

予定になかった装備品の為、凧太郎が受け取りに来たタイミングでは調整が間に合っておらず彼女たちエンジニア部の面々も今回の『作戦』の助っ人として参加していた為に最終的な調整は凧太郎、そして彼とモニター通信を繋いでいるヒビキによって行われているのだった。

といっても、素人な上にそこまでの高度な作業が出来るほど凧太郎の知能は高くないので、既にエンジニア部が6〜7割ほど完成させているものを簡易的な説明書を読みながらやっているだけだ。

「うしっ! こんなもんだろ!」

『……あの、なんかパーツ余ってない?』

「ん?……んん?……こ、こんなもだろう! かんぺきく!」

『ええく……? あとそんなに似てないよモノマネ』

「うっいや、でも……う、動くから。ほらちゃんと動いてるって!」

そしてなぜか一つ余るパーツ。

ヒビキに補助してもらいつつ、ちゃんと説明書通りにやっていた筈なのになぜか本来余ることもないパーツが足元に転がっている。見間違いかと思ひ、目を擦ってみるが見間違いなどではなかった。

通話の向こう側から何やら呆れたような視線を向けられている事に気がついた凜太郎、装着したアームギアを動かしてなんの問題もなく動作することを見せる。

『はあ……うん、この作戦が終わったら後で持ってきて』

「す、すみません。ありがとうございます」

とりあえず、余ったパーツは無くさないようにポケットに入れておく事にした。

「そういえば、なんか前に見た時よりゴツくなってるのはなんで?」

『それはもちろん、色々と装備の追加でアップデートを施したから』

「追加……ほう、例えば?」

『えっと、まずは拘束用のワイヤーガン。これは発射すれば文字通りワイヤーが飛んで行って相手を拘束出来るね。それなりに強度もあるから、モードを切り替えて撃てば所謂グラップリングガンにもなる』

「すんげー! ちよーカッターじゃん!」

『ふふん。それだけじゃない、そのアームギアにはBluetooth機能も搭載してる。簡単にペアリングもできる』

「ほう……んん?」

『そしてなんと、指先からトンカツソースも出て来る。これでいつ

でも出来立てホカホカのトンカツ、全ての揚げ物にソースをかけて食べられる』

「ほうほうトンカツ……ん？　いまトンカツソースって言った？」

『うん、言った』

「なんで!?!　なんでトンカツソース!?!」

『……夜食で食べたコロツケは美味しかった』

「さては使用済みだなっ!!?」

訳がわからなかった。

組み立てる最中になんかいい匂いするなく、なんて思っていた凜太郎だったがその疑問がいま解消されてしまった。

絶対にいらぬだろうその機能と思いつつも、既に組み上げてしまっている上に分解して取り出す時間も残されてはいない。

「はあ……ま、まあいいや。とりあえず、俺もそろそろ行動開始だからこのまま行くしかねえか」

『うん。頑張つて……あ、ウタハ先輩が拘束されたかも』

「マジ?　とりあえず、そっちは任せるよ」

通信を切り上げて凜太郎は腰を上げる。

凜太郎たちが生徒会の『差押品保管庫』からお目当ての品を取り戻すための作戦はこうだ。まずはアリスとヴェリタスの部員たちが派手に陽動作戦を行い、その間にミドリとモモイはシャーレの先生と共にセミナーに向かい、正面突破を試みる。

そして協力を要請されたエンジニア部は保管庫に向かう途中でメイド部のC&Cに行くてを阻まれるであろうゲーム開発部のフォー、と言ったところだ。

そして凜太郎の役目は、窮地に陥るであろうゲーム開発部の救助と逃走補助。

「……んじゃ行くか」

伸びをしながら立ち上がった凜太郎。

見上げる先にあるのはミレニアムタワーの最上階。『鏡』がある『差押品保管庫』はミレニアムタワーの最上階を専用スペースとした西側にあると言われている。

そして保管庫まで行く為には必ず「エレベーター」を使わなければならない。このエレベーターは生徒会と限られた人のみが通過できる指紋認証システムが搭載されている。

そのシステムをどうにかする為に、ヴェリタスの面々が仕込みを働かせているようだったが、凜太郎からしたら指紋認証システムなど関係ない。

「やっぱ高ついなく。ま、行くしかねえか」

目指す先はミレニアムタワーの最上階。

凜太郎は呪力を全身に巡らせて、最短で最上階へと辿り着く為のルートを脳内で構築する。準備運動でもするかのように、全身の筋肉を伸ばしながら軽く地面を飛ぶ。

そして彼は、静かにミレニアムタワーの壁を駆け上がった。

アイツ…頭高くない？

「あははっ、何が何だかわからないけど…：私たちが優勢って感じ！」

「ううっ…：…！」

「あ、あとちよつとで、もう少しで保管庫まで辿り着けるのに…：ア
イタタっ！ どうして後ろを振り返らずにこっちが撃てるの!？」

「え？ うーん、なんとなくそこかなく、って…：直感ってやつかな
！」

「い、インチキだ！ いくらなんでもそれはズルでしょ!?!?…：ア
ダっ！」

「ほらほら！ 足が止まってるよー！」

「くう、おのれデカパイメイドめえ…：…！ そんなデカいのぶら下
げてたらうちのミドリが黙ってないんだからね！」

「ちよ、お姉ちゃん?! 変なこと言わないでよー！」

ミレニアムタワー最上階。

そこでシャーレの先生を含めたモモイとミドリは、生徒会の警備口
ポットを退け、お目当ての「鏡」がある保管庫を前にして苦戦を強い
られていた。

シャーレの先生の指揮、そして双子の息のあつたコンビネーション
をものともせず、2対1という不利な状況であつても抑え込めない
ほどの戦闘能力を秘めた相手に足止めを喰らってしまう。

『Cleaning&Clearing』

通称『C&C』

ミレニアムサイエンススクールで活動するセミナー直属の組織で
あり、凄腕のエンジニア集団であり戦闘力は同校でトップクラスと
いう、ゲーム開発部からしたら化け物集団もいとこだった。

C&Cのエンジニアの1人。

コールサイン「ゼロワン」の名を持つ少女、一之瀬アスナ。彼女はミレニアム随一とされるC&Cのリーダーに次ぐ戦闘力を持つと言われるほどの実力者である。

そんな戦闘能力とずば抜けた直感で戦場を駆ける彼女にモモイたちは手も足も出せずにいた。

「……ふーん」

冷静に分析する。

両者には実力差はあった。

拮抗するわけでもなく、個々での戦闘力であればどれだけ足掻いたところで覆せないようなパワーバランス。

それでも諦めることなく喰らいついてくる精神力とチームワークには、この状況下であろうと敵味方問わずに素直に感嘆の声を掛けてもいいと思えるくらいに。

(うーん。思ってたより、全然悪くない。お世辞にも戦闘能力がすごいとは言えないけど……チームワークっていう点においては間違いないくベテラン級)

視線の先。

息も絶え絶え、この状況を覆すだけの手段も力もない。しかし双子の目はまだ死んでいない。その様子にアスナは目元を緩め口元に弧を描く。

「双子パワーってやつかな。うん、いいじゃんいいじゃん！」

「くうう、まさかここでアスナ先輩と出くわすなんて……おのれデカチチ……っ！」

「お姉ちゃん。一旦退こう……あと、恥ずかしいから齒軋りしながら相手の胸元を睨みつけないで」

「いやだ！ 持たざる者の憎しみを今ここでぶつけてやるんだ！」

「も、目的が変わってるからっ!？」

「えー、大っきくても肩が凝るだけだよ?」

「ぶっとぼしてやるう! うわーん!!」

鼻息を荒くし、己の愛銃を掲げながら悲痛な雄叫びを上げるモモイの様子にアスナはケラケラと笑っている。

「せ、先生……?」

「〴〵の、ノーコメントで……〴〵」

暴走気味な姉をどうにかしようとするが、当然止まるはずもなくミドリはシャーレの先生に助けを求めるかのように視線を向けるが先生は気まずそうに目を逸らすだけだった。

普段から奇行が目立つ先生だが、そういうデリケートな話題には男性は中々踏み込めないものなのだ。

ため息が出る。

ひとまず、状況を冷静に見極めるミドリが姉の襟首を掴んで一時退却を図ろうとするが、そう簡単にはいかない。

突如として響く、耳をつんざくような大きな銃声。

窓ガラスをぶち抜いて数cm横の壁に直撃した大口径弾にミドリとモモイは悲鳴を上げる。

「うひゃ!?!」

「きゃあ! こ、これってカリン先輩の……!?!」

「え……ってことはウタハ先輩は……っ」

「〴〵拘束されちゃった……ってことだろうね〴〵」

冷や汗が流れた。

対物スナイパーライフルにてC&Cの後方火力支援を担当するエージェント、コールサイン「ゼロツー」。エンジニア部のウタハとヒビキの2人が妨害し足止めしていた筈のエージェントの援護射撃、そ

れがここに来て息を吹き返してきた事に表情が引き攣る。

それと同時に、そのエージェントが行動を再び開始したという事は対峙していたウタハが拘束されてしまったという事を意味している。

「あつ、マキから連絡！」

「それっていい知らせ？」

「……む、寧ろ悪い知らせかも。アカネ先輩がシャッターを爆発させて脱出したみたい」

「……っ！」

「それだけじゃなくて、同時にすごい数のロボットもこっちに向かってきてるって……！」

「ええっ!？」

「〃はは、私たち人気者だね〃」

「笑い事じゃないですよ先生！」

それだけではなく、モモイたちにとって不幸な知らせが立て続けに届けられた。

相手の戦力を分散させる為、そしてモモイたちがミレニアムタワーの中を自由に動き回る為に、ヴェリタスが手の施したセキュリティシステムを利用して別フロアへと隔離したC&Cのエージェントが隔離シャッターを爆破して脱出してしまったという、この状況で聞きたくない情報が次々と耳に入ってくる。

「お、落ち着こう。クールになるんだ妹よ、ここまではまだ計画通り……私たちが派手に動けば動くほど警備は手薄になるんだから」

「……お姉ちゃん冷や汗がすごいよ」

「それに……もしこのタイミング私たちが捕まっても、謹慎ぐらいだろうし。部室でこっそりG・Bibleを見ながらゲームが作れる……よね？　だ、大丈夫だよね？」

「うーん。なんの相談かなー？　ちよつとずつ必死さが無くなってきてる気がするけど……まさか、諦めたわけじゃないよね？」

「——この状況なら、諦めた方が賢明だと思いますけどね。」

「そ、その声は……うげえ!? ユウカ!?!」

「う、うげ??……ついまうげ」って言いました!?!」

モモイたちに追い打ちを掛けるように立ち塞がる人影が増える。

それは先生もよく知る人物であった。

もはや袋の鼠といってもいいほどに追い詰められたモモイたちの前に、ミレニアムサイエンススクールのセミナー会計担当であり、何度かシャーレにも当番として仕事を手伝いに来てくれていた早瀬ユウカがしてやったりといった表情を浮かべて立っていた。

「うっ! ユウカ……」

「ツホン! 久しぶりね。とりあえず、ここまで状況を引つ掻き回した事については褒めてあげる。それについては素直に驚いたわ」

「じゃ、じゃあ……」

「でもそれはそれ、これはこれ……こんなありとあらゆる方法を使って生徒会を襲撃するなんて、やり過ぎよ。ちよつと甘くしすぎたかしら、もうイタズラじゃ済まされないわよ」

ユウカの言葉にモモイたちは、サツと気まずそうに視線を背けるしかない。そんな3人の姿に、ユウカは呆れたように息を吐いた。

「無条件の1週間停学、もしくは拘禁くらいは覚悟した方がいいわよ」

「て、停学!? 拘禁!?!」

「驚く事じゃないでしょ。それくらいの事はやってるのよあなたたち」

「そんな、1週間だと……ミレニアムプライスが終わっちゃう!」

「アリスちゃんも、今は反省部屋に入ってもらってるわ。1人だけで可哀想そうだったけど、あなたたちがくればぎつと喜ぶでしょう」

そこまでの罰を与えられるとは思っていなかったのか、ユウカの言葉にモモイとミドリは動揺を隠しきれない様子で驚愕している。若干涙目になりつつある彼女たちを見て、ちよつと楽しくなってきたユウカは笑みを浮かべ嗤っている。

まるで悪の女王。

どっちが悪役かわからなくなりそうな構図に先生は苦笑するしかない。

捕まっても大丈夫だろう、なんて樂觀視していたモモイだが想像以上に自分たちが追い込まれている事に気がつき、その表情はとても険しいものとなっていた。

既にアリスは捉えられている。

というのも今回の作戦の一端として彼女が第一手として陽動を担っていたからだ。

保管庫に続くエレベーターの「指紋認証システム」を突破するのは困難だ。そこヴェリタスが手を加えたセキュリティシステムと交換させる為、アリスは正面からの強行突破でセミナーの指紋認証システムを破壊した。

その際、彼女は派手に暴れてユウカたちに捉えられてしまっているのだ。

「お、お姉ちゃん……!」

「このままじゃ、たとえ『鏡』を奪えたとしても……!」

ゲームを作る為に必要な道具を奪えたとしても、ここでモモイとミドリが捕まってもしまつてはゲーム作りどころではない。ミレニアムプライスまでの時間は多く残されてはいないのだ、だというのに1週間も停学や拘禁などされてしまつてはどうしようもない。

捕まるわけにはない。

どうにかしてこの状況を打開しなければ。

息を整え、相手を睨むように構えたモモイ。

しかしそんな彼女に追い打ちを掛けるかのように、困難は収束して

きた。

「ここを突破しないと!」

「突破? へえ、私たちが相手に?」

「——ふう、やっと着きました」

「……うええ!」

「あ、アカネ先輩!? それに警備の戦闘ロボットまで!」

モモイたちの後方、挟み撃ちにするかのような警備ロボットを引き連れて現れた新たな人影。

C & Cのエージェント。

C & Cのブレン担当であり、敵陣に潜入し爆薬で全て綺麗に掃除を行う、「掃除のプロフェッショナル」という二つ名で知られる人物。

コールサイン「ゼロスリー」

室笠アカネ

彼女がたつた今、この場に到着してしまった。モモイたちが想定していたよりも速く現れたメイドの姿に、思わず思考が止まってしまっそうになった。

「ふふつ、今度こそ本物みたいですね。あらためて自己紹介といきましょう。初めまして……モモイちゃん、ミドリちゃん」

「え、あ、初めまして……」

「ヴェリタスについては、ギリギリ許せる範囲かもしれませんが……ここまで入り込んでしまったあなたたちに、弁明の余地はありませんよ」

「それから……先生も、シャーレに抗議文くらい送らせて頂きますので。ご承知くださいね!」

「あ、あはは、ですよー」

ミレニアムの生徒会に大規模な襲撃を仕掛けたゲーム開発部とヴェリタス。そしてそれに嬉々として加担したであろうシャーレの

先生をムツとした表情で先生を見つめるユウカ。
大の大人が、自分の学校で問題行動に加担したなど彼女からしたら
堪ったものではない。

「うっ……!」

「ど、どうしようお姉ちゃん……!」

失敗。

その二文字が脳裏に色濃く浮かび上がった。

あとちよつとだというのに、ここで本当に終わってしまうのか。先生やエンジニア部、ヴェリタスの面々が助けてくれたというのに、自分たちの力不足のせいで計画が失敗に終わってしまう。

目尻に涙が浮かぶ。

まるで足元から全てが崩れていくような感覚。

「……え?」

「せ、先生……?」

「大丈夫。まだ諦めないで」

優しく、頭に手を置かれる感覚に振り返る。

もはやどうしようもない、そんな絶望的な状況で諦めないでと笑いかける先生の姿にモモイとミドリは悔しそうに表情を歪めるしかない。

「そうしたい、けど……もう無理だよ」

「どうして?」

「どうして……前にはC&Cのエージェント、後にはミレニアムの生徒会。ミレニアムでもトップレベルに強力な二大勢力だよ。こんな状況でどうしたら……」

「でも、こっちにもカードは残ってるよ」

「……!」

「……そろそろ、かな？」

「先生、相談は終わりましたか。大人しく投降するのなら情状酌量の余地があるとして……ま、まあ、少しくらいは多めに見てあげます」

「あー、ユウカ」

「……なんですか」

「先に謝っておくね。多分、うちの部員って手加減とか苦手だろうし……派手に壊れたりしたらごめん」

「はい？……それはどういう……？」

先生の言葉にユウカは首を傾げる。

そんな時だった。

ドンツ！つと大きな音が響いたかと思えば、まるでミレニアムタワー全体が震えるかのように足元が揺れた。いったい何事か、なんて考える暇はなかった。

次の瞬間、ビシツ！と近くの壁面に大きな亀裂が入ったかと思えば、まるで爆発したかのような衝撃が走り轟音と共にボールのように壁面が吹き飛んでいったのだ。

突然の事態に周囲の視線が一点に集まる。

「——おお！　ようやく広そうなところに出たな！」

「パンパカパーン！　勇者パーティが目的地に到着しました！」

土煙が烟るその先、そこには黒髪の少女アリスを担いだ状態のまま片手で気絶したミレニアムの制服に身を包む白髪の少女を抱え瓦礫の上に立つ男の姿があった。

「やつほー。今どんな感じ、もうブツは回収できたん？」

ポカン、と皆が口を揃えて呆然としていた。

しかし目の前の男、凜太郎は自分に向けられる視線など気にも止めずに、まるで散歩中に知り合いでも見つけたかのような軽いテンションでモモイたちのほうへと何事もなかったかのように歩いていく。

目の前で声を掛けているというのに反応のないモモイに対して訝しむような視線を向けた後、変な空気感となっている周囲を見渡した後、アスナやアカネといった初めて見る生徒とその姿に目を輝かせる。

「うおッ！ メイドだ！ マジでメイドさんだ!!……あれ、ユウカちゃんもいるじゃん。やつほー!」

返事はない。

呆然としまま、反応のない相手に首を傾げる。

とりあえず、担いでいたアリスを下ろして近くにいるモモイの前にしゃがみ込むと顔の前で手を振ってみることにした。

「おーい。生きてつか〜?」

「……はっ! え、な、なんで!」

「は? なんでって、何がだよ」

「いや、なんでリントローがここにいるのさ!? それにアリスまで……え、どういうこと? 2人とも捕まってたんじゃないの!」

「いや、アリスちゃんはともかく俺は別に捕まってないが。なんでそうなった」

「だ、だってリントローさんってば通信には返事がないし……てっきり」

「……あー、なるほどそういうことね」

信じられないと言わんばかりに驚くモモイ。

モモイがどうしてそこまで驚いているのか理解できず、そんな彼女の様子に「耳元でうるさいなこいつ」なんて一瞬思ってしまった凛太郎だったが、隣にいるミドリの説明でなんとなく理解した。

それなら、モモイが驚いているのも納得だった。

「無事だったなら返事くらいしてよ!」

「それはすまん。けど、ちよつとトラブルがあつてだな」

「と、トラブル……ですか?」

「うん。渡されてた通信用のインカム壊されちゃった☆」

「え、えー……」

見せられるのは無惨な姿になった通信機。

あははは、なんて笑う凛太郎に呆れて言葉が出てこない。

いや、それよりも凛太郎が抱える女性の姿に目を惹かれ驚きのあまり声が震えそうにもなった。思わずといった様子でミドリが訪ねてしまう。

「と、というか……なんでノア先輩を抱えてるんですか?」

「……え、もしかして知り合いだった?」

「ハッ……ちよつ! リンタロウさん、ノアになにしたの!? 返答

次第じゃ……!」

「うえ!? いや、誓って怪我はさせてないです!」

凛太郎が抱える気絶した女性。

なぜか気絶している自分の知人の先輩を抱えて登場したことに対しても疑問が出てきてしまう。いったいどうしてそんな状況になっているのか。

放心状態から戻ったユウカが悲鳴にも近い叫び声をあげていることから、「やべ、もしかしてやらかしたか」なんて思い慌てて弁明し始める凛太郎。

「いやいや！ 怪我はさせてないから、こう……花京院みたいにあて身って感じでトンってやったただだから！ だよねアリスちゃん！」

「かきよういんって誰さ……？」

「え、はい……恐ろしく速い手刀、アリスでなければ見逃してしまるところでした！」

「ほらね！」

「でも、アームギア越しだったのですごい音がなっていました……わぷっ」

「余計なことは言わなくていいんだよアリスちゃん！」

「ッうわあ……ッ」

「うわっとか言うな！」

なんだか口を滑らせそうなアリスの口元を押さえ込む。

とりあえず、抱えていた少女を降ろして床に横たわらせる。地べたにそのまま放置するのも考え悩むものなので凜太郎は自分が着ていたパーカーを脱ぐとそれを折り畳んで簡易的な枕を作ると少女の頭の下に敷く。

紆余曲折というべきか。

エレベーターが使えないことはわかっていので、ミレニアムタワーの壁面を駆け上がり直接最上階へと侵入した凜太郎。

タワーは結構な高さがあったが放出した呪力にモノを言わせて、ちよつとした空中への飛翔が可能である為そこまで苦ではなかった。アームギアに搭載されたアンカーを飛ばして、空中をスイングしながら蜘蛛のスーパーヒーローにでもなったような気分で遊ぶくらいの余裕もあった。

しかしここに来るまでに色々あったのだ。

といっても、凜太郎がミレニアムタワーの最上階で方向音痴すぎて迷子になりかけていたと言ってしまったもいいくらいだ。その道中で、反省部屋を抜け出してきていたアリスと合流してことなきをえた

が問題はその後だった。

セキュリティシステムが作動して道を塞ぐ隔離シャッター。それのせいで通ろうとしていた道が進めなくなっていたりして、来た道を引き返す羽目になったりしたのだが流石に面倒になった凜太郎。

ならば「道がないなら作ればいいや」なんて思い始め、とりあえず壁をぶっ壊しながら進むことにしたのだ。

そんな時、隔離シャッターによって閉じ込められていたセミナー所属であり『書記』を担当している少女、生塩ノアを発見して彼女を救助した。

『……はっ！』

『？……どうかしましたかリンタロウ』

『近くで女の子が助けを求めている心配がする！』

『で、でも今は急いでモモイたちの元に……！』

『何ってるのさ！ 可愛い女の子……いや、力なき一般人を助けるのも勇者の役目でしょうがアリスちゃん!!』

『勇者の役目……っ！ はいアリスは勇者です！ ならばどんな状

況であろうと、救うべき命を見捨てません！』

『よっしゃ、行くぞ勇者アリス！』

『はい！』

助けに向かった結果、自分たちの仲間が問題事を起こしてその対処にあたろうとしていたセミナーの1人だったとは知る由もなく、凜太郎とアリスは鼻歌交じりに隔離シャッターをぶち壊してノアを助け出してしまった。

その後、彼女と一戦交えそうになったが隙をついた凜太郎がノアを気絶させた事でなんとかあったのだが、気絶したノアをそのまま放置していくわけにもいかず、ここまで連れてきたことで現在に至る。

『てなわけよ』

『なるほど。遊んでたってわけだ』

「ちやうねん。そこに可愛い子がいたからであつてだな」

「『アビドスのみんなに報告しておく?』」

「すいませんでした。それだけは勘弁してください」

真顔になる凜太郎に呆れてため息が出る。

なんだか予定していた時間よりも遅い到着に対して、なんとなく予想はできていたがおおかた予想通りだった為、頭を抱えてしまいそうになる。

しかし、それでも単騎で現状を打破できる可能性を秘めたカードが手元に現れたことは変わらない。

「『リントarrow。任せて大丈夫?』」

「問題なし。時間稼ぎだろ? とりあえず、俺が隙を作ったら目的地まで突っ走れ。そっちの用事が終われば、俺も適当に脱出する」

「……ええ!? リントarrow一人でどうにかするつもり!」

凜太郎とシャーレの先生の会話にモモイが驚いたように声を大きくする。そんなモモイの反応に、「またかよ」と聞き飽きた反応に少しゲンナリとした表情を浮かべる凜太郎。

神秘を宿さない『外』の人間がキヴオトスの生徒に敵うわけがない。それがこのキヴオトスでの生徒たちの共通認識、もちろんモモイたちにとってもそれは変わらない。

『廃墟』を訪れた際に凜太郎が戦えることは知っていたが相手はC&Cの凄腕エージェント集団、いくらなんでも無謀だ。モモイだけではなくミドリも同じ考えであった。

「いくらなんでも無理だつて! ここはみんなで協力して切り抜けた方が……」

「だから、問題ないつて! 余裕のよっちゃんだから!」

「へえ? 随分と余裕なんですね。確かにあなたはアビドスで腕が立つという情報は入っているけど、1人で私たちを相手に勝つつもり

ですか？」

「そりやもちろん。勝つさ」

「……本気なんですね」

「あははっ……よくわからないけどラウンド2つてことでいいんだよねー」

拳を構える凜太郎の姿にユウカも武器を構える。

それに続くように、アスナやアカネも武器を構えて臨戦態勢となった。

一触即発。

互いの一挙一動を見逃すまいと視線を尖らせる。のしかかってくるような重苦しい威圧感プレッシャーの中、何か思い出したかのように凜太郎は手を上へと突き出してストツプをかけた。

「あ、ちよつとタンマ！ さきに一個だけどうしてもお願いしたいことがありますー！」

「……へ？ お願い？」

「そのメイド服のお嬢さん。ちよつといいですかね」

「えっ、私？」

「こんなタイミングで言うのもあれかと思ったんだけど、一緒に写真撮ってもらってもいい？」

「……写真をいま？」

「うん。実はメイドさんとツーショット写真撮ってみたかったんだよね」

「……ぷっ、あはは！ うん、それくらい全然いいよー！」

「ありがとうございます！じやあ俺が片手でハートマークを作るから、そつちはサムズアップでお願いしていい？」

「んと、こういう感じ？」

「そうそうー！ この写真撮りたかったのよ」

突然何を言い出すのかと思えば。

これから戦闘が始まるというタイミングで一緒に写真を撮り始めたアスナと凜太郎に周りはポカーンと口を開けて固まっている。しかし、そんなことを気にもせず凜太郎はアスナにポーズをお願いしてよくわからない写真を取り出す始末だ。

1〜2分くらいだろうか、凜太郎が取り出したスマホからパシャパシャとカメラのシャッターを切る音が響く。

そして何枚か写真を撮り終えて満足したのか、凜太郎は撮った写真を確認するとスマホを懐へと戻して何事もなかったかのように構える。

「よし、お待たせー!」

「いやいやいや! ちょっと待ってなに今の!?!」

「なについて、メイドさんと写真撮っただけけど……あ、今風で言うとチエキっていろいろの?」

「いやそんなこと聞いてないって!?!」

急に叫んでどうした、とでも言いたげな凜太郎に一部始終を見ていたモモイが状況を飲み込めずに悲鳴に近い雄叫びをあげている。

「……もしかしてメイドさん好き?」

「はあ?……そりやお前、好きに決まってるだろ。けどメイド服はロングスカートだともっと好きー!」

「何言ってるの?」

「わかる」

「先生もなにいつてるの!?!」

「それから金髪青目の美少女だと俺の性癖にはドストライク」

「そんなこと聞いてないから!?!」